

# ウマ娘と辿る日本の歴史

ぶ狸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

日本の歴史にウマ娘はどのように関わっていったのか。

絶えることなく紡がれた愛と絆の物語。その時を生きた人とウマ娘達に焦点を当て、歴史を紐解いていきます。

某公共放送でウマ娘と日本の歴史を取り扱ったらこんな感じじゃないかな作品です。

本作はいわゆる怪文書であり、史実に全く基づかない作品です。実在の人物や団体な

どとは関係なく、作中に出て来る学説も存在しません。

# 目次

第1回「古代、ウマ娘達の黎明期」上

1

第1回「古代、ウマ娘達の黎明期」下

11

第2回「飛鳥時代 二人の天才と仏教伝

来」上 25

第2回「飛鳥時代 二人の天才と仏教伝

来」下 43

第3回「ウマ娘の動乱 大化の改新」上

61

第3回「ウマ娘の動乱 大化の改新」下

84

第4回「駆け出しの一等星 光輝くウマ

娘達」上 100

第4回「駆け出しの一等星 光輝くウマ

娘達」中 124

第4回「駆け出しの一等星 光輝くウマ

娘達」下 145

第5回「女帝と道鏡 怪僧と呼ばれた男

の真実」上 166

第5回「女帝と道鏡 怪僧と呼ばれた男

の真実」中 184

第5回「女帝と道鏡 怪僧と呼ばれた男

の真実」下 200

幕間 ウマ娘の世界史 1〜5世紀ダイ

	ジエスト版	—	215
	第6回「東北遠征	みちのくウマ娘の伝	
	説」上	—	226
	第6回「東北遠征	みちのくウマ娘の伝	
	説」中	—	249
	第6回「東北遠征	みちのくウマ娘の伝	
	説」下	—	271
	第7回「平安京仏教とウマ娘	弘法は食	
	物を選ばず」上	—	298
	第7回「平安京仏教とウマ娘	弘法は食	
	物を選ばず」中	—	318
	第7回「平安京仏教とウマ娘	弘法は食	
	物を選ばず」下	—	342
	第8回「ゴールドスピリッツ	〜道長と	
	ライコウちゃんの奇妙な冒険	〜	
	刃を添えて」序	—	375
	第8回「ゴールドスピリッツ	〜道長と	
	ライコウちゃんの奇妙な冒険	〜	
	刃を添えて」(。旦。)ハア?	—	396
	第8回「ゴールドスピリッツ	〜道長と	
	ライコウちゃんのー以下略」/人?	—	416
	⊗ ⊗ ?人	—	
	第8回「シン・ゴールドスピリッツ	〜道	
	長とライコウちゃんの奇妙な冒険	〜	
	鬼	—	
	殺の刃を添えて」:—	—	446
	第9話「メイドインウマ娘	猛き武士達	

の黎明」上	——	474
第9話「メイドインウマ娘	猛き武士達	
の黎明」中	——	494
第9話「メイドインウマ娘	猛き武士達	
の黎明」下	——	514
第10回「平氏と源氏	くヒトとウマ娘	
の誓い」その1	——	544
第10回「平氏と源氏	くヒトとウマ娘	
の誓い」その2	——	570
第10回「平氏と源氏	くヒトとウマ娘	
の誓い」その3	——	601
第10回「平氏と源氏	くヒトとウマ娘	
の誓い」その4	——	636

## 第1回「古代、ウマ娘達の黎明期」上

ウマ娘大国、日本。

現在、ウマ娘達は世界中で競技とウイニングライブを行い人々を熱狂させています。同時に物流業界や医療介護、土木建築などで持ち前の力を活かして活躍してきました。ウマ娘達の経済規模は実に国内GDPの4割を占め、彼女達無くして我が国の発展は考えられないほどです。これほどまでにウマ娘が社会に深く影響を与えている国はないかもしれません。

日本の歴史においても、ウマ娘は古くから人間と深い絆を育み、多くのドラマで歴史を彩ってきました。

古代では大和王朝と深くかわり日本の原点を作り、中世では武士として人と共に戦い抜け、近世では寒冷期の農業を支えるとともに競技者として文化の発達に寄与します。そして、近代では世界が地獄のような戦いをする中で必死に人を支え、戦後復興に大きく貢献したのです。

日本の歴史とは人とウマ娘の歴史であり、絶えることの無い愛と絆の物語なのです。そんなウマ娘達はどのようにして日本にやってきたのでしょうか。彼女達のルートツ

を辿る中で近年、通説を覆す驚きの発見が続き、遂には日本古代史最大の謎と言われていたあの国について大きな進展がありました。

今、日本の歴史を彼女達と共に辿ります。

### 日本ウマ娘放送協会特別企画

#### ウマ娘と辿る日本の歴史

#### 第1回『古代、ウマ娘達の黎明期』

「こんばんは。我が国におけるウマ娘の歴史を紐解くシリーズ企画、『ウマ娘と辿る日本の歴史』の時間がやってきました。第1回目は古代におけるウマ娘、その黎明期であります。多くの人がご存知の通り、彼女達は我が国の歴史に古くから関わり、常に支え合う関係でありました。積み重ねた時は実に二千年以上とも言われ、断続して人とウマ娘とが友好関係を結ぶ社会は日本が最長であります。世界を見渡せばウマ娘王朝や、ウマ娘が実権を持った歴史もありますが、長い歴史の中では人とウマ娘が争い傷つき、遂には大きな過ちさえ犯す事もありました。そのような世界の中で、二千年以上に渡り人とウマ娘が友好的でいられた日本は非常に特異と言えます。そんなウマ娘達はどこからやってきたのか。なぜ、日本に受け入れられたのか。最新の研究と発見を基にその歴



史を辿ってゆきます」

くウマ娘達はどこから来たのか」

これまでの通説では日本在来ウマ娘の起源は3世紀頃、モンゴル高原から九州へと渡来した蒙古系ウマ娘にあるとされてきました。この時期は高句麗好太王碑文にある日本（倭国）と朝鮮半島との間で戦をしていた頃に当たります。

当時の日本は大和朝廷が国内統一を目指すと共に朝鮮半島への影響力を強めていました。伽耶、百済に大和朝廷の出先機関である日本府が置かれ、国の宰相に名を連ねるなど確固たる関係を築いていったのです。しかし、日本の勢力が強まることを高句麗、新羅は座視するはずもなく戦乱の世となりました。

この戦乱の中で、日本はウマ娘の兵士と遭遇します。歴史で確認できる最古の戦場におけるウマ娘は紀元前2500年、戦車を曳く者としてメソポタミアのシュメール絵に描かれています。その後、時代が下がるにつれてウマ娘自身に武装させて戦わせる技術が発達し、機動力に優れた騎兵と呼ばれる兵種が誕生します。中国では紀元前5世紀から騎兵が重要視され、兵法書の『呉子』でも騎兵の重要性が説かれています。

しかし、ウマ娘による騎兵を大々的に活用できたのはメソポタミアやヒッタイトなどのウマ娘と非常に親しい国を除けば、スキタイやパルティアのような遊牧民族か、古代中国のように圧倒的な数でウマ娘を従えた国だけで、日本には騎兵と言う概念が全く存

在りませんでした。

ウマ娘の戦争利用。それが古代において戦争の勝敗を決定づける重要な要素となつた理由をこの時、日本は初めて知ります。人よりも遥かに膂力に優れ、風のように疾駆する。高句麗はウマ娘の数が少なかったため少人数の部隊でしたが、それでも日本にとつては衝撃でした。

じんくうこうしゅう  
神功皇后の伝説において、新羅王は戦わずして降伏したが、ウマ娘達の部隊は少数ながらも勇戦し、敵ながらその美しさと強さに心打たれぬ者はいなかったと称賛しています。

しかし、日本視点では活躍したウマ娘について、高句麗好太王碑や中国の歴史書には一切の記述がありません。

何故、日本では英雄とたたえられたウマ娘たちについて大陸は記録しなかったのでしょうか。それは、大陸においてウマ娘が微妙な立場にあつたことに理由があります。当時の大陸——とりわけ朝鮮半島においてウマ娘の社会的地位は奴隷以下だったのです。

もともと大陸のウマ娘はモンゴル高原で悠々と暮らす遊牧民であり、その性質は穏やかで、走ることを愛し、悪意を嫌い、平和を尊ぶ、そしてちよつぴり寂しがり屋で嫉妬深く、好いた相手にはとことん甘えん坊な可愛らしいものでした。しかし、そんな彼女

たちだからこそ本気で怒るような事態があればいくつもの国を滅ぼす大厄と化してきた歴史があります。

史記には、ある匈奴きょうとの幼いウマ娘が秦の悪漢に乱暴された報復として国境沿いの村々が悉く踏み均なされたと記録されています。匈奴はモンゴル高原で生活するウマ娘達の部族国家であり、少数ながらも強大な武力で歴代の中華王朝をたびたび脅おびかしていました。そんな彼女達が悪漢の狼藉に激怒し、たちまちに部族同士で連合を組み国境沿いを蹂躪ししたのです。この時に芽生えた尋常ではない恐怖故に中国を統一した始皇帝は匈奴のウマ娘を恐れ、万里の長城を築いたのです。

また、ウマ娘は女性しか産まれない生態上、外から人間の男性をお迎え拉致する必要があり、時には発情期のウマ娘達が挙げて大陸の国々を蹂躪性的な意味でし、男性を略奪することが歴史上多々ありましたこれは匈奴に限った話では無く、4世紀頃に登場したフン族はゲルマン民族の国々を襲撃し、王の中には屈辱に耐えかね自害する者もいた。この襲撃がゲルマン人の大移動の原因となっている。

中華王朝にとって匈奴の侵攻は民の安寧の為に絶対には防がなければならぬものでしたが、匈奴の討伐に向かった男性がそのままウマ娘達の虜となってしまう勢力拡大を助けただけというケースも多いです。有名なものでは本国からの十分な支援もなしに奮戦した李陵將軍りりょうに匈奴のウマ娘達が惚れ込んで虜囚とし、そのまま王族の一員に迎

え入れた例があります。

大陸の国々からすれば匈奴のウマ娘達は一度間違えば理不尽な天災に等しかつたのです。

これらの積み重ねにより、大陸では人間とウマ娘の間には容易に埋められぬ溝が生まれました。そのため、日本が大陸で出会ったウマ娘とは、匈奴からはぐれ高句麗などで捕虜となったウマ娘達の末裔であり、その社会的地位は限りなく低いものだったのです。

日本書紀においては三韓征伐さんかんせいばつに赴いた神功皇后が戦場で最前線に立たされ、都市では過酷な労役を強いられるウマ娘達の光景に心を痛め、日本への移住を勧めたところウマ娘が受け入れたとされています。

しかしながら、ここで謎が生まれます。

歴史書において日本とウマ娘が接触した最古の記述がこの三韓征伐のものですが、日本がウマ娘に驚いてるのは彼女達が兵士として戦っていることであり、ウマ娘のことを元々知っていたのではないかと思われる記述があるのです。

以下は日本書紀にあるウマ娘が最初に登場する部分を抜き出したものです。

『皇后、戦場にて金久キン・スミエ氏なる将と相対す。彼の者、ウマ娘なり。皇后、ウマ娘が剣と鎧を持つことに驚きつつも新羅王が戦わずして降伏したと説き、降ることを命ず。久氏、頭

を振りてこれを拒否して曰く、「我等が戦わざれば天下万民新羅に強者無しと嗤えり。我等、競いの中に死すに何ら恐ること無し。而ど競わずして生きることを望まず」。皇后、久氐を惜しみ木蘭（配下の將軍）にウマ娘の流儀にて決着を付けんと命ず。久氐、木蘭がヒトであると困惑するも相競い、久氐は最初大きく突き放すが鎧兜さえ脱ぎ棄てた木蘭が後半に巻き返し僅かに勝利す。久氐、木蘭を称え皇后に降る。木蘭、相手の不調と神威故に勝てど常なれば必敗なりと賛ず。これを見たウマ娘、悉く降る」人間がウマ娘に競技で勝てるとは思えないが、相手が疲労困憊かつ重武装で、ヒトが全くの丸腰となつて長距離を駆け抜ければ勝てる。参考までに、人類最速のポルト氏は最高時速45 km、ポニーはだいたい時速40 kmなので木蘭が人類最高レベルの脚を持ち、この時代のウマ娘がポニーくらいの力なら勝負になるかも。

これは三韓征伐の正当性を強調性するための伝説であるとして長らく重要視されませんでした。まるでウマ娘の流儀を知っているかのようにも読み取れます。

また、新羅王が降伏の際には、

「今後は末長く服従し、ウマ飼当時の大陸でウマ娘の世話をする役職は屈辱的なものであり、主に奴隷階級が就いていた。となりましよう。船使を絶やさず、春秋には手入れの刷毛と鞭を奉りましよう」

とへりくだつたのですが、ある人（木蘭と思われる）が「勇士に鞭を与えるとは何事

か」と激怒し王を殺そうとします。しかし、皇后が「降伏を申し出ている者を殺してはならぬ」と諫めて事なきを得たとあります。

このように、大陸ではウマ娘を鞭を以て従えるようなかなり身分が下の存在としているのに対し、日本はウマ娘に敬意を表し、対等の存在と認めていました。

やはり日本は以前からウマ娘との関わりがあつたのでしょうか。後漢書東夷伝において九州に存在した奴国なこくが1世紀頃には大陸に渡つた記録がありますが、その際にウマ娘という記述はありません。古事記、日本書紀においてもウマ娘達が登場するのは神功皇后の説話が初めてですが、やはり神功皇后や日本の兵士達はウマ娘を見ても驚いたり恐れたりはしていません。日本書紀にはいくつか欠損（欠史八代）があり、その中にウマ娘達との最初の出会いがあつたとも考えられています。

5世紀頃の中国の歴史書においても、「古来より倭国（日本）はウマ賊（ウマ娘）と親しくす」と書かれています。大陸のウマ娘達と日本が友好的であつたことは高句麗と中華王朝にとつて好ましからざるものでした。彼らにとつて日本とウマ娘達は共に脅威であり、特に半島のウマ娘を通じて日本と匈奴と手を結ぶことは何としても避けたかつたのです。

隣国の危機感とは裏腹に日本とウマ娘達の交友は極めて平和的でありました。大陸の人々とは違い自分たちに好意的な日本への興味から積極的に渡海し、匈奴由来のウマ

娘文化が日本に流入しはじめました。三韓征伐の後に、百済や伽耶に影響力を残しつつ大陸への進出が控えられた時期になるとウマ娘達の日本への渡来が加速します。これは中華王朝と高句麗に匈奴が圧され、ウマ娘達の大陸での立場が非常に不安定となったことが原因とされます。半島に取り残されたウマ娘達は過酷な半島では無く自らを受け入れてくれる日本を次なる故郷と定め、はるばる海を渡ってきたのです人間よりもストレスに繊細なウマ娘が海を渡るのは非常に困難なことだったが、それでも日本に渡りたいと願うほど大陸での立場が悪化していたのである。

この時代のウマ具（古代ウマ娘の競争装束）が全国の遺跡から出土しており、適地を求めて現在の関東地方や東北地方にまで急速に広がり、日本中でウマ娘が定住することとなりました。

古代日本がウマ娘を広く受け入れたのは世界的にも稀なケースであります。確かにウマ娘は容姿に優れ、基本的には穏やかな気質ではあるものの、人とは明らかに逸した身体能力と、男性が一切生まれない特殊な生態から男性主体の社会では忌避され、疎外される存在となりました。

しかし、日本はこの辺りの差別がさっぱり理解できませんでした。力に優れていれば農作業が捗ると思ひ、男の子が生まれないと言われてもそれが何かと首をかしげ、何より可愛ければ正義なのだと言わんばかりに我先にと嫁入りを求む者が相次いだのです。

これには渡来したウマ娘側が大陸とのギャップに困惑してしまったことでしょう。

大陸から渡つて来たウマ娘の中には金久氏もいました。神功皇后を祀つた神社には彼女についての後日談が伝わっています。渡来した久氏は自らを負かせた木蘭に恋をしましたが、もはや新羅での身分さえ失つた自分には叶わぬ恋だと思い端女はしためでいいから側にいさせて欲しいと申し出たところ、木蘭は即座に久氏を伴つて自らの祖先神を祀る社へと赴き、彼女を自らの妻とすると誓つたのです。久氏は何かの間違いだと恐縮しましたが、木蘭は「無二の勇士を妻とせずして誰を妻とせん」と一喝し、そのまま生涯の伴侶としました。神功皇后はこれを大いに喜び、木蘭に鞍部くらつくりの姓を与え祝福したとされます。この神社は恋愛成就のご利益があると恋する乙女達に人気のスポットとなっています。



## 第1回「古代、ウマ娘達の黎明期」下

「解説にはウマ娘史の権威で府中大学教授のヤナトミノル教授にお越しいただいています。本日はよろしくおねがいします」

「よろしくおねがいします」

「ヤナトさん、私としてもウマ娘が大陸では疎外されていたというのはなかなか理解し兼ねるのですが、なぜ大陸の国々はウマ娘を蔑ろにしていたのでしょうか」

「先程の映像にもありましたが、人間の男性優位の社会ではウマ娘というのは非常に都合の悪い存在なのです。何せ、人よりも遥かに力に優れている上に完全なる女性部族なわけですから、男性中心の社会である中華王朝としては認めるわけにはいきません。また、匈奴のウマ娘にとっては自由に走ることが至上命題でありますから、モンゴル高原へ進出してくる文明や都市開発は受け入れられないわけですね。一方で匈奴は一族を繋ぐために人間の男性を、中華王朝はモンゴル高原の土地を欲するわけですから当然争いが絶えなかったのです」

「ウマ娘を兵士として利用することもあったみたいですが、国のために戦ってもウマ娘の地位は上がらなかったのですか？」

「歴史には騷すいや赤兎せきとのように一騎当千の働きをするウマ娘が産まれることもあり、彼女達は項羽や関羽と確かな信頼関係を築いています。また、漢王朝も匈奴と友好的な時期もあり、その時はウマ娘の地位も上がっていたと思われます。しかし、基本的には大陸において人権を得ることは無く、国同士のパワーバランスによって地位は常に変化し、5世紀から10世紀にかけてウマ娘の地位は非常に低いものとなりました」

「一方で、日本はウマ娘に対してははじめから好意的でしたね。何というか、やはり三韓征伐以前からウマ娘を知っていないとあの反応はありえないと思うのですけど、どうなのですか?」

「歴史書にウマ娘が登場するのが三韓征伐の際が最古で、それは今も変わっていません。そのため、歴史学的にはそれ以前にウマ娘が日本に渡ったという記録が無く、三韓征伐後のウマ娘の大量渡来で日本にウマ娘がやって来たとしか言えませんでした。しかし、日本の遺跡発掘が進んだ結果ある説が発表され、新たに通説となりつつあるものがあります」

「教科書にはまだ載っていない情報ですね。どのような説なのですか?」

「それは、邪馬台国やまたいこくの女王卑弥呼ひみこがウマ娘であり、日本は遅くとも弥生時代頃にはウマ娘と関わっていたのではないかというものです」

魏志倭人伝ぎしわじんでんに記録される幻の国、邪馬台国。

邪馬台国が存在していたのは2世紀頃で、後漢書東夷伝と魏志倭人伝には2世紀中盤ごろから日本で争乱が起こり、女王卑弥呼によってこれが治まったと書かれています。卑弥呼がウマ娘ならば、これまでの通説よりも早く日本はウマ娘と出会っていたことになりそうです。

邪馬台国の所在について、九州王朝説や大和王朝同一説等がある中、4年前に新たな発見がありました。邪馬台国の女王卑弥呼と同一説がある倭迹迹日百襲姬命やまととどひもそひめのみことの墓とされる奈良県の箸墓古墳周辺から翡翠や黒曜石で彩飾されたウマ具が発掘されたのです。

年代を測定すると、何と弥生時代中期から後期だと判明し、今までの通説を覆す大発見として新聞を賑わせました。

このウマ具はウマ娘が渡来していないのならば存在すらしないはずです。そこから、百襲姫がウマ娘であったのではないかという説が出たのです。

そして先月、宮内庁により衝撃的な事実が公表されます。箸墓古墳はしかごふんに埋葬されているとされる百襲姫はウマ娘だったのです。

世界的に見てもウマ娘王朝だったモンゴル帝国などを除き、人間の王朝でウマ娘を王族として迎え、巨大な墓を建造するなど例がありませんでした。宮内庁も長きに渡り箸墓古墳に埋葬されていたウマ娘は殉葬者じゆんそうじやだと考えていたようですが、皇室の希望もあり秘密裏に発掘調査を実施。すると、豪華な石室と石棺、様々な副葬品とウマ具、大陸由

来と思われる鏡が複数見つかり、石棺の中に眠っていた人物の特徴は明らかにウマ娘であつたというのです。

これらの発見から宮内庁は箸墓古墳の被葬者がウマ娘かつ百襲姫だと断定します。

続けて宮内庁は箸墓古墳の近くにある豊鍬入姫トヨノキイリノメの墓と伝わるホケノ山古墳を再調査したところ、木棺の一部に残された遺髪を解析するとウマ娘のものだと判明し、総合的に考えると崇神天皇の娘で百襲姫の後継者の立場だつた豊鍬入姫が卑弥呼の後継者である壺与と同一人物だと発表しました。

隣り合うように存在する箸墓古墳とホケノ山古墳。そこに眠っていたのは太古の昔、日本人から愛情を持って信仰されたウマ娘の姫君だつたのです。

「卑弥呼と壺与がウマ娘だつたのは私としても衝撃的な話なのですが、これは今後歴史を学ぶ上でどのような変化をもたらしていくのでしょうか？」

「まず邪馬台国が大和王朝と同一であることがほぼ確実となりました。邪馬台国というのは中華思想からみた蔑称で、大和王朝のことを彼らからすると邪悪なウマ娘が台頭する国と当て字をしたわけです。また、ウマ娘でも皇族で、しかも信仰を集めていた巫女ならばあれほど豪華なウマ具を身に着けていても不思議ではありません。そして、日本書紀に照らし合わせると百襲姫の兄妹は吉備津彦命きびつひこのみことになります。吉備津彦命は吉備

平定で温羅うらを退治し、桃太郎のモデルとなった人物です。百襲姫と吉備津彦命は同腹の兄妹ですから、吉備津彦命も実際はウマ娘ということになります。伝説にある人並み外れた怪力も、ウマ娘なら納得できるのです。なお、二人の兄にあたる孝霊天皇の母は皇后細媛命ほそひめのみことであり、こちらが現在の皇室にも血脈を受け継いでいます。そして、日本書紀によると百襲姫と吉備津彦命は共に血脈を残していません。おそらく、ウマ娘の皇族が増えることを憚りはばか、敢えて配偶者を取らなかつたのではないかと推察しています。「しかし百（もも）と吉備（きび）とは、何というか、桃太郎が御伽噺に出たのは室町時代ですが、狙ったとしか言えないセンスですよね」

「果糖を含む桃は古くからウマ娘を魅了しました。黍きびもまた高い栄養価からウマ娘が常食していた代表的な穀物です。神聖な果実である桃を巫女の名前に、屈強な肉体を作る黍は武人の名前に当てたのでしようね」

「ところで、魏志倭人伝と日本書紀では食い違う部分もあるかと思いますが、それはどう整合していけば良いのでしょうか？」

「時系列で言うとうと、卑弥呼が存在したのは2世紀後半。三韓征伐は3世紀中盤で約50年ほどの差です。記紀と整合性を取るなら、百襲姫の晩年に崇神天皇の叔父にあたる武埴安彦命たけはにやすひこのみことが反乱を起こし吉備津彦命が鎮圧するも国が乱れ、これを治めるために百

襲姫の先例に倣って崇神天皇は娘の豊鍬入姫を巫女にした。この豊鍬入姫が魏志倭人伝でいう卑弥呼の後継者の耆与にあたります。彼女は魏に度々使いを送っていたようですが、最初の皇帝謁見の時点で時代は崇神天皇と豊鍬入姫の代で、使者は大和王朝がどのような歴史がある国なのかを紹介したところ魏の通訳が記録係がリアルタイムの情報だと勘違いしたまま記録したため、百襲姫（卑弥呼）が西暦180年前後に既に年増だったと記録されているにも関わらず250年ごろまで生きていた風に記録されてしまいます。おそらく倭国が内乱状態にあった以前に百襲姫は亡くなっており日本書紀では百襲姫が内乱を予言した後に亡くなったとされ、崇神天皇との関係性（大叔母と甥）から180年頃には相当高齢だったのではないだろうか。彼女達の記録が混ざったことから弥生時代にも関わらず異常に百襲姫（卑弥呼）が長命となり、豊鍬入姫（耆与）の記録が少なくなってしまうています。本当は豊鍬入姫がメインで、百襲姫は自分がどのような立場にあるかを説明する際に紹介した先代の巫女なのでしょう」

「なるほど。そして、その後三韓征伐の時代まで続くわけですね」

「はい。豊鍬入姫の後継者が垂仁天皇の娘である倭姫やまとひめです。倭姫もまたウマ娘の可能性が高い皇族で、倭姫の母が薨去した際に殉死を悪習と嘆じてた垂仁天皇に野見宿禰のみすくね力士の始祖ともいわれる怪力無双の人物。がウマ娘の姿を象った焼き物を一緒に埋めてはどうかと提案し、これが埴輪となります。倭姫は豊鍬入姫からよく教えを受けて後に伊

勢神宮を創建した人物としても知られています。また、彼女は父に疎まれ日本各地を転戦させられる甥の日本武尊やまとたけるを大変可愛がり、草薙剣を貸し与えています。その日本武尊の息子が仲哀天皇であり、その妻が神功皇后となるわけです。神功皇后からすればウマ娘である倭姫は義父の唯一の味方であり、彼女もまた三韓征伐の託宣を受けるなど巫女としての力があつたことから倭姫から教えを受けたと考えられます。そうなる倭姫は神功皇后の師匠にもなり、大陸でウマ娘がひどい扱いを受けていると知った皇后が驚いたのも当然と言えるでしょう」

「日本武尊で思い出したのですが、確か熊襲九州南部に存在した豪族。征伐の際、女装したと記録されていますよね」

「その時の衣装は叔母の倭姫から借り受けたものですね。日本最古の女装でありコスプレでもあります。熊襲の支配者だったクマソタケルの兄弟は日本武尊を本当に可愛らしい童女だと思い込んで二人の間に座らせ酒を飲んでいたようで、その隙に日本武尊は——」

「ちよつと待ってください。童女ですか？」

「はい、童女です。しっかりと日本書紀に書かれています。なので、日本武尊はロリ系の男の娘で、叔母と服をシェアできるくらい華奢な体躯で、倭姫も外見はロリである可能性が非常に高いです」

「情報量が多過ぎませんか!!」

「仕方ないですよ、史実ですから。ともかく油断したクマソタケル兄弟の兄に寄りかかる振りをして懐剣で刺殺。驚いた弟が逃げようとすることも追いつかれ尻に剣をブスリと刺されしまいます。この時に敵ながら女装してまで潜入して自分達を討つたことを讃え、自らの名前であるタケルに敵方であつた大和を加えたヤマトタケルの名を贈り、これが転じて日本武尊となります。その後、女装に味を占めたのか出雲の豪族であるイズモタケルを討つ際も女装して近付き、水浴びをする時に刺殺していますね」

「日本最古の英雄が何と言うことをー」

「イズモタケル以降この手を取らなくなっているので、案外イズモタケルに男だと分かってなお襲われそうになって懲りたのかもしれないね」

「業が深い……」

「また、ヤマトタケルはウマ娘を何人か後に迎えていますね。悲劇的な別れをしたオトタチバナ姫や、最後に后となったミヤツ姫です。この二人は叔母である倭姫に似ていたことから日本武尊の心を射止めたとも伝わっています。また、ミヤツ姫は三重県で薨去した日本武尊の死を悲しんで墓の前で泣いていたところ、墓から白鳥が現れ、それが夫の化身だと確信した彼女は白鳥を三重から大阪まで走って追いかけた伝説も残っています」



「結構な距離を走りましたね。それにしても、ウマ娘王朝ではないにも関わらず日本の皇族はウマ娘をよく受け入れましたね」

「歴史的には皇族がウマ娘を寵愛することは珍しくありませんし、蘇我氏を除いてウマ娘は権力闘争に無関心だったのである意味皇族としても安心できる存在だったのでしよう。また、想いあえば一途極まりないので、政略結婚が主だった皇族からすれば本当に愛し合う事ができる相手として選んだ部分もあります」

歴史上、時の天皇や皇族がウマ娘を寵愛し后にする例は決して少なくありません。聖徳太子も黒駒と呼ばれる美しい芦毛のウマ娘を后とし、蘇我ウマ子とも親密な関係にあったとも言われています。ウマ子の娘であるエミシも太子と関係を持ってイルカを産み、事実上の后となっています。

奈良時代には光明皇后がウマ娘の皇后となり、その娘である称徳天皇はウマ娘の女帝となりました。

平安時代は陽成上皇がウマ娘の綏子内親王に恋の歌を贈り、その歌は百人一首にも選ばれています。

院政期には白河院、末期には後白河院がそれぞれ白拍子のウマ娘を深く愛した記録が残っています。

このように、歴史的に見れば皇族がウマ娘を愛する事は珍しく無かったです。

「こうして歴史を辿っていくと、実際にはもつと昔から日本人とウマ娘は出会っていたのではないかと思えるくらい深い絆を結んできましたね」

「そうですね。私見ですが、大規模なウマ娘達の渡来が3世紀頃であって、小規模な流入はもつと以前からあったのではないでしょうか。現状、箸墓古墳のウマ具が日本最古のものですが、九州や出雲地方で弥生時代前期頃と推測されるウマ具が発掘されています。このような考古学的発見により日本とウマ娘との関係がもつと古くからのものだったと証明されるかもしれません」

「出雲と言えば荒神谷遺跡から全国でそれまで発掘された銅剣を超える本数が一挙に見つかり、記紀でも重要視されていた出雲に巨大な国家があった説が一気に信憑性を増しました。青銅器もまた大陸から伝来したわけですし、その時にウマ娘が渡ってきてもおかしくはありませんね」

「はい。なので、最近の学会では日本は邪馬台国以前からウマ娘が渡来しており、時には巫女として信仰していたというのが通説になっています。なので、ウマ娘の地位が高かった我が国からすれば大陸でウマ娘の扱いがひどいことには本当に驚いたでしょう」

まとめー

○少なくとも弥生時代頃にはウマ娘は日本に存在していた。

○邪馬台国の女王卑弥呼はウマ娘であり、大和王朝の巫女たる百襲姫と同一人物。また、吉備津彦命もウマ娘である可能性が高い。

○信仰の対象となっていたためウマ娘が社会文化に深く根を下ろし、大陸とは異なり権力者が積極的に庇護した。

○5世紀頃に大陸の情勢が不安定となり日本へ渡来するウマ娘が爆進的に増加した。

○農耕が広まっていた古代日本でウマ娘は歓迎され、全国に広がった。

「今日だけで多くの通説が覆されたと思うのですが、教科書も変わってゆくのでしょうか」

「はい。少なくとも日本とウマ娘との出会いは弥生時代まで遡り、卑弥呼と百襲姫は併記されることは確実でしょう。もともと古代史が新たな発見により改訂されるのは珍しくないのです、早ければ来年には各社の教科書が変わるでしょう」

「なるほど。ヤナトさん自身は、この古代における日本の人々とウマ娘の関係をどのようにお考えですか？」

「そうですね……この時代はまだウマ娘の競技が完全に制度化されておらず、トレー

ナーという概念もありませんでした。にもかかわらず、人間と私達ウマ娘は確かな絆でむすばれていました。ウマ娘を王族として受け入れた大和王朝や、戦場から始まった木蘭と久氐の物語を知ると、きつと弥生時代よりもつと昔、最初に日本に渡ったウマ娘も愛されたのだと思います。陳腐な言葉かもしれませんが、はじめに愛があつたからこそ、今この時まで私達の関係は変わらず寄り添い支え合うものであり続けたのではないのでしょうか」

「私もそう思います。さて、今夜紹介した我が国とウマ娘との歴史、これは今後の新たな発見によりまた変わっていくものかもしれません。しかし、日本のヒトとウマ娘はいつの時代も互いの信頼と敬愛によって結ばれてきました。その絆は単なる神話と伝説とによって生まれたものではありません。きつと、私達の歴史は愛に満ちていて、そして今に続いているのです。ヤナトさん、今夜はありがとうございました」

「ありがとうございます」

ウマ娘達が大陸から大量渡来してから飛鳥時代まで2000年。その間にウマ娘は日本人の一員として根を下ろし、皇族から民衆に至るまで相愛の仲となりました。

5世紀中頃からは古墳の副葬品としてウマ娘を象つた埴輪が登場し、6世紀初頭に建造されたウマ坂古墳の石室に描かれた壁画には自由に大地を駆けるウマ娘の姿があり

ます。彼女を見守る人物は、この古墳に眠る男性なのでしょいか。その瞳は優しく慈愛に満ちています。

大阪府四條畷市からは5世紀後期の寄り添うように葬られた人間とウマ娘の墓が見られ、この頃には民衆の中にウマ娘が溶け込んでいた証拠であると発表されました。同時に、鑑定の結果この二人は共に70代頃で長年連れ添った夫婦だと思われることから、時を越えて変わらぬ愛として話題となりました。なお、古代において人間とウマ娘が同じ場所に眠るのはウマ娘王朝の国を除けば日本でしか見つかっていません。

この他、いくつもの遺跡や古墳から人間とウマ娘の物語が見つかり、後世に伝わっています。これらに共通するのは、間違いなく愛なのでしょう。

終

制作 日本ウマ娘放送協会府中支部

## 次回予告――

く日出処の天子、書を日没処の天子に致す。恙無きや

飛鳥時代の伝説的偉人、聖徳太子。その人生は多くのウマ娘に愛されるものでした。

そして、仏教の伝来とそれを推し進めた豪族、蘇我ウマ子。

二人の天才によって日本は大きな変革の時を迎えます。

第2回「飛鳥時代 二人の天才と仏教伝来」

ご期待ください。

## 第2回「飛鳥時代 二人の天才と仏教伝来」上

はじまりから終わりに至るまでウマ娘と共にあつた人がいます。彼ほどウマ娘を愛し、ウマ娘から愛された人はいないとも言われています。

最初は厩舎宮中で女官として仕えるウマ娘達の居住区、母である穴穂部間人皇女あなほへのはしひとのひめみこがそこでにわかにな産気付き、急遽ウマ娘が取り上げたのです。取り上げたウマ娘は赤子を産湯につけた際にこう言いました――

「私達はこの御方に仕えるため生まれたのだ」

政治家、外交官、学者、そして指導人（トレーナー）。その全てで才能を遺憾なく発揮した飛鳥時代の皇族、聖徳太子。

彼は後世、日本史上最もウマ娘から愛された人物とも呼ばれています。

同じ時期、大陸から新たなものが流入しました。インドで紀元前8世紀に生まれ、姿や形を変えながら信者を増やし、大陸を経て日本にやってきたのが仏教です。百濟から贈られた仏像と経典は日本の宗教感を大きく揺さぶり、それはウマ娘にとっても他人事ではありません。なぜならば、仏教を積極的に導入した蘇我氏はウマ娘の一族なのですから。

ここに、ウマ娘に最も愛された男と、日本で最も権力を握ったウマ娘一族の歴史が描かれます。

日本ウマ娘放送協会特別企画

ウマ娘と辿る日本の歴史

第2回『飛鳥時代 仏教の伝来と聖徳太子』

「こんばんは。本日は飛鳥時代、十七条憲法や冠位十二階、遣隋使の派遣で知られる聖徳太子を中心に我が国とウマ娘の歴史を振り返ります。今夜お越しいただいたのは淀大  
学教授のアスカアタックさんです。アスカさんよろしくおねがいます」

「よろしくおねがいます」

「早速ですが、今の映像では聖徳太子を最もウマ娘から愛された人物だと言っていますが、本当なのですか？」

「んー、主観にもよるとは思いますが、ウマ娘として的一般論では聖徳太子こそ最も愛された人物であると言えます。まず、聖徳太子の特徴として出生からウマ娘が関わって  
いますからね」

「厩舎で生まれたというものですな」



「厩舎というのは宮中でウマ娘が暮らす区画で、高貴な方も時折訪ねる場所でした。急遽そこで出産ということになったのですが、中には年配のウマ娘もいましたし出産に携わる役目もありましたので、特に問題なく太子は生まれたようです。ただ、太子は赤子ながらに何かウマ娘の直感に訴えるものがあつたようで、冒頭の映像にある言葉が残っているわけですね」

574年、橘豊日皇子（後の用明天皇）の子として生まれた聖徳太子。  
名は厩戸豊聡耳命うまやどののとよとみみのみことと伝わっています。

太子が生まれる以前、553年に百済を経由して日本に仏教が伝わります。

仏教は、インドの仏陀が開いた宗教で、修行等で功徳を積み悟りに至ることを目的とするものです。この仏教成立にはウマ娘も大きく携わっています。仏陀が出家から生涯を通じて従者として連れたウマ娘、健陟カンシダです。

健陟は仏陀の出家から入滅に至るまで常に寄り添い、後に阿難陀アナンダと共に多くの経典を作り仏教の発展に貢献します。一方でウマ娘らしく嫉妬深く自分が最も仏教と親しい者だと自負し、しばしば周りを威嚇したと言います。阿難陀は困り果て仏陀に相談したところ「無視ブラフマナダナ」と答えた。仏陀の入滅後にそのことを聞いたカンカタは気絶して倒れましたが、これを機に心を入れ替えて修行し、遂には悟りに至つたとされます。

阿難陀と健陟により成立した仏教はインドを越え中華、朝鮮半島にまで広まり、遂に日本にやってきたのです。

当時の欽明天皇は大臣達に仏教を受け入れる可否を問います。賛成派の蘇我稲目は「諸国はみな仏教を信仰しており、日本だけがこれに背くことができましようか」と答えます。これに対して大連おおむらじの物部尾輿もののべのおしと連むらじの中臣鎌子中臣鎌足の先祖に当たる人物。は「わが国は天地百八十神を祭っています。蕃神はんしん外国の神。を礼拝すれば国神の怒りをまねくでしょう」と唱え反対しました。

朝廷としてはただちに仏教を受け入れることには慎重でしたが、蘇我氏は強固に受け入れるべきと主張し譲りませんでした。蘇我氏が仏教に固執するのには理由がありません。それは、彼女達がウマ娘の一族だからです。

蘇我氏は近年までは渡来系の一族だと思われていましたが、研究が進むにつれ日本に古くから続く家系であり、蘇我そが高麗こまという人物が妻にウマ娘を迎えて以降ウマ娘を当主とする一族となったのだと分かっています。豪族たちの中では唯一のウマ娘中心の一族であり財力と権力は非常に強いものの今ひとつ立場が弱かったのです。そんな中でウマ娘が設立に大きく関わった仏教が伝来したとなれば、蘇我氏は権威拡大のためにもぜひ日本に広めようと考えたわけです。

——と説明するのが定説ですが、蘇我氏の権威拡大は副産物であり、実際には健陟が

推奨し経典の中にしつこいほど盛り込んだ走ること無心となり悟りに近づく走禅という概念に稲目は魅了されたようです。何せ大好きな走ることが修行であり好ましいとされるのですから。実のところ、稲目は仏法や仏像は良く分からないけれど走ること褒められるのはうれいという理由で広めようとしたみたいです。

欽明天皇が下した判断は、試しに蘇我氏だけが信仰してみたいというものでした。

稲目は邸に仏像を安置して礼拝し朝と夕に走禅を行いました。直後に疫病が起こり多くの人が亡くなります。尾輿と鎌子は神罰であると主張して仏像の廃棄を奏上し、天皇はこれを許します。仏像は海に流され、これで一度仏教の受け入れは止まってしまいます。稲目はせつかくもらった仏像が捨てられたことにしよんぼりしますが、それ以上には走禅目的に走ることまで禁止されたのがショックで寝込み、そのまま病没したと伝わっています。

しかし、蘇我氏は諦めませんでした。稲目の跡を継いだ蘇我ウマ子は再び百濟から仏像と経典を入手し、鞍部多須奈くらつくりのたすなに渡来僧を探すように命じます。多須奈は播磨国で高句麗からの渡来僧を見つけ、妹の嶋を出家させて善信尼とし、更に善信尼を導師として禅蔵尼、恵善尼を出家させます。

なお、鞍部多須奈は苗字から分かる通り前回登場した鞍部木蓮と金久氏の子孫であり妹共々ウマ娘です。日本最初の僧はウマ娘だったのです。

585年3月、ウマ子は敏達天皇から許可をもらい再び仏教を広めようとしています。しかし、直後に再び疫病が流行したのです。

前回の仏教信仰に反対した物部尾輿の跡を継いだ守屋モリヤはやはり仏教を広めるべきではないと天皇に訴え、天皇は仏教の信仰を止めるよう詔を出します。守屋は自ら寺に赴き、仏塔を破壊し、仏殿を焼き、仏像を海に投げ込ませ、仏法信者を面罵した上で、善信尼ら3人の尼を捕らえ、衣を剥ぎとつて群衆の目前で鞭打ちますこの時、善信尼は13歳、妹達はもつと幼いです。守屋に対して周りはドン引きだったのではないのでしょうか。

ウマ子は直ちに善信尼達を助けようとしませんが守屋は、

「信仰を捨てるまで続ける。これは勅命である」

と聞く耳を持ちません。さしものウマ子も勅命には逆らえませんでした。

ところが、そこに通りがかった少年が守屋の前に立ち塞がります。少年は、

「なぜ少女から衣を剥ぎ衆目に晒したうえ鞭打つのだ」

と問います。その子供らしからぬ叡智をたたえた雰囲気守屋はたじろぎますが、

「国中に疫病が流行しているのは蕃神を持ち込んだことに祖先神がお怒りだからだ。だからこやつらに信仰を捨てさせるために鞭打つのだ」

と答え、再び鞭を振りかぶります。すると少年は善信尼達の前に座り、

「ならばまず私を鞭打ちなさい。私は救世観音であり阿弥陀如来でもある仏の化身である。この者達の代わりに打たれるならば本望」

と言ひ、上衣をはだけさせたのです。守屋は度肝を抜かれるとともにこの少年の並々ならぬ雰囲気を察して「今度は止めにする」と言ひ、呆気にとられるウマ子に、

「言つておくが仏法を認めたわけでは無い。この子に敬意を表したのだ。次に寺や仏像を見れば容赦なく破壊する」

と耳打ちして去りました。

我に返つたウマ子は善信尼達を保護すると彼女達を身を挺して助けた少年に言ひました。

「礼を言う。けど、こんなところで何をしているんだ、皇子」

「偶然通りがかつただけです。本当ですよ」

この少年こそが厩戸皇子、聖徳太子その人だったのです。

太子の母は蘇我氏の出身蘇我氏はウマ娘が当主であるが人間の系列もいる。太子の母方の祖母がそちらの出身。であり、ウマ子とも面識がありました。

幼少期から仏教に厚く帰依していたとされる太子。2歳の時、東方に向かつて小さな手を合わせて「南無仏」と念仏を唱えたという。このとき、大使の手からは仏舎利仏陀の遺骨。が生じたと言ひます。幼いころから仏の化身と言われた太子は、おそらく幼い

尼僧が鞭打たれていると聞いて駆け付けたのでしよう。

ウマ子は自分一人で仏教を広めることにも権力を広げることにも限界を感じていました。寺を焼かれ、善信尼達<sup>ニ</sup>が鞭打たれていても何もできなかったことがそれを確信へと変えます。だが、目の前の少年とならば、単なる信仰や権力の先にある未来を見ることのできるのではないか。指導人<sup>トリーナー</sup>という存在が無い時代においてウマ娘達はどこか心のどこかに空虚さを持っていました。しかし、太子を前にすると胸は高鳴り、希望が溢れていくのです。

歴史は語ります。日本最古のトリーナーなお、世界初のトリーナーは紀元前15世紀にヒツタイト帝国に仕えたキツクリという人物。とは誰かを問われると間違いなく聖徳太子である、と。

日本初のトリーナー、聖徳太子。

後にウマ娘の皇帝とまで言われる蘇我ウマ子。

この二人の天才が、飛鳥時代の日本を作り上げていくこととなるのです。

「聖徳太子と蘇我ウマ子が出会い、これから日本の歴史を作っていくわけですが、そもそも何故蘇我氏はウマ娘を当主にしたのでしょうか」

「理由としては蘇我氏は外交関係を専門にしていた一族で、国内での権力を増すために

は更に百済等の大陸へ近い立場になる必要がありました。そこで蘇我高麗という人物が大陸からやってきたウマ娘を妻とし、生まれたウマ娘の稲目を当主に据えたのです。しかし、期待した外交関係では目立った成果は無いにも関わらず宮廷内での評価は何故か上がったみたいで結果として蘇我氏の力が増す事に繋がります」

「評価が上がったのは単にアイドル的な扱いだったのでは？」

「まあ、否定はしません。宣化天皇も稲目に対して『いかにぞや和みけり』と言っています」

「たしか宣化天皇は即位時に70歳近い高齢の天皇でしたよね。それつてもしかするとウマ娘セラピー的なものでは……ウマ娘セラピーの歴史は古く、古代ローマ時代に負傷した兵士のリハビリにウマ娘と共にごろごろ寝る、軽く走ってみる、ウチは今から赤ちゃんにされるとにかく甘やかしてもらおう等が行われていました。」

「外交的に大した成果はありませんでしたが、稲目は優れた政治センスを持っていたようです。これは本来のんびり気質で、言ってしまうとゆるい性格なので政治闘争には向いていないウマ娘にとって例外のような存在です。ウマ娘王朝の国であっても実際に政治を行うのは人間の男性が多かったので、ウマ娘自身が政治力を持っているのは極めて稀と言えますね。そして、その政治センスはウマ子へと受け継がれていたのです」

「なるほど。さて、太子とウマ子は共に仏教を広めようとするのですが疫病の流行によ

りあまり芳しくありませんでした」

585年8月。疫病はますます激しくなり敏達天皇が崩御します。

葬儀の際にウマ子と守屋はそれぞれ誅言弔辞しのびごころのこと。を読むのですが、ここで互いを痛罵します。

守屋は長い剣を差して誅言を読む小柄なウマ子へ「不相応に長いものを持つのは見栄っ張りのすることだ」と言い、ウマ子は緊張で体を震わせる守屋に「出走前のウマ娘の方が落ち着いている」と挑発しました。

太子の父、橘豊日皇子が即位し用明天皇となります。用明天皇は蘇我氏寄りの天皇であり、蘇我氏と物部氏の対立はさらに深まっていきます。

587年4月、即位から僅か二年を待たずして用明天皇は病に倒れます。太子やウマ子から仏教について教わっていた用明天皇は仏法を信奉したいと欲し、群臣に議するよう詔します。守屋と中臣勝海は「国神に背いて他神を敬うなど、聞いたことがない」と反対しますが、ウマ子は「勅命に従うべき」として宮中に僧を迎えて仏教を説かせます。奇しくも勅命によって寺を焼き、善信尼を鞭打った守屋と立場が逆転したものであります。

政局が不利と見た守屋は朝廷を去り、別荘のある河内国へ退いて味方を募ります。排



仏派の中臣勝海は守屋に味方しますが、直後に暗殺されてしまいました。数少ない味方を失い守屋は孤立していったのです。

4月9日、用明天皇崩御。守屋は自分と親しい穴穂部皇子を皇位につけようと図りますが、6月7日、ウマ子は炊屋姫かしやひめ欽明天皇の皇女で敏達天皇の皇后。用明天皇は同母弟であり太子からすれば叔母、ウマ子からしても親戚にあたる。後の日本最初の女帝、推古天皇。の詔を得て、穴穂部皇子の宮を包圍して誅殺します。

穴穂部皇子は前年に義姉にして未亡人の炊屋姫に恋をしてみました喪も明けないうちに彼女を手にしようとしましたが敏達天皇の寵臣だった三輪逆みわのさかうが阻止します。穴穂部皇子はこれを恨み守屋と共に逆を殺害。事の次第を知ったウマ子は「天下の乱は近い」と嘆き、守屋は「貴様のような小臣の知るところではない」と言い放ちました。しかし、自分の貞節を護ってくれた逆の死を炊屋姫は忘れず、ウマ子との利害の一致もあり穴穂部皇子の殺害を命じ仇を取ったのです。推していた後継者を失い、守屋の政治生命はここに断られたのでした。

587年7月、ウマ子は守屋討伐の兵を挙げます。守屋の館へ向かう軍勢の中には太子の姿もありました。

太子を見つけたウマ子は尾を振って喜び、「君は覚悟をもって、私と同じ視座へ立つてくれた。それがとても喜ばしく、とても頼もしく思う」と声をかけました。

一方、守屋は一族を集めて城を築き守りを固めます。その軍は強盛で、弓の名手だった守屋は大樹の枝間によじ登り、雨のように矢を射かけました。物部軍の精強さもありませんが、何故か蘇我軍は士気が低く退却を余儀なくされます。それは戦闘が開始される直前にウマ子がいよいよ放った一言が原因でした。

「物部守屋なんかももののみごとくに打ち破り、みんなで盛り上がるろう」

蘇我軍の士気は著しく下がり、太子でさえ絶句したと言います。

これを見た太子は仏法の加護を得ようと四天王の像をつくり、戦勝を祈願しました。太子の力苦勞人オーラスマ性に心打たれた蘇我軍の士気が上がった今こそ好機と捉えたウマ子は軍を立て直して進軍させ、大木に登っている守屋を射殺。残る守屋の子も悉く討たれ、ここに物部氏は滅亡したのです。

この一連の戦いを丁未ていびの変と言います。

8月、ウマ子は欽明天皇の皇子で蘇我氏の血を引く泊瀬部皇子はつせべのおうじを即位させ、崇峻天皇とします。

ところが、実権がウマ子にあることに崇峻天皇は不満を持ち、592年10月4日に献上された猪を見て剣を抜き、猪の首を叩き落とすと「いつかこの猪の首を斬るように、あの獣が如き女を斬りたいものだ」と言い放ちます。ウマ子は最初「帝にそこまで言わせる女がいるのか。ひどいやつもいるものだ」と呑気にしていますが、太子から「いえ、た

ぶんなたのことですよ」と言われてしよんぼりします。しよんぼりしすぎて屋敷に引き籠つてふて寝し、桃しか喉を通らなくなるほどでした。

ところが崇峻天皇が思わぬところで崩御します。東漢駒子やまとのあやのこまというウマ娘が競争の練習中にうっかり崇峻天皇を蹴り殺してしまったのです。この日、崇峻天皇はウマ子が引き籠つてしまった事を幸いに政治の実権を握るべく東国の租税に関する会議に意気揚々と参加した帰り、気持ちの高揚からか宮中を散策した結果、うっかり儀式として行われる競争に向けてウマ娘の練習するコースに入り込んでしまい崩御したのです。平均時速60キロで疾駆するウマ娘の前に出るのは車の通行する道路に飛び出すのと同義である。

後にも先にもウマ娘に蹴られて崩御した天皇は崇峻天皇だけとなります。

突然の事態に引き籠つていたウマ子は困惑しながらも崇峻天皇の葬儀を行います。突然の事態だけに大々的にするわけにもいかずその日のうちに遺体を葬りました。

この崇峻天皇の突然死は当時でも怪しまれ、ウマ子は一部から王殺しの汚名を着せられることとなります。しかし、王殺しという異常事態にも関わらず国内外はさほど動揺しておらず、いわれなき汚名にますますしよんぼりするウマ子に対して炊屋姫が「いと心苦しけれ」と心配し、太子からは「なにかはべらむ」と声をかけています。このことから朝廷内では事故死として広まっていたと考えられます。

崇峻天皇崩御の翌月、当初は次の天皇として敏達天皇と炊屋姫の子である竹田皇子を擁立しようとはしますが、ウマ子への反対勢力がこれを拒否します。まだ気落ちしているウマ子は炊屋姫や太子に相談を持ち掛けますが、ここで太子がある妙案を思い付きません。

「伯母上、あなたの父上はどなたでしたか」

「ええと……欽明天皇ね」

「旦那さんは？」

「敏達天皇ね」

「もひとつ質問いいかな。あなたが即位した後にあなたの子に譲位したとしても皇統はどうなるでしょうか」

「……あなたのような勘の良い子は好きですよ」

593年12月、皇族出身かつ夫も天皇だった炊屋姫が即位。日本最初の女帝、推古天皇です。

当初は竹田皇子への中継ぎとしての即位でしたが、直後に竹田皇子が薨去。これにより聖徳太子が皇太子となりました。しかし、蘇我氏の血が強く他の豪族から反発が予想されるため太子が即位するわけにはいかず、結果として推古天皇が長きに渡り在位することになります。

ここから、推古天皇の治世の下で太子とウマ子による改革がはじまるのです。

「……崇峻天皇、ウマ娘に轢き殺されたんですか？」

「まあ、交通事故みたいなものです」

「本当に蘇我ウマ子は関与していないのですか？」

「確かに当時から疑いの声は根強く、それもあつて蘇我氏の血が強い聖徳太子やウマ子が推挙した竹田皇子は即位できませんでした。しかし、当時の朝廷の中枢にいる人々からは同情の声が多く寄せられていますし、ウマ子自身も大変気落ちしていたと記録されています」

「では本当に崇峻天皇に嫌われたショックでふて寝していたと？」

「彼女もウマ娘ですから、人に嫌われるのはやっぱり辛かったのだと思いますよ」

「けれど殺意を向けられるまで嫌われている事に気づいていなかったんですよね。蘇我ウマ子は何と言うか、割と天然ボケなのでは？」

「政治の手腕等を見ると間違いなく天才なんですけどね……」

ウマ子は後世のイメージとは違い、実際には愉快的な性格だったようです。

聖徳太子と言えば十人の話す内容を同時に理解したという伝説がありますが、日本書

紀にある記録は何とも言い難いものでした。

ある日、太子が激務の中で多くの人の話を次々に聞いて的確な指示を出していると、たまたま出仕してきたウマ子が太子の仕事ぶりに感心したのは良いものの、悪い癖が出来ます。

「太子は全く大したやつだな。ふふふ」

誰にも聞こえないと思つて小さく漏らした言葉に一人笑うウマ子。ところが太子はおもむろに立ち上がるとウマ子の頭目掛けて<sup>しゃく</sup>笏を一閃。呆気にとられる周りに反した小気味の良い音だけが響きました。

涙目で蹲るウマ子を見下ろしながら太子は呆れ果てたかのように言い放ちます。

「せめてもう少し面白いことを言えませんか」

「前から感じていたが、君の評価はいささか辛くないだろうか？」

ウマ子は全く反省せず、太子のやる気が下がりました。

これ以外にもウマ子がかくだらないことを言う度に太子がどこからか現れてウマ子の頭や尻を杓で叩いた記録が多数存在します。

二人の仲を表すエピソードではありますが、後世の私達はどのように思えばよいのでしょうか。

「……えっと、これ、史実ですか？」

「残念ながら日本書紀や法隆寺縁起等に伝わる紛れもない史実です」

「ええ……」

「蘇我ウマ子はウマ娘の皇帝と言われるほどの天才なんですけれど……その、ユーモアのセンスは凡才以下だったようです」

「それでもひどすぎませんか？ これのせいで戦争にも負けかけてましたよね」

「この他にも、

「調子は『最高』だ。仕事に『さあ行こう』」出仕を前に言った言葉。当然、直後にどこからともなく現れた太子に叩かれた。

「好きだと申す気はございません」推古天皇から「実は太子の事が好きなのは」と問われて。なお直後に太子に（以下省略）

「由緒正しい朝廷の役人として、走りに勉学に“意気揚々”と励み——悔いのない日々を“生きよう”ではないか」官位十二階制定時、新たに登用されたウマ娘の役人に対する激励。言うまでも無く太子に（ry

等々の言葉を残しており、飛鳥時代を研究する学者達を困惑させてきました。

ある歴史学者は言います。

この世に絶対はないが、彼女には絶対があつた。

数多の美点より、たつた三つの欠点1. ダジャレ好き。2. 引き籠もり癖。3. 太子好きすぎ問題。を語りたくなる偉人。

それが蘇我ウマ子というウマ娘だ。



## 第2回「飛鳥時代 二人の天才と仏教伝来」下

594年2月に太子とウマ子は仏法僧の三宝を興隆させるべく仏教興隆の詔を発します。これにより各豪族で氏寺の建立が盛んになり仏教が広まってゆきました。また、この詔ではウマ娘が修行の為に走ることが推奨され太子とウマ子によって従来 of 行事としての競争の他に多くの競争が生まれ、都中の人々を熱狂させたようです。

596年には蘇我氏の氏寺である飛鳥寺が完成します。当時は東西210m、南北420m、塔の高さは40mという大寺院であり、蘇我氏の権力を象徴する建物でした。完成記念の競争には当然ウマ子自らも出走し年齢を感じさせない圧倒的な強さで1着をもち取っています。

また、太子はウマ娘の育成にも力を入れます。598年4月に全国から優秀なウマ娘達を都に呼び寄せ、数百人ものウマ娘が集まったのです。と、ここで太子は運命的な出会いをします。

集められたウマ娘の中から太子の目を釘付けにする娘がいました。彼女こそが後に甲斐の黒駒と呼ばれる伝説のウマ娘です。黒駒の髪は艶やかな黒で四肢は透き通るかのような白でした。太子は彼女に神懸かった才能が秘められていると見抜き、自らが育

成を行います。すると、同年9月には東国へ赴き、富士山を越えて信濃国まで至り、3日を経て都へ帰還したという伝説が生まれるほどの名バとなったのです。

太子が黒駒の育成に力を入れる様子をウマ子は複雑な様子で見っていたようです。太子によりウマ娘の競技が活性化し、朝廷の儀式のみならず様々な場で走る機会が増えた事は彼女としても喜んでいたのでしよう。しかし、ウマ子もまた一人のウマ娘として優れた力を持ち、競技では無敗とまで言われていました。そんな彼女の目の前で太子が若い才能に魅了されているのにも嫉妬心を抱かずにはいられず、太子と黒駒の逸話には度々ウマ子や、時にウマ子の娘であるエミシが登場し、太子を巡って女の戦いを繰り広げるのです。

一方で、黒駒は田舎から上京した後は常に太子の側を離れず、依存する傾向にあったと見られます。ある日、黒駒が太子と共にトレーニングから屋敷に帰ると、ずっと太子の顔を見ていた黒駒が屋敷の門にぶつかってしまいます。太子は驚いて「気を付けてね」とだけ言ったのですが、黒駒は太子を驚かせたことを悔やみ過ぎ、拳句の果てに嫌われたと思いついで絶食してしまいます。慌てて太子が「私は気にしていないよ。それよりいっぱいお食べ」というと今度はモリモリ食べ過ぎて若干太り気味となってしまう、太子を苦笑させたと伝わっています。

600年、太子は隋に対して第一回目の遣隋使を派遣します。しかし、推古天皇に代

わり太子やウマ子が政治を取り仕切る運営は隋の皇帝楊堅には理解できず当時の隋は中央集権的な皇帝親政を行っていたため、日本のありかたは道理に外れていると思つた。国交を結ぼうとはしませんでした。

外交の失敗に気落ちする太子でしたが、遣隋使からもたらされた知識により改革の糸口を掴みます。また、とあるウマ娘により気落ちする間も無い状況においやられてもいました。

603年にウマ子と共に冠位十二階を制定。身分ではなく才能を基準に人材を登用し、天皇中心の中央集権を強めるのが目的でありました。

翌年、「和を以て貴しと為し」からはじまる十七条憲法を制定。憲法と言っても官僚や豪族に対する道徳的な規範が示されており、行政法としての性格が強いものでした。

これらの改革は中央集権を強めるものであり、隋に倣ったものです。太子は次の遣隋使派遣の準備として国内の制度を整え、今度こそ国交を結ぼうとしたのです。しかし、太子が遣隋使派遣に取り掛かるにはここから3年の月日が必要でした。それも政治的な問題では無く、極めて個人的な理由によつて。後世のウマ娘達がサムズアップし、男性が恐れおののき、女性力は力なく首を横にする珍事、聖徳太子監禁事件です。

事の始まりは600年。一人のウマ娘が朝廷への出仕をはじめたのがきっかけです。彼女の名は蘇我エミシ。ウマ子の娘です。

エミシはこの時15歳。明るくて活発、そして輝くような笑顔が眩しいウマ娘です。母譲りの競技の才はもちろんのこと、特に舞踊に長けており身軽で跳ねるように踊ったと言います。一方で偉大な母ウマ子に対しては妄信的になつている節もあり、政治や競技で母が活躍することを誇りとし、さらには練習とは言え実の母に競技で敗れても「やつぱり母上はすごい」と悔しさすら滲ませないほどでした。

エミシの転機となるのが太子との出会いです。太子は一目で潜在能力はウマ子を越え、黒駒にも匹敵するエミシの才を見抜くと同時に「もつたいたい」と思つたのです。

今のままでは偉大な母に隠れて才能を發揮できないまま終わってしまう。それはあまりにも不幸なことです。

そこで一計を案じた太子は非公式の場で黒駒、ウマ子、エミシの三人に競わせたのです。結果、ウマ子は黒駒にクビの差で敗れるほどの大接戦となりましたがエミシは二人に大差を付けられてしまったのです。絶対だと思つていた母の敗北。黒駒と言う余りにも高すぎる壁。エミシを縛っていたプライドは粉々に砕け散つたのでした。

これを切っ掛けに心境に変化が起こり、打倒黒駒と日本一のウマ娘になることを掲げて太子の指導下に入ったのです。太子はエミシの変化を喜び、黒駒と共に切磋琢磨させる日々を送ります。

決戦の日となつたのは603年11月下旬。冠位十二階の制定を記念した競技であ

り、優勝者には天皇から楯を下賜される榮譽あるものでした。

太子に神懸かりとまで言われた黒駒。その黒駒に匹敵するとまで言わしめたエミシ。逃げの黒駒と差しを狙うエミシの頂上決戦は、全くの同着であります。互いに全力を出し切ったエミシと黒駒は相手を讃え合い、周囲は後世にまで残る名勝負であったと語り継ぎました。

しかし、エミシと黒駒の戦いは予想もしない形で決着となります。競技こそ同着となった二人ですが、競技と競技後の舞踊は切り離せないものであり、どちらもこなしてこそ真のウマ娘であります。ところが黒駒、この舞踊が壊滅的に不得手だったのです。先程までの威風堂々とした様子は微塵もなく、優雅に踊るエミシの隣で硬直する黒駒。結果、日本一のウマ娘の称号はエミシに与えられたのでした。とは言え、エミシとしては納得がいかなかったらしく二人で日本一と公言し、後に黒駒に舞踊の手ほどきを行っています。結果は……記録ワケワカンナイヨにありません。

この件から自信と誇りを取り戻したエミシは偉大な母に負けぬ程に政治と競技の両方で活躍していくこととなります。しかし、太子は気付いていませんでした。自分を見つめるエミシの瞳が、時折光を失っていることに。

もともと誰かに依存する傾向のあったエミシですが、日本一のウマ娘となった後に太子への恋心を自覚します。しかし、太子はこの時既に30代を目前に控えながら政治に

指導と過密なスケジュールによって身を固める暇もありませんでした。唯一の出会いの場がウマ娘の指導であり、天性のトレーナーとしての才を持つ太子は多くのウマ娘から想いを寄せられていました。今までは黒駒が牽制することで太子に急接近するウマ娘は現れませんでしたが、黒駒と同格になったエミシの存在は良くも悪くも太子へのアプローチを増加させることになります。しかし、嫉妬深く独占力に定評のあるウマ娘。その中でも日本一とまで言われたエミシは恋敵となる相手に対して黒駒ほど優しくはありませんでした。

太子が他のウマ娘の走りを見ていた事に嫉妬した際には、

「もー、ダメダメーキミはボクの指導人でしょ！しょーがない！今日は追加で1周だけ走ってあげてもいいよ！……見るべきはほかの子か、ボクか。その目でちゃんと確かめてよ」

と言うや否やまだ育成もままならぬ新人のウマ娘を圧倒的な脚力でねじ伏せて心をへし折ります。

太子に群がる恋敵を払う日々が続きますが、肝心の太子は相変わらず激務に追われ一向に身を固める気配がありません。一方で、エミシの太子への感情は次第に抑えがたいものとなっていききました。

そして――

「3年間、一緒に走ってきてわかったよ。ボクには太子しかないって」

603年、聖徳太子失踪す。この報せに朝廷はパニックに陥ります。推古天皇はただちに搜索を命じ、ウマ子は持てる兵力を動員し搜索隊を結成。

ギャグの一つも思い付かないほど憔悴するウマ子でしたが、ふとここで違和感を覚えます。エミシの姿が見えないのです。

嫌な予感がしました。と言うか、もはや確信していました。

「あいつ、やりやがったッ!」

急いで飛鳥中の蘇我家所有の屋敷を調べましたがエミシと太子は見つかりません。

もはや神仏に縋るしかないと飛鳥寺を訪れたウマ子に聞きたかつたものであり聞きたくなかつたものでもある声が耳に入りました。詳細については記紀ならびに飛鳥寺縁起にさえも箝口令と記録の抹消が徹底され残っていませんが、ともかく太子は無事に保護されたのです。

娘の暴挙に対しウマ子は「加減しろおパカ!だがでかした」と痛罵(?)し、黒駒は「その手があつたか」と納得する始末。

心身ともに傷ついた太子は推古天皇の前でさめざめと泣きました。推古天皇もかつて襲われかけた恐怖があつたため太子に深く同情しましたが、彼女としてもいい齡した甥がいつまでも身を固めないことを心配していました。その点ではエミシに感謝して

いたのです。

「あんなことがあつてから言うのも何ですけど、これを機に身を固めたら？」

推古天皇の勧めもあり后を迎えることとなつた太子。償いと称して相手はウマ子が手配する事となりました。

しかし、何故か太子は一抹の不安がよぎります。まるで最後の直線で後ろからウマ娘が差し込む様子を伺っているかのような感覚です。

しばらくしてウマ子が太子の後候補を連れて来ました。相手はウマ子の娘である蘇我トジコ……いや、どう見てもエミシです。

太子は絶望した。外堀は埋まもう逃げられないぞつていたのだ。

「だましたなア！だましてくれたなアアアア！」

「覚悟を決めろ。うまびよいから逃げるな」

記録で確認される最古の「うまびよい」という単語である。結局うまびよいとは何なのだろうか。

何にせよ太子の後である蘇我エミシとトジコは同一人物であり、611年には蘇我イルカが誕生しています表向きには蘇我家の当主エミシの子であり、流石に太子の子と公表することはできなかったのだろう。

この事件を現代のウマ娘達は「お美事」と讚え、現在でも手本としています。日本の



ウマ娘の結婚相手がトレーナーである割合の高さ実に全体の9割。からもそれが事実である事が察せられます。全国のトレーナーの皆様は身边にお気を付けてください。

「……（絶句）」

「史実とは言え鮮やかな手管でしたね。攻めると決めるや一気呵成。いやー、天才はいますね、くやしいけれど」

「えー、全国のトレーナーさん、本当に気を付けてください。我々人間の男はウマ娘には勝てません。適切な距離とリスク管理を徹底してください！」

「無理だと思えますけどね。本能レベルで私達は走ることに喜びを感じますから。その力を引き出してくれるトレーナーさんを好きになるのは自然の摂理。かくいう私も現役時代にトレーナー旦那さんを実家に紹介したり温泉で絆を深めたりと外堀を埋めてゲツトしてますし」

「救いは無いのですか！」

「諦めなさい。うまびよいからは逃げられない」

全国の男性諸君の悲鳴はさておき、歴史に戻ります。

607年、第2回遣隋使が派遣され国書を皇帝煬帝に奉呈します。

この国書の書き出しこそがかの有名な「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に

致す。恙無きや」というものです。

これまで世界に天子（皇帝）はただ一人という中華王朝に対し、日本は自らも天子であり対等の立場であると宣言したのです。

当時、隋は高句麗と緊張状態にあつたため高句麗の背後に位置する日本を重要視し、冊封無き国交が成立したのでした。

610年、太子の跡を継ぐこととなる山背大兄王が誕生。母親は蘇我氏の縁者だとされますが、非常に嫉妬深かつたエミシが許したとは考えられず、おそらくウマ子が男子の後継者も必要だと考えて蘇我氏から人間の一族を嫁がせて儲けたと思われれます。

611年、蘇我イルカが誕生。公的にはエミシの子としか記録されていませんが、父親は太子だと考えられています。

612年、日本書紀に百濟から帰化した味摩之みましという人物が「呉で学んで伎楽の舞を習得した」と聞き、太子はウマ娘を集めてこの伎楽の舞を習わせました。伎楽はチベツトやインド発祥の仮面劇で、所作は猿楽、伴奏は雅楽に大きな影響を与えたとされます。ウマ娘達の舞踊にも大陸の風が入り、より多種多様な発想が生まれていきました。

614年、2回目の遣隋使が派遣。彼等は隋の滅亡から唐の建国までを経験する事となり、帰国後に日本に大きな貢献をすることとなります。

この後、太子とウマ子は共に目立った政治的な動きをしなくなります。隋との国交も

成立し、多くの優秀な人間とウマ娘により国政は安定しています。太子は法隆寺の夢殿に引き籠り仏教の著作に専念するようになり、ウマ子は既に老齢にさしかかり穏やかな余生を楽しむようになりました。

620年、太子とウマ子は協力して国記、天皇記を作成。現在は消失してしまいました。が、現存していれば日本最古の歴史書であり、古代史の解明に大きな役割を果たしたことでしよう。

621年、黒駒が死没。太子は早すぎる死を嘆き、長年に渡って良きライバルだったエミシも深く悲しみました。

翌年、太子は病に倒れます。同じ月には太子の母も薨去しており、近しい者達が次々と亡くなり気落ちする中を病魔に襲われたのです。

倒れる直前、太子は夢殿で不意に「私は疲れてしまったよ。そろそろ死ぬかもしれないね」とこぼします。

太子を訪ねていたエミシは、「なんで、そんな悲しいことを言うんだよ。ボクの尽くし方が足りないの?」と不満そうにします。

ウマ娘は老衰で亡くなる寸前まで若く美しい姿を保つ場合が多いです。20年間変わらぬ姿のエミシを見て太子は柔らかく笑いました。

「君との暮らしに飽きたわけでは無いよ。けど、近頃は何をしても気持が沈み込んでい

くんだ」

「ふーん。じゃあさ、あと1年だけでいいから生きてよ」

「どうして?」

エミシは言います。来年に太子の50歳記念の競技があり、そこで復帰するのだと。

数年前に足を骨折したエミシは長らく競技から離れていました。その後もウマ子に代わり政治の舞台で活躍していたため練習も不足していましたが、太子の見立てでは1年あればエミシの才能ならば十分に現役のウマ娘達にも通用、いやそれ以上になれると思えるのです。

「ボクは太子の愛バで無敵のエミシ様。ウマ娘界のテイオーだよ。絶対優勝するから」

「そうだね。君は絶対だものね」

「約束だよ。ボクの走りを見たら暗い気持ちなんて吹き飛んじやうんだからね」

しかし、彼等の約束は果たせませんでした。

太子の病はますます重くなり、もはや余命いくばくも無いほどです。

最期の時、太子を見舞ったのは長年に渡る友であったウマ子でした。

この時、ウマ子は80歳近く。さしものウマ娘とはいえ老いが表れています。

「早すぎるぞ太子。私より先に行くなんて、順序が逆じゃないか」

「これも天命ですよ。それに、私の役割はもう果たしたでしょう。やるべき事は……あ

あ、一つだけありましたね。しまった、あと1年生きないといけないのに」「どうした?」

「エミシが復帰するんですよ。ちょうど私の50歳の誕生日記念の競技で。そこで優勝するから見てくれと、約束したんです」

「それは、悪い男だね君は。向こうで言い訳を考えておくことだ。きつといいわと許してくれるさ。ふむ、いささか無理やり過ぎか」

「最後の最後まで本当にあなたは……本当におパカな方ですね」

「なに、死は終わりでは無い。輪廻の果てにまた会えるから、その時にはもう少し粹なことを言えるよう努力するさ。そういう教えを信じて来ただろう、私達は」

「はは……そうですね。死は終わりじゃない……けれど、見たかったなあ……」  
エミシがもう一度、1着で駆け抜ける姿を。

621年2月22日。聖徳太子、薨去。

ウマ娘の手で産まれ、ウマ娘に看取られる生涯でした。

「うそつき……」

翌年の第1回聖徳太子記念。

蘇我エミシ、1着。

奇跡の復活と周囲は騒ぎますが、彼女に笑顔はありませんでした。

この競技を最後にエミシは引退。以後は母の跡を継いで政務を行います。娘のイルカが成長すると早々に跡を譲り、記録にも殆ど登場しなくなります。

「ウマ子の生涯、うまくいったな。……うん、悪くない。ふふふ、これなら太子も腹を抱えるな。叩かれるのも、まあ癖にならなくはなかったが、次は撫でてほしいものだ」

626年5月20日。蘇我ウマ子死去。

ウマ子の墓は彼女の好物だった桃の木を植えられたため桃原墓と呼ばれ、現在の石舞台古墳であると言われています。また、霊廟は太子の眠る叡福寺北古墳のすぐ側に作られ、二人は今も寄り添うように眠り続けています。

こうして二人の天才は去りました。しかし、遺したものは多く、これが律令国家日本を作り上げていく原動力となるのです。

まとめ

○蘇我氏はウマ娘が当主を務め、蘇我ウマ子の時に最盛期を迎えた。

○ウマ娘が設立に大きく関わった仏教を日本に広めることで走禪を大々的に広めようとした。ついでに蘇我氏の権威も拡大する。

○太子とウマ子によって競技が増え、ウマ娘が活躍する場が増えた。

○遣隋使の派遣などで日本を国際社会に進出させ、大陸から知識や技術を取り入れていった。

「聖徳太子と蘇我ウマ子。色々と言いたいこと、ツツコミたいことはありますが、彼等は共に晩年には権力を手放していますね。ああいうものに執着する人が多い中で、彼等は潔いと言いますか、引き際が分かっていたのでしょうか」

「んー、もともとウマ子は何というか太子がいなければここまで大きな権力を持つとうとしなかつたと思います。彼女は結果として権力者に昇り詰めましたが、晩年にはあつさりとしてそれを手放して穏やかな老後を過ごしていますし、何より太子の死後はほとんど記録が無いくらいに引き籠ります。娘のエミシも後継ぎが成長すると同時に政治の世界から離れていますし、彼女達にとつて政治や競技は太子がいたから頑張れたのであつて、執着するようなものでは無かつたのでしよう。それよりも、競技や舞踊で人に喜んでもらつたり、太子に褒められることの方が大事だつたのだと思います」

「太子も権力には興味なかつたど？」

「太子は仏教を広めることと日本の対外関係を良くすることが自分の政治家としての役割だと思つていましたからね。それが成し遂げられると燃え尽きてしまつたのでしよう。一方でウマ娘の育成については夢殿に籠るようになってからも続けており、それすら手につかなくなるのは黒駒が亡くなつてからです。本質的には政治家と言うより学者であり根つからの指導人だつたのだと思います」

「そもそも太子は、なぜあそこまでウマ娘に愛されたのでしょうか」

「それはウマ子が守屋との決戦に赴く前に太子に掛けた言葉にあります通り、同じ視座に立つてくれる。同じ夢を見て、それを現実にする方法を示してくれるからだと思えます。これは現在のトレーナーにも言えることですが、ただ指導力があるだけでは良いトレーナーにはなれません。そのウマ娘が何をしたいか、何を夢見ているかを理解し、共に歩んでいく意思が必要なんです。ウマ娘は善意にも悪意にも敏感なので、トレーナーがどう思つて指導しているのかをよく見抜きますが、ウマ娘にとつて太子の在り方と言うのは満点のものだったと思います」

「和を以て貴しとなし、夫れ事は獨り斷むべからず必ず衆と與に論ふべし。十七条憲法にも繰り返し調和や寄り添い合う意思を強調しています。太子がこのような考えを持つにいたつたのは仏教の影響よりも、生まれた時からウマ娘と寄り添う中で、彼女達のように穏やかに楽しく生きられたらいいのにと思つたからなのかもしれませんね。アスカさん、本日はありがとうございました」

「ありがとうございました」

太子の死後も、ウマ娘達は様々な分野で活躍します。

ある時、人間の役人があまりに熱心に働く彼女達に、どうしてそこまでするのかと問います。それに対して彼女達は誇りを持ってこう言うのです。



「私達は聖徳太子の愛だから」と。

そして、遣隋使の帰還により大陸から様々な知識や書物が日本に入ります。

それらを基に日本は律令国家への歩を進め、世界史にも関わる国へと大きな進化を遂げます。

はじめりの指導人、聖徳太子。

永遠なるウマ娘界の皇帝、蘇我ウマ子。

二人の天才によってあの日、日本は世界に届いたのです。

終

制作 日本ウマ娘放送協会府中支部

## 次回予告――

「イルカが何をしたと言うの……」

悪辣非道と言われたウマ娘がいた。

太子の血族を滅ぼした血みどろのスレイヤー。

忠臣か、朝敵か。暴挙か、改新か。

彼女の名は――蘇我イルカ。

次の歴史を語ろう。

第3回「ウマ娘の動乱 大化の改新」

ご期待ください。

## 第3回「ウマ娘の動乱 大化の改新」上

律令国家への道を歩み始めた日本。しかし、中核であつた聖徳太子と蘇我ウマ子の死後は絶対的な指導者不足により思うような改革はなりませんでした。

天才2人の跡を継いだ蘇我エミシ。彼女もまた天才と呼ぶに相応しいウマ娘であり、特にウマ子には無かつた他豪族との協調や、全体の利益の為ならば引き下がることをためらわない柔軟な姿勢はかつて蘇我氏と敵対関係にあつた豪族達からの好感を得て関係改善に至る場合も多かつたです。この協調政策により国政は安定はしていましたが、一方で太子とウマ子の時代ほど蘇我氏の躍進は無く、一族の内部からは不満の声も上がっていました。

「いつまで宗家をウマ娘にのさばらせるのだ」

「今や皇室との縁は我等によつて保てているも同然。それをエミシは分かつておらん」  
長きに渡る蘇我氏宗家と皇室との蜜月は蘇我氏の間人派閥にとつては決して悪くないものでしたが、労せずして得た權益に人は増長したのです。

また、朝廷内の蘇我氏とは遠い皇族達も蘇我氏の栄華を好ましく思わず、衰退の時を伺っていました。

そのような暗雲が迫っているとは知らず、宮中の修練場では一人の少年とウマ娘がトレーニングに励んでいます。少年は山背大兄王。やましろのおおえのおうウマ娘は蘇我イルカ。

共に聖徳太子の子であり異母兄妹にあたります。

山背大兄王は太子の才能を受け継ぎ、多くのウマ娘から慕われる名指導人の片鱗を見せていました。

イルカもまたウマ子、エミシと同じく小柄ながらも優れた脚を持ち、柔軟性こそエミシに劣るものの並外れたスタミナにより長距離での活躍が期待される俊英です。また、イルカは山背大兄王を「お兄さま」と呼んで心から慕い、常に側を離れませんでした。誰もが、この二人がかつての太子とウマ子、エミシのように優れた指導人とウマ娘となり、競技と政治の両方から日本を牽引すると疑いませんでした。

時に627年。

大化の改新まで、あと18年。

日本ウマ娘放送協会特別企画

ウマ娘と迎える日本の歴史

第3回『ウマ娘の動乱 大化の改新』

「こんばんは。今夜のウマ娘と迎える日本の歴史は大化の改新。豪族の権力が強まっていた飛鳥時代から、天皇中心の律令国家へと切り替わるそのターニングポイントであります。解説には先週に引き続きアスカアタックさんにお越しいただいています。アスカさん、本日もよろしくおねがいします」

「よろしくおねがいします」

「先週、蘇我イルカは太子とエミシの子ではありませんが公的には太子の子であると伏せられていましたね。しかし、山背大兄王とイルカは呼び方からして全く隠す気がないようです。どうなのでしょう」

「正直、蘇我氏が太子に執着していたのは事実でしたし、エミシが父親不明の子を産んでも妊娠期間中に太子にいつも3割増しに甘えていたという記録もありますので、当時から公然の秘密扱いでした。また、この時期には蘇我氏に逆らう者は存在しなかったのでイルカも隠す気が無くエミシや山背大兄王も止めなかったのでしょう」

「∴私も学生時代に歴史を学びましたが、山背大兄王と蘇我イルカがこのような関係だとは知りませんでしたね」

「教科書にはせいぜいこのあとの出来事が一言程度あるくらいで二人の関係性については書いてありませんからね。まあ、この二人に限らず教科書は出来事と人名をただ羅列

しているだけなのでそれについて思うところはありますが、掘り下げると一つの時代だけで一年終わってしまいかねないので難しいところですね。それに、イルカと山背大兄王や頼朝と九郎のようにうっかり深入りすると壮絶に曇ってしまい授業にならないものもありますからね」

「確かにそうですね。それはそうと、蘇我氏内の人間の系列。宗家はウマ娘が蘇我稲目以降ウマ子、エミシ、イルカと4代当主を務めたわけですが、ここに来てなぜ不満を募らせたのでしょうか」

「それは皇室との縁戚関係を主に結んでいたのはそちらの系列だからです。太子の祖母に当たる人物もそうですね、山背大兄王の母親もそうですね。ウマ子やエミシは権力を握りましたが一方で皇室に対しては忠臣であり続け、決してウマ娘の皇女による蘇我王朝を建てようとはしませんでした。これはエミシがイルカを太子の子とは公表せずあくまで臣民として育てたことから明らかです。しかし、太子と蘇我氏の間にも生まれた山背大兄王が次期天皇候補として名が挙がると、彼等は欲を出すようになります。ウマ娘の宗家に成り代わり皇室の外戚として実権を握る。後に藤原氏が行うことを先取りしようとするわけですね」

「なるほど。ウマ子やエミシといったウマ娘の結果として権力を握りましたが、あくまで推古天皇の統治と聖徳太子による政治を補佐する姿勢を崩さず、どちらかと言えば競

技の方に力を入れていましたね。しかし、人間はそうではなかったと」

「そういうことです」

「では、この暗雲がどのようなにして睦まじく育つ山背大兄王とイルカを襲うのでしょうか。ご覧下さい」

628年、長きに渡って日本を統治した女帝、推古天皇が崩御します。

天皇は崩御の直前、皇位継承候補となる自身の義理の孫にあたる田村皇子と、聖徳太子の子山背大兄王を病床に呼び寄せます。死を目前にしながらも推古天皇は冷静であり、田村皇子に対しては「慎み深く言動に気をつけよ」と諭し、山背大兄に対しては「あなたはまだ若く未熟なので群臣の意見を聴きなさい」と遺言しました。

この言葉を聞いた蘇我エミシは田村皇子を推古天皇は後継者に選んだのだと判断し、田村皇子の擁立を計画します。

しかし、エミシを除く蘇我氏は山背大兄王を天皇にすべく動き出しました。

「確かに山背大兄王は優秀だけど、先帝が言った通り若すぎる。それに、今必要なのは太子のように新しい風を入れる強い指導者じゃなくて、母上と太子が示した律令国家の基礎を固めて安定させること。だから、今はまだ――」

危機感を覚えたエミシは周囲の豪族と山背大兄王を説得し、王は後継者争いを辞退すると宣言します。

落着し一安心といきたいエミシでしたが、ここで予想外のことが起きます。蘇我氏の中で山背大兄王を推す人間の派閥がエミシに反旗を翻したのです。中核となった蘇我摩理勢はウマ子の従弟にあたり、蘇我氏族内の有力一門としてエミシと対立を深めていました。また、蘇我氏全体としても血縁の薄い田村皇子よりも、民衆やウマ娘達からの人氣が高く血の繋がりも強い山背大兄王を即位させることで外戚としての地位を得られると考えていました。

既に辞退を宣言した山背大兄王にとつても迷惑な話であり、王はエミシと協力して反乱鎮圧に動きます。結果として反乱の大義は失われ、摩理勢は討たれますが、これにより蘇我氏内での人間とウマ娘の対立は明確なものとなつてしまつたのです。

翌年の2月2日、田村皇子が即位し舒明天皇じゆめいてんのうとなります。蘇我氏の血縁はありませんでしたが、自身を推してくれたエミシを信頼し国政を任せました。しかし――

「一族内部からの反発が日増しに大きくなつてゐる。これ以上ボクが表に出てしまうと取り返しがつかないことになるかもしれない。幸いにも他の豪族達は協力的だし、しばらく任せよう。それに……少し疲れたよ、太子」

エミシは基本的に自らの屋敷に引き籠ることが多く朝廷に出仕する事は少なくなつ



ていました。そのため役人は重要な決定を行い際には朝廷では無くエミシの屋敷に赴いて業務を行うのですが、傍から見れば蘇我氏が専横の限りを尽くしているように見えます。これに対して大派皇子という人物が「役人は鐘の音を合図に出仕してはどうか」とエミシに提案しますが、自身が引き籠りのエミシは正直、わざわざ邸に役人が来てくれるのがありがたかったため提案を聞かなかったことにします。なお、この大派皇子は蘇我氏に近しい人物であるため、これは朝廷を軽んずる蘇我氏への警告と言うよりはエミシ個人に対する「引き籠らず仕事してください」というエールだったのかもしれない。

632年、遣隋使として長きに渡り海を渡っていた学僧・旻みんが帰国。この旻という人物、三国時代の英雄曹操の子で詩聖と謳われた曹植の末裔であるともいわれる才英でした。彼は帰国後に学問堂で次代を担う若者たちの教育を行います。そこには若き蘇我イルカと中臣鎌足の姿もあつたのです。

イルカと鎌足は学友と言う形で度々交友があり、共に秀才として研鑽し合う関係でした。かつて蘇我氏と中臣氏は仏教の授受を巡って激しく対立しましたが、先の推古天皇の後継者問題の際には鎌足の父はエミシと協力して田村皇子を推挙するなど良好な関係にあり、かつてのわだかまりは溶けていました。

「お兄さま、お兄さま。イルカ、先生に褒められちゃった」

「何て褒められたんだ？」

「イルカが最カワ。異論は認めない吾が堂に入る者にイルカに如くはない、だって！」

「ほう」

「あと、イルカに力で分からせられたいって言われたんだけど……どういう意味なんだろう？ イルカに先生になって欲しいのかな？」

「何……だと。よくも……よくもイルカに！ 妹に！ そんな感情を向けたな！ 待つていろ生臭坊主、今行くぞ！」

偶然その場にいた鎌足が暴走する王を止めようとします。

「お、落ち着いてください殿下。お気持ちは分かりますが落ち着いてください！」

「どけ、私はお兄さまだぞ！」

イルカは当時の知識人から貪欲に知識を吸収するとともに、その才から抜きんでて並ぶ者無しという評を受けていました。

また、若さゆえにやや急いたところもありましたが山背大兄王はイルカの専属指導人として名を高めています。

彼等は飛鳥の各地で行われる競技を席捲。競争では力強くは走り、舞踊では可憐に舞う姿に人々は魅了されますが、同時期に同じ競技で戦ったウマ娘達からの評価はそれほど芳しくありませんでした。

これは、山背大兄王はイルカの専属として活動し他のウマ娘を一切眼中に入れなかったため、イルカが山背大兄王を独占していると思われたからです。

イルカの母であるエミシも太子を半ば独占していましたが、甲斐の黒駒というライバルの存在と太子自身が多くウマ娘を指導しようとする姿勢を取っていたためウマ娘達は問題視しませんでした。しかし、山背大兄王が他のウマ娘に一切関わらないのは不満を生み、流石にイルカも「他の子の面倒も見えてあげて」とお願いしますが、山背大兄王は、

「いいかイルカ。私はお前の為に、お前は私の為に生きる。私達は二人で一つだ。他は知らん」

と一蹴。この方針は生涯変わらず、この時代はイルカ一強となったのです。

ウマ娘達もイルカに勝てないことに不満を抱きつつも山背大兄王がイルカ専属を公言していたためにまずは彼女に向けられず、全ての競技で一生懸命走る彼女とは特に卜ラブルを起こしていません。

「いや、指導してあげましょうよお兄さま」

「現代的に解釈すると、重度のシスコンだったみたいですね。イルカもブラコンだった

ので、似たもの兄妹だったのでしょうか」

「まあ、エミシの背を見て育ちましたからね」

「しかしこれが後世には悪評として残ってしまい、一方的にイルカが悪者として世に知られてしまったのです。愛情も過ぎれば良くないと言うことですね」

「イルカ一強の時代と言う話ですが、いくら山背大兄王の指導があるとはいえ他のウマ娘では太刀打ちできなかつたのですか？」

「少なくともケガや病で棄権したものを除けばイルカが敗れたものはありません。当時はまだ競技に戦術的なものが確立していませんでしたので、当代随一の頭脳と体力を持つイルカに山背大兄王という名指導者がついたわけですから無敵と言つて過言ではなかつたでしょう」

時は過ぎ、蘇我氏による安定政権の中で日本は成長を続けていました。

640年、遣隋使として大陸に渡り隋の滅亡から唐の建国までを見聞した南淵請安みなぶらのしやうあんが帰国。大陸で学んだ知識を広めるために開塾します。

イルカと鎌足は再び学友となり、そこには中大兄皇子の姿もありました。塾においてイルカと鎌足は共に秀才と称賛され、この時の日本では並ぶもの無き頭脳であつたと言

えるでしょう。

果たして、彼等はこの時どのような未来を描いていたのでしょうか。協調政策を取るエミシの娘であるイルカ。長きに渡りイルカと共に学んできた鎌足。エミシの推挙で父が天皇となった中大兄皇子。

この若き秀才達が日本を牽引する。誰もがそう思っていたのではないのでしょうか。

だが、正にこのとき、濁り水はゆっくりと流れはじめていたのです。

大化の改新まで、あと5年。

「こうして人物関係を見ると、イルカと鎌足、そして中大兄皇子までもが学友であったというのが私には意外ですね」

「この時期のイルカは競技に政治、そして勉学と過密なスケジュールを組んでいます。鎌足や中大兄皇子からすればとんでもない存在を目の当たりにした気持ちだったでしょう」

「イルカについて鎌足は『ウマ娘ではない、何か別の生き物に見えていた』と述懐し、畏怖していたと明かしています」

641年11月、欽明天皇が崩御します。

この時、後継者候補として名が挙がったのが欽明天皇の長子である古人大兄皇子ふるひとのおおえのおうじと山背大兄王です。

古人大兄皇子も母親が蘇我氏の出身であり、蘇我氏が次期天皇として担ぐに相応しい人物でした。

一方で人々からの人気が高く蘇我氏の血も濃い山背大兄王も有力な候補であり、悩んだ末にエミシが下した判断は保留でした。蘇我氏内で真つ向から意見が割れてしまつたために判断をくだすことができなかったのです。

とはいえ、新たな天皇を立てないわけにはいかずエミシは打開策を迫られます。

そしてエミシが選択したのは、かつての推古天皇と同じく女帝を立てることでした。

642年1月、欽明天皇の皇后だった寶女王たからめみが即位。皇極天皇となります。

皇極天皇はかつての推古天皇と同じく優秀な人材に国政を任せることを望み、結果としてエミシが重用されることとなります。

女帝を中心に老臣が纏め、知恵ある皇族が摂政をし、若きウマ娘が側に寄り添う。

これはかつての推古天皇、ウマ子、太子、そしてエミシの関係を皇極天皇、エミシ、山背大兄王、イルカでもう一度再現することを意味します。

エミシの中には、かつての思い出が溢れていた事でしよう。

「まさかあの時と同じような状況になって、ボクが母上の立場になるなんてね。となると、あの子たちがうまびよいすることになるんだけど、うーん母親としてどんな反応すればいいのさ」

当時、異母兄妹での婚姻は珍しくなく皇室では多く確認されています。そして、エミシは知りませんでしたがこの昔に山背大兄王とイルカはうまびよいしうまだつちする仲になっていました。

とりあえず当人たちがどう思っているのか探りをいれると、明らかに動転するイルカにエミシは確信します。

「こいつらうまびよいしてたんだ」

エミシは衝撃の余り好物のハチミツを大量摂取し、太り気味の診断を下されるほどだったと言います。しかし翌朝には孫の顔を見る日も近いと考え直し二人を祝福したようです。

幸福な時は一瞬のことで、現実には蘇我氏にとって厳しいものでした。

ウマ娘が当主を務める蘇我宗家は、実質的に日本のウマ娘を代表し統括する立場にあります。そして、国政では外交を得意としており大陸情勢には常に気を配っていました。

この頃の大陸は唐では皇帝太宗の貞観の治による善政が敷かれ国力を増してしました。一方でモンゴル高原の遊牧民族は内部分裂と唐による北伐で勢力を衰退させ、ウマ娘の地位は非常に低くなっていたのです。半島においても百済が新羅によつて追い込まれ、やはり半島に在住するウマ娘にとつて非常に厳しい状況でした。

大陸で困難な状況を極めるウマ娘にとつて日本は希望であり、日本のウマ娘にとつても大陸の同族を見捨てることはできない選択でした。

甘樫丘に築かれた蘇我宗家の館の遺構を研究すると、その構造から邸宅とは思えない。むしろ武器庫や砦と言うべきものだったようです。当時の記録にもエミシは邸宅に大量の武器を保有した事から武蔵大臣の異名を取つたと伝わり、大陸への警戒から戦力を整えていたことが見えます。

642年、エミシは自らの墓を築きます。その際に山背大兄王が治める地域の民も動員され、山背大兄王の側近が「蘇我臣は国政をほしのままにして無礼な行いが多い。天に二日無く、地に二王は無い。何の理由で皇子の民を思うままに使えるのか」と嘆いたと記録されています。しかし、エミシの墓所と伝わるのは大阪府太子町にあるエミシ塚古墳で、太子の眠る古墳、母ウマ子の霊廟跡の側にあります。このことから実際には老境に差し掛かったエミシが死後は太子の側で眠りたいと希望し、山背大兄王とイルカはそれを叶えようとしていただけではないでしょうか。



同年の1月から7月にかけて外交使節が怒濤の如く来訪し、イルカは対応に追われま  
す。使者に対して政治家として対応するのみならず饗応で行われる競技と舞踊にも出  
なければならぬ彼女は休む暇なく働き続けました。引き籠りがちだったエミシでさ  
え亡命してきた百済の王族と対談するなど精力的に働いています。

この外交使節の多くは大陸の不安定さと百済の危機を伝えるものであり、外交担当に  
してウマ娘の取りまとめである蘇我宗家は最悪の可能性である大陸出兵にも備えなけ  
ればなりませんでした。

ようやく落ち着いて来た9月。今度は皇極天皇が外交使節から聞いた大陸のパワー  
バランスの変化に危機感を抱いたのか船舶の建造を命じます。さらに、ここでモノづく  
りに目覚めたのか天皇は寺院や皇居の改築を次々と行っていくのです。特に宮殿の建  
造と移動についてはエミシとイルカが関わらないわけにはいかず働きづめとなったの  
です。

「何でボクがこんなにも働いているのさ。陛下、そろそろ休ませてよー」

「駄目です。次は新しい新しい皇居を建てます」

「ナンデアタラシクイエヲタテルノ」

「それは私が建築にハマったからです」

「ワケワカンナイヨー！」

642年9月、皇極天皇は新たな皇居の建造を12月までに行うようエミシに命無茶振りじます。

何とか完成した翌年の4月に天皇は遷幸せんこうしました。これが飛鳥板蓋宮あすかいたぶきのみやです。板蓋宮は、文字どおり屋根に板を葺いていたことに由来するといわれています。当時の屋根のほとんどは茅葺きか藁葺きであり、板葺きの屋根は大変珍しいものでした。

「や、やつと休める。もう何も無いよね」

「天皇です」

「デターー!」

「次は長期的にわたって飛鳥中で上水設備を整えて行こうと思えます皇極天皇以前から上水設備は飛鳥寺等で存在したが、彼女の代から組織的な上水道網が整備される。」

「チョットナニツテルノカワカラナイ。ヤメヨウヨソナノサー、ハチミーデモナメテチヨットヤスモウヨー」

「……ません」

「エツ……?」

「やめません!」

「ヤダヤダヤダヤダヤダー!」

643年の10月6日。エミシは無断で大臣の地位をイルカに譲ります。これによ

リイルカは実質的に蘇我氏の家督を継ぎました。

突然の家督相続にイルカは不安でした。学友の鎌足や中大兄皇子はまだ国政に参加しておらず、唯一の頼りは山背大兄王だけです。

良くないことは続くのか、皇極天皇の母である古備女王がこの時期に薨去し、天皇もまた病気がちになってしまったのです。こうなると再び皇位継承問題が浮上するのですが、エミシが一線を退いた今ではイルカが蘇我氏内の意見をまとめなければなりませんでした。

しかし、山背大兄王と古人大兄皇子に加え候補者に皇極天皇の弟であるかるいのおうじ軽皇子も加わり後継者争いは一層の混迷を極めます。

軽皇子は蘇我氏の人間派閥で最も力を持つそがのいしかわまろ蘇我石川麻呂の娘を後に迎えるなど蘇我氏とのつながりを深めています。何故これまで押していた古人大兄皇子から乗り換えただのでしょうか。日本書紀によれば古人大兄皇子はイルカとの仲は決して悪くなく、彼の即位に対してイルカも肯定的でした。おそらく現行の山背大兄王を太子と同じ摂政としての役割に据える体制を崩すことを山背大兄王とイルカが望まなかったのでしょうか。

古人大兄皇子とイルカの接近を蘇我氏の人間派閥は良しとせず、新たな候補者を出します。それが軽皇子なのです。皇子は仏法を尊び神道を軽んじましたが、儒学にも通ず

る有数の知識人です。ある意味で蘇我氏の人間派閥は自分達の能力がエミシやイルカに劣ることを冷静に分析し、操りやすい天皇を立てるのではなくある程度能力のある天皇を立ててそれをサポートする計画でした。

実質的に蘇我氏の内紛となつた後継者争いにイルカは否応なしに巻き込まれていきます。

「イルカは、いない方がいいのかな」

「どうしてだ？」

「だって、イルカと仲良くなつたから古人大兄皇子はみんなから応援されなくなつたし、お兄さまは何度も天皇になれそうだったのに、イルカとお母さまのせいではなれなかつた。イルカが頑張つても誰も喜ばない。だからもう、イルカはいらない子なのかな」

「それは違う。お前が頑張っているのは私が一番よく知っているし、誰よりも喜んでいゝ。それと、私に気を遣うな。別に皇位に興味は無いし、お前を支えられるのなら今のままで良い」

「で、でも——」

「競技だとお前を見ている事しかできないけど、こつちは私の背中を見ていて欲しい。イルカ、お兄さまに前を走らせてくれないか」

大臣になつてからまだひと月も経たない夜です。不安に押しつぶれそうなイルカを

山背大兄王はいつも励ましていました。

「大丈夫だ。何があっても、お兄さまがお前を守るから」

夜、甘檜丘の屋敷でどうにも寝付けなかったイルカはぼんやりと外を歩いていました。

イルカとしては皆で仲良くできれば良いと心から思っていました。身内であるはずの蘇我氏の人間たちはイルカを嫌っています。

どうすればいいか悩むイルカの目に、丘の向こうが赤く光っているのが移ります。そこは斑鳩のある方面。山背大兄王が住んでいる場所でした。

「お兄さま……？」

643年11月1日。

蘇我氏の命を受けた巨勢徳多と大伴長が率いる軍勢が斑鳩宮の山背大兄王を襲撃します。

総勢は1000名ほどでしたが全員が装備を整えており、対する山背大兄王側はほとんど最低限の武器しかもっていませんでした。

攻めて来る軍勢が蘇我氏だけでなく多くの豪族と皇族さえも含まれていると知り彼等の思惑を看破しました。

「嵌められたか」

おそらく口実は最近流れていた山背大兄王が反旗を翻そうとしているという噂。そこに付けこみ先手を打ったという形で攻めてきた。あくまで噂と気にしていませんでしたが、それすらも罠だとすれば。

山背大兄王の予想は正鵠を得ていました。

今、山背大兄王が死んで最も疑われるのは蘇我氏であり、彼等が平然と全ての罪をイルカに押し付けるのは目に見えています。

自分がイルカやエミシを邪魔だと思ふ蘇我氏の人間達にとって消したい存在だと理解はしていましたが、そこにエミシが協調政策を取っていた他の豪族や皇族までもが暴挙に及ぶとは思っていませんでした。後悔しても状況は変わりません。

せめて一人でも多くイルカの敵を斃すために山背大兄王にとって最初で最後の戦いが始まりました。

「たとえ多勢に無勢であろうとも私は、全力でお兄さまを遂行する！」

王とその家臣たちはよく戦い、攻め寄せて来る者の中でも名のある豪族を多く打ち倒しました。しかし、多勢に無勢で徐々に追い込まれていきます。

自らが剣を振るい戦う中、敵からは「疲れているだろう。潔く討たれよ」と罵声を浴びせられます。しかし王は、

「だから何だ。それが妹の為に命を張らない理由になるのか！」

と一喝し斬り伏せていききました。

全滅が近いと悟った山背大兄王は邸に火を放ち生駒山に逃亡します。

王はしばらく潜伏していましたが、迫りくる冬の前に力尽き、法隆寺で最期を迎えることを決めました。

「イルカ、済まない。できれば誰も恨まず、幸せに生きてくれ。父上、どうか母上とイルカを護つて下さい」

11月11日。山背大兄王は自らの命を絶ちました。

翌日には訃報がイルカの耳に届き、彼女はひどく錯乱します。

「嘘だ。イルカ頼んだよね。お兄さまを助けてつて頼んだよね。嘘……嘘だ、嘘だー」

イルカは高向国押たかむくのくにおしに山背大兄王を捕縛という形で救出しようとしていましたが、国押はイルカの命令に従いませんでした。

山背大兄王の死を知ったエミシは嘆き悲しみ、激怒しています。イルカは母に対して「ごめんなさい、ごめんなさい」と謝り続けることしかできませんでした。

最大の支えを失い、イルカは暗闇の中に放り出された迷い子になってしまいました。

「お兄さま、イルカもう走れないよ。どうすればいいの、お兄さま。どうやって生きていけばいいの」

涙は止めどなく溢れて頬を濡らしますが、ここで不意に抑えがたい吐き気がイルカを

襲つたのです。

今までにない感覚にイルカは戸惑いますが、ある可能性に気付くと一層涙があふれて来ました。

「そつか……分かったよお兄さま。この子がお兄さまが最後にくれた希望なんだね」  
顔を上げたイルカの目は炯々と光り、その様子は青い炎のようでした。

「イルカ、この子を日本一のウマ娘ーうん、違う。もつと上に。お兄さまの子が日本を治めるべきなんだ。見ていて、お兄さま。イルカ頑張るよ」

イルカは、狂ってしまったのです。

翌年に産まれた山背大兄王の子を皇女と呼ばせ、皇室の行事を無断で代行するなど明確に篡奪を目論んでいると思わせる行為を行います历史上、皇統の篡奪を目論んだのは弓削道鏡と平将門、そして蘇我イルカだけだと言われています。

エミシはイルカの計画を聞き激しく反対しますが、既に実権をイルカに譲っていたため無力でした。

もはやイルカには山背大兄王の血を残すことこそがみんなの幸せになると信じて疑いません。

そして、イルカの治世は清廉にして苛烈でありました。

都の風紀は乱され、盗賊たちは次々に捕縛さえ人々は落ちた物でさえ盗もうとしない



ほどの秩序を保ち、イルカは民衆から畏敬の念を抱かせました。

ただただ彼女は頑張っていたのです。みんなを笑顔にするために。みんなを幸せにするために。ただ一人、イルカだけが幸せになれない治世でした。

時に645年。

大化の改新まで、あと僅か。

### 第3回 「ウマ娘の動乱 大化の改新」 下

「……何というか、確かにこれは教科書には載せられませんね」

「悲劇というのが生温いですからねー」

「私、ここから先が見たくないのですが」

「だめです。一緒に曇りましょう」

「ええ……」

645年7月10日。

この日は三韓から使者が訪れ、イルカも出席する予定でした。

朝廷から使いの者が訪れたためイルカは腰を上げます。暑い夏に長時間にわたって行われる儀式の為気乗りしません。大臣としてイルカが出ないわけにもいきません。

イルカが屋敷を出ようとすると、履こうとしたイルカの左足の靴が転がりました。

「イルカ、とうとう靴さんにまで嫌われちゃったのかな」

とてもしょんぼりするイルカ。外を見れば今にも雨が降り出しそうな雲模様です。

今日は読みたい本もたくさんあるしサボっちゃおうかなと思いますが、使いの者が急か

すのでしづしづ屋敷を出ました。

イルカはかつて山背大兄王から贈られた短剣を肌見離さず持つており大極殿だいごくでんに入る際に預かろうとする門番に対していつも、

「あ、あげません!」

と言つて断つていましたが、今日は道化が近づきイルカに短剣を預からせてほしいと身振りで示します。イルカはいつも通り断るのですが、この道化はあからさますぎる人参役者で、よよよとウソ泣きをします。その様子があまりに可笑しくてついイルカは笑つてしまいました。そして、久しぶりに笑顔になれた彼女はお礼として一旦剣を預けたのです。

丸腰になったイルカが席に着くと、儀式が始まります。

三韓からの国書を蘇我石川麻呂が読み上げ、滞りなく行事は進んでいきました。しかし、終わりに近づくとつれて石川麻呂の手は震え、汗は滝のように流れているではありませんか。

「石川麻呂おじさん、どうしてそんなに震えているの?」

「あ、ああ……これは陛下の前だから緊張してしまつてね」

「そうだよね。イルカもいっぱい緊張して、何回も失敗しちゃった。だから、失敗しても大丈夫だよ」

何も知らないイルカは真剣に石川麻呂を心配し、精一杯励ましています。その姿に、石川麻呂は一層震えが強くなりました。まるで、余りにも大きい罪悪感に震え上がっているかのようです。

「あわわ、ど、どうしよう……おじさんが余計に震えちゃった。落ち着いて、深呼吸だよ。ひっひっふー」

「……」

「ひっひっふー……あれ、おじさんなんで泣いて——」

その時でした。

物陰から誰かが突然飛び出し、イルカの首に斬りつけてきたのです。

驚いて立ち上がろうとするイルカの左脚にも刃が振るわれ、彼女は前のめりに転倒します。血だらけになりながら相手の顔を見ると、イルカは思わず叫びました。

「お、皇子、鎌足さん、どうして!?!」

最初に斬りつけてきたのは中大兄皇子でした。その後ろには彼の臣下が二人控え、さらに奥には弓を構えた中臣鎌足の姿もありました。

イルカには中大兄皇子と中臣鎌足が剣を向けているのかが何故か分かりませんでした。た。

彼等と同じ塾で学ぶ学友であり、山背大兄王を失ったエミシの悲しみを知っているは

ずでした。理解してくれると思つていたのです。これからやろうとすることを応援してくれるとさえおもつていたのです。

ここにイルカの味方は一人も居ませんでした。皇極天皇はいつの間にか姿を隠し、身内である蘇我石川麻呂でさえ顔を伏せたまま助けようとしません。

「どうしてなの……」

みんなを幸せにしたいだけなのに。みんなに喜んでほしいだけなのに。

「イルカが何をしたいと言ふの……日本書紀原文、臣罪を知らず。乞ふ、明らめたまへ（私が何の罪を犯したというのですか。どうか明らかにしてください）。」

満身創痍のイルカは尚も生きようと脱出を試みましたが、傷を負った左脚が更に酷く損傷し倒れ込みます。そして、皇子の臣下である網田と子麻呂の刃がイルカの命を絶ちました。

この日は突然の大雨に見舞われ、イルカの亡骸は庭に打ち捨てられます。

蘇我氏の協力者によって運ばれた娘の亡骸を前にエミシは何を思つたのでしょうか。

エミシの許には協力する豪族やウマ娘が集まり拳兵を促します。しかし、山背大兄王に続きイルカを失つたエミシにはもう今更抵抗する気力もありませんでした。

「太子、ボクは何を間違えたんだらうね。もう分かんないよ。助けてよ……」

翌日、エミシは自ら館に火を放ち命を絶ちました。

この時、多くの記録や文化財が消失しています。その中には太子とウマ子が手掛けた天皇記も含まれており、辛うじて搬出された国記もまた後に紛失しているため古代史研究に大きな障害が出てしまいます。それは、太子との思い出を誰にも渡そうとしないことによるエミシシの最後の抵抗だったのかもしれない。

古人大兄皇子は事件後に出家し隠遁しますが、9月12日に反逆の疑いをかけられて殺害されました。

こうしてウマ娘が当主を務めた蘇我宗家は滅亡したのです。

この一連の流れを「乙巳の変」と呼び、ここから始まる改革を「大化の改新」と後世では呼びます。

「本当に：イルカが何したって言うんですかね」

「彼女は、ただ愛する人と幸福に生きたかっただけだと思います。けれど、その願いは人間の悪意の前には清らか過ぎたのです」

「エミシもあまりに報われたいと言いますか、やるせない気持ちになりますね」

「実際、中大兄皇子も思うところはあったのか焼け落ちた館から見つかったエミシの亡骸を丁寧に埋葬する許可を出しています。それがエミシ塚であり、愛した太子や尊敬する母の近くで眠れているわけですから、せめてもの救いがあると思いたいです」

「ところで、中大兄皇子と鎌足の動機は何だったのでしょうか」

「一般的には皇位篡奪を目論んだイルカを殺害する事でそれを防いだとされます。それは中大兄皇子と鎌足の動機としては正しいのですが、背後はもっと複雑ですね」

「背後と言うと、蘇我氏の間人派閥ですか？」

「そうですね。計画の主導は中大兄皇子と鎌足ですがそれは乙巳の変だけで、山背大兄王襲撃から大化の改新に至るまでの計画は蘇我氏の間人派閥によってなされたと言えるでしょう」

全ては蘇我宗家を打ち倒し権力を増すために。人間の欲望がイルカとエミシ、山背大兄王を殺したのです。

645年7月12日、皇極天皇は軽皇子に譲位し、孝徳天皇が即位します。イルカの死から一月後のことでした。この時、山背大兄王を襲撃した巨勢徳多と大伴長徳はそれぞれ左大臣と右大臣にまで昇進しています。蘇我氏に近かった二人が鎌足に次ぐ地位を得たのは孝徳天皇に重用されたからです。蘇我石川麻呂をはじめとするかつての間人派閥の存在も大きかったです。

しかし、蘇我氏の間人派閥が思い描いた権力は得られませんでした。孝徳天皇は甥の中大兄皇子を信頼し皇太子にします。二人は共に仏教を重んじ唐風の律令国家を作る

べく唐との国交を重視しました。これは宗家から引き継いだウマ娘の取りまとめをする蘇我氏にとつて、ウマ娘を蔑む国を重視し友好国である百済を軽視する方針は受け入れがたいものでした。

結果として蘇我氏は孝徳天皇から疎まれ、蘇我氏の当主だった石川麻呂は異母弟である蘇我日向の讒言によつて無実の罪を着せられ自害に追い込まれます。

蘇我日向という人物は中大兄皇子より一回り年上で鎌足と同年代の忠実な配下であり、この讒言以前に石川麻呂が中大兄皇子に接近しようとして娘を送った際には汚名を承知でその娘を奪い石川麻呂がこれ以上の力を得ることを阻止するなど汚れ役さえこなす忠義の人でしたなお、石川麻呂の娘である遠智娘と姪娘が自ら進んで皇子に嫁ぎ、結果として石川麻呂は縁戚になった。この讒言も石川麻呂の排除を決めた孝徳天皇と中大兄皇子の計画によるものだったのでしよう。

罪を問われた石川麻呂は真偽を確かめるべく送られた使いの者に、

「返答は、帝の御前で申し上げましょう」

と繰り返しますが実際に孝徳天皇の前には現れませんでした。天皇の前に姿を現したばかりに殺害され、言葉さえ届かなかったイルカの最期を思えば何とも皮肉な行動です。

遂に孝徳天皇は中大兄皇子に命じて石川麻呂の屋敷を包囲させます。しかし、石川麻



呂は山田寺に逃れその地で命を絶ったのです。

それは、まるで自らが命を奪う計画を立てた山背大兄王の最期をなぞるかのようでした。

事の顛末を聞いた孝徳天皇は中大兄皇子に対し、

「少しは気が済んだか」

と言います。

中大兄皇子は慚然とした様子で、

「虚しいだけです」

と答えました。

父を夫が死に追いやったと知った中大兄皇子の後はショックで病となつて死去するなど後味が悪い結末であり、学友の仇を取つても気が晴れることはなかったのです。

その後、中大兄皇子は自らが天皇になることを拒み続け、孝徳天皇が崩御した際には母である皇極天皇が再び皇位に就き斉明天皇となります。その斉明天皇が崩御した後も7年間即位していません。自らの手が血に塗れているのを知つて皇位に就くべきでは無いと思つていたのでしょうか。もしくは、彼は聖徳太子のような立場を望んでいたのかもしれませんが。

中大兄皇子は皇太子として政務を行う中で鎌足の補佐を受けながら外務と軍事の担当をしますが、悪化する大陸情勢を前に思わず、

「イルカが生きていれば」

とつぶやいたと言います。

中大兄皇子の嘆きも虚しく大陸は動乱の嵐が巻き起こり日本は否応なしに巻き込まれていきます。

660年、唐の支援を受けた高句麗と新羅が百済に侵攻し百済が滅亡。

663年、日本は百済復興をかけて白村江の戦いに挑みますが大敗し、反攻を恐れた中大兄皇子は九州の防備を整え大量の防人を送ります。この防人には大陸による侵攻を恐れたウマ娘も多く参加し、日本の国防に大きく貢献しました。

668年、中大兄皇子が即位。天智天皇となります。しかし、翌年には鎌足が死去してしまいます。

天智天皇は弟の大海人皇子を皇太子としていましたが、息子の大友皇子に跡を継がせたいと思いました。当時は親から子に皇位が行くのではなく兄から弟に受け継がれる場合が多かったので天智天皇の考えは異例でした。

大海人皇子は身の危険を感じて出家し、吉野に隠遁しますが、母方の身分が低かった大友皇子に味方する豪族と大海人皇子に味方する豪族に分かれてしまいます。

671年、天智天皇が崩御。大友皇子は弘文天皇として即位しますが、その直後に大海人皇子は兵を挙げて都に攻め込み弘文天皇を自害に追い込みました。この戦いを後世では壬申の乱と呼びます。

この時、蘇我氏も弘文天皇に味方する人間と、大海人皇子に味方するウマ娘に分かれて争いますが、大海人皇子が勝利したことで蘇我氏の間人派閥は完全に没落したのでした。

しかし、実はこの時人間派閥は不可解な行動をしています。弘文天皇の将として従軍した蘇我果安が突如として他の將軍を殺害した上に自殺。弘文天皇の軍は一気に弱体化したのです。もともと蘇我氏の間人派閥は大友皇子よりも大海人皇子と親しく、皇子が吉野に隠遁する際には見送りに来るほどです。また、石川麻呂を除く兄妹は皆皇室に忠実であり、ウマ娘の庇護者として常に活動していました。大海人皇子がどこまで知っていたのかは分かりませんが、蘇我兄妹は内乱を早期に終わらせるべく汚名を被ると共に、兄妹唯一のウマ娘であるムラジの家系を大海人皇子側につかせて家名を存続させました。

かつて陰謀によって山背大兄王とイルカを殺害し国を乱した蘇我氏。その生き残りは命をかけて皇室とウマ娘に尽くし、贖罪を果たしたのかもしれない。

まとめ

○太子とウマ子の死後、エミシにより協調政策で政治は安定するが蘇我氏の内部では不満が出る。

○皇室の後継者争いを契機に対立が激化し、

○当代一のウマ娘であるイルカがエミシの跡を継ぐが蘇我氏の暗躍により山背大兄王が殺害され暴走をはじめめる。

○皇位篡奪を計るイルカを止めるため中大兄皇子と中臣鎌足鎌足が乙巳の変でイルカを暗殺。エミシも自害し蘇我宗家が滅亡する。

○生き残った蘇我氏も衰退し、壬申の乱で滅亡する。ウマ娘の系列は藤原氏と婚姻することで存続し、現在に至るまで血脈を繋げている。

「アスカさん、中大兄皇子と鎌足はイルカを死なせてしまったことを悔いていたのでしょうか」

「悔いていたのでしょね。しかし、後継者争いや白村江の戦いの敗北により求心力を失うことを恐れたためイルカの名誉を回復させることはできませんでした。中大兄皇子や鎌足からすれば斬りたくて斬ったわけではありませんが、斬ったからには大義名分

が必要であり、イルカは悪役でなければならなかったのです」

「あの時、山背大兄王が殺されさえしなければイルカは暴走せず皇室の忠臣として活躍し、時が経てば中大兄皇子や中臣鎌足も政治に参加するわけですから、歴史は大きく良い方向に変わったかもしれませんね」

「それを一番痛感したのが中大兄皇子であり、中臣鎌足であつたと思います。イルカの死後、彼女の役割を引き継ぎ本当に苦勞したようで、結局外交で失敗していますから後悔は一入だつたでしょう」

「イルカを忘れず悼んでくれたのがせめてもの救いですね。アスカさん、本日はありがとうございました」

「ありがとうございます」

天武天皇は壬申の乱を契機にかつての陰謀家を一掃し、健全な国家運営に乗り出します。

また、一時期は蘇我氏への反発から国の中枢にウマ娘が関わる事が控えられてきましたが、藤原4兄弟の紅一点、藤原ウマカイのように国政に携わる者も排出されました。なお、ウマカイは蘇我ウマ子の子孫にあたる数少ない蘇我氏系ウマ娘である蘇我媼子の娘であり、祖先と同じく文武並びに競技においても目覚ましかつたも伝わります。しか

し、この血筋には一つ謎があります。公式には蘇我婁子（ウマノ）の母は蘇我ムラジとされていますが、このムラジというウマ娘、天智天皇の御代に右大臣を務めているにも関わらず64年に亡くなったという記録しか残っていないのです。ムラジの異母弟である赤兄は孝徳天皇の子である有馬皇子を嵌めて左大臣にまで昇進するなど記録が多く残っているのと対照的ですが、結局蘇我氏の中で血脈を残せたのは壬申の乱で大海人皇子に味方し、後に娘を不比等に嫁がせたムラジの系列のみです。

ところで、イルカには山背大兄王との子がいましたが乙巳の変の後全く記録がありません。通説ではエミシと共に亡くなったとされますが、それを書き記した記録は見つかっていないのです。果たしてイルカの娘はどこに消えてしまったのでしょうか。ところで、異母弟とされる日向は兄の石川麻呂を裏切つてまで皇室に忠義を尽くし、果敢に殺人者の汚名すら背負つてムラジの血脈を守りました。何故ウマ娘であるムラジの血筋を過剰なまでに守ろうとしたのでしょうか。ムラジの娘を妻とした藤原氏の記録には、ウマ娘である婁子に対して何故か敬称を用いたり、不比等が妻に愛情と共に敬意を持っていたと書かれています。

そして、婁子と不比等との間に生まれた藤原アスカは日本史上唯一ウマ娘の皇后である光明皇后となり、その娘である孝謙天皇は史上唯一のウマ娘の女帝となりました。

光明皇后は聖徳太子の熱烈な信徒であり、法隆寺に多額の寄進をしています。また、

彼女に伝わる話の一つにこういうものがあります。エミシが太子を偲んで作らせた天寿国繡帳を見た光明皇后は極楽で仲睦まじく暮らす太子とエミシを表した部分を指差して、「太エミが一番ですわ。純愛といえばコレですわ」と懸かり気味に言い、そして法隆寺の境内にある山背大兄王が最後を遂げた場所では「あなたこそ日本一のお兄さまですわ」と讃えました。そして、イルカの眠る飛鳥寺にも足を運び、墓の前で手を合わせました。何故逆賊とされるウマ娘の墓に手を合わせるのかと近習たちは言いますが、皇后は毅然と言いました。

「ここにはわたくしの——いえ、ただ小さな頑張り屋さん眠っているだけですわ」

現在、エミシは他豪族との調和を重んじた安定政権であり、イルカは最後の暴走以外は多くの人に畏敬される治世を行っていたと再評価されつつあります。

多くの夢と野望が渦巻いた飛鳥の地。万葉の世界を留める場所には、今はただ穏やかな時が流れています。

こうして人間の思惑により暗雲が立ち込めていたウマ娘との関係は再び平穏を取り戻し、時代は奈良時代へと移り変わってゆくのです。

終

## 制作 日本ウマ娘放送協会府中支部

## 次回予告――

「あなたには覚悟がありますの？ 私と……その、”一蓮托生”のような関係になる覚悟が」

疫病が猛威を振るう奈良時代。

ただ雲の上の存在ではなく、貴顕の使命を果たすべく人々のために尽力したウマ娘がいました。



絶対的な慈悲を示し続け、最盛期には「退屈」とまで言われた治世を実現した賢女。彼女の名は、光明皇后。

第4回「駆け出しの一等星 光輝くウマ娘達」  
ご期待ください。

## 第4回「駆け出しの一等星 光輝くウマ娘達」上

710年、元明天皇は都を奈良の平城京へと遷都します。平城京は唐の都である長安をモデルとし、中央の朱雀大路を軸として右京と左京に分かれたれ、さらに南北東西を碁盤の目のように整然と区画化された美しい街並みをしていました。

また、平城京はシルクロードの終着点でもあることから国際的な都市であり、都には唐や新羅、遠くは天竺周辺の人々までもが歩く国際色豊かな光景が広がっていました。

政治は中臣鎌足の息子である藤原不比等が実権を握り、律令制度の確立に力を尽くすとともにウマ娘との婚姻や起用により蘇我氏の滅亡で支援者を失っていたウマ娘達の代表者の地位を確立します。

701年に不比等主導で大宝律令が制定されますが、ここにはある画期的な内容が含まれていました。ウマ娘の市民権です。

大宝律令のあらゆる項目で、人間とウマ娘は対等であり同じ日本国に住まう国民として扱おうと明文化したのです。現在、大宝律令の原文は失われてしまいましたが、751年に制定された養老律令と大きな差異はないとされているため間違いなく701年にウマ娘はウマ娘王朝以外の国家で世界で初めて市民権を得たとされます。これは不比

等がたとえ藤原氏が滅びようともウマ娘達が決して日本での社会的地位を落とさないように配慮した結果でした。

不比等は何故ウマ娘をここまで庇護すべく細心したのでしようか。それは、彼もまたウマ娘を愛する一人の男だったからに他なりません。不比等の妻の一人、藤原媼子は既に滅びた蘇我氏の出身でありましたが、不比等は彼女を深く愛したとされ、二人の間にはウマカイトとアスカという二人の娘が誕生します。

特にアスカは続日本書紀において「幼にして聡慧」と評されるほど幼いころから聡明であり、またウマ娘らしく可憐な容姿で紫がかつた髪が美しいとも記録されています。

「アスカは可愛い。日本一可愛い。絶対に日本一の男にしか嫁にやらん。そして日本一の男は私。つまり誰の嫁にもやらん！」

真面目な顔をしてそう宣言するのは藤原不比等、この時50歳。肩に愛娘を抱えての堂々たる宣言です。

周りはいつもの病気だとしてハイハイお父さんそろそろ休みましようねと冷淡です。「分かっておらん。アスカは何か特別なんだ。私には分かる。きつと、日本一どころか世界一、いや星空に輝く大星おおいぬ座で最も明るい恒星シリウスの和名。のようになんか魅了するウマ娘になるのだ」

「お、お父様。そろそろ下ろしてくださいまし」

「お爺様、アスカが困っていますよ」

「ぬううう、皇子よ！　我が孫にしてアスカの幼馴染よ。あなたも男ならば私の敵なのだ。どうしてもアスカを嫁にしたくば帝にでもなつてから出直して参れ！」

「もう、いい加減にしてくださいまし！」

文武天皇の皇子である首皇子おびとのみこは父を7歳で亡くし、母もまた精神を病んだため不比等の許で養育されました。アスカとは幼馴染であり、同じ年の甥と叔母の関係でもありません。二人は稚心ながらも何となく互いにほのかな好意を抱きつつある年頃。そこに暴走する親。パカを目の当たりにしたアスカが、とうとうキレてその脳天に一撃を見舞ったことを誰が責められるでしょうか。

この日、709年は不比等50歳の記念の日であります。晴れの日にも関わらず昏倒する主賓と、手慣れた様子で彼を寝台へと運ぶ藤原家の一族。啞然とする来客に不比等の妻である媼子が「うちのパカがすみません。すぐに片付けますので気にせず楽しんでくださいね」と妙にやんごとなきオーラを出しながら微笑むと「あ、ハイ」と何事も無かったかのように会食が進められました。

ある意味で都中で有名になっていた不比等の親。パカぶりですが、誰もが不比等の暴走をオパカだと思っても、その内容については寸毫も疑っていませんでした。

「確かに、アスカちゃんは何か特別なのよね。仏様のご加護を持って生まれたのかしら」少女が時代を代表するスーパースターになることを、誰もが期待していました。そして、それは決して遠くは無い未来だったのですが、同時に日本が先行きの見えない暗黒の時代へと突入する未来も近づいていたのです。

日本ウマ娘放送協会特別企画

ウマ娘と迎える日本の歴史

第4回『駆け出しの一等星 光輝くウマ娘達』

「こんばんは。今夜もウマ娘と迎える日本の歴史の時間がやって参りました。本日の主役は、光明皇后。奈良時代に活躍した聖武天皇の皇后であり、生涯を通じて慈善事業を行った慈愛の人です。彼女を中心として奈良時代はどういった時代だったのかを辿り、ウマ娘達がどのように暮らしていたのかを見ていきます」

奈良時代の始まりは元明天皇を補佐する不比等による律令国家の完成を目指す改革が行われ、安定した成長が続きました。

不比等の取り組みは多岐にわたり、舍人親王らと協力して日本書紀の編纂を行い日本

の歴史を後世に伝えようと試み、和同開珎という貨幣の鑄造により物々交換が主流だった経済から貨幣経済への転換を計りました。

元明天皇の御代は中央集権化と地方自治の両方を制度化するまさに躍進の時であり、この時に現存する日本最古の歴史書である古事記や、地方の風土や文化・特産物を記した風土記、漢王朝を参考にした地方自治体制度である郷里制など日本が中世に至る準備を着々と進めていきました。

715年、元明天皇は高齢を理由に娘の元正天皇に譲位します。本来ならば孫の首皇子が即位するのですが、皇子はこの時まで14歳と若く、2代続けての女帝となりました。元正天皇は慈悲深く落ち着いた人柄であり、あでやかで美しいと記されるほど叡智と美貌を兼ね備えた人物であり、歴代の女帝の中でもかなりの美人だったようです。

元正天皇は母と同じく不比等を中心とした改革を継続し、律令国家の完成を果たすべく養老律令の制定に取り掛かります。

時を同じくして、藤原氏の屋敷では一つの関係が進もうとしていました。

「…皇子様、申し出は嬉しいのですが、本当にその意味を理解していますか？」

「分かっている。私はアスカ、君を后にしたい」

「あのですね、わたくしはウマ娘ですよ。夫人ならともかく今までウマ娘の後なんて聞いたこともございせん基本的に后（皇后）夫人。また、皇后は中継ぎの天皇となる場

合もあり皇族がなるのが慣例でした。」

「それでも、私はあなた以外を后にしたくない。それに、私は全て知っているんだ。あなたの夢も、血筋のことも」

「どうしてそれを……あ、お母様ですわね。全く、お節介なことですよ。けど、本当によろしいので？ わたくしと一緒にになるというのは、この血の使命も一緒に背負うということ。あなたに、その覚悟がありますの？ その……わたくしと一蓮托生のような関係になる、その覚悟が」

「もちろんだ」

「ふふ……その迷いのないところ、小さな時から変わりませんのね。いつだって、わたしのことを一番に考えて。分かりました、でしたらわたくしも遠慮はしません。わたくしの夢、太子様やひいおばあ様達の願い、絶対に叶えてみせますわ」

715年ごろ、首皇子は幼馴染みの藤原アスカに婚礼を申し込み、二人はこれから一蓮托生となつて人生を歩んでゆくのです。しかし、その前に二人にはお話しすべき相手がいきました。

「……もう一度申してくれアスカ。私はどうやら幻聴が聞こえたようだ」

「お父様、わたくし結婚いたします」

「だ、誰とだ。この日本一の男たる父を超える男がいるというのか！」

「私だ」

「皇子イイツ！ やはりお前か！ 許すん！ 許すんぞ！」

「ど、どちらですの!?! それはお許しになっていきますの?」

「間もなく即位できる私と縁戚になつて藤原氏の栄華を築こうという権力者の人格と愛娘を渡したくないという親。パカの人格がせめぎ合っている。だが、人格は一つで良い。

結論は一つで十分だ」

「冷静な解説をしている場合ですか。お父様がもう還暦なのに舞踊中のウマ娘に匹敵する空中舞踊で皇子様を狙っておりますわ！ あの体勢——聖徳太子様が寒い駄洒落をやめない蘇我ウマ子を懲らしめるために開発した伝説の奥義にして皇族で脈々と受け継がれ、お母様がお父様をしばく際に使っていた飛鳥文化強襲アタックで間違いないですわ！」

「その通おおり！ 我が愛娘を奪うならばこの不比等容赦せん。くらえ、超必殺・飛鳥文化強襲！ 仏教文化の重みを知れ——」

しかし、不比等の大技を皇子は幾度か躲した後に受け止めると、そのまま掴んで地面に叩きつけました。

必殺の技を見切られて呆然とする不比等に皇子は論じます。

「初手から大技を出したな。考え方はおかしくない。だが、聞きかじっただけの行為を実践で試すもんじゃない。だから腰痛など起こすんだ」



そう、不比等は見様見真似で大技を繰り出し、さらに腰痛を発症していました。

「そもそもあんたは飛鳥文化強襲に向いていない。空中殺法による衝撃を膝を曲げて吸収する癖がある。どちらかというと『飛翔する海神の摂政』向きだ」  
フライング摂政ボセイドン

皇子が告げたのは皇室に伝わる聖徳太子考案の大技です。不比等は一度だけここまで見抜きの確なアドバイスまでする自らの孫を愛娘を嫁がせる相手に相応しいと認めました。

「だが体さばきは見事だった…いい才能だ」  
センス

「ふっ……孫か。良いものだな」

結局、渾身の飛鳥文化強襲は屋敷の至るところを破壊するだけに留まりました。不比等は皇子の投げ落としもあつて動けなくなつたところを妻の媼子に見つかり本家本元の真・飛鳥文化強襲を喰らい完全に沈黙。二人の結婚は媼子が認めたことで落着し、恙無く婚禮の儀を行うこととなつたのです。

藤原家において没落した蘇我家の出身かつウマ娘の媼子は何故か藤原氏において不比等以上の地位であり、夫が彼女を呼ぶ際に敬語を用いていたあたり二人の関係性、とどうか彼女本来の血筋が伺えます。

717年、藤原アスカは首皇子と婚禮。幼馴染みの初恋を成就させました。なお不比等は未来を託すべき相手を見つけたからか一気に老いが深くなつてのでした。

720年、藤原不比等は61歳でこの世を去ります。力を入れていた養老律令の施行を前にした死でありました。

不比等は始めから順風満帆な人生を送ったわけではなく、彼が朝廷に出仕し始めた頃は天武天皇によって中臣氏は政治の中樞から遠ざけられ大舎人の下級役人からのスタートでした。そこから蘇我氏を失ったウマ娘の保護や法律家としての優秀さから出世し、今の地位を築いたのです。彼の死に最も悲しみを表したのはウマ娘達でした。首皇子主催の不比等の追悼競技では都中のウマ娘が走り、悲しみを分かち合ったのです。

この競技に1着はいません。誰よりも激しい人生を駆け抜けた男こそが勝者だと宣言したのは未亡人となった媼子でした。そして、彼女もまた夫の後を追うかのように間もなくこの世を去りました。

不比等の死は日本に一つの時代の終わりを告げるとともに何かぼんやりとした不安を感じさせるものでありました。そして、その不安はやがて現実味を帯びてゆくのです。

「解説には作家で奈良時代に詳しいセントちゃんにお越しいただいています。セントちゃんさん本日は——」

「セントで良いですよ」

「では、セントさん。本日はよろしくおねがいします」

「よろしくおねがいします」

「蘇我氏の滅亡後に藤原不比等がウマ娘の庇護者となったわけですが、それによってウマ娘達に具体的な変化はあったのでしょうか」

「実は大きな変化はなかったようです。と言いうのも、大部分のウマ娘はその力を活かして農耕や都市開発に従事して、時折競技に参加する生活を送っており一般社会では無くてはならない存在であるとともに民衆からも大きな信頼と愛情を向けられています。なので庇護者が誰であろうともその地位は揺るぎないものでした。そもそも蘇我氏は民衆からすれば善政を行っていたので常に高い支持を得ており、不比等は蘇我氏から妻を得てウマ娘の庇護者の地位を受け継ぐことでウマ娘からの支持と民衆からの支持を一挙に取得したわけですから不比等の方が利益を多く受けていますから、むしろウマ娘の庇護者となることで不比等が変わったと言えますね」

「なるほど。ある意味、ウマ娘に信頼されたのが不比等が出世したきっかけなのかもしれませんね」

「ウマ娘の存在は不比等の出世に影響したのは確かですが、そこには持統天皇の存在も欠かせません。持統天皇は夫の天武天皇が行った大臣を置かない独裁体制の限界を悟

り左右大臣を置き個人のカリスマではなく皇室の権威と律令による支配という現実的な方針を取らざるを得ませんでした。そこで民衆の支持と貴族の支持、そして律令の制定という何もかもが必要になってしまったのです。ところが、不比等が蘇我氏でウマ娘である媼子と婚姻すると民衆の支持を得ます。さらに壬申の乱以来地位を落とした貴族達も中臣氏出身の不比等に好意的です。止めとばかりに不比等は法律のプロフェツシヨナルでした。持統天皇からすれば父の天智天皇の忠臣だった鎌足の遺児が喉から手が出るほど欲しい人材になったことに運命的なものを感じたと思います。結果、不比等は大きな出世を遂げたのです」

「なるほど。蘇我氏のウマ娘との婚姻、中臣氏出身、法律のプロフェツシヨナル。これら全てが合わさって出世に結びついたのですね。ところで、そんな偉大すぎる男だった不比等ですが、家庭内では弱かったようですね」

「まあ、だいたい藤原媼子の存在ですね。暗黙の了解として、彼女は山背大兄王とイルカの孫であり人とウマ娘を結ぶ象徴でもありました。そんな彼女に不比等は愛情と敬意を以て接していたのですが……媼子は曾祖父の太子に似たようで理知的かつ時にアグレッシブな人柄だったようで、不比等は尻に敷かれていたようですよ」

「そりゃ、飛鳥文化強襲<sup>アタック</sup>でしばかれたらそうなりますよ」

「尻に敷かれつつも不比等は愛妻家かつ子煩悩であり、愛娘のアスカへの盲愛や実質的

に天涯孤独になった孫の首皇子を引き取って育てるなど愛情深い人柄だったようです。また、ウマ娘の指導人としての功績は媼子が多くの競技で活躍したことからそちらでも一流だったようです」

「確か不比等は能筆家でもありましたし、万能に近い人だったのですね。そんな彼が殊の外気に掛けたのが愛娘のアスカというわけですか」

「はい。人は人を知ると言うべきか、不比等の見立て通りというべきか、彼女はまさに夜空のシリウスのように輝いていくのです」

「しかし、星が輝けるのは夜だからこそ。つまり、日本はこの時非常に暗い時代になっていました」

奈良時代――それは疫病と飢饉、そして反逆の時代。

律令国家を目指す改革は確かに日本を発展へと導いたのですが、同時に人口爆発を招きました。都市の食糧供給率を上回る人口の増加はすぐさま飢饉として現れ、朝廷はその対応に追われず。

加えて、国際色豊かな都市はすなわち外来の病が入り込みリスクがあるということでもあり、日本国内に様々な伝染病が流行し始めたのです。

そして、元々大和朝廷に反感を持っていた東北の民たちは律令国家の押し付けに我慢

ならなくなり各地で反乱を起こします。

まるで日本がこれ以上輝くのをこの世が認めないかのように闇は広がり、時代に取り残される人々は自ら輝きに背を向ける。一寸先すら見えない暗黒の時代が訪れたのであります。しかし、闇夜を照らす輝きは今まさに顕れようとしていたのです。

723年。皇太子妃アスカは困窮する人々に心を痛める日々を送っていました。

「何とかしなければみなさんが飢えてしまう。まだウマ娘は食べていただけますけど、そう長くはもちませんわ」

ウマ娘は最悪の場合、道端のタンポポ等の野草を食べれば生きていけます。しかし、人間はそう簡単ではありません。まず人間から飢餓が広がり、ウマ娘も野草を食べても限界がありますからいずれ「無理いく」、「お腹すいたあく」と啼き出すのは目に見えています。

自分にできることは無いか。過去の文献を漁っていると、彼女にとって天啓となるものが見つかったのです。

「これは……太子様が作られた貧しい方々を救う施設？　こ、これですわ！　これならわたくしも！」

かつて聖徳太子が四天王寺の一面に作った施設。それは、貧者に食事と住む場所を与え、孤児を育成する社会福祉施設。隋に倣って作られたそれを、悲田院と言います。

早速アスカは首皇子經由で許可を取り、悲田院を興福寺の中に設立します。興福寺は藤原氏との縁が深い寺院であり、悲田院への出資は皇室のみならず藤原氏も多くを出しました。

食べるものと雨風をしのげる場所があると聞き、都の貧困層は悲田院を天の救いかの如く思い駆け込みました。そして、先頭に立って働き、炊事場を取り仕切るウマ娘の姿に驚愕するのです。競技や舞踊でその姿と名を都中に轟かせる皇太子夫人のアスカが下々の人が着るような作業着を身に纏って働いているのですから。

「もう大丈夫ですよ。ここで英気を養って、また明るい未来のために歩き出せばよろしいのですわ!」

「一緒に働いてくれる方も募集中ですわ。温かい家庭的な職場ですわよ!」  
「美味しいですわ、美味しいですわよ。出来立ての雑炊が美味しくてパクパクですわ! みなさまもこれを食べて元気を出してくださいませ〜!」

本当に高貴な方なのかと人々が困惑するほど積極的に働くアスカ。お手製の雑炊はウマ娘が愛好する黍等の雑穀ベースに野草や肉を加えて塩で味付けした栄養満点なおかつ美味しい逸品であり、食欲旺盛なウマ娘基準で作っているため人々が十分に満ち足りるほどのごちそうでした。お椀を空にした人々はやはり、「美味しいけど、これ皇太子妃様のお手製なんだよな。いや、本人なのかあの人」と、やはり困惑を深めました。そ

の儀式や競技で見たものと変わりない姿や、漂わせるやんごとなき雰囲気はまさしくアスカのものでした。

「綺麗な方だよな、アスカ様は」 ウマスギル！

「ああ、世の中には色々な美人がいるが……あの方ほど美しい人を見たことはない。気が付くと目が釘付けになっちまう。それに、何だかあの方と接すると湧いてくるんだ。明日を生きる希望ってやつが」 モットクワセロ。

「あんな高貴な人にここまでしてもらったんだ。俺らも明日から頑張ろうぜ！」 サイコウダ！

「「後ろのやつうるせえよー！」」

「また食べたいな」

悲田院のそこかしこで英気を取り戻した人々の明るい掛け声が響きます。彼等は翌日から農作業などに従事し、中にはアスカに心酔して悲田院の作業員となるなどの働き口を見つけて社会復帰を果たしていくのです。

後世、この時に救われた人々の声が興福寺縁起に残っています。

「あの時、日本は暗闇の中にいて俺達はその中に投げ出された迷い子だった。けれど、見上げれば光る星がすぐそばまで来てくれて俺達に進むべき道を明るく照らしてくれた。だから俺達はまた立ち上り、走り出せたんだ」



彼等にとって、アスカは輝く星だったのです。この話が広まり、彼女は明るく光るアスカ姫と呼ばれ、後に彼女が光明皇后と呼ばれる由縁となったのです。

しかし、彼女には全てを救う事ができるほどの力はありません。これから日本はさらなる暗黒に包まれてゆくのです。

不比等の死後、朝廷の権力図は大きく変わりました。不比等の長男、武智麻呂はまだ20歳であり位もそれほど高くありません。そこで、元正天皇が代わりに補佐役として選んだのが親族の長屋王でした。

長屋王は不比等の政策を受け継いだ方針を取り、皇族を中心としながらも安定した政治を目指していたようです。しかし、不比等というカリスマを失った影響は各地で頻発する反乱となって現れ、追い打ちをかけるかのように水害や飢饉が起りました。

長屋王は突然の事態にも適切に対応し、飢饉対策には租税の免除を行い、軍役が重いと判断すると緩和策を実施、反乱には即座に兵を送り込んで鎮圧するなど素早い対応を取っていました。この時は不比等の子である藤原兄妹も協力し、724年に陸奥国で起こった蝦夷の反乱には兄妹の紅一点のウマカイが20歳で大將軍として出征するなど実務面で長屋王を支えていました。

しかし、長屋王の政策は適切かつ迅速でしたが、それ故に強行的な側面もあり皇族以外の貴族や役人からは不満が出ていました。そして、長屋王が唯一失敗したと言えるの

が農地改革です。

722年、これまで安定した政治の影響か日本は人口が膨れ上がっていました。しかし、人口が増えても食料の供給が追いつかず、各地で貧困が問題となったのです。これに対応すべく長屋王が掲げたのが百万町歩開墾計画です。これは秋の収穫後に官民一致で開墾事業に乗り出して良田を確保しようという方針でしたが、一方で収穫後に疲れた領民やウマ娘については無視し、監督する役人は従わなければ解雇するという強硬策でした。

結局、実行者側のモチベーションが上がらず開墾は思うように進みませんでした。事態を打開すべく翌年の723年、長屋王は三世一身法を制定。これは開墾した田畑を孫の代まで私有しても良いという法律でしたが、三世一身法の効果は平均寿命の短い奈良時代では20年未満しか継続しなかったようであり、領民たちのモチベーションは上がり、監督する役人や肝心の領民がサボり始めると真面目に働いていたウマ娘達もやがて野辺を適当に駆けたり、タンポポを寝転がってムシヤムシヤするようになってしまいました。

更に長屋王にとって良くなかったのは彼が良くも悪くも保守的なことでした。それが決定的な過ちとなるのが724年、首皇子が即位し聖武天皇となった時でした。

聖武天皇は皇后に当然ながら愛する藤原アスカを立てようとします。しかし、長屋王

は今までウマ娘が皇后になつた前例が無いためこれに反対したのです。当時、皇位継承の中継ぎとして先帝の妻が即位する例が非常に多く、病弱であつた聖武天皇もそうなる可能性がありました。それを危惧した長屋王は非皇族のアスカを立后させるのに反対し皇族から新たに妻を得るようにそれとなく勧めますが、聖武天皇は長屋王の忠告に対して素直に従い皇族から妻を得て一子を設けますが皇后を立てませんでした長屋王「違う、そうじゃない」。

この時はまだ長屋王の考えが正しく問題はありませんでしたが、同年に起こつたある事件をきっかけに事態は変わつてゆきます。

聖武天皇にとって生母である藤原宮子は非常に心配する相手でした。夫の文武天皇の崩御後に心を病んだ彼女を何とかして元気づけたいと常々思つていた聖武天皇は、母に大夫人の称号を贈ろうとしたのですが、これは長屋王からすれば戸惑わずにはいられないものでした。本来、天皇の生母には皇太夫人の称号が贈られるのですが、宮子は立后してなかつたため名乗れません。また、大夫人という称号も前例が無い上に皇太夫人以外の称号を贈つてはならないという法もありました。長屋王の反対は当然のもので、聖武天皇も素直に勅旨を取り下げます。しかし、正論とは言え2度に渡り藤原氏の子女に対する妨害を行つてしまつた長屋王と藤原氏の関係は悪化してしまつたのです。

この事件を後世では辛巳事件と言います。そして、様々な要素が重なり彼らの未来に

暗い影が差し込んでいったのです。

「長屋王の判断は私からすると何も間違っていないかと思つたのですが、藤原氏からすると腹立たしいものだったのでしょうか？」

「この頃の藤原4兄妹はまだ位も低く、長屋王の正論に対して特に反発を示していません。しかし、問題は長屋王の敵は藤原氏ではなくその他の貴族と民衆です。彼等は長屋王と藤原氏の間で亀裂が入る切つ掛けを見出すと藤原氏の肩を持つて長屋王を非難します。民衆も長屋王への不満から藤原氏とその周囲の貴族を支持し、気が付けば藤原氏は長屋王と対峙しなくてはならない状況に置かれていました」

「やはり農業政策が上手くいかなかつたことが民衆の長屋王への不満に結びついていたのでしょうか」

「それもありませんが、長屋王自身が元々民衆から人気のある人とは言えませんでした。長屋王の邸宅跡から発掘された木簡には彼の屋敷に豪華な品々が運ばれていたことを示し、氷室を作つて夏には氷を食すなど贅沢な暮らしをしていたようです。貧困に喘ぐ民衆からすれば長屋王は憎むべき相手で、逆に光明皇后を中心に民衆を救済しようとする藤原氏が善玉に見えたのは必然でした。良くも悪くも、長屋王は雲の上の存在であつたのです」

「ありがたいございます。さて、政治家としては有能だった長屋王を元正天皇や聖武天皇は信頼し、藤原4兄妹も何とか決定的な破滅を避けるべく奔走します。しかし、月日が流れるほど長屋王への不満は積み重なり、藤原氏への期待は増すばかり。そこへ、またしても悪しき出来事が彼らを襲うのです」

727年、聖武天皇の人間の夫人との子である基王もとちかうが誕生し、聖武天皇はこの赤子に譲位し、自らは太上天皇として政治をしようという構想を練ります。天皇となつてからアスカの指導人としても政治家としても身動きの取りづらい状況に彼自身思うところがあり、長屋王や藤原4兄妹という有能な政治家がいれば問題なく運営可能という判断でした。当然、長屋王は「落ち着け」と言わんばかりに聖武天皇をなだめ、撤回を促します。ところが、この直後に基王が満1歳にもならず薨去してしまい、事態は最悪の流れへなつてしまうのです。

当時、乳児の死亡率は高く基王が薨去しても悲しみこそあれど言つてしまえば起きうる状況にすぎず聖武天皇も深くは考えませんでした。ところが、急激にある噂が広まつてしまったのです。

基王が薨去したのは天皇の地位を狙う長屋王が呪詛したからだ、という噂。

始めてそれを藤原4兄妹が耳にしたとき、パカな噂だと笑い飛ばそうとしましたが、

まず最初に武智麻呂が気付いて青ざめ、次に房前、そして全員がとんでもないことになる。と血相を変えてアスカの元へ駆け込みました。

アスカの元には聖武天皇もおり、既に青ざめた表情で4兄妹を迎えます。

「まずいことになった。このままでは長屋王は殺されてしまう。しかも、私達の手によつて！」

聖武天皇が叫ぶと、アスカと4兄妹はより沈鬱な表情へと変わります。まさしく聖武天皇が言った通り、事態は長屋王抹殺へと否応なしに動いていたのです。

「陛下、今すぐ私が兵を率いて長屋王を脱出させれば或いは——」

ウマカイが縋り付くように聖武天皇に長屋王救出の許可を求めますが、天皇は力なく首を横に振りました。

「だめだ。兵を動かすには私の許可が必要となり、兵達と民衆にとつて長屋王が基王を呪い殺したことは確定事項なのだ。もはや、兵を動かすことは私が長屋王の罪を認めたことにしかならない。彼等は喜び勇んで長屋王を殺すだろう」

「そこまで……そこまで彼は恨まれていたのですか！ 確かに暮らしはいいな—と思つていましたが、私はおいしいものをいっぱいもらつたり、夏にかき氷をごちそうになつたり、競争の計画を一緒に立てたり、それから、それから——」

「もういい、ウマカイ！ よすんだ！」

「何も殺さなくても！」

「黙れと言っている！ わきまえろ」

涙ながらに助命を乞うウマカイに兄の武智麻呂が怒鳴ります。ウマカイは長屋王と最も行動を共にすることが多く、半ば指導人のような関係だったのです。

「もはや神仏に祈るほか無い。私達は動かず、何事も無ければ機を見計らい長屋王を復帰させる。しかし、何かあれば、ほんの些細なことでも、それで全ての望みが断たれる。蛇は決して、獲物を逃さない」

「ああ、仏様——」

聖武天皇とアスカは心から仏に慈悲を求めますが、このとき既に長屋王の命運は尽きていたのでしょう。

翌朝、聖武天皇に密告がありました。長屋王は呪術を学び、国を傾けようとしているという内容です。

密告したのは中臣宮処なかとみのみやこと漆部君足ぬりべのきみたりという下級役人です。彼等は長屋王への不満を持つ貴族の意を受けて天皇に讒言したのでした。無論、そんなことは聖武天皇も分かっています。もしも聖武天皇が独裁者であったのなら、今すぐこの二人の首を斬り落としてしまいたいほどです。

「そうか……大義であった。下がれ」

何とか怒りを抑えて下がらせると、聖武天皇は呆然と天井を見上げ、深く嘆息しました。

もはや望みは断たれ、後は長屋王の屋敷を包囲し自害を迫らなければなりません。それを誰に命じるべきか悩んでいると、藤原ウマカイが声を上げました。

「陛下、長屋王へ向かわせる兵の指揮、私にとらせてください」

「ウマカイ、本当に良いのか？」

「私に行かせてください」

任務は、最愛の人を殺すこと。

ウマカイの毅然とした雰囲気は呑まれた聖武天皇は許可を出し、近衛兵を率いたウマカイによって長屋王の屋敷は包囲されます。

門の前にウマカイが立っていると、扉の向こうから聞き慣れた声がしました。

「お前か、ウマカイ」

「……」

彼女は応えません。罪人となってしまった長屋王とは言葉を交わすことすら禁じられていたのです。しかし、長屋王には十分にウマカイが何を思っているのか伝わっていません。

「まさかこうなってしまうとはな。すまない、お前たちに汚名を背負わせることになっ



てしまった」

「……」

「だが、不平や恨みは、私が全てあの世へ持つていく。どうか、陛下を……この国を頼む。頼んだぞ、藤原ウマカイ。私が愛したウマ娘よ」

扉の向こうから気配が消え、夜が深まってゆきます。そして、次に門が開けられた時には家令が全て終わったことをウマカイに伝えたのです。

瞠目した彼女は、小さく洩らしました。

「……さようなら、私の指導人さん」

729年2月。長屋王、自害。

聖武天皇は即座に勅を発し、長屋王を生駒山に丁重に葬ることと、決して葬儀を卑しくしてはならないと厳命します。また、一部を除いた長屋王に近い官僚や親族の罪を赦免し、長屋王に関わる領民の税を免除しました。時の権力者が失脚する際には多くの犠牲者が出るものですが、聖武天皇と藤原4兄妹は最小限に抑えるべく奔走したのです。

この事件を、長屋王の変と呼びます。

## 第4回「駆け出しの一等星 光輝くウマ娘達」中

信頼する長屋王を失い悲嘆に暮れる聖武天皇でしたが、一方でこれは改革の機会でもありました。かつての保守勢力は長屋王の死で萎縮し、貴族と民衆は藤原氏を支持しています。今ならば、以前に流れたアスカの立后も可能となるのです。

同年、藤原アスカは皇后となり、光明皇后と呼ばれるようになります。日本史上唯一のウマ娘の皇后であり、皇族以外が皇后となるのは仁徳天皇以来のことでした。

光明皇后は地位が上がっても相変わらずーいや、ますます社会福祉に力を入れて自ら前線で働きました。

730年、貧しい病人の保護、治療を行う施薬院を設置。ここでは何と、大陸からもたらされた漢方や薬用人参といった貴重な薬が使用され、民衆やウマ娘は光明皇后と藤原氏に畏敬の念を抱いたと言われます。

また、光明皇后はここで医師が育成することにより疫病に喘ぐ奈良時代の医療を少しでも改善しようとしたのです。

「ナンデオクスリモツテルノ!」

「それは私が皇后陛下の主治医だからです」

「ワケワカンナイヨ」

施薬院に関してはこのような伝説も残っています。

千人の垢を洗い落とすことを自ら志願した光明皇后が言葉通りに人々の身体を洗っている、最後の千人目に重症のハンセン病患者が現れました。光明皇后は顔色一つ変えず患者の身体を洗いましたが、患者は皇后に膿を口で吸い出すよう要望したのです。流石に周りもいい加減にしろと怒りますが、皇后は躊躇うことなくその通りにしましたのです。

「このくらい当然ですわ。さあ、お身体もキレイになりましたし、次は藤原家特別施薬を——あら？」

患者は正体を現し、如来となつて光明皇后を祝福したと伝わります。流石に史実では無いでしょうが、一方で光明皇后が本当に施薬院で活動していたのは記録にあるので、彼女の働きに感動した人々によってこのような伝説が作られたのではないのでしょうか。そして、この時期、あるウマ娘の活躍が広まりつつありました。

その名は行基。奈良時代を代表する異才です。

彼女は668年に現在の大阪府堺市に生まれ、15歳で仏門に入ります。その後、飛鳥寺や薬師寺で修行をする中で生涯の師となるウマ娘、道照上人と出会います。道照は西遊記でも知られるウマ娘、三蔵法師玄奘の愛弟子であり、彼女から「梨と同じくらい

好き天竺への旅の中、飢えた彼女は偶然差し出された梨を食べて命を永らえたので、命の恩人と同じくらい大切に思っているといった意味である。……たぶん。」と言われるほど愛され、その教えを受けた名バです。道照は師から日本には走禪をもっと詳しく広めるべきとのアドバイスを受け、日本のウマ娘により正しい走禪を広めるべくウマ娘でありながら指導人としても活躍していました。

体格で劣る行基は競技では大逃げをかまそうとして結局体力が足らず惨敗すること繰り返しており、走禪においてもいまいち何かが足りないかと不満感を持っていました。しかし、道照との出会いで彼女はついに悟りを開くに至ったのです。

「そうか。大事なものは勝つことじゃない。諦めずに走るから走禪なんだ。それも正しい姿勢で、正しい体力配分で走り切るために修行があり、ギョーキたち仏門はそれを教えるために今まで学んできたのか！」

自分が今まで好きに走り、正しい姿勢や体力配分を軽視していたことを反省した行基は、自らは競技から離れるも様々なウマ娘に師から学んだ走禪の意味に加えて正しい姿勢と体力配分を分け隔てなく教えることを決意します。しかし、当時の指導人は朝廷によつて選ばれた者しかなることのできない特別な立場であり、道照のような大陸で修行した実績ある名バがするならともかく、何の実績もない行基が指導をするのは弾圧されても仕方のない行いでした。まだ家族もいた行基は今では雌伏の時と見定め、自由になる

その時を待ちます。

714年、最後の家族だった母の喪が明けて46歳になった行基は知識結と呼ばれる集団を結成。これはウマ娘の果たす農業、土木建築、競技の全てを修行とし、大陸由来の知識に長年に渡り行基が独自に研究した情報を合わせて最適化した当時最先端のテクノロジーを持つ職能集団だったのです。

彼女達は近畿地方を中心に各地で開墾、建築、ウマ娘の指導を行い、人とウマ娘が豊かに暮らすとともに正しく走ることのできる世の中を作ろうとしました。しかし、仮にも仏門である彼女の行いは仏教徒が寺の外で活動することを禁じた僧尼令に違反するとされ、717年頃から弾圧を受けるようになったのです。しかし――

「諦めない。みんなが正しく走って修行をするために、どれだけ禁じられてもギョーキ達は伝え続ける。それに、田んぼを耕すことも、橋をかけることも、みんなを笑顔にする。それは絶対に、間違いなんかじゃないんだから！」

行基への弾圧は730年まで続きますが、その頃には彼女達が開墾した田畑や治水事業が社会を豊かにしてゆき、正しい姿勢で走ることが競技寿命を高めることもウマ娘の間で広まっていました。そこで、朝廷は行基の行いは決して悪しきものではないと判断して少しずつ弾圧を緩めていったのです。

731年。行基は63歳になっていました。

つい昨年までは何をするにしても朝廷からの弾圧を覚悟しなければなりませんでしたが、今では役人の方から行基達に協力し始めています。

この日は行基が前々から計画していた平城京の用水路を拡張する工事を開始する時であり平城京は近くに大きな川がなく治水関係に弱点を持っていました。彼女は小高い丘から全体を眺めていました。そろそろ自分も手伝いに行こうかと思っていると、最近やたらとまとわりついてくる青年が今日も行基の許を訪れたのです。

「お前、まーた来たのか。どこの貴族の戯れか知らないけど、勘当されてもしらんど」

「大丈夫だ。偉いからな」

「だったら余計に帰れよ。全く、下が苦勞するぞ」

「はは、全くそのとおりで。民百姓には苦勞をかけてばかりで、どうしようもない」

「随分大きなこと言うな。本当に偉いんだな、お前。農業や建築もある程度知っていたし、ウマ娘の育成も筋が良い。ギョーキが独学で身につけた理論もすぐ覚えていくし。何か悔しいぞ」

「まだまだ師匠には敵わない。ところで、師匠はどうやってここまでのし上がったんだ？」

「ん？ ああ、まあそうだよな。こんなチビのウマ娘のババアが何で職能集団を率いているのか気になるよな。けど、悪いけど何のことはないよ。ギョーキはただ、諦めな

かっただけさ。諦めずに走り続けていたら、いつの間にかみんなが認めてくれた。そりゃあ、昔は色々と無茶したけど、走って、米育てて、橋かけて、何でも諦めずにやっていたら周りに人が出来てた。信じられるかい？ 競技で一度も勝ったことのないウマ娘が、菩薩だの聖人だの呼ばれるなんて。あたしはただ、諦めなかつただけなんだけどね」

「それができたからあんたは凄いウマ娘なのだと思うよ。全く、今の帝にも見習わせた  
い」

「ああ、今の帝ねえ。いや、そんなに悪かないだろ。ギョーキのことを認めてくれたみたいだし、何よりずっと頑張ってるじゃないか。皇后の……たしか、光明皇后陛下だけ？ あの方もありがたいことに御仏の慈悲を示してくださっている。そんなお二人のことを悪く言っちゃあバチが当たるよ」

「し、師匠オ！ 師匠オオオ！」

「ぬわあー何で抱きつくんだよお！ ていうかお前どつかで見た記憶があるんだけど。服は粗末なのにやけに小綺麗というか、無駄に高貴というかーって、おま、いや貴方様はー」

天皇かよオオオ！

731年。聖武天皇、行基と出会う。

前々から行基の行いに興味を持っていた聖武天皇は自ら行基に教えを請い、その知識や技術を学びます。これにより、行基達は公的に認められた存在となり、翌年には日本最古のダム式ため池とされる狭山池の築造には朝廷から行基達に協力を依頼するなど良好な関係を築いていくのです。そして――

「陛下、陛下！ 言われたとおりの姿勢に変えると今までよりずっと早く走れましたの！ ！ ！ どこでこのような知識を学ばれたので？」

「詳しくは秘密だけど、最高の師匠に教わった」

「……秘密？ 一蓮托生のわたくしにも秘密ですの？」

「ああ、秘密だ。師匠からあんまり大っぴらにはしないように言われたからな」

「もう、陛下。わたくし、とても気になりますわ」

「そんなに？」

「はい。とても、気になります」

皇居の一角では仲睦まじくトレーニングをする二人の姿がありました。

長屋王の変から月日は流れ、まだまだ苦しいけれどもようやく安定しつつある雰囲気があります。しかし、幾つもの星が煌めく奈良時代。そこに最大級の暗雲が近づきつつあることを、誰も気付いていなかったのです。



「はい、終わりもよろしいようですね。今日はこのあたりでさようならをー」

「司会さん、現実逃避しないでください。まだ後半がありますよ」

「待つてくださいいよ。いい感じで終わる雰囲気だったじゃないですか。長屋王の変の悲しみも癒えて、聖武天皇と行基は協力して国内の治水や農地を整え、光明皇后は救民の前線で働き藤原4兄妹がサポートをする。もう完璧ですね。奈良時代はハッピーエンドです。そうですね！」

「司会さん、奈良といえは何ですか？」

「ええと、大仏ですかね」

「あれがなぜ作られたのかはご存知ですよ。希望の象徴、願いと救済の権化としてあの大仏は作られました。けれど、あれだけ巨大な救済を願わずにはいられなかったのは、どれだけの絶望があったのでしょうかね」

「……………」

「希望を知るにはまず絶望を。さあ、時間も圧しています。続きを、どうぞ」

それは、一人の漁師から始まりました。

九州のとある漁師が朝鮮半島で座礁し、新羅はその漁師を何の悪気もなく、むしろ善意で日本に送り届けました。本来ならば、たったこれだけの歴史の中に埋もれるような

出来事です。しかし、この時送り届けられた漁師には、最悪の贈り物も添えられていたのです。

何時だつて、地獄への道は善意で舗装されている。まさにここから起こる悲劇は、善意により引き起こされました。

735年8月。九州北部にて疫病が大流行を開始。疫病の名は、天然痘でした。

事態を重く見た太宰府は朝廷に税の免除を申告し、許可されます。しかし、天然痘により農民は激減し、農地を手放す者も多く九州では飢饉が発生します。

736年4月、阿倍継麻呂を団長とする遣新羅使が平城京を出発。使節団は九州北部を経由して新羅に向かいますが、一行はその道中で天然痘に感染し新羅で感染したのか、九州で感染したのかは不明。当時の資料では新羅で感染したと考えられている。団長を始め多くのメンバーが死亡し、残された一行が平城京に帰還することにより本州にウイルスが持ち込まれてしまったのです。そして、翌年には全国的に大流行することとなりました。

後世、天平の疫病大流行と呼ばれる大惨事であります。

農民の大量死はただちに大飢饉を招きます。聖武天皇は九州に限定していた免税令を全国に拡大し、更には地方を治める国司に対して「疫病治療法および禁すべき食物等のこと七カ条」を配布し天然痘の対策に当たらせました。

この七カ条の内容は、以下のとおりです。

1. 病は高熱と発疹、下痢が生じる。特に下痢に注意。ツライ。

2. 身体を温めること。絶対に冷やさないで。お腹は特に温めて。

3. 布団ないかもしれないけど地べたに寝ないで。何か敷物してね。身体が冷えるから。

4. 重湯とかお粥は温かいのが良いけど冷えてもとにかく食べさせて。お粥の米は細かく砕いたら食べやすいよ。

5. 食べるのを嫌がってもとにかく食べさせて。塩は砕いて粉にしたものを飲ませたら口は荒れるけどその後の経過が良いみたい。

6. 回復後も20日間は生物を食べたらダメ。安静に。また体調崩したら次は助からないよ。

7. インチキ療法とかを信じるおパカは死にます。けど人參は高熱に効くみたいから汁にして飲んでね。

施薬院などの臨床データから分かっていることを多少おパカな人々でも理解できる平易な書き口でしたためられています。また、内容も伝染病対策として不足はあるものの基本的には現在でも通用するものであり、朝廷が伝染病対策について正しく認識していたと言えます。

また、これは日本の医療が奈良時代には加持祈祷と言ったお祈りや神頼みではなく、きちんと根拠と薬学に基づいたものとなっており当時決して医療後進国ではなかったことを示しているでしょう。

文書の効果があつたのか否か、ともかく翌年の1月には大流行は沈静化します。しかし、この僅かな期間で日本国民の30%に達する100万人以上が死亡し、日本はあまりにも多い犠牲者を出してしまいました。

そして、犠牲者に貴賤は無く、光明皇后にとつてあまりにも悲しい別れが立て続いていたのです。

「ウマカイ姉様！ しつかりなさってください！」

「ダメよアスカ。私に近寄ってはいけない。ああ……兄様もみんな死んでしまった。やっぱり、長屋王は私達に怒っていたのかな……」

藤原4兄妹は最初4月に房前が亡くなると、7月に武智麻呂と麻呂が相次いで亡くなり、残るウマカイもまた8月に倒れたのです。

何故か4兄弟の看護を率先して行っているにも関わらずピンピンしている光明皇后おそらく施薬院で様々な病人を看護する中で偶然免疫を得ていたと思われる。そうであれば本当に御仏の加護としか言えない。は姉の忠告を無視して必死の看護を行いました。間もなくウマカイもこの世を去りました。

この世の権力を一手に握っていた藤原4兄妹の死を口さががない人々は長屋王の呪いだと言つて恐れたといひます。

4兄妹の死後、実権を握つたのは元皇族の橘諸兄たちばなのもろえです。諸兄の母は夫と離別後に不比等に再嫁していたため4兄妹や光明皇后とは義兄妹の關係にあり、同時に不比等の娘を妻に迎えていたため藤原氏と非常に親密でした。

姓を得て臣籍降下した皇族は降下前の名前、諸兄の場合は葛城王を名乗るのが一般的でしたが彼はそうしませんでした。理由としては兄と姉を一気に失つてしまつた義妹と聖武天皇に、「お兄ちゃんはまだここにもいるぞ」というメッセージを送るためだつたと思われまゝ。事実、彼は生き残つた者として国力がどん底にまで落ち込んだ日本を再建すべく聖武天皇と光明皇后を支え続け、全力でお兄ちゃんを遂行したのでした。

この時、大陸由来の知識を遺憾なく發揮して出世した人物に吉備真備きびのまきびと玄昉げんぼうの二人がいます。真備は様々な學問に精通する万能の人で、玄昉は人格に難はあるものの藥學に長けていました。特に玄昉は投薬治療により聖武天皇の母である藤原宮子の心を癒やして36年ぶりの親子対面を実現することにより天皇の信賴を得て、更には疫病の治療にも尽力しています。

皇族や知識人を中心に政務を行える人材をかき集め、何とか日本再建へと動き出そうかという740年。九州からあまりにも空気が読めないと言うか、何と言うべきか困る

報せが舞い込んできました。

「一応訊きますが皇后陛下、もうよろしいのでは？」

諸兄が問うと光明皇后はうんざりと言わんばかりに頬を膨らませてしまいました。

「わたくしの手には負えません。好きにしてくださいまし」

「皇后もそう言っていることだし、もう良からう。此奴は親族でもなければ何でもない。朝敵だ。兵士を用意しろ。大軍が良い。水と食料も。出ていつてもらおう、この世から」

此奴——それはウマカイの養子で跡を継いだ藤原広嗣を指します。

広嗣が伯母の光明皇后に愛想をつかさされ、聖武天皇にここまで激怒されたのはこれまでの所業と今回のやらかしを思えば当然のことでした。

最初の兆候は738年。投薬治療で精神の均衡を取り戻した藤原宮子と治療に当たった玄昉の間を邪推し擲揄したことが親族の逆鱗に触れて大宰府に左遷されます。

そこで大人しくしておけば良いものを740年に世の中が乱れているのは外国かぶれの吉備真備と玄昉のせいだから追放しろと朝廷に上奏文を送りつけたのです。これは二人を腹心としていた橘諸兄にとって当然逆鱗に触れる行いであり、広嗣は反逆を企てていると怒り狂います。聖武天皇はともかく事情を聞こうと広嗣の召喚を命じますが、広嗣はこれを無視。そして、9月には手勢1万を率いて反旗を翻したとの報せが舞

い込んできたのです。

このあまりの空気の読めなさという意味不明さに激怒していた諸兄は一周回って冷静となり、批判された真備は乾いた笑いを漏らし玄昉は忌々しそうに舌打ちをします。そして、仮にも姉の跡をついだ義理の甥を何とかしようとうと光明皇后は動くこうとしましたが、話を聞いて早々に匙を投げ聖武天皇は「だめだこいつ早くなんとかしないと」と討伐を命じたのであります。

討伐軍の総大将はおおのあずまひと大野東人。聖武天皇が即位してまもなく頻発した東北の反乱において長屋王の指示の下で軍を率いて鎮圧した歴戦の勇将です。この大人気ないほど本気の討伐軍を前に広嗣の反乱軍は鎧袖一触に敗れ、広嗣は新羅に逃亡しようとしませんが天候が味方せず捕らえられて東人により斬刑に処されました。乱を起こしてから僅か2ヶ月。一体なんのためにこんなパカげたことをしたのかは全くの謎です一説には日本との関係が悪化していた新羅が黒幕とも言われているが、それにしても広嗣が愚かすぎる上に支援した形跡は無い。

しかし、ある意味で広嗣は予想外の戦果を得ていました。ちょうど広嗣と東人が会敵した辺りのこと、戦の経験などないボンボン相手に歴戦の勇将である東人が敗北するなど天地がひっくり返ってもあり得ないと確信する諸兄はそんなことはもうどうでもよろしいと言わんばかりに国内再建に取り掛かるべく今日も意気揚々と出仕しました。

「おはようございませす、陛下。さあ嫌なことは忘れて今日も元気よくお仕事をー」

玉座は空でした。それどころか近習の一人もいません。とてつもなく嫌な予感を感じながら諸兄が玉座に近付くと、書き置きが一枚置いてありました。

『探さないでください』

この日、諸兄の絶叫が平城京に響き渡った。

「何事ですか?」

叫びを聞きつけた光明皇后が玉座に駆け寄ると、やはり書き置きを見て絶叫。絹を割くような叫びが近畿中に響き渡りました。

一方その頃、伊勢国周辺。

「……何か聞こえたか?」

「聞こえたかもしれないが、聞きたくない。私はもう疲れた。疲労を持て余す」

「お前なあ、そりゃ頑張ってるのはわかるけど家出はダメだろ。悪いこと言わないから嫁さんのところに帰りなさい」

「違う、私は師匠の一番弟子の沙弥勝満だ。これからは師匠と一緒に皆と汗を流して生きていくんだ!」

「ま、まあ、とりあえずは好きにしなよ。ここの工事も来週には終わるし、そこからは橘様の依頼で山城に行くからそこで引き取ってもらおうよ」



心身ともに限界を迎えた聖武天皇は突然伊勢へと出奔。たまたま治水工事で逗留していた行基を見て我慢が決壊。半ば幼児退行気味になりながら彼女の側にいました。

思えばこれまで誰にも甘えられなかった人生でした。多少なりとも事情を知る行基は、この弟子を名乗る治天の君を少しでも癒そうと寄り添いました。

「何してるんですか聖武天皇」

「本当に何してるんでしょうね」

「これお兄ちゃん……橘諸兄は激怒したのでは？」

「それが意外にも怒るところか悔やんでいますね。橘氏の氏寺に奉納された文には諸兄直筆で『兄として弟の悩みを見抜けなかった。悔しい』と、あります」

「兄を名乗る不審者について私はツツコむべきなのでしょうか」

「一応光明皇后の義兄ですし皇族なので兄と言えなくは……いや、無理ですね。名前からして諸みんなのお兄ちゃん兄を主張するあたりちよつとヤバい人です」

「もしかしてこの時代のツツコミ役は先の疫病で全滅してヤバい人しか残っていないのではっ？」

「まだ光明皇后や行基、吉備真備がいるから大丈夫ですよ」

「それ以外はヤバいってことじゃないですか」

場面は変わり美濃經由で山城国まで来た一行。

山城国に所領を持つ橘諸兄の屋敷前には聖武天皇がよく知る紫色の髪が光り輝いて見えます。回れ右して逃げようとする聖武天皇の首根っこを行基がひっ捕まえると、そのまま光明皇后の前に引き摺って行きました。

「あなたが、お師匠様ですか？」

「誰の師匠かは知らないけど、そりゃギョーキのことかい？」

「ああ、あなたが行基様でしたのね。わたくしは陛下と一蓮托生のアスカです。光明皇后とも呼ばれておりますが、どうぞよしなに」

「お、おう。そんな睨まなくてもこんなウマ娘のババアと陛下の間には何にも起きないよ。とにかく、旦那は連れてきたから受け取ってくれ」

「ありがとうございます、行基様」

目を合わそうとしない聖武天皇。

流石にすべてを投げ出して一週間以上音信不通実際には最初から行基が朝廷に連絡していたため居場所や移動先は把握していた。にしていたのは拙いと分かっているの  
でひたすら気まずそうです。

「陛下」

「……」

「ごめんなさい」

頭を下げたのは光明皇后でした。

驚いた聖武天皇が思わず皇后を見ると、耳を垂らして心から辛そうにする愛妻の姿がそこにあつたのです。

「わたくし、あなたには一蓮托生になる覚悟があるかと言っておきながら、わたくしはあなたの辛さを分かっていませんでした。わたくしの家があなたの負担になったのに、本当にごめんなさい」

「私こそすまない。皆にー君に迷惑かけて。本当に、すまない！」

お互いに謝り続ける二人を見て行基は呵々大笑しました。独身の彼女からすればいい歳した夫婦が今更こんな初々しさを醸す姿はあまりに微笑ましく、声を上げて笑わずにはいられませんでした。

「いい嫁さんだな（ちよつと怖いけど）。大事にしなよ、パカ弟子」

そう言い残して行基は去ってゆきます。

「まあ、しばらく休んでもいいんじゃないの？ ギョーキはこれから都で仕事があるから戻るけど、お前はもうちつとだけ休んでなよ。それで、助けが必要ならまた会いに来な。大丈夫だ、何度も言ってるだろ？ 諦めなきや何とかなるさ」

その後、今まで留守を守っていた橘諸兄が合流してきた聖武天皇夫妻はしばらく彼の屋敷を臨時の皇居として静養し、難波や紫香楽などに都を移して各地を旅しました。そして、745年に平城京へと戻るのです。これを彷徨五年と呼びます。

無計画に思える行動ですが、結果として各地を訪れたことが民衆への慰撫となり、同時に大量の死体で溢れていた平城京の再建までの時間を稼ぐことにもなりました。なお、平城京の再建や聖武天皇が行く先々の建築には行基の職能集団の姿があり、彼女は陰ながら弟子を支えていたのです。

彷徨の中で人々と関わり、聖武天皇はある事に気が付きます。地方に向かえば向かう程に都ほど社会福祉が行き届いておらず、また仏法の認知率も低いのです。日本において寺院は一種の社会福祉施設であり、教育機関でもありました。全国が疫病が過ぎた今、地方の再建も聖武天皇の課題です。寺院は短期的には社会福祉施設として、長期的には教育機関として民衆を支えるものとしてなくてはならないと考え、741年に聖武天皇は全国に国分寺・国分尼寺の建立を命じました。

仏法により国家の安泰を計る考えを鎮守国家と言います。後世、聖武天皇の施策はこの思想の基に行われたと解釈され、それは確かに正しいです。しかし、国力が最低レベルにまで落ち込んだ状況で単なる他力本願で済ませられるほど状況は甘くなく、聖武天皇は理想を掲げながらと現実に向き合うという非常に苦しい選択を迫られ、その解決と

して仏法により人々に継るものを与えつつ、国分寺・国分尼寺の僧侶たちが全国で社会福祉と教育にあたるという方法を採ったのであります。

しかし、先の疫病の損害は大きく、人々は絶望の淵からなかなか立ち直れずにいました。何か、大きな何かが必要なのです。人々の絶望を吹き飛ばすような、大きな何かが。

「と言うわけで助けてくれアスカ！ 君が必要だ」

「陛下…結構な無茶苦茶を言っているのは分かっていますか？」

「分かっているが、どうにも考えが浮かばない。何か、こう、常識に囚われない発想が必要なんだ」

「もしかしてわたくし、今喧嘩を売られているのですか。わたくしに常識が無いと言う意味ですわよね」

「それは違う。ほら、アスカは時々常識を超えたことするから社会福祉の後援ならともかく現場で働くのはあり得ない行いです、今回も何か思いつかないかと思ったんだ」

「うう…言われてみれば確かに、そうかもしれないですね。けれど、そんな大きな何かとかいう漠然としたもの、一体どうすればよろしいので？ 大きな仏さまを作るとか、何か具体的なものにした方が皆さんも分かりやすいと思うのですけれど」

「いい発想だ！」

「きやあ！ いきなり叫ばないでくださいまし！」

何気ない一言で聖武天皇に電流奔るッ！

743年11月5日、聖武天皇は平城京に大仏を建立する詔を出しました。

かくして、15m80cm・重さ250トンの巨大な仏像を作るといふ途方も無い計画がスタートしたのです。

## 第4回「駆け出しの一等星 光輝くウマ娘達」下

実のところ、大仏建立の詔によってすぐに大仏を作り出せたわけではありませんでした。理由としてはひどく現実的な話しであり、予算と人手不足の問題です。

詔には、「大仏くらい日本中の富と力を持つている私からすれば簡単に作れるけれど、大事なものはみんな協力を作って、功德を積む事だよ。だからみんな協力を作ろうね。あ、役人は無理強いかしちやだめだよ。このことをみんなに伝えてね」とありますが、簡単に作れるとか言うのは明らかに虚勢です。実際には予算がなかなか下りず、寄付やボランティア頼りになってしまったのでしょう。そして、国分寺・国分尼寺を作って間もない状況で仏法が浸透するはずもなく、当然人でもお金も足りない状況になつてしまったのです。

「諦めたくないが、人もモノも金もない。最近では東大寺に力が集中することを他の寺院が嫌がつてきているし、どうすべきか」

「また弱気ですわね、陛下。けれど、わたくしも悲田院や施薬院での活動に競技もありませんし、今度はあまり力は貸せませんわよ。常識外れのわたくしには何も思い付きませぬし」

「だからあれはそう言う意味じゃないからな。うーむ、このままじゃ本当にどうにもならない。そんな民衆が力を貸して、しかも寄付とかも集めてこれて、他のお寺に顔が効くようなお方が——いたな」

万策尽きた聖武天皇は行基に直接泣きつき面会します。

「かくかくしかじかぶもぶもと言うわけなのですが、どうか師匠のお力をお借りしたく——」

「良いぜ」

「そこを何とか、もう頼れるのは師匠だけなんです。役人は無理い——無理い——しか言わないし、お寺は邪魔するし、アスカはご機嫌斜めだし。兄を名乗る大臣や最後の良心真備はいまいち協力してくれないし。私には師匠しかいないんです。師匠がやれと言えば私、何だつてしますよ。うまびよいでもうまだつちでもむしろご褒美と言うか師匠だつたら私——」

「いや、聞けよ。力貸すつて言っているだろ。パカ弟子。あとお互い齡なんだからうまびよい言うな。743年時点で聖武天皇42歳、行基75歳。」

「師匠オーツ！」

「ぎやあああ！ だから抱き着くな。パカ弟子イ！」

聖武天皇の大仏建立にかける思いを感じ取った行基は協力を快諾し、彼女が率いる職



能集団が全面的に動き始めます。

行基が大仏建立に協力していると言う話は瞬く間に広がり、彼女が今まで手助けをしてきた土地の人々が我先にと都に駆けつけ、事情で来れない者はせめてもと勧進（寄付）を送って来たのです。

滞っていたはずの大仏建立が動き出したことを察知した寺院関係者とそれに連なる役人は行基の活動とそれを支持する聖武天皇を批判しますが、御前にて行われた話し合いの場でしばらく行基はやれ不可能だのやれ無理いだのと相手の言いたいことを言わせた後に、天地がひび割れるほどの大音声を出したのです。

「喝——ッ！ 陛下が諦めず、このギョーキもやると言っているのにお前らが諦めてどうするんだ！ 天に従わず、衆生を救おうともしない。それでどうして仏門を名乗れる。どうして役人を名乗れる。そんなにも何もかも諦めるんだったら、役人も仏門もやめちまえ！ せめてギョーキ達の邪魔をするな！」

行基の一喝により僧たちと役人は沈黙し、何も言い返せませんでした。

玉座から一部始終を見ていた聖武天皇と光明皇后はいたく感激し、これ以降も寺院関係者や役人から不平不満が出る度に行基に一喝してもらうようになったのですが……その光景は、何か大きく間違っているような気がするものでした。

「喝飛ばせー、ギョ・ウ・キ！ 喝飛ばせー、ギョ・ウ・キ！」

「ああもパカ弟子イ！ お前の嫁さん何とかしてくれ！ 見世物じゃないんだぞ！」

「喝飛ばせー、シ・シヨ・ウ！」

「ぬわああお前もかよオオオ！」

後の日本最古の応援歌であります。

光明皇后は行基に対して嫉妬心から否定的な立場でしたが、これ以降はある程度認めるようになったみたいです。

その後、行基は全国を行脚して大仏建立の意味を人々に説き続け、日本中から支援が集まります。

「師匠、何で白い牛に乗ってるんです？」

「長門国から借りた。いやーすげえ力持ちだし便利なんだよコイツ」

「良い判断だ。<sup>センス</sup>長門国には褒美を出そう」

行基が全国を行脚する際には寺をついでに開く場合もあり、山口県にある龍蔵寺には次のような伝説があります。

行基上人が全国から人材や物資などを集めていると、長門国では神がかった力を持った白牛が送られてきた牛達の中にいました。歳を取って疲れやすくなった行基はいたく気に入り、工事現場を回る際にはこれに乗って移動し、その力を活かしてウマ娘でさえも難しい作業もこなしたと言うのです。

大仏が完成すると聖武天皇は白牛とその飼い主を褒め、飼い主には土地と「国守」の姓を与えました。しかし、白牛は役目を果たしたからか、あるいは背に乗せたもう一人の主を追いかけたのか長門国に帰る途中で亡くなり、そのことを知った天皇は白牛を悼み、行基上人が開き白牛を偲ぶ寺に「白牛山 龍蔵寺」の勅額を与えました。

他にも行基が訪れた場所には様々な形で大仏建立に協力したとの伝承があり、全国を回り協力を得ていたのは確かでしょう。この時、思わぬ副産物も生まれています。

「師匠、今度は何をしているので?」

「地図作ってる」

「地図ですか。どのくらいの規模を?」

「日ノ本全体だけど?」

「!?!」

後に行基図と呼ばれるもので、現存していれば日本最古の日本地図です。地図自体は738年8月に朝廷が国郡図を諸国に提出させた記録があるため存在していますが、全国を行脚し日本列島の形を最初に把握したのは彼女だったのかもしれない。

「聖武天皇、行基師匠が好きすぎませんか?」

「聖武天皇は幼い頃に父を亡くし、母とも40年近く会えない中で成長しましたから。」

頼ることのできる年長者があまりいなかったのです。数少ない頼れる人々も政変や疫病で亡くなったわけですから、プラスチックが爆発した彷徨で行基と触れ合うことでいざとなれば頼れる年長者がいることに安心できたのでしようね。何と言うか、二人の関係は師弟というより年の離れた姉に甘える弟みたいなものでした。光明皇后も相当嫉妬したらしく、関係改善まで聖武天皇が行基に会いにゆく際には必ず監視を付けていたと言われていますから」

「頼れる年長者といえは……橘諸兄は？」

「あれは兄を名乗る不審者なので。いえ、忠誠心と能力は確かなんですけど、あそこまで突然の兄ムーブされると聖武天皇も困惑したのでしよう」

「学者から不審者とか言われる偉人他にいますかね」

「前回登場の日本人が選ぶお兄様ランキング殿堂入りに比べるとどうしても薄いですがね、この人」

「いや、義妹のために命をかけた人と比べるのは流石に可哀想でしょう。……さて、全国から支援が集まり、大仏建立はいよいよ大詰めを迎えてまいりました。しかし、誰よりも大仏の完成を見たかった彼女に残された時間は余りにも少なかったのであります」

743年6月。聖武天皇は墾田永年私財法を制定。これは律令制の根幹である全て

の財を国家（天皇）の所有物とする方針を崩すものでしたが、人々が自らの意思で土地を切り開き発展することが国を豊かにすることだと考えたのです。

745年、聖武天皇は行基に仏教界の最高位である大僧正の位を日本で最初に贈ります。行基は「ギョーキはそんな大したウマ娘かね？」と言いつつ、照れくさそうに笑いました。

746年には大仏の鑄型が完成し燃灯供養を行われ、翌年からは鑄造が開始されます。

大仏の完成は着々と近づき、誰もがその日を夢見ていました。しかし、鑄造も終わりがけた749年2月。一人のウマ娘がその役目を終えようとしていたのです。

「あはは、わざわざお前が見舞いに来るなんて、ギョーキは随分偉くなったね」

「師匠は大僧正なんですなら、もう十分に偉いですよ。それより、はやく元気になってくださいよ。もうすぐ大仏も完成して、師匠には開眼供養の大役があるんですから」

「うーん、そうしたいのはギョーキもやまやまなんだけどねえ。ずっと全力で走り続けてきたから、ちよつとしんどいかな」

「諦めないでください、師匠。あなたが諦めないでくださいよ」

「そりや違うよ。パカ弟子。ほら、お釈迦様だって言っているだろう。諸行無常、是生滅法。人もウマ娘も、生きていればいつかは死ぬ。けれど、その限られた時間の中でやれ

ることを全力です。それが、ギョーキの考えた諦めないってことさ。もうギョーキは、与えられた時を走り切ろうとしているんだから、別に諦めたわけじゃないだろ。なあ、パカ弟子。お前は、全力で走っているか？ ギョーキには、やりたいこと我慢してするように見えるんだよな」

行基からの最後の訓示です。聖武天皇は居住まいを正して彼女の声に耳を傾けました。

「人みなを 御法の歌に泣かせけん 君が聲こそ聞かまほしけれ意識：みんなはありがたい言葉だから泣いているのだろうか。いいや、あなたの声だから泣いているのですよ。大丈夫だよ。お前の声は、みんなに届いただろう？ なんだってやれるさ。お前なら」

「だけど、私にはー」

「ギョーキの一番弟子ならさ、諦めるなよ。もうやりたいことをやつても仏様は何も言わないから、やれるだけ全力でやってみろよ、しゅまん勝満」

「……」

「ギョーキは、少し先を走っているからさ……追いつけたら教えてくれよ。大丈夫、大丈夫。諦めなければ、必ず……何とか……なる……から……さ」

「……師匠？」

「――」

「またいつか、会いましょう。その時も、あなたの弟子として。本当に、ありがとうございます。……」

749年2月2日。行基、入寂。

釈迦と同じ涅槃の姿で、少しも心乱れることなくこの世を去ったと伝わっています。

悲しみの中、彼女の亡骸は生駒の地で茶毘に付されるため弟子達により輿に乗せられて運ばれました。その弟子達の中には沙弥勝満と名乗る人物があり、彼女の遺骨を舍利瓶に納めると、生前に行基が建てていた庵の側に埋葬しました。

聖武天皇は行基に菩薩の称号を贈り、彼女は文殊菩薩の化身として今でも語り継がれています。

師を失った聖武天皇は眼病の悪化もあり意気消沈してしまい、光明皇后や娘の阿倍内親王は心配でなりませんでした。

「なあ、父よ。いい加減に元氣を出してくれないか。母さんも心配して――何をしているんだあなたは」

引き籠もる父を見かねた阿部内親王が部屋に入ると、そこには剃髪してスキンヘッドになった父がいました。

「おお、女東宮女性の皇太子のこと。か。どうだ、似合うか？」

「う、うむ、似合っているかいらないかではなくてだな……何故剃髪しているのだ。帝が出家するなど聞いたことがないぞ」

「いや、確かにそうだが。けど似合ってるだろう？」

「……」

「似合っていない？」

「だから、似合っているかどうかではなく、現役の帝が出家したら駄目だと言っているの！」

「私は似合っていると思うんだがな」

「ーッ、勝手にしなさい！」

「似合っていないのか……」

同年、8月19日。聖武天皇は突如出家。一説には行基が入寂前に出家させ、5月には沙弥勝満太上天皇の署名を使うなど既成事実化させていたとも言われています。ともかく、ある意味では恒例となった聖武天皇の突発的行動に朝廷は慌てて讓位の手続きをし、男子のいなかったため娘の阿部内親王が即位。彼女が日本史上唯一のウマ娘の女帝、孝謙天皇であります。

天皇の地位から開放された聖武上皇は、今まで力を入れられなかった社会福祉やウマ娘の育成に積極的に参加し、行基の教えを広めていきました。



「師匠の言うとおりの好きにしてみたけれど、やっぱり色んなところに迷惑かけちゃったな。女東宮ーいや、今は帝か。あの子には呆れたとか言われちゃったし」

「何だか色々ありましたけど、わたくしはこれで良かったと思いますわ。また陛下と一緒に走ったり、みなさまのお世話をできるなんて夢のようですよ」

孝謙天皇の後見は光明皇后となっておりますが、実際には橘諸兄や吉備真備、藤原仲麻呂らがサポートしており彼女は自由の身となった夫と今まで以上に一蓮托生の存在として活躍していました。

「そりゃ、私も後悔はしていかないけれど…やっぱり娘に剃髪が似合っていないと言われたのは辛い、とてもツライ」

「あら、そうですね？ わたくしは似合ってると思ひましてよ」  
「そうだよな。やっぱり似合ってるよな！」

穏やかな時が流れ、このまま何事もなく日本は大仏の完成とともに再生を宣言できると思われていました。ところが、晩秋には完成の目処が立っていたにも関わらず思わぬ問題が発生しました。

「黄金が足りないだど？」

「はい。あれほど巨大な御仏ですので、今あるものだど全体を覆うにはとてもとても」  
「それは…マズくないか？」

「はい。非常にマズいです」

「どうにかならないかキビキビマキビイ」

「陛下、変なあだ名を付けないでください。私は吉備真備です」

「変……なのか。似合ってると思うのだが」

「(何で変なところだけ似ますかねこの父娘)」

孝謙天皇をはじめ朝廷としては、大仏は何としても金色に輝かねばならなかったのです。

もはや大仏は希望の象徴であり、三千世界の隅々にまで輝く姿により人々に朝廷への畏敬と明日への望みを抱かせるためにはただの大仏では駄目なのです。金色に輝くことではじめて大仏は真の完成を迎えるのです。

困った孝謙天皇は父に相談しました。

「なるほど、分かった。先ずは全国から金を掘り出せないか調査を命じよう。次に、これ是最悪の場合だけど大陸から金を輸入する手もある。けれど、今の財政で大陸から輸入するのは厳しいから、あくまでも我が国から金が見つかるのが望ましいな。大丈夫、諦めるにはまだ早い」

何でもないように落ち着いて理想案と妥協案を提示した父に孝謙天皇は驚き、

「まだ引退せずとも良かったんじゃないのか？」

と問いましたが、上皇は

「やりたいことをやるって師匠と約束したからね。だから、お前に譲ったことを後悔はしていないさ」

と答えました。

そして、間もなく陸奥国から金が発掘され、大仏は予定通り金色に輝く姿で完成の時を迎えるのでした。

「師匠、見ていますか？ 諦めなければ、本当に何とかなりましたよ」

749年12月、鑄造が完了。

そして、752年5月。聖武上皇夫妻と孝謙天皇をはじめ多くの人々が見守る中で菩提僊那により大仏の開眼供養が行われました。大仏建立の詔から11年、ついに大仏は完成したのです。

日本史上初となる金色の巨大な大仏を目にした人々は口々に仏の威光を称え、その瞳にはもはや影一つなく皆が光り輝いていました。

「めでたい日だな、父さん」

「ああ、本当にめでたい日だ。ところで帝よ、何かこういう日にはすべきことがあつたと私は思うのだが、どうだろうか？」

「無論、帝としてこういうめでたい日には何を行うべきか、わかっているさ。母さん、準

備は良いか？」

「いつでもよろしくてよ。皇后として、何より誇り高き藤原家のウマ娘として、わたくしは常に1着を目指しますわ」

「頼もしいな。では、宣言するでしょう。第1回大仏開眼記念競技の開催を！」

「えいえいおー、ですわー！」

大疫病以来、小規模な競技や儀式として欠かせないものを除き国家行事としての競技は取りやめられていました。しかし、今日この日から再びウマ娘達が大舞台で競い合うことができるようになったのです。

競技には光明皇后をはじめ日本中の名だたるウマ娘が参加。その中には、何と孝謙天皇の姿もありました。

「おいおいおい。帝が参加するなんて前代未聞だろう」

「前代未聞とあなたが言うか、父さん。確かに私は治天の君だが、その前に一人のウマ娘だ。はじめての大舞台、走らざるを得ない！」

孝謙天皇は疫病の關係で遅咲きのデビューとなりましたが、偉大な母譲りの優れた体躯と名指導者たる父の薫陶により女帝にふさわしい最高の仕上がりでした。

日本史上、ウマ子とエミシですら公式では叶わなかった母娘対決。それが遂に光明皇后と孝謙天皇によって実現することになったのです。

奇しくも大外枠で隣同士となった二人。互いに戦意は最高潮であり今か今かと出走の時を待っています。

「たとえ娘が相手でも、全力で参ります。お覚悟なさい」

「相手が誰であろうと関係ない。私が目指す理想への礎にしてやる」

火花散らす母娘。そして、聖武上皇の合図により全てのウマ娘が一斉に駆け出しました。

圧倒的な脚力で先頭を駆ける光明皇后。しかしその後ろ2バ身から孝謙天皇は虎視眈々と前を狙います。最後の直線、仕掛けたのは孝謙天皇。だが光明皇后の脚色も衰えない。並びかけた二人、その差は僅か。聖武上皇は一瞬たりとも見逃すまいと二人を見つめていました。

「例え新しい風が吹こうとも…勝利は譲りませんわ!」

「女帝は、負けないッ!」

ゴール手前、本当に僅かのところで抜け出したのは、孝謙天皇。見事な差し切りにより親娘対決は娘の勝利で幕を下ろしたのです。

光明皇后はこれまで無敗の絶対的な強さを見せており、そのあまりの強さから「退屈」とまで言われるほどでした。しかし、最後の最後で劇的な勝負を披露し、その無敗の伝説を娘に譲ったのです。

「おめでとう、わたくしのかわいい子。あなたこそ、ウマ娘の女帝ですわ」

最強を降し、名実共にウマ娘の女帝となった孝謙天皇。そして、光り輝く一等星はその競技人生に終止符を打ったのでした。

752年。鑑真和上が来日。聖武上皇と光明皇后が出迎え、日本に多くの戒律をもたらしたと言われています。

引退後の光明皇后は聖武上皇と共に変わらず社会福祉活動とウマ娘の育成に携わり仲睦まじく暮らしていましたが、もはや聖武上皇は与えられた役目を全て果たしつづかりました。

ある日のこと、二人で連れ立って歩いていると人々は口々に大仏の威光とこれからの発展を口にしていました。それを聞いた聖武上皇夫妻は自分達におもねるため言っているだけではないかと心配になりました。しかし、傍らで農作業の休憩をしていたウマ娘達は「退屈だね〜」、「また走りたいなく」、「退屈だけど、平和だね〜」と談笑しているのを聞いてはらはらと涙を流しました。ついに、あの大疫病を乗り越えて人々が「平和」を退屈になるほど享受していると知り感極まったのです元ネタは十八史略にある「鼓腹撃壤」。

「ああ、私の役目は果たせた」

756年、聖武上皇は病に倒れます。光明皇后は必死の看病を行います、病は次第

に重くなり余命幾ばくもないほどです。しかし、聖武上皇はどこか晴れ晴れとした気持ちで自らの最期を迎えようとしていました。

「アスカ、私はね、やりたかったことを全てできたよ。それは師匠の教えもあつたけれど、君がいてくれたから私は夢を持てたんだ。君がいなければ、私は何もできなかっただろうね」

「それは……わたくしも同じですわ。あなたがいたから、わたくしはここまで走り続けてこれましたの。どうか、どうか、わたくしを置いていかないでください。わたくしたちは一蓮托生、あなたなしでは生きてゆけません」

「大丈夫だよ、アスカ。私は、天地の間で少し休むだけだから。涅槃の先には君を待つてから共に行くよ。だから悲しまないで。ゆっくり、君がしたいことを全て終えてからおいで。大丈夫……大丈夫だよ……」

756年8月。聖武上皇、崩御。

彼は全力でその生涯を駆け抜け、その顔は満足そうに微笑んでいたと言います。

「あなた……オビト様聖武天皇の諱（本名）。わたくし、駄目ですの。あなたがいなければ、わたくしは、何もかもー」

光明皇太后となったアスカは、亡き夫の遺品の中で悲しみに暮れて過ごし、光り輝くウマ娘ときえ言われた彼女から笑顔は失われてしまったのです。

事態を重く見た孝謙天皇と、皇太后の甥である藤原仲麻呂は相談して聖武上皇の遺品を東大寺に寄進することを提案します。最初、皇太后は激しく拒絶しましたが、亡き夫を悼むためと説得されてしぶしぶ遺品の一部を寄進しました。その後、相変わらず夫との思い出の中に引き籠もる母を孝謙天皇は必死に説得し、計3回に渡り遺品を寄進させたのであります。これで元氣な母が戻ってくるかと思いきや、完全にふてくされてしまった皇太后は孝謙天皇の後見の立場にもかかわらず悲田院と施薬院での社会福祉の場以外は完全に数少なくなつた夫の遺品を抱えて過ごし、公の場に出ることはほとんど無くなりました。

この時、朝廷は橘奈良麻呂の乱などに揺れていたのですが、その全てに皇太后は無視を決め込みます。孝謙天皇と仲麻呂は遂に諦め、皇太后をそつとするように政治から遠ざけて余生を送らせました。

そして、760年。光明皇太后はこの世に未練など無いかのように夫を追いかけました。亡骸は当然夫と同じ陵に埋葬され、奈良時代のオシドリ夫婦は今も寄り添い眠り続けています。

「……大仏建立ですか。私が習つたのは仏教の力で国をまとめようとしたという、よく考えるとそれって為政者としてどうなのか、と思つてしまうものでした。そこには



こういった考え方もあったわけですね」

「何事にも象徴は必要ですからね。戦後復興を64年オリンピックピックが象徴したように、大仏建立は単なる他力本願ではなく国民を一つにすることにより大疫病からの復興を象徴する意図があった。人々にとって、まさに希望だったのだと思います」

「この時代に輝く星々とは全てのウマ娘であり、人々だったわけですね。そして、その中で最も光り輝いていたのが光明皇后や行基上人という一等星でした。まさしく、光り輝くウマ娘達。今日は彼女達の遺した思いに触れながらお別れいたします。セントさん、本日はありがとうございます」

「ありがとうございます」

光明皇后が寄進した思い出の品々が保管される東大寺正倉院。この中に、光明皇后直筆の「楽毅論」の模写があります。これは中国において帝王学と王道を説いたものですが、光明皇后の字は非常に力強く断固とした意志を感じさせる筆跡をしています。特に力が入っていたのが、末尾にある「王となりたければ、王道を征け。そうでなければ自分の生き方を断固として押し通せ」という文。民のため、国のために不退転の覚悟で尽力した彼女は、最後までその生き方を変えることなく人々に慈悲を示し続けました。

聖武天皇が建立した大仏は、戦火により二度の消失を迎えます。しかし、その度に日

本中から寄付が寄せられて再建されました。奈良の大仏は、今も人々の希望の象徴として存在しています。

終

制作 日本ウマ娘放送協会府中支部

「逆境を覆し、返り咲いてこそ『女帝』を名乗れるというもの。貴様もそう思うだろう？　なあ、道鏡」

ウマ娘の女帝たる彼女に何があつたのか。

幾多の野望もつれた大混戦の末に散つた狂臣、蘇我イルカ。  
その子孫が、再び日本を支配する。

昏き瞳は宿命か——

彼女の名は、孝謙天皇。

第5回「女帝と道鏡 怪僧と呼ばれた男の真実」  
ご期待ください。

## 第5回 「女帝と道鏡 怪僧と呼ばれた男の真実」 上

聖武天皇の跡を継いだ女帝、孝謙天皇。

遅咲きながらも大仏開眼供養記念にて母、光明皇后を降し日本一のウマ娘を名乗るに相応しい抜きん出て並ぶもの無しといった勢いを誇りました。

臣下に従兄妹の藤原仲麻呂をはじめ、橘諸兄や吉備真備といった長らく聖武天皇の治世を支えてきた功臣がいたこともあり、彼女の治世は順調な駆け出しを見せようとしています。父が整えた絶好の良バ場。誰しもが今までの女帝と同じく歴史に残る賢帝となるのを期待して止みません。まさか、芝がダートと化すなど誰も思いもせず。

日本ウマ娘放送協会特別企画

ウマ娘と辿る日本の歴史

第5回 『女帝と道鏡 怪僧と呼ばれた男の真実』

「こんばんは、今宵のウマ娘と辿る日本の歴史。主役は日本史上唯一ウマ娘の天皇となった女帝、孝謙天皇であります。最初期の彼女の治世では、藤原仲麻呂や橘諸兄、吉

備真備といった日本の俊英が集まっていました。彼等は既に長い政務の経験を積んでいましたからこれからの治世は安定する。誰もが、希望を持っていたのです」

しかし、孝謙天皇の即位以前から火種は存在していました。橘諸兄の息子、奈良麻呂は藤原氏がこれ以上に力を持つことを良しとせず他の皇族を立てようとしたのです。

候補となつたのは黄文王<sup>きぶみわう</sup>。長屋王の息子です。彼は聖武天皇の治世下で従四位上各省の長官・次官くらいの位階。正直、微妙な立場。を任ぜられて以降全く出世できず燻っていました。そこに次代の天皇となる誘いが来たのですから当然これに乗ります。

ところが、皇族達からはある程度の支持を得たものの貴族や役人、ウマ娘は「女帝で良くない？ むしろウマ娘の女帝とか見たくない？」と奈良麻呂を支持せず、父の諸兄でさえも「余計なことするなや」と冷たい反応でした。

結局、749年に聖武天皇が突如スキンヘッドとなつて出家し慌てて孝謙天皇が即位。つつがなく女帝となつたのです。

755年、橘諸兄の館で開かれた宴会において酔つた諸兄はつい失言をしてしまいました。

「ここだけの話、上皇の剃髪は似合つてないと思う」

これを諸兄の家令が不敬発言として上皇に報告。上皇は涙目になりながらも、

「べ、別に気にしてないし。アスカが似合ってるって言ってくれたら何と言われても知らんし。私は聞かなかったことにするね。はい、この話は終わり。気にしてなんか無いんだからね！」

と、不問としました。一方で、病床の父に追い打ちをかけたかのような諸兄の行いに孝謙天皇は怒り、真相究明のため宴席に参加していた佐伯美濃麻呂を呼び出します。美濃麻呂は参加してはいたものの諸兄のボヤキを一々覚えてはいるはずもなく「知らんがな」と答え、ムキになった孝謙天皇が他の参加者も喚問しようとしたところで光明皇太后が「おやめなさい、みつともない。ところで、陛下のあの頭は絶対に似合っています。異論は認めませんわ」と孝謙天皇を宥めて事態を収めました。

しかし、酔いが醒めた諸兄は一連の話を聞くと顔面蒼白となり、  
「俺は駄目なお兄ちゃんだ。もう駄目だ、おしまいだあ」

と大臣を辞して自ら謹慎し、さらに仲直りする前に聖武上皇が崩御すると魂が抜けたようになってしまい757年1月に74歳で薨去しました。

これを拙いと思ったのが奈良麻呂。藤原氏以外で唯一権力を握っていた父の死により橘家が力を失うのは目に見えています。更に、先の皇位継承のいざこざで彼自身孝謙天皇や藤原氏との関係が悪く出世も望めません。

この頃から再び奈良麻呂の暗躍が始まります。

一方、女帝は全く関係のないところで危機に陥っていました。

「待て道祖王、ふなとおうなぜ服を脱いでいる」

「脱ぎたいからだ」

「いや、確かに今日は暑い。だが仮にもウマ娘で帝である私の前でなぜ脱いだ」

「気持ちが良いからだ」

「……（啞然）」

「ところで、俺の道祖神道祖神には様々な形があり、その中にはどう見てもご立派様も存在する。を見てくれ。こいつをどう思う？」

「すぐく…小さいです。って、何見せとるんだゴラアアア！」

聖武天皇の遺勅により皇太子となった道祖王。彼は仕事こそ真面目ではありましたが私生活ではどうしようもない変態であったらしく孝謙天皇にウマっ気競バ用語で勃起を意味する。を出してしまい孝謙天皇の蹴りが炸裂。そのまま品行に問題ありとして僅か1年で廃太子となります。これ以降、元々男嫌いの兆候があった女帝はすっかり男性恐怖症となってしまったのです。

流石に次こそはまともな人を皇太子にしようと仲麻呂が推薦したのが日本書紀の編集で知られる舍人親王の息子である大炊王おおいおうでした。この大炊王、24歳となる今まで全く注目されていませんでしたが、穏やかで仲麻呂の意によく従っていたため急遽担ぎ出

したのです。仲麻呂との関係は義理の息子にあたり、仲麻呂の私邸に居候していました。つまりニートでは……。

奈良麻呂はこの行いに激怒します。急に出てきた。ぼつと出の皇族を推すならば今まで自分が推していた皇族は何なのかと不満が高まったのです。そして、仲麻呂の排斥を本格化させてゆきます。

奈良麻呂にとって、この時が最後のチャンスでした。聖武上皇の崩御で光明皇太后はすっかり政治から遠ざかり、孝謙天皇は道祖王のトラウマで混乱しています。仲麻呂を討つには今しかありません。そこで黄文王や道祖王など皇位継承権を持つ皇族を集めて反乱を計画します。ところが、この集まりに誘われなかった皇族が密告したことによりあつさり朝廷に露見してしまいます。

孝謙天皇と仲麻呂はひどく困惑しました。反乱の疑いのある者は全員親族と言ってよく、先帝や諸兄の喪が明けぬうちに何をしているのかと呆れ果てています。ともかくせつかく世の中も平穏となりつつあり、彼等は彼等で夫を恋しがって泣き暮らしている。光明皇太后にこれ以上心配をかけないためにも早期解決を求めます。

757年7月、孝謙天皇は今回のことを不問とする勅旨と同時に「貴様ら親戚なんだからある程度仲良くしろよ」という旨の宣告をしました。

これでひとまず落ち着くだろうと安心したその日の夜、都の警備をしていた中衛舎人



都を守る親衛隊の隊長格。上道斐太都かみつみちのひたつから奈良麻呂らに与する小野東人小野妹子の末裔。から「お前も反乱軍にならないか？」と誘われたと緊急報告が上げられ、堪忍袋の緒が切れた仲麻呂は孝謙天皇の許可を得ると中衛府の兵を動かし関係者を次々と捕縛しました。

獄に入れられた容疑者達に対し、仲麻呂の兄である右大臣の藤原豊成が尋問しました。が親戚ゆえの甘さからか自白を得られませんでした。ことを荒立てずに収めようとしたその日のうちに反故にされたことで精神的に余裕のない孝謙天皇は隣に信頼する仲麻呂を立たせながら「反乱なんか信じない。もうこの話は終わりだ、解散！」と涙目で宣言しますが、良い意味で空気の読めない男が一人――

「待つてくれ陛下。そいつらの尋問、ちよいと私に任せてくれないか？」

「永手ながて、不敬であるぞ」

「仲麻呂オ、本当は分かっているだろ。あいつらは黒だ。生かしておいてもろくなことにはならない。まあ、私は豊成の兄貴みたいに優しくはないから、奴らがどうなっても構わないからな」

仲麻呂は正直嫌でしたが、真相究明をして禍根を断つというのは尤もであると考え兄弟の藤原永手に尋問を任せました。

結果、何をどうしたのかは全く不明ですが全員が反乱を計画していたと自白したので

す。

孝謙天皇の御前で行われた尋問で天皇は奈良麻呂に何故反乱を起こそうとしたのかと問うと、奈良麻呂は「東大寺の大仏なんか作って何になる。あれのせいで国は乱れ民は苦しんでいるから私が政治を正すのだ」と吠えましたが周りは呆れ果てて絶句しました。

「貴様…仮にも貴人でありながら大仏建立の意義が分からないのか？」

酷く頭痛がしてやる気が下がったと言いたげな表情を浮かべながら孝謙天皇が問うと、奈良麻呂は「あれになんの意義がある」と言つてふんぞり返るばかり。遂に孝謙天皇はこんなパカは知らんとばかりに玉座を立ててふて寝し、仲麻呂はあまりの愚かさに呆れてものが言えませんでした。

「お前さあ、大仏建立には民の希望でありお前の父親も関わったんだぞ。それをお前がなんのつもりで糾弾してるんだよ。しかも反乱の理由になりもしない。まるで意味が分からんぞ？」

永手のひたすら侮蔑の籠もった言葉に奈良麻呂は何も答えられませんでした。永手の言葉と態度は、その場にいた者達全員の総意でもありました。

全ての取り調べが終わると孝謙天皇は今まで抑えていた怒りを遂に爆発させ、苛烈な裁きを下しました。内容は以下のとおりです。

橘奈良麻呂：杖により撲殺。

黄文王：改名の上で撲殺。

道祖王：改名の上で撲殺。

安宿王：佐渡へ流罪。

大伴古麻呂：撲殺。

佐伯全成：自害。

小野東人：撲殺。

撲殺というのは公には牢獄に閉じ込めていたとしていますが、実際には獄中で杖によつて撲殺処刑されたことを意味します。

改名というのは特に孝謙天皇が腹を立てた者に対して改名を強要したものです。例えば、

「黄文王、貴様は余りにも愚かすぎるから名前を久奈多夫礼くなたぶれどうしようもない愚か者の意。としろ」

「道祖王：貴様は二度と見たくなかつたぞ。貴様のような男には勃起ビルサドスキ帝の名を――何だ仲麻呂？ むう、確かにはしたくない上に帝の字は拙いか。では意味がわからんという意味で麻度比まどひの名に変えろ。そして二度と、金輪際私の前に出るな。次は絶対に蹴り殺す。絶対にその粗末なモノを粉碎する、良いな？」

「お前は……ええと……（いや、誰だこいつ）。仲麻呂、此奴は？ 賀茂角足？ かものつた そうか……（ま  
ずい、本当に誰だこいつ。思い出せん）。お、お前は……そうだな（よくわからんが、何か  
トクそうな顔しているな）、乃呂志と名乗れ。うむ、分かったら獄に戻って良いぞ（結局  
此奴は誰だったのだ？）」

と、微妙な子供じみた悪口レベルの珍名を付けまくりました。隣の仲麻呂にとつては  
絶対に笑つてはいけない大臣24時状態であり非常に腹筋が鍛えられたでしょう。

ともかく、多くの者が処罰される政変となり、藤原氏とその関係者が一挙に躍進する  
こととなりました。ただし、いまいち仕事ができなかつた藤原豊成はこのときついでに左  
遷されてしまいます。

この政変を橘奈良麻呂の乱と呼びます。

「今夜の解説は先週に引き続きセントチャンです。セントチャンさんー」

「セントで良いよ」

「では、セントさん。今回の反乱は未然に防げたのは良かったですけど……前回の藤原  
広嗣レベルのパカだと私は感じましたが、どうでしょうか」

「うん、おパカだね。頭に芝でも生えてるのかつてレベルだね」

「ありがとうございます。一方、本件に光明皇太后は本当に全く関わらなかつたのです

か？ 皇室と実家の一大事なのに」

「……この時彼女がナニしてたのか記録があるんだけど、知りたい？」

「知りたいです」

「本当に？」

「はい」

「旦那の服着てトリップしてました」

「……………はい？」

「ですから、亡くなった旦那の残り香をくんくんとー元ネタ：マリア・テレジア。最期に亡き旦那のガウンを着てトリップしながら亡くなったとか。なお初恋相手（旦那）を相手の国を滅ぼしてでも手に入れた猛者。この湿度、絶対ウマ娘だろこの人。」

「いや、もう結構です。訊いた私がパカでした。今のところはカットしましょうウマ娘のディレクターが面白かったのでノーカットです。さて、奈良麻呂の乱を防いだ孝明天皇でしたが、元々中継ぎとしての存在であり、母の光明皇太后が病に倒れたことで看病に専念するため讓位を決意します。しかし、それが後に間違いであったと思ひ知るのです」

758年、病に倒れた光明皇太后実際には病ではなく夫を失ったことで衰弱していっ

たと思われる。の看護にあたるため孝謙天皇は皇太子の大炊王に譲位。淳仁天皇が即位します。

淳仁天皇を擁立した仲麻呂は独自の政治を行うようになります。彼は人々が成人する年齢を繰上げることにより租税が発生するのを遅らせ、雑徭の半減、問民苦使や平準署の創設など困窮する人々を救うための徳治政策を進めます。また、唐勳肩だつたため官名を唐風に改称させる唐風政策を推進します唐風の官名だと、太政大臣Ⅱ相国、大納言Ⅱ丞相、中納言Ⅱ黄門などになります。そして仲麻呂自身は右大臣に出世しました。さらに、仲麻呂の一家は姓に恵美の二字を付け加えられるとともに、仲麻呂は押勝の名を賜与されます。

「仲麻呂、お前に新しく名前をやろう」

「はい、ありがとうございます（うわっ、絶対微妙な名前だよ）」

「私はどれだけ不機嫌でもお前の顔を見ると笑顔になってしまふから、えみに字を当てて恵美。そしてどんな意見も最終的には私が根負けしてしまうので押勝。合わせて恵美押勝と名乗るのだ。ムフー、これは良い名だろう?」

「いやクソダセエな（ありがたく名乗らせて頂きます）」

「え?」

「ーあ」

「……………グスン」

「つ、謹んで名乗らせて頂きまー」

「仲麻呂のパカ！ もう知らん！」

思わず本音が出た仲麻呂。これ以降、二人の関係はギクシヤクしてしまふのです。

実はこの直前から二人が不仲となる兆候がありました。孝謙天皇は遅咲きのウマ娘であり、大仏開眼供養記念の時点で既に全盛期をとうに過ぎています。娘に敗北するまで無敵を誇り、強すぎて退屈とまで言われた光明皇后は逃げ先行主体で危うげのない競技をしていましたが、孝謙天皇は体力面の不安から最後の直線まで脚をためて差し切る競技を行い、毎回接戦での勝利でした。辛うじて敗北はないものの当人としても気力体力共に限界を感じていました。

そんなある日の鍛錬中の出来事です。

「陛下、まだ本日目の目標を終えていません。休むには早いですよ」

「仲麻呂、今日はどうも体調が優れなくてな。私も色々忙しくて休めておらんし、今日の鍛錬はここまでにしよう」

「何をおっしゃいます。陛下には競技においても女帝でいたもらわねばならぬのです。

さあ、走り込み100本行きますよ」

「む、無理いゝ、できるわけなからうそんな本数！」

「諦めんなよ…」

「あ？」

「諦めんなよ陛下、どうしてそこでやめるんだそこで！もうすこし頑張ってみろよ。ダメダメダメ諦めたら、周りのことだつて思えよ、応援してる人の事思つてみるつて、あともうちよつとの所なんだから、私だつてこのクソ忙しいとこユメヲカケルつて頑張つてんだよ絶対やつてみる、そしたら必ず目標達成出来る！」

「いや、仲麻呂、何か暑苦しいぞ」

「言い訳してるんじゃないですか？出来ない事、無理だつて、諦めてるんじゃないですか？駄目だ駄目だ！諦めちゃ駄目だ！出来る！出来る！絶対に出来るんだから！」

「あ、ハイ」

結局追加の走り込みまでさせられた孝謙天皇のやる気は急激に下がり、競技からの引退を検討しはじめたのです。

すれ違う事の増えた二人。そして事態はさらなる悪化を遂げていきます。

同年、大陸では安史の乱が発生首謀者の安祿山はかつて楊貴妃（ウマ娘）にバブみを感じてオギャリ、公開赤ちゃんプレイをするやばい人。唐の弱体化を好機と見た仲麻呂は半島で長年に渡り苦境に立たされているウマ娘の解放と百濟復興を名目に新羅征伐を計画します。これは軍船394隻、兵士4万700人を動員する本格的なものにな



る筈でしたが、そこに待ったをかけたのが孝謙上皇です。

彼女からすれば大疫病から始まった飢饉と急激の人口減少からまだ20年。確かに国政は安定し人口も増えて来ましたが、外国に攻め入る余力があるとはとても思えませんでした。加えて、あの大疫病は新羅からもたらされたのだと上皇をはじめ多くの人々は固く信じており、近年の関係悪化もあり半島に関わるろくなことは無いと考え、できれば大陸の情勢にも触れられなかつたのです。

結局、上皇をはじめ貴族や民衆の理解を得られず計画倒れに終わりました。しかし、この一件で孝謙上皇は仲麻呂の政治家としての能力を疑問視するようになったのであります。

760年、光明皇太后薨去。さらには武部卿軍政を司る行政機関の長。現代で言えば防衛大臣。であった弟の乙麻呂も失います。さらには2年後に尚侍女官たちを取りまとめる行政機関の長官。妻の藤原袁比良、腹心だった参議の紀飯麻呂と中納言石川年足を失うという呪われているかのように訃報が連続し、仲麻呂の政治基盤は大打撃を受けるのです。

慌てて仲麻呂は自らの子や娘婿などと言った親族を政権に加えますが、この人事が仲麻呂に反対する人々にとつて格好の批判材料となり逆に仲麻呂の力をそぐこととなりました。

761年、淳仁天皇は平城京の宮殿改築のため孝謙上皇を伴い近江国の保良宮へ移ります。この時、心労と慣れない土地での暮らしに体力を奪われたのか孝謙上皇は病に倒れます。病といってもおそらくは風疹程度で、大事を取れば問題のないものです。ところがここで思わぬ事態が発生していました。天皇や皇族の主治医である内薬司の侍医がこの時一人だけ同行していたのですが、この侍医は人に対する医療行為が専門でありウマ娘は範疇外だったのです。慌てて平城京からウマ娘の医療知識を持つ先代の侍医が召喚されますが、その間誰かが看病をしなければなりません。

責任者不在の中で誰が上皇の看病をするのか揉める中、一人の老僧が手を上げたのです。

「ほんなら拙僧が看病しますよ。ここでぐだぐだしとつてもしやあないやないか」

老僧はそう言うや否や自らが厨房に入り粥をこしらえ、湯と清潔な布を持って上皇の寝所へと入っていったのです。

「失礼するよ」

「失礼するなら出ていけ」

「ほなさいなら……つてあかん、いくら拙僧が河内国現在の大阪府。出身でも洒落にならんわ。ていうかなんや、上皇陛下も案外元氣そうやないか」

「やけになれなれないな。病と言つても少し熱が出ただけで大したことはない。このく

「らい、すぐに治る」

「そない言うても病に大きいも小さいもありまへんがな。小事が大事になることなんて世の中まあるんやからここは粥でも食うて安静にしとき」

「いや貴様は私の母親か。まったく大げさだが、確かに病を侮るのは良くないな。この粥は有り難くいただくから貴様はもう下がって——」

膳にある土鍋の蓋を開けた瞬間、孝謙上皇の声が止まります。信じられないものを見たと言わんばかりの表情のまま自ら椀に粥をよそうと一口だけ口にしました。

「あら、もしかして口に合わなかった？ 確かに下々が食うもんかもしれんけど栄養はあるし美味しいと拙僧は思てつくったんやけど」

「いや、美味だ。本当に美味だ。すまない、少しだけ一人にしてくれ」

「んー、分かりました（知らんけど）。食べ終わったらまた言うてください。ほな、また」  
部屋に一人になった孝謙上皇。一口、また一口と粥を口にします。

不意に頬を涙が伝い、彼女は震える唇からどうしようもない想いを吐露しました。

「……母さん」

二度と知ることの無い筈だった母の味。それも、悲田院で振る舞われた正真正銘の手料理。まだ幼い頃、身分も様々な人々の中でみんなと椀をかきこんだ思い出。どんな美食も、どんな珍味も、あの日の粥より美味しいものではありません。それを、思いもし

ない場所でまた味わう事ができたのです。

少しして、用意されていた布と湯で顔や身体を拭い、元女帝としての身支度を整えた彼女は老僧を呼びました。

「馳走になった。ところで貴様、この粥をどこでおぼえた？」

「ああ、この粥ですか？ あれは拙僧がまだ若かりし頃。その時は奈良の都では酷い飢饉が多く、都にはその日の飯も食えん人らが多かつたんですわ。それを見かねた光明皇后、あんどきはまだ藤原アスカ姫やつたな。あのお方が悲田院を作った。拙僧はそのとき悲田院のおかれた興福寺で修行をする小僧でして、そこに紫がかつた髪の毛のウマ娘がな、暇なら手伝え言うんで手伝つたんです。何やかんだ話したら、同い年と言うことでそこから仲良うなつて、他の人には教えていない本当の粥の作り方を教わつたんですわ。そのあとすぐに他の寺に移つて修行することになつてもうて、そのウマ娘とはそれつきりですわ」

「そうだったのか。ところで貴様、先帝夫妻。つまり私の父母と会つたことはあるか？」

「はは、いやはや恥ずかしながら拙僧、ここ最近までいろいろな場所を禪師として回つておりまして光明皇后の御尊顔は終ぞ拝見しておらんです。いやー、行基師匠と伊勢の辺りで少しだけ行動を共にした時期に沙弥勝満を名乗る当時のみかd——いえ、さる高貴なお方を見た事はありましたが、その後は下野や陸奥やらへ行き、戻つた頃には両陸

下はお隠れ古語では死を直接表現せずに「隠れる」などの言葉で表現する。あそばされた後でしたから。実のところ、拙僧宮中では新参者なんですわ」

「ふふ、そうか。紫の髪をしたウマ娘か。貴様、さては今年で齢は61だな」

「そうですが、何で拙僧の齢がお分かりに？」

「さて、何でだろうな。ところで貴様、名は何というのだ？」

「拙僧の名でございますか。名乗るほどのものではございませぬ」

「そういうのいいから名乗れ」

「では、謹んで。拙僧、俗世では弓削氏の末裔。仏門では義淵・良弁から梵語と走禪を学び、行基菩薩から競技の指導について才無しと太鼓判を押されつつもウマ娘を気遣う性根だけは認められた者。名を——」

——道鏡。

701年、河内国生まれ。この時、61歳。

これといった出世もせず、単に誰も責任を取りたがらず孝謙上皇の看病がおろそかになつてのを見かねた老僧が、後に日本三大悪人。皇統篡奪を目論んだ怪僧と呼ばれるようになる、誰が予想しえたでしょうか。おそらく、それは本人でさえも思わなかったのではないのでしょうか。

## 第5回 「女帝と道鏡 怪僧と呼ばれた男の眞実」 中

孝謙上皇の病はすぐに平癒しましたが、看病以来上皇は道鏡を傍に置くようになりました。当初は単なる話し相手でしたが、次第に道鏡は心の抛り所となり上皇は彼を寵愛するようになっていきます。

この道鏡、指導人としては全くの無才でありましたが、一方で真心を込めてウマ娘の世話をすることで知られておりました。その腕前はどのような暴れウマであろうと彼の前では穏やかとなり、孝謙上皇も道鏡の真心に絆されてしまったのです。あるいは、全くの同年齢であつた父母の面影を見たのかもしれない。

この状況に危機感と妬心を抱いたのが仲麻呂です。彼は今は関係が悪化しているものの長年従妹を支えてきた自負がありました。それがどこのウマ娘の骨戦国策にある故事。「隗より始めよ」で知られる郭隗がどうすれば人材が集まるのか問う国王に「名バの骨さえ大切にする国ならおのずと人は集まります」と答えたことから転じて大切にされる価値の無い、出自卑しき者を指す。とも知れぬ人物に上皇の寵が移つたことは我慢なりませんでした。

仲麻呂は淳仁天皇を通して道鏡を遠ざけるよう進言します。彼としては最大限に気

を遣い、天皇から諫めるといふ形で体裁を整えたものになるはずでした。

だがそれが逆に孝謙上皇の逆鱗に触れたのです。

「貴様、私が色ボケしたとでも言うのか。そんなウマ娘に私が見えるのか。違う違う違う違う、私は限りなく清らかなウマ娘だ」

「いえ、しかしながら先帝として卑しか者を傍に置くのを控えてもらいたく——」

「誰を傍に置くのかどうか、いちいち貴様が決めるのか？　そもそも、卑しいなどとよく言えたものだ。傍系の貴様が帝位にあるのは私の寛容さあつてのこと。勘違いするな、貴様などいつでも帝位から外し、誰よりも身分卑しき者にできるのだ。分かったら、二度と、私を煩わせるな」

「御労しや。そこまであの坊主にたらしこまれましたか」

「誰が色に狂うものか！　私の五体は元正天皇が如く清らかなり前回登場した第44代天皇。公式で美人。やたら甥の聖武天皇を我が子認定する詔を出した母を名乗る帝。18歳で即位して以来生涯独身だった。彼女を引き合いに出した孝謙上皇も、つまり、そういうことである。そもそもまだつちする奴なんか大嫌いだ！　だいたい勃起帝が悪い。」

激怒した孝謙上皇は淳仁天皇を痛罵した上で廃位をほのめかしました。

実際、仲麻呂の傀儡であった淳仁天皇は貴族や民衆から人気があつたわけではなく、

傍系ということもあり立場は脆弱でした。一方で絶大な人気を誇った聖武天皇夫妻の子である孝謙上皇には今なお根強い人気があり、彼女が復位を望めば容易に叶う程でした。

この上皇の変わりように仲麻呂は道鏡への憎しみを強め、「かゝ、卑しか坊主ばい」と意味不明な言葉で罵る奇行を見せたと伝わります。

とはいえ、道鏡との仲を邪推されるのを嫌った孝謙上皇は792年5月に宮殿の改築が終わり天皇が平城京に戻ったにも関わらず、母である光明皇后が開基した男子禁制の国分尼寺である法華寺を居所とします。これが都の人々には上皇と天皇の關係悪化が表面化したと捉えられました。

翌月、孝謙上皇は仲麻呂を除く五位以上の官人を呼び出して「帝の不孝は目に余るから二度と顔もみたくない。また、政務を執るにも頼りなさすぎるため国家の重大事は私が決める。皆もそのつもりで」と宣言。実質的に政権が分裂してしまつたのです。なお、都の人々の反応はと言うと貴族たちは概ね中立であり事態を静観する構えを見せ、ウマ娘を中心とする民衆は孝謙上皇を支持し、淳仁天皇は自らの立場の弱さを見せつけられることとなりました。

763年に孝謙上皇は道鏡を少僧都に昇格させます。これは奈良時代の僧侶の階級で上から6番目。ちょうど中間に位置するものです役目としては上役の補佐と言う名



のこき使われポジション。完全に世知辛い中間管理職の悲哀漂う地位である。この人事に既に老齢の道鏡は「この齢で中間管理職とは、陛下は拙僧に過労で死ぬと申すか!」と抗議しましたが、孝謙上皇はげらげら笑いながらも「貴様ならできる。諦めるなよ」とどこかで聞いた気がする愛ある激励バツグンを以て人事を通しました。

翌年、孝謙上皇の派閥であった吉備真備が大宰府から呼び戻され安史の乱への警戒という名目で仲麻呂により左遷されていた。再び中央に返り咲きます。もともと、本人は学者肌ながらも大宰府での軍政が決して嫌いでは無く、むしろ大陸で多くの軍事学を学んだ彼は国内で最も恐るべき軍略家としての才能を開花させていたのです。とはいえ、聖武天皇から最後の良心他のイカれたメンバーは兄を名乗る不審者、薬をキメるマッド坊主など。と呼ばれ信頼された彼も御年70。いい加減に楽隠居したいと辞表を都に奏上したのですが、裁可が下る前に都に呼び戻すことで辞表を握りつぶしたのです。このことを知った真備は癖のある白髪を掻きながらも「やれやれ、私が活躍するような事態が無ければいいけれど」と呟きました。

徐々に暗闘が広がる孝謙上皇の派閥と淳仁天皇の派閥。その決定的な決裂の時はすぐそこまで迫っていたのです。

「何か、イメージと違いますね道鏡」

「この時期の道鏡は今までパツとしなかつた老僧が人の良さでいきなり拔擢された状況なので立場に困惑しています。今後も基本的に彼は困惑し続けて、状況に流されてゆくのです」

「道鏡といえば、性欲を持って余す色魔で、ウマツ気も第三の脚と言われるほどのモノを持ち、孝謙上皇とうまびよいしたともいわれませんがそれはー」

「ただの貶めるための悪評ですね。それもおそらく始皇帝の母と関係を持ち篡奪を企んだ??のものを流用したものです。同じ悪評を聖武天皇に仕えたマツド坊主こと玄昉が同様に流されているのでこの頃の悪評テンプレートだったのでしょう」

「良心真備はいつの間にか太宰府に飛ばされていましたね。70とは、歳を取りましたね真備」

「何で真備に感情移入してるのかは知りませんが、彼は一応橘家の閥だったので仲麻呂の力が強まると左遷されています。と言っても当時の孝謙天皇は真備を大変信頼していたので表向きには大陸への警戒として彼に相応の位階を与えた上で仲麻呂が追い出した形です。が、10年ほど太宰府の長となった真備が見事に軍政改革をして九州の安定化と防衛力の向上を果たしました。どんな立場でも役割を果たす彼は朝廷にとって最大の忠臣であり、孝謙天皇も彼が引退を考えはじめたと知り慌てて地位を上げて辞表をなかつたことにしたのです」

「そして、その判断がまさかの展開を生むわけですね。それでは暗闘が続く平城京に、ついにその時がやってきたのです」

孝謙上皇が自らの閥を作り政治への影響力を強めたことに関係修復を絶望視した仲麻呂はついに強硬策を打ち出します。

764年9月、奈良時代の朝廷は諸国から毎年20名の若者を上京させ軍事訓練を行うのが通例でした。しかし、この年は一つの地域から600人を招集することを勅旨を取りまとめて奏上する役割である高丘比良麻呂たかおかのひらまろに命じます。また、淳仁天皇の弟である船王と共謀し皇族内での根回りも行います。ついに仲麻呂は武力をもって政敵を葬ることを決意したのでした。

計画は次のとおりです。まず各地から何も知らない若者たちを即席の大兵力として用い、淳仁天皇の勅命を受けた皇軍に仕立てるのです。そのために必要な太政官印を事前に確保し、自らの手で勅命を発行可能な体制を整えました。そして、吉備真備や道鏡ら政敵を殺害した後、孝謙上皇からは完全に権力を奪い幽閉する。その根回しのために皇族たちを味方に引き込んだのです。

ところが、二度あることは三度あるのか。計画が漏れるのは広嗣・奈良麻呂と続きもはやお約束。やはり今回もあっさり漏れてしまいます。しかも計画の初歩中の初歩。

何と最初に協力を命じた高丘比了麻呂が即座に孝謙上皇に報告したのです。更には自らが計画成就を占わせたお抱えの陰陽師そもそも、陰陽道は真備が創設者の一人であり、陰陽師は真備の弟子も同然でした。皇族も我先にと密告。仲麻呂の人望の無さなか、あつという間に明るみに出てしまいました。

9月11日。仲麻呂の反乱を知った孝謙上皇は太政大臣まで務め、今上帝を操る仲麻呂がいきなり思い切った行動はしないだろうと思つていたため半ば呆然としたまま現実を受け止めきれませんでした。その中で、ズレた冠を気にせず被る老人がひどく不本意そうに発言を求めました。

「残念ですが起きてしまったことは仕方ありません。陛下、まずは敵に太政官印があるのがこちらに不利なので、より決定力のある玉璽と馱鈴を帝から取り返しましょう。既に我々に味方する山村王が確保に動いてくれます。当然、敵もこれを取り戻そうと躍起になります。そこで、私に策があります」

今まで学者上がりの文官としての真備しか知らなかった孝謙上皇をはじめとする朝廷の面々は立て板に水の如く軍略を披露する真備の語り口にすっかり吞まれていました。

「この玉璽と馱鈴を二つの意味で陽動にします。一つは、これを取り返す部隊はそれなりの地位のある敵将が少数精鋭を率いてくるでしょう。我々は彼らに一度玉璽と

駅鈴を奪わせます。すると、敵は目的を果たして必ず油断するのでそこを待ち伏せした部隊と、引き返した山村王の兵で挟撃して殲滅、再び玉璽と駅鈴を確保します。同時に、この動きに敵の目が奪われている間に我々は軍勢を集め、数的有利を確保する。それが私の策です」

「なるほどー」

もつともらしく道鏡が大声で納得の声を出した。一介の僧である彼に軍略がわかるはずもないが、彼は真備が与えられた役目を必ず果たす男だと短い付き合いながらも信頼していました同じ孝謙上皇にこき使われる苦勞人の老人として意気投合したのだらう。

道鏡の声に反応して、貴族達も一人また一人と真備の策に賛同します。

一方、いまだ状況を受け止めきれぬ孝謙上皇は真備に、なぜ仲麻呂は反乱を起こしたのか問います。真備は白髪頭を一掻きすると拝して答えました。

「畏れながら陛下。蘇我と物部との争いのように世の中の戦争の九割は後世の我々からすれば愚かと思える理由で起こるのです。そして、残り一割は広嗣然り、奈良麻呂然り、当時の者達ですら愚かだと思ふ理由で起きます。此度の仲麻呂めは、一割の方でありましょう」

この答えにようやく孝謙上皇は覚悟を決め、真備に緊急で従三位・参議に叙任し、さ

らには中衛大将として指揮権を委ねたのです。

「やれやれ、この歳になつて大將軍とは私も運がない。とはいえ陛下から祿をもらう身分。給料分くらいは働くとしますか」

真備の策は見事に的中し、山村王の持ち出した玉璽と馱鈴を狙つて仲麻呂は自らの息子である藤原訓儒麻呂を追手に差し向けます。山村王は計略通り僅かな抵抗の後に玉璽と馱鈴を奪わせ、這々の体で逃げ出したと見せかけました。追手側はまんまとこれに引つ掛かり、帰路で真備の命を受けた坂上苅田麻呂後の征夷大將軍である坂上田村麿の父。に待ち伏せされ、大混乱に陥つたところを折り返した山村王の兵に挟撃されます。

訓儒麻呂は苅田麻呂に狙撃され戦死。

ここで苅田麻呂は現場の判断で敵方が戦力を逐次投入するかもしれないと見抜き、再び山村王をあえてゆつくりと進ませます。すると、再び仲麻呂の命を受けた手勢が攻めてきたので待ち受けて撃滅。玉璽と馱鈴は計略通り孝謙上皇の手に渡り完勝を治めます。

孝謙上皇は勅を発して、仲麻呂一族の官位を奪い、藤原の氏姓の剥奪と全財産の没収を宣言します。同時に仲麻呂の傀儡であつた淳仁天皇を幽閉し仲麻呂が万が一にも正当性を得ることを阻止したのです。

敗色濃厚と悟つた仲麻呂は一族を率いて平城京を脱出し、長年国司を務めて彼の地盤

となつていた近江国での再起を目論見ます。

仲麻呂の脱出を許したことに孝謙上皇陣営はにわかには色めき立ちますが、真備が相変わらずの不本意そうな顔で近畿の地図を見ているのを見て落ち着きを取り戻します。孝謙上皇はもはやおそろおそろといった風に真備に問いました。

「ま、マキビイ。もしかしてもう策を打っているのか？」

「不本意ながら。敵が巻き返しを計るには当然兵を集うことから始まります。仲麻呂の場合、それは自らの治めた近江であるのは分かりきったことです。ですから先んじて準備はしました。合言葉は『美容と健康のために食後に茶を一杯』。これが伝わり次第、近江に至る橋を焼くよう命じました。おお、やだやだ。何が悲しくて税で掛けた橋を税で焼かねばならないのですか。全く持って不本意極まりない」

文官らしくぶつぶつと文句を言う真備に一同は苦笑せざるをえませんでした。同時に真備の用意周到さに心胆が冷える思いでした。

この働きを孝謙上皇は「マキビイは恐ろしい。まるで魔術を使つたように敵の動きを全て読み先んじて潰す。もはや我らに負けはない。女帝と僧侶と魔術師、そして勇敢なる兵士が揃えば天魔さえも調伏できよう」と心から恐れると同時にその軍略を讃えました。

ともかく、仲麻呂の行動を予測した真備の策により官軍を先回りさせて橋を焼き、関

所を設けて近江への進路を塞ぐことに成功します。仲麻呂は子息の辛加知が治める越前国に入り再起を図るべく、琵琶湖を縦断し越前へ北上することを企てます。また、奪取した太政官印を使って太政官符を発給し、偽の勅命を乱発し味方を募りました。しかし、それは既に真備の読みどおりでしかなく、孝謙上皇は仲麻呂を討ち取った者に厚い恩賞を約束するとともに、諸国には、太政官印のある文書を信用しないように国璽を押し印した勅命を以て通達します。太政官印と国璽では重みが雲泥の差であり、仲麻呂に味方する者は誰一人として名乗りを上げなかったのです。

「……さて、仕上げだ。果たして私はこの無益な戦で流れた血に対して、残された僅かな時間でそれに見合う何かを残せるだろうか」

真備の命を受けた官軍はまだ事変を知らぬ辛加知を斬ると、近江と越前の国境で仲麻呂軍の先発隊数十人を撃退します。辛加知の死をまだ知らない仲麻呂は、舟で琵琶湖対岸に渡り、越前への入国を試みますが逆風により断念。上陸した塩津から越前への突破を図る仲麻呂軍を再び真備の官軍が奇襲し仲麻呂の軍勢は行き場を失ってゆきます。

北上を断念した仲麻呂軍は近江の古城に立て籠もると、攻め立ててくる討伐軍に対し必死で応戦します。ここまでわずか2日間の出来事でした。

9月18日。真備率いる討伐軍によって海陸から激しく攻められた仲麻呂軍はついに崩壊。湖上に舟を出して逃れようとする仲麻呂は、一兵卒の石村石楯この時の功績に



より十六階昇進して従五位下になる大出世を遂げた。に斬られ、残る一族も皆殺しにされました。

栄華を極めた男の最期は、一兵卒に問答無用で斬殺され末期の言葉さえ遺せぬ惨めなものだったのです。

一週間前の時点では仲麻呂の軍権と支配力は上皇を圧倒していました。仮に彼が機を待っていれば直系の後継者のいない孝謙上皇は時と共に不利となり、高齢だった道鏡と真備もまもなく世を去っていたでしょう。たった一つの判断ミスが全てを瓦解させたのです。

この反乱を、藤原仲麻呂の乱。または恵美押勝の乱と後世では呼びます。

「良心真備、魔術師になる。この魔術師は必ず還ってきますね」

「何気に遣唐使として危険な航海を何度も経験し、帰路で屋久島で難破した際にはサバイバルして生き延びているので首から下も有能なんですよね」

「この人欠点とか無いんですかね」

「色々と凄すぎる人ですからね」

以下、吉備真備の伝説一覽。

・陰陽道を趣味感覚で学び奥義を会得。その技法を友人だった阿倍仲麻呂の子孫に伝

えて日本の陰陽師創設に寄与。なお、阿倍仲麻呂の子孫が安倍晴明。

・六韜三略を日本に持ち込んだ日本兵学の祖。

・日本最初の碁打ち弥生時代頃には伝わっていたため大陸でも勝負できるプロの碁打ちという意味だろう。

・あまりに有能すぎて皇帝玄宗が帰国させるのを拒否。

・マッド坊主玄昉を呪い殺した藤原広嗣の怨霊をワンパンで調伏。

・人外にもモテモテ。何と日本への帰国の際には九尾の狐が真備を慕って日本にやって来た。

「この人主役の和風ファンタジー作ったらエライことになりそうですね。やっているところが凄すぎて逆に何したのか分からないパターンでは」

「理解できる範囲の凄い人が一番評価されて、それを超えると逆に影薄くなるのが人の世の常ですから」

「さて、仲麻呂の乱を鎮圧した孝謙上皇。著しく政治が乱れた中で、再び彼女が立つときが来たのです」

乱を鎮圧した孝謙上皇は764年の10月に淳仁天皇に皇位の資格なしと判断して廃位を宣言します。淳仁天皇は親王の待遇で淡路島への配流が決められ、淡路廃帝と呼

ばれるようになり、ました。実は淳仁天皇という諡号は弘文天皇や仲恭天皇と同じく明治時代になって贈られたものです。それまでは正當天皇と認められてさえないませんでした。空いた皇位には孝謙上皇が出家の身のまま復位し、称徳天皇となります。

称徳天皇は今まで仲麻呂により左遷されていた者達を重用し、その中には先の奈良麻呂の乱でついとばかりに左遷されていた藤原豊成も存在し、右大臣として返り咲いたのです。

同時に道鏡は仲麻呂に変わる女帝の相棒として太政大臣・禪師の位を贈られ、真備もまた中納言に昇任しました。

3年前まで鳴かず飛ばずではありましたが、それなりに満足した生活をしてきた道鏡からすれば中間管理職だけでも精一杯だったのにいきなり太政大臣と禪師を合体させた即席の地位を贈られてしまい思わず「やめえや、拙僧こんな地位につく人間やあらへんやろ」と嫌がりますが、称徳天皇は「ははは、こやつ。まだ上を求めるとは欲しがりさんめ」と変な誤解を起こしたのか翌年には法王の地位を贈ります。意味が分からず呆然とする道鏡の肩を真備が優しく叩き、「気にしたら負けだよ。親子揃って訳わからぬいことを極稀にするから」と同情しました。

称徳天皇の掛かりは留まることを知らず、765年には48歳で競技の世界に電撃復帰。「何だか今なら行けそうな気がした」とは本人の談。

「いやね、結果はもうどうでも良いですわ。拙僧は指導者でも何でも無いただ陛下のお世話をするだけの年寄りですから。だから陛下、無理せず無事に帰ってきてや」

ひたすら拝み倒すようなに高齢での復帰を心配する道鏡。そんな彼に称徳天皇は微笑みかけます

「全く、貴様は変わらん。少しくらい偉ぶっても良からうに。まあ、無事に帰るのは当然だが――別に、一着を取ってしまっても構わないだろう？」

復帰戦は平城京で行われた春の儀式に伴う小さなもの。しかし、長年のブランクに加えて指導人不在の称徳天皇が勝つなど誰も思っていません。いわばゲスト走者の記念みたいなもの。競技場のウマ娘達でさえそう思っていました。そう、僅か数分後まで。

「悪いな、皆の衆。私は女帝として、負けるわけにはいかんだ」  
信じられぬものを見た。

観客も、競技者として走ったウマ娘達も同じ気持ちでした。残り僅かな直線で女帝が先頭にまで恐るべき追い上げをもって登り詰め、宣言通り一着でゴールしたのです。

幾度目か分からなくなるほどの衝撃にただただ呆然とする道鏡な駆け寄った称徳天皇はこの上ない笑顔でした。

「逆境を覆し、返り咲いてこそ『女帝』を名乗れるというもの。貴様もそう思うだろう？　なあ、道鏡」

「あかん、参ったわ。拙僧には敵いませんわあ、陛下」

道鏡は考えるのをやめた。

事実、ウマ娘に限らずアスリートにとつて精神面は結果に大きく作用します。道鏡との出合いは称徳天皇に今までなかつた安らぎを提供し、彼女の力を再び第一線で戦える領域にまで仕上げたのです。

ここでお話が終わっていれば、称徳天皇はウマ娘の女帝にして奇跡の復活を遂げた一流の競技者として名を残し、道鏡は天皇からの重すぎる親愛を贈られつつも彼女を支えた名僧で終えられたのかもしれない。

しかしながら、げに恐ろしきは人間の浅ましき。当人の知らないところで事態は変わっていったのであります。

## 第5回 「女帝と道鏡 怪僧と呼ばれた男の真実」下

道鏡が孝謙上皇の寵愛を得ることで今までと大きく変わったのは本人だけではありません。道鏡の生家である弓削氏もまた著しく地位を上げていきました。

特に道鏡の弟である弓削浄人は今まで無位無官の下級役人だったのが公卿となり、766年には中納言になるといふ異常な出世を遂げます。彼がこれに増長したのはいわば必然だったのかもしれませんが。

弓削氏の異常な出世は当然ながら他の貴族の反感を買います。中には暴走する称徳天皇を廃して皇族であり先の乱で勲功のある和氣王や淡路廃帝を復位させようとする動きもあり、廃帝は凡庸ながらも穏やかで猫好きとして知られ、その筋の方面からはそれなりに支持されていきました。和氣王は独身であり後継のいない称徳天皇の後釜を狙う野心を抑えきれず実際に謀反を計画し、もはや何度目になるのか分からないですが、いつもの通り露見すると捕らえられ、伊豆へと配流される途中で絞殺されました。同時に、和氣王の兄である淡路廃帝は謎の死を遂げました。どう考えても消されています。

即位以来、立て続く近い者の反乱でいよいよ人間不信に陥った称徳天皇はますます仏門と道鏡へ癒やしを求めます。称徳天皇は次々と各地の寺に行幸し、仏教重視の政策

を推し進めます。一方で続日本紀では、刑罰が厳しくささいなことで極刑が行われ、冤罪を産んだと評されているように、人間不信から恐怖政治が確立されつつありました。

769年5月には異母妹・不破内親王とその息子の氷上川継が天皇を呪詛したとして名前を改めさせられた上で配流されました。

「何だか名前をつけるのも久しぶりだな。不破内親王、貴様は義妹でありながら私を呪うとは許しがたい。以後は厨真人くりのまひとくりやひめ厨女台所のお手伝いさん。つまり家事手伝い。と名乗れ」

「川継、貴様は母とともに許しがたい罪を犯した。もはやその血は穢れているから志計志麻呂しけしまろしけしし穢れ。と名乗れ。この穢れた血め」

相変わらずのネーミングセンスに都の貴族は震え上がります。

同じく称徳天皇の異母妹・井上内親王を妻としていた中納言の白壁王（後の光仁天皇）は天皇の疑心暗鬼を警戒し、酒に溺れた振りをして難を逃れようとなりました。

「やれやれ、人間不信の独裁者ほど性質の悪いものはないね。後世、我々はどのように語り継がれているのやら」

「もはや悪人と呼ばれるのは避けられんやろな。なんでこんなことになってしもうたんや……」

「何でかな。お互い前世で何かやらかしたかもしれないね。そうでなければ君も私もこ

の歳まで働かされることはなかったろう。まさかまたしても辞表を握りつぶされるとは思わなかった。もう75になりそうなんだけど、私」

「あんたがいないと拙僧が本当に過労死するから辞めんといてなあ」

「死なば諸共とか思っていないかい？」

「一蓮托生って良い言葉ですわな」

「何が悲しくて年寄り二人が先帝と光明皇后ゆかりの言葉で関係性を表現せにやならんのだ。私の最後は曾孫の声を聞きながら本を読み、そのまま眠るように死ぬと決めているんだ。そのためにも絶対にも夢の年金生活を手にして見せる」

「……拙僧は分からんけど、あんたはたぶん悪人とは記録されんと思うわ。知らんけど」  
称徳天皇の暴走を辛うじて止めるのが道鏡と真備の役割でした。しかし、769年時点で道鏡は68歳、真備は74歳と二人はいつ倒れてもおかしくない高齢です。

そしてこの年、胃が壊れるのをひしひしと感じる道鏡にとつて、あまりにも致命的な事件が起こってしまうのです。

太宰府の長官となっていた道鏡の弟である浄人からとんでもない報せが届いたので

「道鏡を皇位につけるべしとの神託が下った」



世にいう、宇佐八幡宮神託事件であります。

「セントさん、思い返せば称徳天皇は身内から裏切られ続けてきた人生でありましたから、彼女が人間不信になったのは仕方のないことなのでしょうか」

「決定的だったのは仲麻呂の反乱でしょうね。今まで最も信頼してきた従兄に裏切られ、その後も立て続けに反乱や呪詛の噂が身内から出てきて称徳天皇の精神は極めて不安定になってしまいました。この時期の彼女とまともに会話できたのは心から信頼する道鏡と、父の代からの忠臣で飄々とした吉備真備、それと仕事は微妙ですが穏やかで敵を作らない従兄の藤原豊成くらいです。共通するのは称徳天皇からすれば彼らならば絶対に裏切らないという安心感と、どこか人を穏やかにさせる雰囲気を持つことです。しかし、それ以外の人間を称徳天皇はもはや信用できなくなり、この三人とウマ娘達以外には全く心を開かなくなっていました」

「そこに、後世に悪名高いあの事件が舞い込んでくるのですね」

その報せを聞いたとき、道鏡はひどく落ち着いていました。あるいは、来るべき日が来てしまったと悟ったのかもしれない。

「つまり、道鏡を皇位につけれ全ては治まるというのだな」

「左様でございます」

嬉しそうに確認する称徳天皇を道鏡は冷めた目で見ていました。

「ふむ、なるほど。しかし皇統ではない道鏡がそのまま即位するのは無理だな。よし、私に良い考えがある」

「嫌な予感しかせえへんけど、何ですか？」

「まず貴様と私が結婚する」

「冗談きついわあ」

「無論、結婚は形だけだ。次に、貴様が天智天皇のご落胤だという噂を広めまくる。これで皇統は保たれるし私は満足、皆も幸福。まさに神託通り全て治まる。完璧ではないか」

「いや、無理やろ。拙僧のおとんもオカンも弓削氏の冴えない一般的人やで。そんな噂誰も信じへんわ」

「信じないなら、信じさせればよいのだ」

（駄目だこの帝、早くなんとかしないと）

道鏡と真備の心の声が重なります。

とにかくこのままではまずいと道鏡はとりあえず真偽を確かめるべく朝廷から正式な使いを出すことを進言し、受け入れられます。

使いとして最初に選ばれたのは和氣広虫。称徳天皇が比較的信頼する数少ない人物です。しかし、広虫は事態の深刻さを察して病弱な自分には宇佐八幡宮のある九州までの旅に耐えられないとして、弟の清麻呂に投げます。姉からの突然のキラーパスに驚く清麻呂ですが、そこに道鏡は活路を見出したのです。

清麻呂が九州へと旅立つ直前である5月、道鏡は称徳天皇の許可を得て清麻呂に新たな姓を贈りました。

「清麻呂はん、拙僧が新しくあんたの姓を考えたんやけど受け取ってもらえるやろか？」  
「はあ、どのようなもので？」

「ふじのまひと輔治能真人。せやからあんたは今日から輔治能清麻呂やな。その意味を、よく考えてくれや。ホンマに頼んだで」

「……………なるほど。委細承知」

「結果がどうあれ、あんたは吉備の生まれらしいな。真備はんにはよろしゅう伝えとくさかい大丈夫や。どーんとかましたれ！」

清麻呂の実直な瞳を見て道鏡は自らの意図が伝わったことを確信しました。

（輔治能……よく国政を助けよの意味。そこに私の名である清麻呂を足して解釈すると、清らかな心で国政を助けよとなる。そして、先の神託は明らかに国を乱すもの。道鏡法王の意図、この清麻呂確かに承知しました）

のしかかる責任を背負いながら宇佐八幡宮で正しい神託を得て秋に平城京への帰還を果たしました。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか。道鏡、やけに気楽そうだね」

「まあ、打つべき手はもうありまへん。拙僧は清麻呂はんを信じますわ」

「そうかね。まあ、仮に皇位を継いでもお互い老い先短い身の上さ。あの世に行けば元通りになるから、気楽にいこうか。後世の悪評も、墓の下までは聞こえないさ」

「それなんやけどなあ、すんまへん真備はん。どうやら一蓮托生つちゆうの嘘になりそうや」

「いきなりどうしたんだい？」

「まあ、あんたは何も言わず清麻呂はんを心配してくればええんや。後は、拙僧の役目やからな」

意図の読めぬ道鏡を真備は訝しみますが、その答えはすぐに分かりました。

「も、もう一度申せ清麻呂。神託は何と下ったのだ！」

「何度でも申し上げます。先の道鏡法王を皇位につければ世の中が治まるなどというのは嘘偽り。真実はこの通りです！」

清麻呂が広げた神には宇佐八幡宮神の公式の書簡として、「わが国は開闢このかた、君臣のこと定まれり。臣をもて君とする、いまだこれあらず。天つ日嗣は、必ず皇緒を立

てよ。無道の人はよろしく早く掃除すべし」と書かれていました。要約すれば今まで天孫の血を引く皇室だけが皇位を継いできた。それを乱す無道の者である道鏡を排除せよ、となります。

この神託により道鏡が皇位を継ぐことは完全に無くなったのです。

「清麻呂！ 清麻呂オ！ 貴様までもか私を謀るか。何が清麻呂だ。貴様など穢麻呂だ！ 姉の広虫も狭虫と名乗れ！ 二人共二度と我が前に姿を見せるな！」

「ご命令のままに」

清麻呂は泰然としたまま宮中を去りました。

称徳天皇は希望を潰され道鏡にひたすら謝罪しましたが、道鏡は、

「謝る必要なんかあらへん。拙僧には皇位なんか畏れ多くてしやあないし、なれんからといって陛下と拙僧の仲が悪うなるわけでなし。今まで通りでええやん」

と、呆気からんと言われてしまい、称徳天皇は「日本はお前のような徳のある人物にこそ治められるべきだと思つたのだ」と言いました。しかし、道鏡はそれをやんわりと否定します。

「そりや大陸の易姓革命なら正しいかもしれへん。けれど、常に徳のある人物がおるわけでもないし、大概の人は自分さえ良ければ良いつていう小人やで、拙僧を含めて。そんな考えでいちいち徳のある人物を求めていれば代が変わるたびに国が乱れてみんな

不幸や。確かに国を治めるのに徳は必要かもしれん。けれどな、その徳を越えて天下万民が納得する権威は既に陛下は持つとる。ほんまありがたい神託の通りやで。天地開闢以来、皇位は皇統と共にあつた。千代に八千代に受け継がれてきたそれを、たかだか一個人の徳ごときでひっくり返そうなど、おこがましいにも程がありますわ。陛下もゆめゆめ忘れんといてな。徳は死んだら終わりやけど、権威は死んでも残るんやで。それに、徳は100年あればそれなりに身につくけれども、権威は100年あつても足りません。失つてから後悔しても、遅いんやで」

道鏡から説教を受けたのは称徳天皇にとつてはじめてのことでした。

「そうか……私は間違つていたのだな」

神託に従い道鏡は国政から遠ざかり、称徳天皇とも距離を置きます。すると弓削氏の権力はたちまちのうちに消え去り、地位を失うものや罪を裁かれ捕らえられる者が相次ぎました。

「諸行無常、諸法無我。この世の権力なんて呆気ないものや。たかだか拙僧が隠居した程度で崩れ去る」

「そうだね。栄華なんて終われば虚しいものさ。ところで道鏡、一つ文句を言つて良いかな」

「何や?」

「あの時の言葉、てつきり私は全ての悪事は自分が被るから私や周りには及ばないという意味だと思ったんだ」

「まあ、だいたいその通りやな」

「うん、だいたいは合っていたよ。けどね、道鏡。君のもう一つの目的に私は気付いてしまったよ。君、私より若いくせに隠居決め込んでるのかな？」

「……てへへ」

「笑つてごまかせると思わないでくれよ生臭坊主。また辞表が受け付けられなかった私の恨み、君はどうしてくれるんだい！ 今度に至つては出すと同時に無言で目の前で引き裂かれたんだよ！ 死ぬまで私に働けと言うのかねあの暴君は！」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。祓い給え清め給え」

「いまさら君の念仏ごときで効くわけがないだろう。この恨みは絶対に忘れないからね。具体的には適当な田舎に飛ばしてやるから覚悟しなさい」

「ははは、そりや怖い。せやなあ、下野国なんかには飛ばされたら生きていけないやろうなあ。あの辺りはウマ娘も多くて騒がしいから、きつと過労で死んでしまおうわ」

皇位篡奪をしかけた男と、魔術師と呼ばれた万能の天才。お互い年老いてから友人となつた二人の間には穏やかな時が流れていました。对象的に、道鏡が離れた称徳天皇には残酷な運命が待っていました。道鏡と出会つてから健康を取り戻した称徳天皇の身

体はたちまちに弱まり、重い病に罹ったのです。

看病をする吉備由利真備の娘。に対して、称徳天皇はうわ言のように「道鏡に会いたい。道鏡に会わせて」と懇願しましたが、道鏡は会わないことが彼女と、そして自らに相応しい罰として拒否しました。

770年8月4日、称徳天皇は崩御。享年53歳でした。

後任には皇族の白壁王が即位し、光仁天皇となりました。

道鏡は称徳天皇の陵の前に庵を移して故人を弔いましたが、21日に下野国の薬師寺別当という職を与えられて都から追放されます。それは、法王を務めた道鏡にとつては確かに左遷かもしれませんが、弟の浄人は3人の子らと共に土佐に流刑となるなど道鏡周囲の弓削氏が罰を受ける中では軽いものでした。

「お、ほんまに下野国に行けるんやな。真備はん、おおきにや」

要望通り現代の栃木県にあたる下野国へ移ることとなった道鏡。しかし、その表情に都落ちする悲壮感はありませんでした。

「それじゃあ陛下。もう会いにこれんけれども、すんまへんな。もうじき拙僧もそつちにいきますんで、それで堪忍したつてや」

振り返り、亡き愛バに別れを告げた道鏡。

彼は2年後の772年に下野国でこの世を去りました。



後世、彼は皇位篡奪を企んだ朝敵。日本三大悪人とまで言われる存在ですが、同時期に政務を執っていた者達の悪評を一身に背負ったのです。墓さえ定かならぬ彼は、今も栃木県の何処かで眠っています。

「……はい、怪僧と呼ばれた道鏡。その最期は穏やかですが、侘びしさすら感じさせるものですね」

「道鏡自身は今までの事こそが異常なことで、やつと落ち着くところに落ち着いたとも言えますから。実際、彼は一切恨み言を残さなまままでこの世を去りました」

「真備も、なんとというか……休んでほしいですね」

「その後、彼も最期は念願かなって楽隠居できたのでハッピーエンドで人生を終えられました。けれどその時80手前なので遅すぎるといえば遅いですね」

「称徳天皇と道鏡の関係とは、結局どのようなものと表現すれば良いのでしょうか」

「うーん、とても難しいですね。恋人でもなければトレーナーでもない。親しい友人以上ではあるけれど、妥当な言葉が本当に見つかりづらい。おそらく、伝承で道鏡が称徳天皇が自分にとってどんなウマ娘だったのかを語っているのです。その言葉が最も正しいのではないのでしょうか」

「ありがとうございます。では、最後に下野国での道鏡と真備達のその後について触れ

ながらお別れとさせていただきます。セントさん、本日もありがとうございます」「ありがとうございます」

道鏡が都を去った直後の771年。吉備真備はもはや何度目か数えるのも嫌になった辞表を提出。ついにそれを受理させます。そして、楽隠居を過ごした後の775年に81歳で薨去しました。右大臣まで務めた天才の最期は、穏やかな昼下がりに曾孫の声を聞きながら書を読んでいる途中にうたた寝しそのまま二度と目を覚ますことのないという生前に理想とした、あまりにも幸福なものでした。

宇佐八幡宮神託事件で改名の上に追放された和氣清麻呂は、称徳天皇の崩御と同時に罪を許され、名を取り戻した上で都へと帰還しました。最終的には従三位にまで昇進し公卿となり、明治時代には功績から正一位を贈られます。清麻呂は現在でも皇統を守護した忠臣として深い尊敬を受けています。

下野国での道鏡の足跡は殆ど残っていません。しかし、同地に設けられたウマ娘の教育施設では僅かな間ですが心を込めてウマ娘達の世話をした老僧の話が伝わっています。その人物が、時折西の方向に手を合わせて拝んでいるのを見たウマ娘が「何に拝んでいるの?」と問います。すると老僧は「ある御方を偲んで拝んでいる」と答え、続けてウマ娘がどんな方だったのかと問うと少し考えた後にこう答えました。

「相棒みたいな御方やな」

その語る老僧の表情は、どこまでも穏やかであったと伝わります。

終

制作 日本ウマ娘放送協会府中支部

## 次回予告

平安時代初期。

伝説の戦いは東北で行われた。

征夷大將軍坂上田村麿が指導したのは最速の機能美、鈴鹿御前。

一方、蝦夷の將軍アテルイがぶつけてきたのは、どんなバ上であろうと飛ぶように勝  
利を勝ち取ってきた無敗の怪鳥、悪路王。

逃げ切るか、それとも追いつくか。

宿命のライバルが、命を掛けて競い合う。

第6回「東北遠征 みちのくウマ娘の伝説」

ご期待ください。

※来週は番組の内容を変更してお送りします。

## 幕間 ウマ娘の世界史 1～5世紀ダイジェスト版

これは日本にウマ娘が渡来する遙か前から続く世界の歴史。今日はその断片をご覧ください。

1世紀――

中華にて光武帝が後漢王朝を興す。

「うおおお、100万の敵がなんぼのもんじやアアア！」

「スゲエ、劉秀様が牛に乗って突撃してる！ こっちの兵は1万もないのに！」

「大将オオオ、何やってんだお前エエエ！」

「銅バ軍も続け！ 劉秀<sup>あ</sup>さまを死なせるな！ 回収したら撤退を――」

「敵将討ち取つたりッ！」

「何で勝てるんだアアア!?!」

戦場では牛に乗り常に先頭を駆け、銅バ兵と呼ばれる農民反乱集団のウマ娘達を率いて無敵を誇りました。そのため、銅バ帝とも呼ばれたともいいます。

なお、戦闘スタイルは「策？なにそれ美味しいの？そんなことより突撃しようぜ。僕、先陣ね」と、皇帝自ら先陣切つて突撃するもので、恐るべきことに本人が先陣を切つた

戦ではほぼ無敗でした。

後漢を打ち立てた後は善政を敷き、あまりにも温和かつ清廉な人柄に欠点がなさすぎで創作上の人ではと疑われる光武帝こと劉秀。彼の打ち出した政策の中にはウマ娘を含む奴隷解放宣言がありました。その温和で清廉な人柄から聖王や聖帝など「聖」の一字をもつて讃えられたのが本人からすれば煩わしかったらしく、自らにこの一字を用いることを禁じました。劉秀は恐ろしく自己評価が低く、遺言でさえ民に対して良い政治を行えなかったと謝罪しています。……筆者としてはこの方が良い統治者と言えないのであればこの世に良き統治者など歴史に存在しないと思うのですが。

なお、皇帝になった後もフレンドリーな性格は変わらず、側近や大臣を引き連れて夜の街へと繰り出して門限に間に合わず野宿したことが少なくとも2回記録されています。

同時期、エルサレム。

「ヨシユア様……わたしみたいなノロマと一緒に良かったですか？ 他のお弟子さんはもう先にいってしまいましたよ？」

「良き隣人と共に歩む私は幸せである。ゆつくりと行こうじゃないか」

「えへへ、ヨシユア様は優しいです。マルタ姉ちゃんならグズグズするなっついても

怒られるけれど、ヨシユア様とならどこまでもいけそうです」

「そうだね。共にどこまでも神の教えを広めよう。この世界には、こんなにも愛が溢れていると伝えなければ」

ナザレのヨシユアー後のイエス・キリストが伝導を開始。彼は終生マリア通称ベタニアのマリア。おそらくマグダラのマリアと同一人物。竜殺しの聖女と名高いマルタは姉。という小柄なウマ娘を供とし、全ての人類の罪を背負ったゴルゴダの丘での十字架刑の3日後、復活した際には彼女の元へ真つ先に姿を見せたと伝わります。或いは、彼が遺した教え以外にも、彼が生きた証をその身に宿したことに気がついたのか。

マリアは罪の女と呼ばれることもありませんが、これはイエスの最も愛した女性がウマ娘であることが人間至上主義の教会からすると都合が悪いため、彼女を貶めた偽りに過ぎません。

有名なマリアの義弟ラザロをイエスが蘇生させたというエピソードですが、実際にはこのような内容でした。

ある日、マリアの姉のマルタからイエス達に報せが来ます。何と義弟のラザロが流行り病で危篤だということです。急いでベタニアへと向かったイエス達でしたが、着いたときにはラザロが亡くなって4日経っていたのでした。

マリア姉妹と共にラザロの墓へと案内されるイエス。当時のユダヤの埋葬は洞穴の

中に一年ほど遺体を安置し、その後遺骨を骨壺に入れて埋葬する方式が一般的でした。

「ラザロオオオ！ 出てきてくれよオオオ！」

滂沱の涙を流して悲しむイエス。さらには悲しみのあまりラザロの墓穴を塞ぐ岩をどかすという暴挙に出ます。ところが、死んだはずのラザロは墓穴から申し訳無さそうに出てきました。

「ラザロ生きとったんかワレ！」

実のところ仮死状態になったラザロは墓の中で蘇生し、墓穴の中で副葬品のワイン等で何とか生きのびていたところをイエスによつて墓穴を塞いでいた岩がどいたため外に出られたのです。

神の奇跡として名高いエピソードですが、実際には神は神でも笑いの神の奇跡だったようです。とはいえ、ラザロが良き隣人でなければそもそもイエスは墓石をどけるまで取り乱さず、彼は墓穴の中で死んでいたでしょう。この話が後世に残した教訓とは、イエスが奇跡を起こしたことでなく、良き隣人であれば災いから主が救ってくれることなのです。

なお、イエスの血を受けた聖杯と彼とマリアの子孫を巡る謎を描いたダ・ヴィンチコードは世界的ベストセラーとして知られています。



## 2世紀――

ローマ。

「ルシウス、これが新しいテルマエなのか！」

「はい。にんじん風呂と申します、ハドリアヌス陛下。にんじんのエキスを湯に溶け込ませることで疲労回復の薬効があります」

「流石はルシウス。これならばウマ娘達の士気もにんじんのごとく伸び、この戦に勝てるだろう！ しかし、人間にはいまいち受けぬようだな。お主が開発した流れるテルマエは人もウマ娘も同様に好評だった。今後も人とウマ娘の双方を喜ばせる活躍を期待するぞ」

(……やはりまだ足りない。あの平たい顔族に負けないテルマエを作らねば)

ローマではハドリアヌス帝の治世下で建築技師ルシウスによりテルマエが発達。

ハドリアヌス帝は名君として知られ、その治世下でローマ帝国全体の統合強化。官僚制の確立と行政制度の整備。さらには法制度の改革といった大胆な改革と繊細な統治を実現しました。

なおにんじん風呂は湯を飲み干すウマ娘が続出し中止となった。

## 3世紀――

「これが最後の戦いかもしれん。赤兎、逃げてても良いのだぞ」

「私はもはや貴方様以外に仕えたくはありません。どうか、共に死ぬと命じてください」  
「ははは、それはできません。儂も兄者達と同じ時、同じ場所で死ぬと約束している。だから赤兎、共に生き抜こうぞ！」

「はい、関羽様！」

「すまない、兄者。約束は守れそうにない」

中華では、三国時代に突入。一日に千里を駆けると言われたウマ娘赤兎と、その指導人となった関羽は最期の時まで共にあり、関羽は捕らえられるも投降を拒み麦城の戦いに散りました。

呉の孫権は赤兎を惜しみ配下に加えようとしたが、関羽に忠節と操を立てた彼女は食を絶ち、指導人に殉じました。

## 4世紀――

フランス北部、シャンパーニュ。

「私は最初の槍を投ずるだろう。続かぬ者は直ちに死ぬ。我に続く勇敢なるウマ娘よ、奪え、搾れ、犯せえ！」

「うおおおお、子種を寄越せえええ！」

「種エ、種エエエ！」

「あああ、お父さん！ 助けてー！」

「やめろオ！ 私が何人でも相手にしますから息子は、息子だけは！ この子には心に決めた子がー！」

「ほう、初物か。興奮してきた、服を脱げ。いや脱がせた」

「ヒヤツハー、男は奪え！ 搾り取れ！ 悪いけどまだまだ全然足りないんだよお、繁殖期のウマ娘舐めんよオラア！ 何がお父さんだ、お前がパパになるんだよお！」

「嫌アアア、俺たちに酷いことをするつもりでしょう！ 西ゴート王国みたいに！ 西

ゴート王国みたいに！」

「うるせえ！ 明るい家族計画の時間だオラア！ 孫と娘が同時にデキることを悦べエエエ！」

「救いはないんですかアアア！」

アツティラ女王率いるフン族の侵攻により西ゴート王国が崩壊。西ローマ帝国を始めとする諸国にまで影響がおよびゲルマン人の大移動へと繋がってゆきます。

なお侵攻の理由がウマ娘人口がアルテラ女王の善政により爆発的に増えたフン族内部の深刻な男性不足と繁殖期ウマ娘は人と同じく年間を通して常に発情期ですが、春か

ら夏にかけては猛烈に性欲を持って余す繁殖期が存在し、現代でも距離感を見誤った多くのトレーナーがうまびよいされている。また、元々が女系種族だったためウマ娘は同性愛にもおおらかであり女性トレーナーも普通に危ない。が重なった結果、他国への男性の略奪が開始されたのです。

アツティラ女王は「神罰」、「神の鞭」と呼ばれ西欧世界から畏れられました。最新は自らが陣営に招いた愛バのクリームヒルトにより刺殺されたといえます。ニーベルングンの歌によると、夫であり指導人であったジークフリートの仇を討つためアツティラ女王を利用し、用済みとなったので殺害したとされる。このことに対してある北欧史を研究するウマ娘は「ヤバい」と評した。

## 5世紀ー

ブリテンにてカムランの戦いが発生。

「モードレッド卿。なぜ、遠征中に留守を任せたキャロット城をお前が手にし、反乱を起こしたのだ」

「復讐のためだ。我が父ロット王とモルガンの恨み、ここで晴らさせてもらう」

「そうか…奴らの手駒となったか。だが、お前は勘違いしている。本当の仇は私ではないのだ」

「違う、あんたは私の父と母を殺した！ アグラヴェインが教えてくれた！」

「いいや違う。お前の本当の父母は生きている。……」

I am your mother」

「No, that's not true. that's impossible！」

王が如何なるときも外さなかった兜を脱ぐと、アーサー王は金髪碧眼のウマ娘だった。その容姿はまさしくモードレッドと瓜二つ。そして、その髪には母と思っていたモルガンには無かったモードレッドのチャームポイントと同じ特徴的な白い流星が――

「No……Noooooooooo！」

なんやかんやあつてブリテンは滅びた。

――

「……………」

「パカでも分かるウマ娘の世界史」という本の前半を読んでいた日本ウマ娘放送協会の松平アナウンサーはゆっくりとその本を閉じると鞆にしまい、深くため息をついた。

何十年も前に妻が娘のために買ったもので、面白いし今入っている仕事の参考になるからと渡されたが、前半の1から5世紀までを流し読みしていて頭痛がひどくなり、カムランの戦いでホースの暗黒面を見たあたりで遂にギブアップしたのだ。

「なあにこれえ」

それは、世界史の研究をする全ての研究者（人間限定）が新たな資料が発掘される度に呟いてきた言葉であつた。ウマ娘の研究者は「わかる」だの「すごい」だのと、何か語彙力が死んではいるが特に驚く様子もなく受け入れるのが常だ。

まるで意味がわからない。イイハナシダナーと思つていた次の瞬間には人間が蹂躪されたり、隙きあらばよく知つた歴史上の偉人がうまびよいされてよく分からないことになつている。欧州情勢は複雑怪奇というが、この世界は複雑怪奇過ぎて魑魅魍魎が跋扈する地獄なのではないかと思つた。

日本に生まれて良かった……。

松平アナは心からそう思つた。今取り掛かつている仕事、「ウマ娘と辿る日本の歴史」に出てくるウマ娘達の何と平和なことか。乙巳の変については忘れよう。あれのせいで松平アナは一時期人間不信になりかけるほどのトラウマになつてしまったのだ。

収録開始まであと2時間。スマホを見れば、妻から連絡が来ている。

『今日も収録頑張つてね。放送、楽しみにしてるわ♡』

思わず顔がにやけてしまうが、誰が彼を責められようか。既に五十路をとうに越えた松平アナとその妻はかれこれ40年以上連れ添つているが、未だに知り合いのウマ娘の家庭と同じく熱愛ぶりを保つていた。

ウマ娘の結婚相手の9割はトレーナーだが、1割は例外がある。松平アナとその妻は、その1割だ。

待ち受け画面には現役時代の妻ともう一人の写真。トレセン時代のトレーナーだった女性――松平アナの母と共に秋の大櫓を越えた先にある楯を抱えて二人が笑っていた。撮ったのは自分だったのを今でも思い出す。あの頃から変わらぬ笑顔が今も家には待っている。

これもまた一つの歴史。これから紡がれるものが、このようにささやかなものであればどれほど良いだろうか。

スマホを仕舞った松平アナは再来週収録の台本を取り出し、コーヒーを啜る。そして盛大に吹き出した。

『第8回 ゴールドスピリッツ ロングウェイ 道長とライコウちゃんの奇妙な冒険 鬼殺の刃を添えて』

台本のタイトルを見て頭を抱える。

どうやら日本はもう手遅れらしい。

## 第6回「東北遠征 みちのくウマ娘の伝説」上

ハルウララを有馬記念で優勝させるようなもの。

それは不可能、或いは奇跡の遠い親戚としての言い回しでしたが、それはもはや過去のこと。彼女が芝2500メートルを先頭で駆け抜けてからは「為せば成る」の意味へと転じています。そんな彼女の専属となり僅か3年で有馬記念の偉業を達成させたトレーナーをして、「私は彼の偉人に如かず」と言わしめた伝説的なトレーナーがいます。その名は坂上田村麻呂。征夷大將軍にして軍神、あるいは奇術師。そして史上最高のトレーナーの一角です。

彼が史上最高とまで呼ばれる由縁となったのは、東北遠征において今尚歴代のウマ娘で屈指の強さを誇るとされる駿しゅんめ女にして怪鳥・悪路王と世紀の対決を果たした最速の仙女・鈴鹿御前の指導人であり伴侶であつたからであります。

後の世にまで轟く東北遠征、その伝説の競技。それはウマ娘同士のみならず、二人の指導人による男と男、その意地のぶつかり合いでもあつたのでした。

日本ウマ娘放送協会特別企画



## ウマ娘と辿る日本の歴史

## 第6回『東北遠征 みちのくウマ娘の伝説』

「こんばんは。今夜もやってきました、ウマ娘と辿る日本の歴史の時間。司会を担当する松平です。今宵の主役は、征夷大將軍・坂上田村麻呂と、そのパートナーとして今なお日本史上最速のウマ娘と名高い鈴鹿御前であります。彼女は現在も競技の世界において活躍するサイレンススズカ選手の名前と由来を同じくする間柄です。まずは坂上田村麻呂、彼が鈴鹿御前と出会うまでどのような人生を歩んできたのかを辿りましょう」

坂上田村麻呂。

758年に生誕、生まれた地は不明。

坂上氏は後漢の皇族の末裔である阿知王が、日本の応神天皇第15代天皇。仲哀天皇と神功皇后の子。八幡大菩薩として後の武士に信仰されている人物。が良き君主だと聞き、大陸より氏族を引き連れて渡来し、帰化したことから始まったと伝わります。

渡来の理由は応神天皇が名君であると聞いたからとされていますが、この頃は日本へのウマ娘大渡来の時期と重なることと、坂上氏が弓バの道。すなわち牛に跨がり矢を射かけ、相棒となるウマ娘とのコンビネーションにより敵を倒す兵法の達人として知られることから、大陸において数少ないウマ娘を愛する一族であり、大陸での立場の悪化についてゆけず途方に暮れていたところで日本のことを知り、渡来を決意したのでしよう。

弓バの道。それは後漢の祖、光武帝が編み出した恐るべき兵法であり、一部を除き体得不可能であるがゆえに坂上氏につながる一族を残して廃れてしまったものです。それは、鎧を身に纏った状態で牛に跨がり突撃して突破口を開く。続くウマ娘の精鋭が機動力を活かして傷口を広げて敵を崩壊させるという極めて脳筋な、「兵法」と名のつくのもおこがましいパワープレーでした。

当然ながら先陣を駆けるのは人間。それも光武帝に匹敵する強さとカリスマ性を持ち合わせ、何よりウマ娘との絆を育むことのできる指導人にしか十分な効果を発揮せず、普通の者ならば無駄死にしてウマ娘のやる気を下げただけの自爆技に過ぎません。ところが、光武帝やその後裔の一部はウマ娘と確かな絆を育んだため、指導人が先陣を切ると後続のウマ娘達は愛する人を護るために死にもぐるいで戦う。つまるところ、士気を上げて物理で殴れば良いという、最高に頭の悪いけれども結果だけを見れば最高

に合理的な兵法となったのです。

その兵法に「柔能く剛を制す」の出典として知られる六韜三略著者は封神演義でおなじみの太公望。孫子が説かなかった寡兵で大軍を打ち破る方法も書かれている。後に前漢の張良、蜀の諸葛亮が教本とし、吉備真備が日本に伝えた後には九郎義経が会得したことで知られる。を合わせて改良がなされ、坂上刈田麻呂と吉備真備により完成されたのが、人バ一体。即ち、人間の兵士に対しウマ娘がバディとして支え合う関係の構築。これが日本の軍略に大きな変革をもたらしたのです。

はつきりと言って、後の武士団へとつながるこの集団はあまりに強すぎました。あのスパルタを破った古代ギリシア最強の歩兵部隊である神ヒエロス・ロコス聖隊が男性同士の恋人による部隊であったように、深い愛情と絆で結ばれた者達が強いのは必然と言える。田村麻呂の父である刈田麻呂は、坂上氏の一党を率いて皇室の命ずるままに連戦しましたが、その戦果は少数で大軍を打ち破り、多くの敵将を射抜く圧倒的なものでした。そのため、都には刈田麻呂以上に皇国の守護者たりうる者は存在せず、782年に桓武天皇即位の直後に発覚した氷上川継の乱に連座して官職を解かれた際も僅か4ヶ月で元の官職に復帰するという例外的な措置を取られています。これは母方が百済王家の出自である桓武天皇からすると、同じ渡来系氏族である坂上氏にシンパシーを感じると共に、その武勇を心から頼りにしていたからだと思われれます。

さて、田村麻呂は13歳頃に陸奥鎮守將軍となった父や兄弟と共に半年ほど陸奥国の多賀城に滞在していました。

まだ成長真つ只中の彼は野山を駆け回り奥州の素晴らしい自然を知りました。まだ神秘が色濃く留まる地も、人の世と間もなく混ざり合おうとしています。少年の田村麻呂は果たして何を思ったことでしょうか。あるいは、それ以上の出会いがあつたのやも知れません。

「和人。ここに何をしている?」

小さな弓を構えた少年。衣装は動物の毛皮に、独特な模様のある手ぬぐい。蝦夷の少年のようです。

引き絞られた矢を射掛けられようとしているのに、田村麻呂は動じません。少年を一瞥すると再び景色に目を戻し、そのまま答えました。

「景色を見ていた」

「……それだけか?」

「それだけだ」

「随分と酔狂なことだ」

「伊達と酔狂が手前の信条だね」

「お前さん、変わり者と言われるだろ」

「よくお分かりで」

毒気を抜かれたのか、番えた矢を外した少年は田村麻呂と二人で景色を眺め始め、互いに言葉少ないながらも談笑しました。

頃合いを見て田村麻呂は城へ戻ると言つて踵を返し、その背に少年が問いかけます。

「お前さん、名は？」

「我が名かね。我は田村麻呂。坂上田村麻呂だ」

「そうか。俺は阿弓流為あてるい。縁があればまた会おう」

「ああ、縁があればね」

後に宿命のライバルとなる蝦夷の大將軍・阿弓流為。再び両者が相見えるのは20年後のこととなります。

778年頃から田村麻呂は朝廷に出仕し始め、780年には近衛府の將監しょうげんとなります。これは近衛府の三等官の地位であり、代々武官を排出する坂上氏に相応しいものでした。

一見すると身分に相応しい順調なスタートに思えます。ところが、この頃の田村麻呂ははつきり言えばくすぶっていました。理由は、彼の余りある才能のためです。

田村麻呂は身長175センチ、胸の厚さは40センチ。体重120キロ。当時としてはかなりの高身長かつ、現代でも異常なほど筋骨隆々、ムキムキマッチョの恵体です。

しかし、彼の恵まれすぎた才能と武芸についてこられる者も、要求水準に至るウマ娘も存在しなかったのです。

弓矢を取ればウマ娘用のものでさえ軽々と引き絞り一矢一殺の武技を見せ、剣を取れば防いだ剣や盾ごと叩き斬るパカぢから。鎧など彼にとつては紙も同然。こんな怪物には人間はおろか、ウマ娘でさえも「無理いゝ」、「人間チガウ」、「お武家様の戦い方じゃない」などと言い、誰もついてこられなかったのです。

ここで田村麻呂、まさかの拗ねる。かと言つて何か悪さをするでもなく、給料分の仕事以上はせずに定時退庁。専属で育成するウマ娘も取らないが、坂上氏秘伝の技術で近衛兵全体の底上げはするなど責めるに責められない空気を作り、必要以上のことはしない。結果としてこのような日々が25歳になる頃まで続きました。

軍神田村麻呂の不遇時代。それが覆されるのは、あるウマ娘との出会いを待たざるを得なかったのです。

「解説には平安時代の東北地方、特に蝦夷の民の歴史に詳しい東北大学教授のアシタカヤツクルさんにお越しいただいています。ヤツクルさん、よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

「田村麻呂といえ、蝦夷討伐での活躍と初代征夷大將軍、後は清水寺に縁があることく

「らいが私の印象なのですが、彼にも不遇な時代があつたのですね」

「はい。当時の兵士にあたり、後の武士となる人々は必ず弓バの道。すなわち弓とウマ娘とのコンビネーションなくして一人前とは言えない過酷な教練を課されてきました。ところが、田村麻呂には人間であるにも関わらず彼の技量についてこられるウマ娘が存在しないという前代未聞の事態が発生したのです。さらに彼にとっては不幸なことに、彼一人でも十分に強く、もうあいつ一人で良いんじゃないかな的な評価を下されていました。とは言え、いつまでも田村麻呂程の傑物を遊ばせているほど朝廷に余裕があるわけがなく、田村麻呂は相方探しに苦慮する事となるのです」

「なるほど」

「あと、結構勘違いされている方も多いかもしれませんが、田村麻呂は初代征夷大將軍ではありませんよ」

「え？」

「初代は田村麻呂の上官だった大伴弟麻呂ですね。田村麻呂は彼から役職を引き継いだので2代目です」

「シラナカッタ……ハズカシイ筆者もこの話を書くまで勘違いしていました。」

「落ち込まずに続きいきましょ」

25歳の田村麻呂は相変わらず鬱屈とした日々を過ごしていました。そんな折、都にはある噂が流れ始めます。

立烏帽子を被ったウマ娘が競技を荒らし、賞金を搔つ攫つてゆく。さらに、彼女が競技を走った直後には大嶽丸と名乗る盗賊が現れては狼藉三昧で手がつけられないとの話です。

朝廷は最初こそ田舎ウマ娘と野盗風情、どうということはないと高を括っていました。これが東大寺大仏記念や聖徳太子記念、すめらぎ賞などの皇室ゆかりの競技でも謎のウマ娘が現れては大逃げをかまし、直後に盗賊が現れる非常事態が発生したのです。慌てて朝廷は謎のウマ娘の調査と盗賊の討伐を近衛府に命じ、回り回って白羽の矢が立ったのがこの時、自由に動けた田村麻呂でした。

田村麻呂はまず謎のウマ娘、仮称・立烏帽子が確認された最も古い競技を当たります。すると、伊勢神宮記念や熊野記念など伊勢国が活動のはじまりだと判明します。次に、朝廷の許可を得た田村麻呂は伊勢国へと赴き、怪しいウマ娘がいなか訪ねて回りまわりました。

「すみません、この辺りに立烏帽子を被ったウマ娘はいませんか？」

「あんれまあ、でっかい赤毛の人だねえ。この辺りにそんな格好のウマ娘はいないよ」

「そうですか。では、この辺りで行われた競技で、大逃げで勝ったウマ娘は？」



「ああ、それならいるよ！ 鈴鹿山の子だね。あんまり山を降りなくて顔を見ないけど、どうしてるかねえ。けれど、気をつけなよ。あの子、走ること以外にはとんと無頓着で、おまけに走ったらあの勝ち方でしょう？ 仲の良いウマ娘もいなくて、人当たりの良いとは言えないから」

「そのウマ娘に何か、盗賊との関わりがあるとか？」

「盗賊？ ウマ娘が？ お兄さん冗談はおよしよ。人間ならともかくウマ娘が盗賊になんかなるわけないさね」

これはこの時代の日本人共有の考えでした。というのも、ウマ娘には落伍者となる理由はほとんど存在しないからです。走るならば競技者、すなわち宮仕え。学があれば僧侶に。体が丈夫なら農業、漁業、建築に。何にもなくとも気は優しく可愛く力持ち、嫁の貰い手に困ることなしの引く手あまた。むしろよほどの末法の世でもない限り落ちぶれる方が難しいとまでウマ娘は言われていたのです。そんなウマ娘でさえも多くの犠牲者が出た天平の大疫病がいかにも凄まじかったかが分かります。

田舎のかあちゃんウマ娘の言葉に田村麻呂は思わず、

「確かに」

と、納得してしまいました。

しかしながら調査を終えるわけにもいかず言われたとおり鈴鹿山へ向かう田村麻呂。

鈴鹿山は現在の鈴鹿山脈の中にある鈴鹿峠付近であり、近江（滋賀県）と伊勢（三重県）の国境に位置する地です。ここにある関所から東を関東、西を関西と区別する重要な場所でもあります。また、古くから盗賊の横行する場所としても名高く、伊勢神宮への参拜客や朝廷からの使いが度々襲撃されることでも知られていました。田村麻呂が鈴鹿山と聞いてウマ娘と盗賊との関わりを疑ったのも無理はありません。

とは言え、盗賊もあからさまに強者の風格漂う田村麻呂に挑むほどパカではなく、接触を恐れて盗賊は隠れてしまい、鈴鹿山を搜索する田村麻呂は人にもウマ娘にも出会わずむしろ迷子となり正直途方に暮れます。

「これって、拙いのでは？」

田村麻呂、人生最大の危機です。

とはいえ流石は後の軍神。臆することなく水の音を聞きつけるやすぐに小川を発見しました。川上なら住む者がいるかもしれない。いなければ引き返して川下に向かえばいつか人里にありつくだろうと田村麻呂は考えます。そして、本当に川上にて民家を発見したのです。

そこには栗毛の年若いウマ娘が一人で住んでいました。縁側でぼけくと空を見つめていたウマ娘は、田村麻呂に気付くと軽く会釈をし、視線をまた空へと戻します。

「良い天気だな」

「そうですね。何だか走りたくなるくらい良い天気です」

「走らないのか？」

「ちよつと、左脚を痛めてしまつて……」

田村麻呂は事前に、先の競技で立鳥帽子が左脚を痛がる様子を見せていたとの情報を得ています。もはや彼の中で目の前のウマ娘が立鳥帽子であることは確定事項。しかし、田村麻呂は今そんなことはどうでも良かった。

「すまないが、左脚を診せてくれないか」

「少し痛めただけです。休んでいればすぐまた走れるようになりますから気にしないでくださいー」

「いいから、診せてくれ」

有無を言わせぬままウマ娘の左脚を踵にして触診する田村麻呂。すると、彼の表情はみるみる間に険しくなつていきます。

「お前、相当痛んでいるだろう。折れているぞ」

「……」

「それに右脚に比較して左のトモの張りが著しい。左回りに回旋する癖があるな」

「……はい」

「どうするつもりだったんだ」

「え？」

「この脚をどうするつもりだったのかと訊いている！ 左脚足首内果骨折、腫れもひどい。おそらく治るが、介添も無しに生活、それと日常的に左脚へと無意識で負荷をかける癖。予後を悪くして二度とまともに走れなくなってもおかしくないぞ！」

「……」

走れなくなるかもしれない。田村麻呂の言葉にウマ娘は顔から血が引き真つ青になります。かなり悪いとは自覚していたのですが、まさか二度と走られなくなるほどとは思っていなかったのです。

「競技で得た金や賞品ならあるだろう。今すぐ医者か坊主を呼ぶぞ」

「呼べません……」

「何だと」

「呼んでも来てくれません。あなただって、分かっているのにしょう？ 盗賊との繋がりのあるウマ娘。都から追手が来るような者を、わざわざ危険なこの山まで来て誰が診てくれるのですか」

「なるほど、確かにここは危険だな（迷いかけたし）。なら、これでどうだ」

「はい？」

田村麻呂はウマ娘を軽々と横抱きにし、家屋の外へと出ます。

後にお姫様抱つこと呼ばれるものです。

外に出た彼は太陽の位置と勘で先程の集落の方角を予測しました。

「しつかり捕まってるよ」

「ほえ？」

そして彼は駆け出しました。

集落まで残り約10キロ。それも道なき道をゆく無謀すぎる爆進。だが田村麻呂にとつてそれは問題ではなかったのです。

その異形となるほど鍛え込まれた両腕の中にいるウマ娘。彼女が走られなくなるかもしれない。ただそれだけが問題だったのです。

「と、止まってくださいい！ 止まってー止まれなあい！? 無理無理、無理です、怖いです！」

「それがどうした！ お前はウマ娘だろ。ウマ娘なら走ってなんぼじゃないか！」  
「無理い〜！」

いくつもの山を超え、登りならば歩幅を小さく、下りは歩幅を大きくと見事に使い分けた田村麻呂、最後の山を超えて集落へと駆け抜けてきました。

先頭は坂上田村麻呂、脚色は衰えない。これは大楽勝か、田村麻呂。顔色一つ変えず余裕の走りです。

集落に到着。斤量15貫約56キログラム。をものともしない圧巻の走りを見せました。本当に人間なのか田村麻呂ツ！坂上氏で幼い頃から田村麻呂に仕えた郎党の青山あおやまぼくしん拍進が記した私記から引用。

集落に到着した田村麻呂は近隣の医師的役目をしていた寺院へと転がり込み、事情説明を求めると和尚かしょうを無視してウマ娘の足を添え木や布で固定し、絶対安全の状態を作り上げました。和尚もウマ娘か脚を負傷していると知るやいなや即座に田村麻呂のサポートに徹し、

「悪かったですね、和尚。私は坂上田村麻呂。御坊の適切な支援、感謝します」

「おお、貴方が坂上氏の。医術の心得のある拙僧らに勝るとも劣らない技はまさにお見事。感服仕ります」

「よしてください。煽てられ慣れていないので、ともすれば天狗になってしまいます。それに、まだ私の技は親父にも、その師である先右府様吉備真備のこと。にも遠く及びません。先右府様が魔術師ならば、私など奇術師になれるかどうかも分からぬ身です」互いに挨拶を交わすと、田村麻呂は寝台に寝かされたウマ娘へと向き直ります。彼女の顔色は変わらず青ざめていますが、さらに小刻みに震えていました。

武門の家、坂上氏においてウマ娘でさえもついてこれなかった超人。新たな皇国の守護者。都から遠く離れた鈴鹿山まで田村麻呂の噂は届いていました。そんな人物が

来た理由は分かりきっています。盗賊とのつながりを疑われ、捕らえるか斬るかをしに来たのだとウマ娘は思い込み、この脚では逃げることもできずただただ震えるしかなかったのです。

しかし、田村麻呂としてはウマ娘の気持ちを感じつつも欲しかった反応とは違うため困ったように癖のある赤毛を掻きました。

「まあ、坂上と言っても偉いのは親父やもつと昔の御先祖で、俺はと言うと身体だけは丈夫な、特に何をしたわけでもないただの昼行灯さ。別に取って食ったりしないから安心しなよ」

「…はい」

「ところでお前、名前は？」

「鈴鹿……生まれた御山の名前をそのままに」

「歳は？」

「……13になります」

「俺より一回りも下なのか。それで、あの山に一人で住んでいたのか」

「はい。二人共、何年も前に流行り病で。私は、ウマ娘なので何とか食いつないでこれましたけれど……最近では競技にも出られなくなって……悪い噂も……」

「盗賊との繋がりと噂、ね。けど、悪いけれどそれについては訊くつもりは無いよ、

無駄だから」

あつさりと言つてのけた田村麻呂に鈴鹿御前は面食らいました。しかし、ウマ娘が何たるかをよく知る田村麻呂としては、そもそもウマ娘が盗賊に実を落とすこと自体がありえない話なのです。

「だつて鈴鹿、お前。盗賊とは何の関わりも無いんだろ？」

その言葉に対して鈴鹿御前は無言で何度も激しく頷きます。

「そりゃそうだ。今の御時世に大逃げをかますほど走りに熱中し、はるばる都にまで走りに来て足が折れても一着だったウマ娘が、盗賊ごときに関わるはずが無い。大方、競技目当てに防備が緩くなり、お前に負けたウマ娘のやる気が下がったところを付け狙う盗賊がいるんだろ。名前は――そう、大嶽丸」

大嶽丸。鈴鹿山を根城とする盗賊団の首魁であり、走ることに以外には無頓着だった鈴鹿御前が謂れなき悪評を被る原因です。

「まあ、こいつに関しては近々俺が見つけ出して叩き切るから良しとして大嶽丸のナレ死予告である。それよりも噂ではかなりの名バラしいじゃないか。俺は、お前について知りたい」

最速の機能美を誇る鈴鹿御前。

速さは自由であり、孤独でもありました。



誰も彼女に追いつけず、絶望的なまでの差をつけられての大逃げ。山を降りて競技に出れば相手となるウマ娘は我先にと出場を取りやめ、ついには競技として成立しないからと出禁にされること多数。もはや地元である伊賀に彼女の出場できる競技はありませんでした。

顔を隠して都の競技を意図せずして荒らしまくった結果、変装の一貫で被っていた立烏帽子がそのまま異名となり恐れられ、やはり出禁となる。さらには折からの盗賊騒動が都でも生起したため田村麻呂派遣にまで至ったのです。

ほつりほつりと身の上を話す彼女に田村麻呂は大いに憤慨した。

「パカな！ どれほど相手が強く美しくかろうとも、ウマ娘ならば競い合うものだろう。それを避けるとは都のウマ娘は何を考えているんだ！」

指導人として、武人としても優秀過ぎた田村麻呂が競技の世界から遠ざけられてから幾星霜。まさかウマ娘の中にも同じ境遇の者がいるとは夢にも思いませんでした。

「鈴鹿、俺の愛バにならないか？」

「え？ けれど、私達は今日あつたばかりですよ。いきなり、そんなこと言われても……」

「それがどうした！ 俺となら絶対に脚を治して速さの向こう側を見せてやれる。坂上のウマ娘ならば競技を出禁にさせることなんかできないし、お前は思う存分に走られ

る。どうだ、お前の（競技）人生を俺に出来ないか！」

「……そ、それは、求婚ですか？ 私、まだうまぴよいか早いと思うのですが」

愛バとは必ずしも夫婦関係を意味せず、むしろ相棒や心の友といった意味が大きいのですが、愛バⅡ夫婦Ⅱうまぴよいと直結するあたり田舎ウマ娘たる彼女のそちらへの無知ぶりが分かります。

「おっと、勘違いしないでくれ。本当に、勘違いしないでくれよ。自由をこよなく愛する俺は独身主義なんだ。単に、俺と一緒に速さの向こう側を目指さないかって話だ。他意はない」

「……………」

「だ、駄目か？」

「そうですか。他意はないんですね……今は。不束者ですが、よろしくお願いします」  
「ああ。よろしくー！」

その後、都に戻った田村麻呂は鈴鹿御前のリハビリテーションを献身的に支え、復帰した彼女の指導人兼相棒として正式に活動を開始し始めました。

こうして田村麻呂は鈴鹿御前を愛バとし、弓バの道をついに完成させたのです。

なお、伝説では鬼神やら何やら超強化される大嶽丸ですが、落ちぶれた人間にそんな神通力があるはずが無く、戦闘の超人である田村麻呂に鈴鹿御前という相棒が備わり、

間違ひなく最強にして最速となった二人に勝てるはずがなく、哀れな盗賊は瞬殺されたのでした。

むしろ大嶽丸、本体よりも持っていた刀のほうが後々まで名が残っています。銘を大通連と小通連。鈴鹿御前の二振りの愛刀として知られる刀です。

大嶽丸の隠れ家から押収した品々の中に盗賊が持つにしては豪華な刀を見つけた田村麻呂が、

「鈴鹿、顕明連鈴鹿御前の愛刀。これを用いれば田村麻呂でさえ反応できないほどの速さで切り込めたと言われている。は温存してこの二振りを使わないか？」

「良いですけど……田村麻呂さんは？」

「俺にはソハヤがあるからな。それに、美しい刀は自分で使うよりも、他人が使っているのを見ていたいものさ」

「ソハヤノツルギ。そんなに、特別なんですか」

「先祖から受け継いできたものだからな……どうした、鈴鹿、怖い目をして」

（……たとえ剣が相手でも、田村麻呂さんの隣は譲りたくありません）

「おーい、鈴鹿？ おーい」

実は鈴鹿御前、かなりの独占力で後世に名を馳せることになります。

780年、桓武天皇は息子の安殿親王あてしんのうを皇太子とし、その祝いに田村麻呂を従五位下

へと昇進させます。これにより坂上氏が単なる武門の家から中央貴族への仲間入りを果たしたとも言われます。

その祝いの夜――何と鈴鹿御前が田村麻呂へ夜這いを敢行したという記録が残っています。

鈴鹿御前、このとき16歳。まさに適齡期。酒に酔った田村麻呂の寝込みを襲い、うまびよい仕る。翌朝、互いの姿を見て全てを悟った田村麻呂は往生際悪くも「お、俺は独身主義なんだ！ 伊達と酔狂で生きるダメ人間だからお前ほどのウマ娘には相応しくない」と無駄な抵抗をしますが、都の一流ウマ娘が影さえ踏めない最速のウマ娘から逃げられるはずも無く、奥の手である顕明連の鯉口をチラチラ見せながら、

「田村麻呂さん、あなたが悪いんですよ。私はあなたの優しさを知ってしまい、今は速さの向こう側よりも、あなたの隣で、あなたと同じ速さで歩んでいきたいのです。競技の先頭も、あなたの隣も、誰にも譲りません。なので、このまま夫婦になつてしまいましう。お返事は？」

とプロポーズされ、田村麻呂は頷くしかありませんでした。翌年、田村麻呂と鈴鹿の間には正林しょうりんと言う名の娘が生まれたと言われています。

坂上氏としては田村麻呂の嫡子がいけないのは非常に拙いので、小松の前と呼ばれる鈴鹿御前によく似た人間の女性を迎え入れましたが、これが鈴鹿御前の逆鱗に触れます。

伝承では天命により25歳で鈴鹿御前が亡くなり、後妻の小松の前が113歳まで長生きしたとありますが当時の資料を見ると亡くなったのは小松の前とあります。この小松の前、ようやく田村麻呂との間に男の子二人を授かった直後の死でした。その遺体には3つのそれぞれ形状の違う刀傷があったとか。

このことは坂上氏において厳しい箝口令が敷かれ、現在に至るまであくまでも噂程度にすぎません。ただし、田村麻呂の嫡子を育てたのも、来世でさえも寄り添っているのは鈴鹿御前であるとあからさまなほど記録され、1000年以上時が過ぎた今でさえも、田村麻呂の最愛の妻として鈴鹿御前の名を出さなければどこからともなく三振りの刀が飛来し切り刻んでくるとまで言われています。これに対してあるウマ娘の歴史家は「仕方ないね」と、愛の大きなウマ娘ならばこういうこともあるから人間は寛容の心を持つとうと説きました。

そして時は流れ、791年。田村麻呂の父はこの世を去り、田村麻呂自身も順調に出世していきまます。

鈴鹿御前も田村麻呂の愛妻愛バ表記のみだと刀が降ってくる噂がありません。として数々の競技を総ナメにし、都の人々は誰が勝つのかではなく、鈴鹿御前が何バ身の差をつけて逃げ切るのかを賭け合うほどだったと言われています。

しかし、この世は諸行無常。変わらぬことなどありません。ついに東北では、田

村麻呂に匹敵する指導人と、そのウマ娘2人が歴史に飛び立とうとしていたのです。

1111年。最速、怪鳥、怪物。後の世まで語り継がれるウマ娘達が一堂に会するまで、あと

## 第6回「東北遠征 みちのくウマ娘の伝説」中

「鈴鹿さん、何気に人間を手に掛けた初のウマ娘では？」

「明確な殺意で手に掛けたのは日本史上初かもしれないね。ただ、事故なら練習場にうっかり入って蹴り殺された天皇がいますし崇峻天皇のこと。詳しくは第2話を参照、同様にウマ娘が全力発揮しているとところへ無防備に入って彼方まで吹き飛ばされた人間はいくつか確認されています」

「そう言えばいましたね、ウマ娘に蹴られて崩御した方。いくつか確認されたとおっしゃいますが、当時の法的にはどのような処分が下ったのですか？」

「崇峻天皇を殺めてしまった東漢駒子がシヨックのあまり絶食し死亡したのを切っ掛けに朝廷ではまず蘇我氏がウマ娘になるべく罪過がいかないよう法整備をし、藤原氏によつて故意によらない事故であれば無罪放免となるよう法が整えられています。二元々、練習場を使用できる宮仕えのウマ娘はきちんとした許可と指定された場所での練習をしています。それに加え、農作業や建築で全力発揮する場合も監督者がついており、はつきり言えばウマ娘側の過失を少なくするよう法整備したわけですから、それでも起きた事故は人間側の不用心さによるもの、という扱いです」

「けれど……鈴鹿さんは明確に殺っちゃいまさー」

「松平さん、それ以上いけない。本当に、これ以上はやめましょう！ 鈴鹿さんは良妻。それで終わりです！」後日、ヤツクル教授から松平アナへ清水寺か坂上神社へお参りし、「鈴鹿さんは良妻です」と宣誓するよう連絡があり、理由を訊くとこの時松平アナの背後に三振りの刀が薄つすらと見えたので慌てて話を打ち切ったそう。

「あ、ハイ。それでは続きを。田村麻呂が鈴鹿御前と絆を育む間に、東北では朝廷にとつて看過できない事態が起きていました。長きに渡っていた蝦夷討伐。朝廷軍からすれば敵に当たる蝦夷軍に一人の英雄が現れたのです」

789年、陸奥国衣川北岸。

長きに渡る蝦夷討伐の中、病による指揮官の急死により戦線は膠着。朝廷軍には厭戦ムードが漂っていました。

いつまでも変わらぬ戦局に激怒した桓武天皇の命により5月下旬、ついに戦端が開かれます。

朝廷軍は蝦夷軍が胆沢に集結していたとの情報を得て、これを約8000の兵を2つに分け、敵を挟み撃ちしようとして動き出します。

しかし、先発隊は蝦夷の築いた砦を前に手間取り、そこを蝦夷の奇襲部隊800が襲



いかかります。後続部隊にも400の奇襲部隊が襲い退路を断ちました。この攻撃に朝廷軍は大混乱。山と川との間に追い詰められ多数の溺死者を生み出す大敗となったのでした。

長らく朝廷と蝦夷の戦いはじわじわと朝廷が有利になる形で進行していましたが、ここにきて予想外の敗北を喫してしまったのです。

これを巢伏の戦いと呼び、この戦で名を挙げた蝦夷側の三人の武将。その名が――「大将、阿弓流為……副将にウマ娘の母禮、と悪路王。こいつらが、今回の指揮官か」

奥州の地図を前に田村麻呂と鈴鹿が軍勢に見立てた木片を手に頭を悩ませています。「分散した敵を包囲し各個撃破……兵の不足は奇襲の有利性で解決。我が軍の裏をかく見事な用兵だ。鈴鹿、どう思う？」

「兵学はよく分かりませんが、敵は恐ろしく賢い将に率いられていると感じます。きっと、勝てるのはあなただけ……そんな予感がします」

「だろ。うな。まったく、今は亡き親父や魔術師様なら手放しで称賛するほどの用兵だぞ、こいつは。何が悲しくて、運命だとか宿命だとかいうものに振り回されなきゃならんのだ」

「……敵の将に、何か運命を感じたのですか？ 私以外の相手に、運命を？」

鈴鹿御前の殺る気が上がった。

掛かってしまっているかもしれないね。

「こんな縁は望んじやいなかったがね。全く、今なら魔術師様や親父が宿命とか運命だとか、そういった言葉を嫌ったのがよく分かるよ。阿弖流為……俺は幼い頃、一度だけ会ったことがある」

「阿弖流為は、敵方の大将。お知り合いだったのですね」

「気の合う男だったが……残念だ。再会の約束が、こんな形になろうとは」

悪い予感をよく当たるもの。歴史は田村麻呂の予想通りに進んでゆくのです。

791年、敗北を雪ぐため蝦夷征討準備がはじます。

2月25日に兵士の動員について具体化すると、田村麻呂は東海諸国へと派遣され、兵士の練度と武具の検査を実施、征討軍の兵力は10万人ほどでありました。

7月13日に大伴弟麻呂が征東大使に任命されると、田村麻呂は百濟王くだらのくにぎし俊哲しゅんてつ、多治比浜成たじひのはまなり、巨勢野足こせののたりとともに征東副使となります。弟麻呂は既に還暦を越えた歴戦の猛将。俊哲と野足は東北地方の国司などを務め土地勘に明るく、浜成は先の巢伏の戦いにおいて唯一蝦夷軍への反撃に成功した戦上手です。皆、田村麻呂よりも経験に優れ、33歳の田村麻呂はひよつ子同然でした。

口さがない貴人は田村麻呂をお飾りや親の七光りとあざ笑いましたが、司令官を務める弟麻呂は彼らに対して、

「後日、恥入るようなことがなければ良いがな。お前さんたちは大樹の苗木を見て、それが高くないと笑う愚を犯しているかもしれないのだぞ」

と釘を刺したと伝わります。後に、彼の予言は見事に的を得るのであります。とは言え、このメンバーの中で最も若輩なのが田村麻呂なのもまた事実。確かに幼少期に陸奥国へ行ったことはあれど、朝廷の名誉をかけた反抗作戦の将に名を連ねるにはいささか性急と思つたのです。

「先輩方がいれば私など本当にお飾りでしょう。伝え聞く魔術師様ならむしろ楽ができて良いと笑いませうが、あの世の親父から何か天罰が降りそうで怖いのですが」

「謙遜は不要ぞ、坂上の子よ。確かに我らならば蝦夷に勝つことは容易いかもしれぬ。しかし、帝は根本的解決をお望みなのだ」

「根本的?」

訝しむ田村麻呂に歴戦の将達は微笑みを返します。

「左様。蝦夷との泥沼の戦を終わらせ、完全に服属させる。ついに日ノ本を一つにする時が来たのだ」

「しかし、我らは老兵。まもなく退き際がやってくる。それに、我等は力を持って征する以外のやり方を知らぬ。血で血を洗うやり方では蝦夷は服属せぬのは、長きに渡る戦いの歴史がそれを証明しておるわい」

「だからこそ、君のような若者が必要なんですよ。田村麻呂君の智略と、君の指揮するウマ娘とは、都の守護にとつてきわめて貴重なものですが、このような状況下で君を都にとどめておくのは、炊きたての米をお櫃のなかで堅くしてしまうようなものです」

先輩方の温かい言葉と期待に田村麻呂は身が引き締まる思いでした。

——ほんの数秒後までは。

「それと……田村麻呂君はウマ娘に随分と愛されているようだね。細君は、鈴鹿と言つたかな」

「はい、お恥ずかしながら愛されております」

「何を恥ずかしがることがある。儂ら全員嫁はウマ娘ぞ。言わば指導人の同胞ではないか」

指導人の同胞。言い換えればうまびよい被害者の会である。なお、日本における創始者にして終身名誉会長は聖徳太子であります。

「ところで話は変わるが、坂上家には代々伝わるうまびよいの秘技があるとか……ここはお近づきの印に先輩を助けられると思つてちよつとで良いから教えてくれんか」

「はあ」

「頼む、また来年の春には繁殖期が来てしまう。今年は何とか耐えられたが我らは衰える一方。妻は変わらさずまだつち。我は辛い、耐えられない」

「後生だ。妻は本当に容赦が無いのだ。満足させなければ『私にはもう魅力がありませんか。それとも他の女が気になりますか。違う、違う、違う。私以外を見ることなんて許さない』と存在しない恋敵に嫉妬して虚ろな瞳で見てくるのだ！」

「あの娘たちの恋愛観は何なのですかね。私がもう歳だからもつと若い人を伴侶にしたらどうかと断つても、『ああ、気になさらないでください。多少時間がたったお米でも、ちよつと温めるとけつこうおいしく食べられるものです』と言つてその夜に私がいたでかかれてしまいましたよ。いやはや、どうしましょう」

「……………とりあえず、鍛えましょうか」

うまびよいの道に王道なし。心技体、全てを尽くして立ち向かつてこそうまびよいはなせるのだ。

やはり筋肉。筋肉は全てを解決する。体力こそパワー。速さは不要。賢さなど捨てた。体力と根性で人はウマ娘を満足させられるのか。

出来る、出来るのだ！

「あ、そういうの良いで技を教えてくださいませんか」

「心はともかく体はもう無理じゃろ。技で挽回せんといかんのだ」

「無駄スキルポイントに技量はある故、金技量でも何でも良いぞ」

「……………ならば、仕方ありませんね。では手始めにうまびよいの序盤でウマっ気が暴発し

そうになった時に役立つ、『鋼の意思』を伝授いたしましょう」

「「「おおおおおッ！」」」

遠征軍の絆が上がった。

鈴鹿御前はじめ將軍たちの愛妻のやる気も上がった。

その後、將軍たちの体力が50下がった。

ともかく、軍を率いた経験の乏しい田村麻呂が副使として登用された理由は田村麻呂の戦略家・戦術家としての能力を期待するとともに、強力なウマ娘を副官とする阿弓流為への警戒から鈴鹿御前を戦力に加えたい朝廷の意図が見えます。

一方、東北地方では1月11日に蝦夷側の領主である阿奴志己等が陸奥国府にウマ娘の使者を送り、朝廷に服属したいと考えているものの、他の蝦夷の民が妨害して叶えられないと申し出たため、食べ物を与えて放牧したとの報告が来しました。

朝廷から陸奥国司に対して蝦夷は虚言もいい、服属と称して利を求めるので、今後は蝦夷の使者がきてもむやみに物を賜らないことを命じています。

しかしー

「あのお、また食べ物を頂けないかと思ひまして。いえ、別に朝廷側のご飯が美味しいからとかではなくてですね、これも服属の練習。そう、朝廷に服属したときには食文化も変わりますから、その練習ですわ」

「ーません」

「え？」

「あげません！」

「そんなあ、よよよ」

「う”わ”あ”あ”あ”あ”！か”わ”い”そ”う”た”あ”あ”!!あ”け”る”よ

”お”お””

「あの、チケ……じゃなかった、国司。一応これ勅命なんだけど、いいの？」

「た”い”し”よ”う”ふ”た”よ”お”。お”て”か”み”き”て”る”か”ら”あ””

「……通訳」

「都からお手紙が来てご飯あげても良くなったみたいですね」

「よく分かるね」

「もつと北の方言にくらべれば聞き取りやすいですよ」

相手が蝦夷でもウマ娘が相手だと対応が甘くなりいまいち効果はなかったようです。

とは言え、792年8月17日の勅では蝦夷の将が服属を望んでいることに際し、都へ上がことを許し道中では軍士300騎をもって送迎、国家の威勢を示したとあります。

また、同年11月3日に同じく蝦夷の将である阿波蘇、宇漢米公隱賀、吉弥候部荒嶋が長岡京へと入京して朝堂院で饗応され、阿波蘇と隱賀は爵位第一等を、荒嶋は外従五位下を賜り、今後も忠誠を尽くすようにと桓武天皇が言葉をかけています。1月時点と8月以降では朝廷の立場が一転しているわけですが、なぜこのようなことが起きたのかと言えば、原因は明らかでありましょう。

「正面切つて戦うだけが兵法ではない。そんなのは猪武者がすることだ。敵の数を減らし、味方を増やせば戦争は勝てるもの。利益だけでは理解は生まれず、理解だけでは腹は膨れない。両方与えれば、敵はころっと味方になる、簡単な理屈さ」

田村麻呂が最も得意としたのは戦場での切り合いよりも、むしろ相手を味方につけてしまう交渉術でした。これにより蝦夷の民は戦う前から朝廷への服属者が相次ぎ、戦局は有利になっていったのです。

「さあ、舞台は整った。今回は楽ができそうであれしいね」

794年3月6日、弟麻呂率いる遠征軍が出発。3月16日には征夷のことが都に報告され、3月17日には参議・大中臣諸魚に伊勢神宮に奉幣せしめ征夷を報告しています。

この時、田村麻呂は自らの指揮する部隊に

「知つての通り蝦夷側は次々とこちら側についてくれてパカ真面目に戦わなくても待つ



ていれば勝てる状況にある。故に、我が軍は勝つことより負けなことを方針として採用する。みんな、かつこうが悪くても良い、生き残れよ！」

「「はいっ！」」

「俺たちの行動原理は？」

「「伊達と酔狂！」」

「生き残るコツは？」

「「世の中を、甘く見るごと！」」

「よろしい。これは偉大なる先人の言葉を拝借したものだが、たかだか一地方の存亡だ。競技に較べれば大した価値もない。気楽に行こう」

「「応ッ！」」

6月13日、歴史書には「副將軍坂上大宿禰田村磨已下蝦夷を征す」と短い記事のみあり、蝦夷征討の關係記事は散逸しているため、この出陣後の具体的な経過や情況はほとんど不明であります。

9月28日には諸国の神社に奉幣して新たな都に遷ること、および蝦夷を征すことを祈願しているため、蝦夷征討は継続中であつたと考えられます。

10月22日に長岡京から新京に遷都されると東北から戦況報告が届けられ、遠征軍は軽微な損害で多数の敵を討ち果たし、さらに戦わずして服属する者は時が経つほどに

増えているとの報せに桓武天皇は大いに喜びました。

そして、田村麻呂らがまだ東北で戦っている12月、新京は「平安京」と名付けられます。

奈良時代は終わり、ここから平安時代が始まるのです。

年が明けた795年2月23日、弟麻呂は初めて見る平安京に凱旋して天皇に節刀を返上しました。同年2月7日には征夷の功による叙位が行われ、田村麻呂の位階は従四位下に進みました。

「……………」

「あなた、どうしました?」

「不満だ」

「え、こんな昼間からですか。私は構いませんが、まだお陽様も高いのにうまびよ」

「違う、そうじゃない。先の戦、俺は蝦夷の民との戦を完全に終わらせるつもりだった。なのに、都の連中は遷都したから祝のため帰ってこいだの、勝っているのだからもう大丈夫だろだのと勝手なことを言いやがって。おまけに老人共とくれば『東北の綺麗な空気で身体が若返った。戦は若い者に任せて、妻と余生を過ごす。もう、うまびよいなんか怖くない』とか言って辞表を出しちまうしな。お將軍たちは遠征軍からの引退には成功したものの、真備以来の様式美として当然のごとく辞表は却下された。しかも彼らがう

まびよいから逃れられる筈もなく、翌日には干からびた將軍4名がそれぞれの屋敷で発見されることになる。何より許せんのは阿弋流為だ。あの野郎、俺達から逃げやがった」

彼が聞けば「無茶を言うな」と言いたくなる文句です。先の戦において阿弋流為は蝦夷軍が内部崩壊するのを防ぐので精一杯であり、田村麻呂と戦場で戦うなどとても手が回らなかつたのでした。

「私は、あの美しい景色をあなたと駆けられただけで満足でしたよ」

「嘘だね。景色に浮かれて走って、その後には火照ってしまいましたとか言ってきたのはどこの誰だったでしょうか」

「……（顕明連チラツ）」

「お、俺は屈しない。あの時も流石に戦地では他の將兵に申し訳ないから逃げたんだぞ。それを美しい景色を二人で駆けたとか記憶を捏造するんじゃない!」

「身体が、とても暖かい。何だか因子継承（意味深）しちやいそう」

田村麻呂は逃げ出した。如何に超人である彼でも斬り合いならば何とかなくてもうまびよいだけはいけない。

しかし、脚でウマ娘に勝てる筈もなく――

「ふう……：気持ちよかつた」

「ウマピョイニハカテナカツタヨ」

796年3月9日、田村麻呂は陸奥出羽按察使兼陸奥守むつでわあぜちけんむつのかみに任命されると、同年10月27日には鎮守将軍も兼ねることになります。翌年の1月27日、桓武天皇より征夷大將軍に任ぜられたことで、東北地方全般の行政を指揮する官職を全て併せ持つことになるのです。要するに丸投げである。

798年7月12日に従四位上、799年5月に近衛権中將になると、この頃には肩書きが「征夷大將軍近衛権中將陸奥出羽按察使従四位上兼行陸奥守鎮守將軍」となっていました。

「いや長いだろ！ 死んでもいないのに特進させやがって、俺に死んで欲しいのか！」  
「そ、そんなことないんじゃないですか？」

「いいや、中央貴族のボンクラ共のことだ。戦死した特進を前渡ししたから生きて帰るなど言いたいんだよ。俺は伊達と酔狂で戦をするし、民のために戦う誇りもある。だがな、母親の着物の影に隠れて出てこないような腰抜けのために命なんか張れないし、愛妻も配下もウマ娘達も巻き込めるもんかよ。ふざけやがって」

すつかりやる気を無くした田村麻呂はのろのと準備をし、ようやく出陣したのが801年3月31日、田村麻呂が44歳のときでした。

結局、田村麻呂を心から信頼する桓武天皇が他の貴族の前で田村麻呂の武功を褒め称

えると同時に、

「そういえば、朕の記憶では魔術師様も元々は皇族。藤原氏もウマカイを始め軍事には明るかつたはず。仮にではあるが、田村麻呂に何かあればこれまで田村麻呂をパカにしておつたものこそ遠征軍指揮官には相応しかろう。なに、出征前に特進はさせてやるゆえ安心するがよいぞ。まさかとは思うが、田村麻呂をパカにしておいてできぬなどとは申さぬよな」

と、容赦なく告げたことで中央貴族は震え上がり、田村麻呂は溜飲を下げた後に征夷大將軍として節刀を賜つて平安京より出征しました。率いる軍勢は4万です。

「時が経ち、阿弖流為は盛り返すかと思えばそうでは無かつた。拍子抜けだな」

801年11月6日に「征夷大將軍坂上宿禰田村麿等言ふ。臣聞く、云々、夷賊を討伏す」とのみあり、征討が成功していたことがうかがえます。

801年12月7日に凱旋して節刀を返上すると、12月15日には従三位を叙位、翌年の1月には近衛中将に任命されました。

2月14日、田村麻呂は造陸奥国胆沢城使として胆沢城を造営するために陸奥国へと派遣されます。

かつての通説では胆沢城の造営について、阿弖流為を追い込むための拠点だったと説明されてきましたが、近年では和平交渉の結果、阿弖流為らの正式降伏に向けて話し合

いが落ち着き、それにともなつて戦鬪が全面的に終結したため、工事の着手が可能になったとの見方もされています。

「よし、お城を建てちゃうぞ。凄いのを建ててるぞ」

「嘘でしょ……もう戦も終わりなのに本気ですか？」

「何か嫌な予感がするんだよ。蝦夷を服属させて、本当に戦は終わるのか。いや、これだけ都から離れた場所なら、良からぬ考えを抱く者も現れる。その時、この城が我々にとつて重要な拠点となる……そんな予感が」

「それは……嫌な予感ですね」

「外れてくれれば良いんだがね。けど、嫌な予感つてのはだいたい当たるんだなこれが」  
この時に田村麻呂が築いた胆沢城は東北地方の鎮守府として150年間機能し、前九年の役・後三年の役においても多賀城と共に兵站基地として活躍することとなります。

「しかし、昨日の雨で随分とぬかるんでいるな。こんな足場では如何にお前でも満足に走れんだろうな」

「そうですね。できれば芝のほうが私はー」

「た、田村麻呂様あー！」

血相を変えたウマ娘が田村麻呂の元へ駆けてきました。

「どうした、敵襲か？」

「いいえ、もつと重大事です。都のウマ娘への挑戦者が現れました」

「何だと!？」

競技場。これはウマ娘ならば決して覆ることのない絶対的な式です。それを田村麻呂も十分に理解するとともに事が大きくなる可能性を感じ冷や汗を流しました。

田村麻呂と鈴鹿が急いで仮設競技場に赴くと、泥にぬかるむ路を翔ぶように駆ける仮面のウマ娘が他へ大差をつけての1着。辛うじて整備されていた芝の競技場でも、栗毛の怪物がまるで全身から蒼い気迫を放つが如き走りを見せ、やはり圧倒的な強さで他のウマ娘をねじ伏せました。

「嘘でしょ……あの子たち、坂上のウマ娘よ」

鈴鹿が息を呑むのも仕方ありません。

坂上氏のウマ娘は皆、鈴鹿御前ほどではありませんが皆才能に溢れ、厳しい訓練を積んでいます。

この日は確かにバ場は悪いですが、それは相手も同じこと。なんの言い訳にもならないのです。

「うーん、全然物足りないデース。もしかして、油断しましたか?」

「悪路王、そんなはずないでしょう? きつと今まで工事をして疲れていたんですよ。大和のウマ娘さんたち、『浮き沈み七度』とも言います。今は調子が悪くとも、これから

きつと良くなるはずですよ」

仮面を被ったウマ娘は垣間見える碧い瞳から不満げな視線を漏らし、栗毛のウマ娘はたおやかに笑いながらも決して油断ならぬ雰囲気を感じていません。そして、二人の後ろには独特の紋様の手ぬぐいを頭に巻いた民族衣装の男。その顔は、髭面にはなつたものの幼き頃に見た顔の面影を残していました。

「はん、大和のウマ娘ってのはこんなもんかい。ちよいと育成が悪いんじゃないのかあ、田村麻呂」

「阿弓流為……」

好戦的に笑う阿弓流為に田村麻呂もまた好戦的な笑みを返します。

一目見た瞬間から分かっていたのかもしれない。いつか、自分達は戦う運命にあると。そして、その時がきたのです。

「戦は流石だな。とてもじゃないが勝てねえ。そもそも、戦う前からこちらが負ける状況にしやがって。無学の俺に少しは手加減しやがれ」

「パカを言うな。巢伏で俺が同じことをやれと言われてもできないくらい見事な用兵を見せた奴に正面から戦うなんて猪武者も良いところだ。俺は伊達と酔狂で戦いはするが、自殺志願者ではないんでね」

「はは、何十年経っても伊達と酔狂か……変わらねえな、お前は」



「お前こそ、剣呑な雰囲気は変わらないな。一杯やるか？」

「応とも、そのつもりで来たー」と、言いたいのが……どうやらそうもいかんみたいだな。俺の愛バが何か怖い」

「き、奇遇だな。何故か俺の愛妻もさつきから刀の鯉口を滅茶苦茶鳴らしているんだ。またにしよう」

「そうしよう」

蒼い気迫を放つ栗毛のウマ娘――阿弓流為の副官である母禮と、顕明連の鯉口を笑顔で切りまくる鈴鹿御前の殺気に男二人の再会を記念する酒盛りは一旦お預けになりました。二人が激怒した理由は共通して嫉妬です。男同士の友情にさえ彼女は我慢ならぬほどの独占力をもっていました。

「それで、敵方の総大将たるお前が何で俺の前に？ 単なる降伏じゃないんだろう」

「まあな。近いうちに降伏するのは話し合いで決まったとおりだが、俺達はちよいと納得がいかないうちところがあつてな。俺が負けたのは別に良い。お前が優れていただけの話だ。だがな、何故だろうな。みちのくウマ娘は大和ウマ娘に劣る？ そんなパカな話が出てきている。これは、どういうことだ」

「何だと」

田村麻呂が振り向くと、彼が従える配下の中から顔を背けるものがありました。おそら

く交渉の際に戦勝に浮かれて口が滑ったのでしよう。

「巢伏を思い出してみる。貴様ら朝廷軍は惨敗、大敗、完敗のあげく東北の塵の一部となりはてるところを愛バ達のお情けで生きながらえさせてもらった。それなのに再侵略してくるろくでなしではないか」

「……」

「そして、今しがた競つてみれば……まるで話にならん。芝でも砂でも負ける大和ウマ娘のどこにみちのくウマ娘に勝てる要素があるというのだ」

「……」

「お前の愛妻も、どうせ大したことはないのだろう。そんなやつに誰が降るものか。戦に負けたが、みちのくウマ娘が大和ウマ娘には決して劣らん。いや、むしろ勝っている。そう宣言しなければ降伏するのはナシだ」

「貴様、俺の愛妻をパカにしたか」

「そうだ。落とし前の付け方は、分かるよな」

「言われずとも」

「そりゃ良かった。では、報せを待つぞ田村麻呂。せいぜいそれまで朝廷の捨て犬共を鍛えるのだな。帰るぞ、母禮、悪路王」

「え、もう帰りのデスカ？　今からみなさんと格闘の練習をすると約束がー」

「悪路王、阿弔流為さんの言うことがきけないんですか？」

「お、おう。母禮ちゃんが何かコワイです。ではみなさん、また走りましょう。ワタシは世界最強ですけど、挑戦者は拒みませーん」

騒がしく帰ってゆく阿弔流為一行。

残された田村麻呂達はお通夜のようなムードです。手塩にかけたウマ娘達はたった二人に完敗。指導人としての田村麻呂の誇りはズタズタでした。しかし、彼本人はそんなことは小さな問題に過ぎません。彼の逆鱗に触れたのはそこではないのです。

「鈴鹿、都から僧を呼べ」

「はい」

「胆沢城が完成次第、この地にて競技を開く。そのためには厳正な審判ができる者が必要だからな。阿弔流為め、人の滾らせ方をよく知っている。俺は俺自身がパカにされたならば笑って世界最強の言葉で言い返したさ。だがな、奴は俺の愛バ達を、何より愛妻を敢えてパカにしがった。もはや言葉では足りない。朝廷の捨犬だと。言ってくれるじゃないか。俺たちを何だと思ってるんだ、奴らは」

802年2月25日に田村麻呂は都から僧を派遣することを朝廷に求めています。理由は戦乱による彼我の戦没者の冥福を祈るため、蝦夷の教化のためなどの説が推定されています。しかし、僧侶がこの時代では仏教家、学者、医者、教師、指導人、ウマ娘

ならば競技者、そして競技の審判など様々な分野を担う国家公務員であったことを考えると、田村麻呂は特定の目的ではなく複合的な理由で僧侶を従軍させたのではないでしょうか。

そして、ついにその時がやって来るのです。

胆沢城が完成し、その記念の競技が開かれるとの報せが東北地方を駆け巡り、みちのくウマ娘の面目を晴らすと共に大和ウマ娘を打ち倒すべく強豪達が集まります。

後世で最も速いとされるウマ娘。

最も強いとされるウマ娘。

最も恐ろしいとされるウマ娘。

身に纏う雰囲気は他とは一線を画し、まさに一触触発。

伝説の戦いまで、あと僅か。

## 第6回「東北遠征 みちのくウマ娘の伝説」下

胆沢城杯、開催三日前。

大和のウマ娘とみちのくウマ娘の間では細かいルールのすり合わせが行われました。距離、バ場、枠。地域によってまちまちなルールをすり合わせ、すべてのウマ娘が心置きなく走ることができる。田村麻呂はその調停役として僧侶の派遣を希望したのです。

幸いなことに、朝廷と蝦夷の間にそれほどのルールの乖離は無く、競技は芝880間(1600m)、左回りと決まりました。

「今回は逃げずに来たようだな」

「はん。負け戦ならゴメンだが、勝てる勝負を取りこぼす気はないんでね」

「そりゃ結構。それで、これは他の出走バとは関係のない特別な掟だが……了解か？」

最後に取り決められた文言。阿弭流為はそれについて何のためらいもありませんでした。

「いいぜ。文句は無い。むしろお前こそ本当に良いのか？ 都に帰ったら首が飛ぶぞ」

「それがどうした。お互いに命をかける。そうでなくては対等では無いさ」

「違くない」

互いに了承し、彼等は開幕式に赴きます。

当時、競技は政治的・宗教的な行事の側面もあり、初日と2日目は祝賀会や儀式、詳しいルール説明、交流会などに費やされます。

一通りの儀式が終わり、演台上上がった田村麻呂と阿弓流為により競技のルールが説明されました。

芝880間。何の小細工もない真つ向勝負。ウマ娘達は皆領き、異存はないことを示します。

だが、最後の最後に田村麻呂は特別な掟を追加したのです。

「この競技において、みちのくウマ娘が勝利すれば我々朝廷軍は胆沢城を明け渡し軍を退く。しかし、我々大和のウマ娘が勝った暁には阿弓流為、お前の命を貰う」

ざわつくウマ娘達。

思わず長柄の刀に手をかけた母禮を悪路王が必死に止め、鈴鹿御前は厳しい目を全体に送り牽制します。対して、田村麻呂と阿弓流為は互いに笑みを浮かべて並び立っていました。

「受けて立つか、阿弓流為」

「はん。受けて立つというのは違うな、田村麻呂。むしろお前達こそ、俺達にかかつてき

な」

「言うじゃないか。では、勝負といこうか」

「応とも」

拳をぶつけ合い、両雄は演台から降ります。

競技開始までの自由な交流の場は大和ウマ娘もみちのくウマ娘も変わりなくざわめき、困惑が広がりました。

「……どういうことですか」

「何がだ？」

「あなたの命をかけるなんて聞いていませんよ」

「決めたのはついさっきだからな。まあ、賭け金にしては大したもんじゃないがね」

「どうしてあなたは、自分のことをそんなにも蔑ろにするのですか!」

阿豆流為は決して主戦派ではありませんでした。しかし、故郷を救うために立ち上がり、煽った者が我先にと朝廷におもねる中でただ一人で戦い続けた蝦夷の英雄。理不尽な戦力差を目の当たりしながら愛する人を支え続けてきた母禮も、今回ばかりは我慢なりませんでした。

「蔑ろにしているつもりは無いんだがな」

「なら、いますぐ辞めましょう!」

「そう言うなよ、母禮。どうせ負け戦なら、せめて一度勝つて終わりたいじゃないか。最後の一花、俺に咲かせてくれないか」

死を覚悟した男の目に、母禮はこれ以上何も言えませんでした。

「……分かりました。私、走ります。けれど、こんな事なら……あなたと何処か遠くへ逃げてしまえば良かった。今はただ、己が許せません」

肩を怒らせながら立ち去る母禮の背中を阿互流為は気まずそうに見送りました。

「怒らせちゃったな。お前も怒っているのか、悪路王?」

悪路王は先程から呆然としています。

そもそも彼女は何者なのでしょうか。

海に向こう、北の大地の更に向こう、遙かなる大陸で生きる民の血を継いだ青い瞳のウマ娘。

彼女は走ることが好きでした。ウマ娘なら当たり前のことなのに、彼女はあまりにも――強すぎました。

芝も、砂も、泥も、彼女にはまるで翼があるかのように駆け抜けます。

瞳も、髪も、言葉も、何もかもちぐはぐなウマ娘。親もなく、ただ一人で生きる十二カ。だから人々は少女を畏れたのです。青い瞳を隠すため、いつしか彼女は仮面を被せられ、焰のような紅い服――遠くからでも見えて彼女を避けるための服を着せられて。



誰も少女を受け入れようとはしなくなりました。

鬼と呼び、誰も近寄らなくなつた彼女は宛もなく彷徨い続け、山奥で行き倒れました。それを救つたのが、偶然狩りをしていた野性的な青年と栗毛のウマ娘で、以来彼等と共に暮らしてきた。

青年は指導人で、誰よりも頼りになつて、お父さんがいればこんな人が良いと思つた。栗毛のウマ娘は、とつても優しくてちよつぱり怖い。お母さんーと言つたら怒られそうなので、お姉さんがいたら、きつとこんな人なのだろう。

あまりに温かい日々に、少女は心から笑えるようになっていました。

青年の指導を受けた彼女は、ウマ娘として規格外の才能を持っていると分かりました。また、怖がられる。捨てられる。少女は恐ろしくなりましたが、青年と栗毛のウマ娘、それにみちのくウマ娘達は少女を恐れず、何度でも一緒に走つてくれました。

「俺達は、独りでは強くなれない」

青年は少女にそう説きます。

涙が溢れ、

だから、少女は戦いました。

家族を守るために、何でもしました。

けれど本当は彼女はただ、走ることが好きなごく普通のウマ娘なのです。戦いも、血

の臭いも、遠ざけてしまっても野原を駆けていたいだけなのです。

忌み子の仮面はいつしか反乱を、紅い衣は復讐を象徴するようになって、今も彼女は偽りの役割を演じ続けています。

いつか、この仮面を脱ぐ日が来るのでしょうか。

悪路王でも、高丸でもない。本当の自分。

少女の……ワタシの、本当の名は——

「——けどなあ、そりゃ俺だつて死にたいわけじゃないんだぞつ、と……おい、悪路王？」

「……」

「おい」

「……」

「チリホプニ、鳥は飛んでゆく聞いてるか？」

「んにゃ!? ちよつとおとu、阿豆流為サン！ 真名はやめてください！ 他人に聞かされたらどうするのですか！」

「素に戻っているぞ」

「……いじわるデース」

「悪い、悪い。あんまりにも気を張り詰めさせているみたいだからな」

「……」

「そんなに思い詰めるなよ。勝てば良いだけだろ？　いつものお前らしく、やっつけちまえよ」

「……ハイ」

「俺はお前を本当の娘だと思っている。だから、お前になら命を賭けて何の後悔も無いんだ」

「ワタシも、そう思ってます」

「なあ、パカな親父かもしれないけれど……父さんを助けてくれないか？」

阿弓流為の肩を悪路王は掴むと、今まで決して外さなかつた仮面を取りながら、その蒼い瞳を向けました。

「ふざけんなブース、なーに私が負けそうな雰囲気出してんですか！　言われなくても私は世界最強です！　あんな大和のウマ娘なんかには負けません！　絶対に勝って、勝って……もう、逃げようよ、お父さん……」

「ああ、そうだな……逃げよう。勝ったら皆で、生きて逃げような」

愛バの前では天衣無縫の英雄であっても、愛娘の前ではただの父親。阿弓流為は目に涙を浮かべて娘の頭を撫でました。

一方、田村麻呂と鈴鹿も明日の競技を前に最後の鍛錬を積んでいます。調子は最高。

後は出走を待つばかりです。

「不安か？」

「……いいえ」

「一応、実質的に俺の首もかかっているんだけどな」

「大丈夫です。私は負けません」

「それもそうか」

「はい。たとえ脚が砕けようと、私は必ず一着で駆け抜けます。だから待っていてください。第四の曲がり角、大櫓の向こう側で」

事も無げにそう断言する鈴鹿御前に、田村麻呂は何度目か分からなくなるほど惚れ直した。

そして、協議当日。

「ハ―イ、鈴鹿さん。今日はよろしくお願ひしマース」

「悪路王さん。はい、よろしくお願ひします。素敵な仮面ですね」

「は、ハハ……そうデスカ？ トイコベルぶっバ演」

「え？」

「オウ、北の言葉は分からないのですね。それは大変。出走前に他のウマ娘に話しかけられても何も返さないのはスゴく失礼デース」

「嘘でしょ……そんな作法があつたなんて。あの、せめて何か無難な挨拶が返せるように、教えてくれませんか？」

「イイですよ！」

「では、良い勝負をしましょうと言うには何と言えば良いのですか？」

「それはですね、ゴニヨゴニヨ」

「なるほど、発音が難しいですが何とか言えそうです。ありがとうございますね」

「イエイエ、オキニナサラズ」

鈴鹿御前と悪路王の友情（？）が深まりました。

出走を控え、鈴鹿御前も枠に入るべく競技場に足を踏み入れます。しかし、出走前のイキリたったみちのくウマ娘の中の何人かが鈴鹿御前の前に立ちふさがりました。

「やってみせろよシサム和（アイヌ語）」

「何とでもなる筈ね（ズーズー弁）」

「大和ウマ娘だど!?!（津軽弁）」

「あ、ええと……」

鈴鹿御前は相手が何を言っているのか分かりませんが、何となく健闘を祈る的な事を言ってくれているのは魂で理解できます※違います。今こそ悪路王から教わった挨拶を返すべきだと鈴鹿は確信しました。

「アン調子イェクカのドキアイヌ語のアン（私は）イェクカ（奪う）ドキ（酒盃）で、勝利の美酒は我にあり。勝つのは私だ。La victoire est moi。調子のんな、という超訳です。たぶん通じないのでインチキ言語です。」

「「は？」」

笑顔が引きつる蝦夷のウマ娘達。これには鈴鹿御前もびつくりです。

「……悪路ちゃん、何を教えたの？」

「秘密アース」

ややハプニングはありましたが、遂に出走の時を迎えます。

ここからは坂上氏の郎党である青山あおやまぼくしん拍進の私記、都への報告書、奥州の伝承、人々の語る英雄譚。それらを複合し、胆沢城杯を細部まで再現してお伝えします。

胆沢城杯は地方の競技とは思えぬほどの大盛況。奥州のウマ娘のみならず、日ノ本全国から指導人、ウマ娘、そして一般の聴衆が詰めかけました。その大歓声を受けて出走するみちのくウマ娘達はやや緊張した面持ちです。

展開は分かりきっています。問題は注目の三人、鈴鹿御前と母禮、悪路王がどう競争を作り上げていくか。

初見の相手ならば小細工無用の真つ向勝負。

今、出走。各ウマ娘一斉に飛び出しました。

母禮はやや出が良くなかったが、流石は歴戦のウマ娘。スツと落ち着いて前に持ち出す。

乾いた西日を浴びた、秋の東北の芝。そうです、鈴鹿御前、当然行く。問題は体力配分。

二番手は悪路王、脚はがっしりと土を掴み控えている。

その後ろ母禮、早くも盛り返している。阿豆流為との信頼の絆、決して負けられぬ大一番。

問題は体力配分ですが、第三曲がり。ここまでの440間(800m)を鈴鹿御前、それほどこぎつてはいない。

5バ身ほど先行して鈴鹿御前の逃げ、二番手には悪路王、ここで母禮は早めに出てきた大擲の向こう側。

(神様……神様……お願いします)

さあ、どうだ、どうだ、どうだ。

外から詰め寄ってきたのは緑の勝負服、副将の母禮。残り330間(600m)で並び立ってきた。ここまで、水時計で50……秒。50秒!? 1000mを50秒は世界記録を大幅に更新するありえない数字であり、流石に神話の類とされていますが、この記録から今なお鈴鹿御前は世界最速のウマ娘と言われています。

(もう二度と走れなくなっても構いません)

逃げ切れないか鈴鹿御前。外から母禮、続いて悪路王も上がってきた!

(だから、どうかお願いです。私に力を下さい)

母禮が伸びてきた!

鈴鹿御前に迫る、迫る。

ここで仕掛けるか阿弓流為の愛バ!

大逃げのウマ娘は後半に鈍る。それは、東西において変わることはない筈の常識。

愛する人を守るために、母禮は乾坤一擲の差しに出た。

あと3バ身、2バ身――

仕掛けるか。今か。いや、まだか。

最後の直線、右隣には悪路王。勝てる、勝って生き延びる。あの人とどこまでも、逃

げて、逃げて――

母禮が勝利を確信し踏み込みを強めてから僅か数歩、彼女は違和感を覚えた。

おかしい。

距離が、縮まらない。

「――」

そして彼女は見てしまった。



鈴鹿御前が、汗一つかいていないまま自分も、悪路王さえ眼中になく走っている様を。母禮は誤解していた。鈴鹿御前は疲れたから脚色が鈍ったのではない。敢えて、第四の曲がり息を入れたのだ。次なる加速——差しウマ娘に匹敵する再加速の為に。

「あ——」

一瞬、目が合った。

流し目で見てきた彼女の瞳は、どこまでも遠くを見つめるようで、母禮を敵として見ている感じがした。その底冷えするような瞳が、母禮の闘志に致命的な罅を入れた。

そして加速。

近付いた筈の距離は再び間を開けられ、埋めようのない差が広がっていく。

ありえない。

逃げウマ娘が、差しウマ娘に押し勝つなど、あつて良い筈がない。そんな存在に、どうやって勝てば良いのか。

（追いつけない……こんな……どうやって勝てば……）

母禮の闘志は、ここで折れた。

だが——

「まだデスっ！」

飛び立つ鳥の翼はいまだ折れず。

「まだ、勝負は終わっていません！」

悪路王が驚異的な末脚で上がってくる。

さあ真つ向勝負だ。

坂を登る！

鈴鹿御前はまだ逃げる。

外に少しよれながら悪路王。

母禮は伸びが苦しい。

「やっと見えたー」

鈴鹿御前は幻視する。

乾いた西日。吹き抜ける風。どこまでも続く芝の道。そして、道の先には笑顔で手を

降るー

「速さの向こう側。静かで、何処までも綺麗な景色。何より、あなたが見える！」

更に加速。

もはや彼女はウマ娘なのか。空気が爆ぜるあり得ない音が足元から響き、芝は抉れ、後続はただ呆然と前を走るニカの背を見ることができなかつた。

民話は語る。

『鬼も、怪物も。皆、影さえ踏めず。』

その者、弁財天の写身にして軍神の比翼。

最速の仙女。名を『』

鈴鹿御前だ、鈴鹿御前だ！

悪路王も我が身を叩くように加速するも距離は縮まらず、鈴鹿御前との差は3バ身。

「勝てるはずなのに。負けられないのに。どうして……」

逃げて差す！

何というウマ娘だ、鈴鹿御前！

いや違う！ 逃げてなどいないのか！ ただ速すぎるだけなのかアー！

「どうして届かないの！」

二番手は悪路王だが離れている！

110間（200m）を通過ッ！

異次元の逃亡者、最速の仙女、軍神が愛した最高のウマ娘、鈴鹿御前が逃げ切った！

大和ウマ娘の貫禄！

どこまでいっても逃げてやるッ！

見事だ、見事だ鈴鹿御前！

愛する人目掛けて視界良し。

少しずつ速度を落とした鈴鹿御前は、終着点の向こう側に立っていた愛しい人の無の

胸の中に飛び込んだ。

「勝ちました……あなた、私、勝ちましたよ」

「ああ、見たよ。俺にも見えた。どこまでも静かで綺麗な場所をお前が駆け抜けるのを。あれが、お前の見たかった景色なんだな」

「それだけじゃないの。あなたが見えたから……あなたがいてくれたから、私は誰よりも早く走れた。だから、あなたのおかげで私は走れたんです」

「そうか……ありがとう、鈴鹿」

暫しの抱擁の後、田村麻呂は決着をつけに行きます。

阿弓流為は身なりを整え、澄んだ瞳で田村麻呂を見ます。既に覚悟は終えているようです。

「負けたか」

「ああ」

「賭けは俺の負けだ。見事なウマ娘だな、侮辱したことを謝罪する。それにしても、俺の娘を負かすなんて。あいつが負けるなんて初めてだぞ」

「そうかい」

「それじゃ、持っていきな。できればこの首はできれば見晴らしの良いところに掲げてくれ。都ってやつをよく見たいからな」

田村麻呂はソハヤノツルギを抜くと、その柄尻で阿弼流為の頭を軽く小突いた。

「……大パカ野郎、誰がお前みたいなき面の首なんかいるかよ。そもそも、命を貰うと言ったが殺すなんて一言も言っていないからな！ 生きたままお前らは都に連れて行ってやる」

「いや、それ実質的に死ねってことじゃー」

「それがどうした！ 男の約束だろ。黙って俺に命を預けやがれ」

ドンと胸板を叩く田村麻呂。それを見て阿弼流為は悟ります。

嗚呼この男は、最初から俺達を生かそうとしていんだな、と。

「……つくづく伊達と酔狂で生きているな、お前」

「おうよ。悪いか」

「いいや、それが良い」

立ち上がった阿弼流為は敗北に打ちひしがれる愛バ達のところへと向かい、力いっぱい抱きしめます。そして、三人が大声で泣く声がしばらく辺に響きました。

802年5月19日、阿弼流為と母禮、悪路王が蝦夷軍500余人を率いて降伏。平安京へと帰還します。

遂に、長きにわたる東北遠征は終わりを迎えたのです。

しかし、阿弼流為らの身柄については公卿内で紛糾します。会議の場で田村麻呂は、

「奥州はその地の者に治めさせることが得策。そうでなければ何度でも反乱が起きるぞ」

と阿弓流為を故郷に返して彼らに現地を治めさせるのが得策であると主張します。しかし、公卿たちは「野生獣心にして、反復定まりなし。たまたま朝威に縁りてこの梟帥を獲たり。もし申請に依り、奥地に放還すれば、いわゆる虎を養いて患いを残すなり」と、あくまで阿弓流為は反乱軍の首魁として死ぬべきだと譲りません。

田村麻呂は激怒した。かの邪智暴虐の腐れ貴族を一人残らず切り捨てるべきだと決意した。実際、腰にあるソハヤノツルギの柄に手がかかつていました。

悲鳴を上げる貴族達を桓武天皇は冷ややかな声で征すると田村麻呂に一言、「そちが執行せよ。良きに計らえ」

とだけ言いました。

田村麻呂は伏して帝の意図に感謝すると、阿弓流為達を連れて都から遠く離れた河内国の名も無き山奥へと赴きます。

「もう少し都を見たかったんだが、まあ良い。ここでやるのかい？ どうせならもつと見晴らしの良いところが良いんだがね」

「田村麻呂、貴様……一度命を永らえさせておいてこの仕打ちですか！ これが、武人のやり方ですか！」

「しにたくない……しにたくないです」

毒舌を漏らす者、怒り狂う者、ひたすら怯える者。三者三様の有様に田村麻呂は申し訳無い思いに満ちます。

「あ……盛り上がりつついるところ何度もスマンが、静かにしろ。静かにしろって！  
おい、このパカ野郎。いいか、よく聞け。ここを逃亡地とする！」

「「はあ?」」

「都ではお前らを匿いきれないから、斬ったことにしてお前らをここに一旦逃がすと  
言っているのだ」

「いやいやいや、待てや！ ここ完全に山じゃないか。どうやって生きろと！」

「阿弓流為、お前は蝦夷の民だろ。だったら、できるじゃないか……狩りとか」

「雨風はどうやって防げばよろしいので?」

「そこに洞窟があるじゃろ」

「い、いつまでデスカ?」

「また近々奥州にもどる予定だから、それまでだな。何せ俺、征夷大將軍近衛中将陸奥出  
羽按察使従四位上兼行陸奥守鎮守將軍ですから。俺はもう奥州とお別れしたいんだが、  
奥州が俺を離してくれないのだ」

「長い、長い、肩書が長い！ むしろよく覚えたな」

「そんなわけで、奥州に戻るときにお前らも連れて行く。ただ、奥州にもお前らを居させるわけにはいかん。どこか遠くへ逃げてもらうことになるが……構わないか？」

「元々逃げるつもりだったからな。まあ、生きていられるなら異存はないさ。母禮と悪路王もそれで良いよな？」

「はい。阿弓流為さんと一緒なら、大丈夫です」

「ワタシも問題なしデース！」

802年9月。

阿弓流為たちは河内国の山奥にて斬られたと伝わりますが、罪人ならば公の場で処刑するところを何故か人目につかない場所秘密裏に殺害したと記録にあります。さらに、阿弓流為の首を晒した記録もなければ、その墓さえも記録に無いのです。

また、反乱軍の指導者だった阿弓流為達が朝廷に騙し討ちのように殺害されたのに蝦夷の民は反乱を興した形跡すらありません。そして、翌年803年に田村麻呂は再び奥州に赴き志波城を築くなど奥州の統治に乗り出します。そのために奥州へ赴く一行の中に阿弓流為達を紛れ込ませて、彼等を故郷へと送り返したのです。

しかし、奥州全域に及ぶ田村麻呂の支配地域から死んだ筈の阿弓流為の噂が出るのは田村麻呂の進退に関わりません。阿弓流為達は、更に北へと逃げなくてはならないのです。



小さいながらも丈夫な船を用意し、母禮と悪路王が食料と水を積めるだけ載せていきます。

荒れ狂うことで有名な津軽海峡。今日は西からの風も穏やかなまさに良い旅立ちの陽気。見送るのは田村麻呂と鈴鹿御前の二人だけです。

「世話になったな、田村麻呂」

「気にするな。……こう言うのも何だが、俺は都の腐れ貴族共よりも、お前に対して友情を感じている。もしかしたら、お前達三人と穏やかに過ごす。そんな未来もあつたんじゃないかと思つてしまうよ」

「そうだな……きつと、そうだ。俺は、母禮と悪路王が側にいて、走ったり狩りをして穏やかに暮らし、たまにお前と酒を酌み交わす。そんな生活があつたのなら……それ以外は何も……何もいらなかつたなあ」

太陽が眩しかつたのか、阿弓流為は目頭をおさええます。田村麻呂は、その肩を幾度か優しく叩きました。

「最後だから言うが、俺は一目見たときから思つたよ。弓を構えながらお前を見て、『ああ、こいつとは終生の敵となるか、或いは得難い友となるんだな』と。結局、両方だつたな」

「全くだ。それで、どこまで行くつもりだ、友よ」

「決まっている、世界の果てまで！ 生き残るコツはお前に教わったな」  
 「世の中を、甘く見ることに」

三人を乗せた船が港を離れて水平線の向こうへと遠ざかり、そして見えなくなりました。田村麻呂と鈴鹿御前は、彼等が水平線の向こうへ消えるまでずっとながめていたと言います。

阿弓流為、母禮、悪路王。

彼らのその後は歴史にありません。しかし、北米大陸で暮らすアメリカ先住民にはある不可思議な伝承があります。

遙か西、黄金の国から来た旅人達。

大いなる魂を持つ導き手。

El Condor Pasa  
 Condorが飛びたつが如き俊足の娘。

Grass Wonder  
 驚嘆すべき芝の申し子。

彼らを讃えよう。遠く離れたこの地にて、彼らは誰よりも自由に駆けた。

8世紀頃と考えられる伝承が誰を指すのかは分かりません。しかし、私は信じてしま  
 うのです。

彼等はどこまでも共に走り続けたと。

「……はい、東北遠征の終わり。これにて日本本土と九州、四国と現在の日本国の国土の殆どが統一されました。ヤツクルさん、田村麻呂はどうして蝦夷の民に対して融和的な戦略を取り続けたのでしょうか」

「そうですね、田村麻呂も決戦による解決も想定していたと思います。しかし、その前に蝦夷の民に対して融和政策を行い敵の数を減らそうという田村麻呂の戦略が思ったよりも蝦夷に効果を与えてしまったのですね。もともと蝦夷は巢伏の戦いが最後の反撃でした。その後は緩やかな滅亡を受け入れるかのように朝廷への服属がたて続き、最後まで抵抗した阿弓流為は実質的には孤立無援となっていました」

「なぜ阿弓流為はそこまで抵抗したのでしょうか」

「彼自身は決して好戦的ではありません。むしろ、面倒見の良さが仇となり、時代に乗り遅れて今更朝廷に服属できない人々の旗頭になってしまったわけです。それさえも田村麻呂が意図せぬ戦略で瓦解寸前だったわけですから、ついに一戦も交えず阿弓流為は田村麻呂に降伏したという流れです」

「そして、伝説の胆沢城杯。鈴鹿御前は水時計という信頼性に疑問のあるものではありませんが、1000mを50秒という、世界記録を大きく塗り替える記録を持っています。まさに異次元の逃亡者。最速の仙女の異名に偽りなしでしたね」

「みちのくウマ娘は、後の坂東ウマ娘やチェスト九州ウマ娘と並ぶ強豪を生み出すブラ

ンドとしていまだに語り継がれてきます。そんなみちのくウマ娘を蹴散らし、当時無敗だった悪路王や母禮を打倒したことで大和ウマ娘の実力を見せつけたことは、その後の奥州の統治に大きく作用しました。もしもあそこで鈴鹿御前が破れていれば、もしかすると大和ウマ娘は大したことないと思われ、蝦夷の民も反意を盛り返したかもしれません。しかし、激戦を征して見事なまでの逃げを果たした彼女に奥州の人々は敬意を抱き、後に田村麻呂と鈴鹿御前の娘である正林が陸奥国に定住した際には喜びのあまり長い間祭りが開かれたとさえ言われています」

「競技を通じて、長きにわたる人々のわだかまりは解け、爽やかな和解へと至ったのですね。それでは、今夜は田村麻呂と鈴鹿御前のその後について触れながらお別れとさせていただきます。ヤツクルさん、本日はありがとうございます」

「ありがとうございます」

東北遠征の後も田村麻呂は皇国の守護者として君臨し、嵯峨天皇と平城上皇の間で生じた藤原薬子の変でも都の治安維持に奔走し、変の首謀者の一人である藤原仲成を配下に命じ射殺するなど老いてなお智謀に衰えを見せませんでした。

811年5月、田村麻呂は自らの死期を悟ります。彼は死に際し「鎧兜を身に着け、剣を握ったまま葬ってくれ。死しても都を見守りたい」と遺言し、その通りに現在の京都

市山科にある西野山古墓に埋葬されました。

坂上田村麻呂、享年54歳。

愛妻の鈴鹿御前は田村麻呂の死を嘆き悲しみ、鈴鹿山へと戻ると一切公の場へ姿を見せなくなりました。田村麻呂の死の翌年、嵯峨天皇の勅命により鈴鹿山に田村麻呂の祭壇が築かれると、亡き夫の御霊を護ることに生涯を捧げ、113歳まで生きました鈴鹿さんの神通力つてこの時に身につけたんじや。愛怖いなあ。

鈴鹿御前が生涯をかけて護った祭壇は田村神社へと整備され、田村麻呂は田村大明神と神格化されます。また、この神社には他にも嵯峨天皇と、何故か倭姫やまとひめ第1話参照。邪馬台国の女王壺与にあたるウマ娘。が共に祀られています。これは、本来ならば鈴鹿御前を祀るべきところを官位等を持たなかった彼女をいきなり神格化するのを朝廷が憚り、妥協案として倭姫の名を拝借したのが通説です。当然、このような妥協を提案した役人がどのような末路を迎えたかは言わぬが花でしょう。現代は、田村麻呂の隣に鈴鹿御前の人形を飾り、夫婦神として信仰を集めています。

坂上田村麻呂と鈴鹿御前。

今も二人は寄り添い、果てなき高天原を駆けているのかもしれない。

終

制作 日本ウマ娘放送協会府中支部

次回予告

807年、太宰府。

弘法大師、帰国。ファースト説法。

仏はいる。そう思った。

第7回『平安仏教とウマ娘 弘法は食物を選ばず』  
ご期待ください。

## 第7回 「平安京仏教とウマ娘 弘法は食物を選ばず」 上

蘭肴美膳味無変。病口飢舌甜苦別。西施美笑人愛死。魚鳥驚絶都不悦。

どれだけ豪華な食事でも、私にはとても足りない。どれだけ美しい人の笑顔に焦がれようと、魚や鳥は驚き逃げてしまう。立場が変われば苦も楽も変わりゆくものだ。

真言宗の開祖にしてこの世をありのままに見据えた天衣無縫の怪物、空海。

一切衆生悉有仏性。

全ての者は悟りに至る可能性を持つ。

そう人々に説きこの世すべての人々を救うと誓った天台宗の開祖、最澄。

生涯を通して互いを高めあった二人の名僧。日本の仏教をさらなる発展へと導いた彼等は、どのような修行を積んできたのでしょうか。そこには、喜怒哀楽、愛別離苦が交わる笑いと涙、そして別れが積み重なっていたのです。

日本ウマ娘放送協会特別企画

ウマ娘と辿る日本の歴史

第7回 「平安仏教とウマ娘 弘法は食物を選ばず」



「こんばんは。今夜の主役は弘法大師空海。言わずと知れた高野山金剛峯寺、真言宗の開祖です。日本の仏教文化に多大な影響を与えた名バの中の名バは、どのような生涯を辿ったのでしょうか、その歴史に迫ります」

弘法大師空海——俗名は佐伯真魚。さえぎのまお 芦毛のウマ娘。

774年、讃岐国生まれ。父の佐伯田公は国司に仕える郡司という地方豪族、母の玉依御前はウマ娘でした。

幼い頃から学問の才を見せた真魚ははじめ四書五経を始めとする中国の古典に関心を持ち、18歳で官僚の育成機関である大学寮へ入ります。

しかし——

「真魚殿……その量は一体?」

山盛りのご飯。山盛りのお魚。山盛りのご飯。山盛りの煮物、大椀の汁物。山盛りのご飯。

ご機嫌な朝飯です。が、その量はあまりにも多すぎました。同僚ウマ娘は絶句しますが、本人は涼しい顔でご飯を咀嚼し続けています。

「……昼まで断食だからな。食べるうちに食わねば」

「そんな短い時間は断食とは言わないよ」

真魚は同僚ウマ娘の正論を全く聞かず、あれ程の山盛りの食べ物を一瞬で腹に入れると、厨房へと声をかけました。

「おかわり」

返答は空のお櫃。それは、もう食うなという鋼の意志を無言にしてあらゆる言葉よりも雄弁に語っていました。

「何故だ」

「いや、当然だよ。それよりも、食べてばかりだけど勉強はしてるの？」

「勉…強？」

あ、だめだこのウマ娘。同僚ウマ娘は慈愛に満ちた瞳で真魚を見ると、ぼて腹を晒すおパカにせめてもの学問の手ほどきをすべく彼女の私室へと向かい……後悔しました。

「なにこれ」

山積み of 書物。山積み書物。山積み書物。

不機嫌な知の暴力です。

「易経に春秋左氏伝……道教、経書。これ、隣の明経科のものじゃない。全部読んだの？」

「当たり前だろう。読まなければ暗記できない」

「ホントに暗記したの？ 二十有五年、春、陳侯使女叔來聘。」

「打開字典顯示相似段落・」

「夏、五月、癸丑、衛侯朔卒。打開字典顯示相似段落・」

六月、辛未、朔、日有食之、鼓用牲于社。打開字典顯示相似段落」

「ホントなんだ……」

「だが満ち足りない。どれほど書を漁っても、つまらぬことしか書いていない」

「ええ……」

「だから大学を辞めることにした。ご飯も少ないし」

「待つて、待つて、待つて！ 庶民の私達にとつて大学寮は唯一出世する道よ。それに、

今は飢饉疫病が蔓延して食べていけないかも分からないのに出ていくの？」

「問題ない。食べ物は適当なキノコやタンポポでも食べるし、出世などどうでも良い。

無駄な時間を過ごす方がよほどツライ」

「そこまでして……貴女は何を学びたいの？」

「分からない。ただ、私の阿頼耶識が求めるんだ……人とウマ娘の根源とは何なのか。

この世の真理とは何か。私を満たせるのはきつと、それだけなんだ」

佐伯真魚、19歳。僅か1年にして大学寮を去ります。

様々な学問に通じていた彼女は仏教や走禪への関心を深め、四国にて修行を開始しま

す。

彼女が実践した修行は、虚空蔵求聞持法。虚空菩薩の真言を百万回唱える、ただそれだけの修行。しかし、限られた時間の中でそれを成すには食事と睡眠を削らざるを得ず、同じ言葉を唱え続けるという単純作業の中で心の均衡を失いかねない、仏門においても荒行と言われるものでした。

物事とは、複雑な方が安定します。この修行は心を安定させていたあらゆるものを取り除いてゆき、針の一本の上に立つかの如き危うさの中で自らを見つめることとなるのです。さらに、ウマ娘ならば座してはなりません。百万の真言を走りながら唱えねばならないのです。これは、ウマ娘にとつて走ることこそが自然体であるため座すよりもむしろ走ったほうがより心の支えを取り除くとの教えによるものです。

(終わりまでどれほどかかる)

(なぜ私は走る)

(なぜ私は食べてはならないのだ)

(なぜ、私なんだ……)

(なぜ……)

真理など、本当はどうでも良かった。

ただ、走りたかった。意味などなくとも、走ることが好きだった。走って、食べて、寝

る。ただそれだけで良かった。

なのに、どうして私は飢える。どうして私は乾く。

なぜ私は頂点を目指さねばならない。誰なんだお前は……どうしてなんだ。

真理よ……ブラフマーよ、どうしてー

「どうして私を離してくれないんだ」

真理を求めていたのではなく、真理から愛された存在。それが、佐伯真魚の正体でした。

それは祝福ではなく、むしろ呪い。

いくら知識を得ようとも、真理は嘲笑うかのように矛盾や反例を挙げ連ねる。学べば学ぶほど、真理は真魚を追い詰めてゆくのです。

もつと近くへ、もつと寄って、もつと知って。そして、私を決して離さないで、と。

何時しか真理は形となり、芦毛の怪物の姿をして真魚を追い立てるようになりました。

阿波国、室戸岬。四国中を走る真魚に、遂に百万回目の真言を唱える時が来ました。

そして、唱え終わり脚を止めた真魚には、何の変化もありませんでした。

(何も変わらなかつた……何も、分からなかつた)

走り疲れた身体。襲い来る睡魔と空腹。これだけの負荷をかけておいて、何の成果も

ないのか。真魚は、無力感に囚われました。

無

この時、真魚には走ることも、学ぶことさえも心から消えていました。完全なる無心。一本のか細い針の頂点、剥き出しになった阿頼耶識に、真理はこの時を待ちわびていたかの如く襲いかかります。

世界とは、人とは、ウマ娘とは、何なのか。

何時も後ろから忍び寄ってきた芦毛の怪物が嗤い、万雷の歓声の中で真魚を追い抜き振り返ります。変わった髪飾りと白い装束こそ違えど、その顔はまさしく真魚そのもの。真理とは、即ち――

「梵我一如」  
お前は私だ

全ては自らの内より生ずる。悟りを開いた真魚は果てしなく広がる空と海の間で大笑いしました。

「ああ、この景色は良いな……」

794年、室戸岬。

佐伯真魚、私徳度正式に僧として登録されず、まだ勝手に名乗っているだけの僧侶。かつ20歳にして悟りに至る。

まだ造営を開始したばかりの平安京西寺にある庵に真魚は帰還を果たしました。

「帰ったぞゴンゾー」

「勤操和尚と呼べ、澆刺<sup>ハツラツ</sup>真魚のあだ名。元氣と食欲の有り余る様から勤操和尚が勝手に呼んだ。」

勤操和尚。真魚にとつて師と呼べる三論宗の僧です。

三論宗は『中論』『十二門論』『百論』を經典として尊重し、特に龍樹の唱えた『空』の概念を唱える宗派です。

「……怪物を飼ひ慣らしたようだな」

「あれは怪物などではないよ。なんの事はなかった」

「だが、何かを掴んだのだろう。無を得て、何を見た」

「我を見た」

その一言で勤操和尚は真魚が悟りに至ったことを理解します。

勤操和尚は笑います。仏陀の愛弟子、阿難陀や健陟でさえ悟りに至ったのは仏陀の涅槃の後です。当然、勤操和尚も未だ悟りに至る道半ばです。ところが、真理に愛され過ぎた真魚は一足飛びに悟りを開いてしまいました。そんな彼女に誰が師として得度させられると言うのでしょうか。

「得度を前に悟るとは……お前さん、これから仏の道を歩むとしても苦しむぞ。この国に、誰もお前を導けるものなどおらん」

「そうかもしれない。だが、導きならば人でなくとも良い。記憶は引き継げないが、記録ならば引き継げる。師には困らんさ」

「可愛くない弟子だ。それで、僧としてお前は何と名乗るんだ？」

「……小栗頂オッリキツてん」

「よし、お前しばらく得度させねえから！」

「何故だ!？」

佐伯真魚が正式に空海となった時期は諸説ありますが、近年では遣唐使に随行するため804年に東大寺にて勤操和尚の手で得度したというのが有力です。

得度前の真魚は24歳で日本初の戯曲である聾瞽指帰ろうこしいきを執筆します。これは、生老病死について仏教、儒教、道教の視点で登場人物が討論する内容で、現代日本の宗教学の先駆けでもあります。弘法大師直筆のものが高野山金剛峯寺に伝わりますが、その筆跡はやや硬く後の形式とは異なります。それもそのはずで、そもそも聾瞽指帰を記した理由は……。

「澆刺、お前の記した書が話題となっていて何が何だあの字は？ お前らしくない」

真魚の書く字は非常にエネルギーッシュであり、書かれた文字が喜んでいられるかのようです。しかし、聾瞽指帰の字はどこか恐れと緊張がありました。

「ゴンゾー。私も僧である前にウマ娘。ヒトの子なのだ」



「つまり?」

「これを書いた切っ掛けは、勝手に大学寮を辞めたことを家族から滅茶苦茶叱られて……その言い訳として書いた」

「だから、緊張で筆が硬くなったと?」

真魚はコクリと頷きました。

「パカかお前は!」

残念ながら弘法大師の黒歴史は現在も高野山にて秘宝として大事に保存されています。後の嵯峨天皇、橘逸勢と並ぶ天下の三筆として名高い彼女の筆跡は今も衆目に晒されているのです。

「解説には高野山金剛峯寺教学部のサトリダイヤモンド住職にお越しいただきました。サトリさんよろしくおねがいます」

「よろしくおねがいます」

「弘法大師は、今までのウマ娘と違い競技よりも学問中心ですが、全く競技には出なかったのですか?」

「今のところ、弘法大師が競技に参加した記録はありません。一説には非常に身体が硬かったため速く走ることが出来ず競技で他のウマ娘と競うのを嫌がったとも言われて

います。一方で、これは高野山ではなく比叡山、伝教大師が弘法大師から聞いたと伝わるものですが、一度でも競技を知れば己の内にある怪物を抑えることは出来ず、仏の道を志すことは出来なかつたと語つたとも言われています。しかし、一方でお遍路の中には弘法大師が開催をしたとされる地方競技も残っており競技自体を否定はしていません」

「あくまで、自らの身を慎むために競技から離れていたのですね」

「私はそういう説に依っています。当時でも非常に力のあるエネルギーシユな方ですし、出ていけば競技も普通に強かつたと思いますよ」

「弘法大師と言えば筆を選ばなかつたと伝わる能書家で、天下の三筆とまで言われましたが、緊張で字が乱れる事もあつたのですね」

「実はそれ、後世の人々が中国の書家の故事と混同したものでして、弘法大師はむしろ道具にこだわっています。唐で自ら上質な筆を手作りする手法を身に着けてからは筆作りを半ば趣味とし、自らの尾を用いて筆にすることもありました」

「自分自身が筆になることー流石は三筆、次元が違いすぎますね」

「弘法大師の乱れた字も我々にとつては彼女の足跡やウマ娘として感情のある確かに生きていた存在である証だと考えておりますので、非常にありがたい存在として祀っております」

「たぶん、本人は嫌がっていませんかね？」

「それもまた修行ですので、弘法大師の修行に関われることは我々としてはごく褒美です」  
「……徳が高い方々の考えは私には理解しがたいようです。さて、平安時代の仏教は一言で表すと腐敗が始まっています。政治と宗教が一体となった弊害と申しましょるか、東大寺を筆頭とする南都仏教の勢力が力を持ち過ぎてしまったのです。朝廷はこれを嫌い、長岡京への遷都を計画しますが、担当者であった藤原種継が暗殺されるなど混乱を極めます。この事態を受けて長岡京に見切りをつけて新たな都を定めるよう進言したのが、かつて宇佐八幡宮神託事件で配流されたものの再び朝廷にて出世を遂げたい和氣清麻呂です」

和氣清麻呂は新たな都として山背の地を提案します。治水関係に難点を抱えていた反省から東西に加茂川と高野川を有し、三方を山で囲まれつつも南に巨椋池を持つ背山臨水の地であるこの地こそ、平安京となるのです。そしてその鬼門たる場所、比叡山にはまだ寺社はありませんでした。清麻呂はその地にて庵を構えて修行する一人の青年に目をつけます。その青年の名は、最も澄み渡ることを意味する、純真無垢の象徴。

即ち、最澄。後の伝教大師です。

最澄は南都仏教との関係を維持しつつ、朝廷から新たな仏教界の勢力となり政治的な

秩序をもたらす存在として最澄が開いた天台宗に期待を寄せていました。

しかし、最澄からすればわざわざ南都から離れてまで政治的なことから遠ざかっていながらも関わらず勝手に周りが期待する状況です。

「困りましたね……また内供奉十禅師の誘いですか」

内供奉十禅師とは、帝を守るために結成された僧侶十人衆。いわば、仏教戦隊サトルンジャーです。最澄にはたびたびこの一員となるようオファーが来ており、更には桓武天皇からはリーダー（赤）以上の立場である存在（シルバー）を意味する頭巾の使用を許可されるほどの高待遇ですが、最澄は頭巾の使用許可だけありがたく受け取りつつのらりくらりとレンジャー入は断っていました。

「下手に出世すると南都の先輩方から何を言われるか分かりませんし、仕事が増えれば經典を読む時間が無くなるではありませんか」

最澄は經典マニアの傾向があり、後に空海とも經典の貸し借りをし合った挙げ句に返したくないあまり借りパクをして一時期絶交するほどでした。

「けれど、いよいよ断りづらくなってきましたね。泰範、どうしましょうか？」

「それウチに訊きますか？ お師匠さんのことなんやから自分で決めてくれんと困るわ」

泰範。最澄にとって初期からの弟子であり比叡山開山メンバーの一人です。最澄は

このウマ娘の弟子を殊の外目をかけており、彼女一人のために女人禁制の寺が多い中で比叡山はこの禁を緩めていました。

「おやおや、反抗期ですか泰範。私は親離れの悲しみと、成長の喜びの板挟みになってしましますよ」

「誰が親や！ そりや、まだ赤ん坊やったウマ娘だったウチを拾ってくれたのは感謝しとるし、競技の指導もしてくれたのは恩に着とる。けどなあ、お師匠さん……もうウチは赤ん坊やないんやで。ちんちくりんかもしれへんけど、立派なウマ娘やーって、誰がちんちくりんやねん！」

「うう、まだ御山に來たばかりで碌な食べ物が無いばかりに娘の成長を阻んでしまった。不甲斐ない媽媽ママを許してください」

「お師匠さん……そこはせめてオトンと言わせてくれへん？ 冗談でもキツイわ」

泰範の前半生は完全に謎に包まれており、後の最澄の執着具合から親子のような関係だったのでは無いかとも言われています。

「私は泰範の母となると阿弥陀如来に誓ったのです。だから、この豆乳を飲ませて貴女の成長を促さなくてはならないのです！」

「なんちゆうことを阿弥陀様に誓つとんねん！ いくら仏でも一発でツツコミ入れてくるで。ちゆうか、その豆乳やめてえな。ウチ、それ嫌いやねん！」

「好き嫌いはだめでちゅよ」

「オイコラ、終いには家出するぞ。ウチが嫌なのは豆乳だけやない。その布を浸らせて抱きかかえられながら飲むのが嫌やと言つとるんや！」

泰範が赤ちゃんにされるまで、あと一分。

泰範のことはともかく、内供奉十禅師への参加要請の断りと経典の収集を両立させるため最澄はある秘策に打って出ます。

「泰範、ちよつと良いですか？」

「何や、お師匠さん。ウチは今荷造りで忙しいねん。止めても無駄やで、ウチはもう赤ちゃんになるのもでちゅね遊びも懲り懲りなんや。お師匠さんも親心が少しでもあるんなら笑つて見送つてほしー」

「私、暫く唐に行くので留守を任せますね」

「聞けや！ ウチは家出するゆうてんねん。もうお師匠さんの赤ちゃんになるのは嫌なのに、何で唐になんか……え、唐やて？」

「はい。ちよつと経典買いに行つてきます」

「そんな面白い物感覚で行く場所ちやうやろ！ ええか、遣唐使の死亡率は半分以上なんやで。何でお師匠さんがそんな危険犯して行かなあかんねん！」

「けど、帝からのお願ひ断るのもいい加減心苦しいですし……我が国に伝わった経典は

全部読んでしまいました。見ますか、帝からのお手紙」

最澄は桓武天皇からのラブコールを渡しました。

「……何か、熱烈やな。これ受けへんと刺されるやつちゃうか?」

「私、追いかけるのは好きですけど、追いかけるのはちよつと……」

「鬼かあんた。受けたれや」

「受けません!」

「その鋼の意志は何やねん! あ、比叡山はうまびよい御禁制やで。良い子のみんなは『冷静沈着』を身に着けてから入山頼むで下テロップ『タマモオネエちゃん、ついでにナイスネイチャとの約束や!』」

「受けないといけませんかね……」

「受けたれや。すぐ留学行くんやから帰ったときには有耶無耶になつとるやろ。受ける代わりに留学費用でも都合してもらえばええやん」

「泰範」

(あ、流石にゲスすぎたか。あかん、お師匠さん怒つたら説教滅茶苦茶長いんやけどなあ)

「貴女は何て賢いのですか! 媽媽は嬉しいですよ」

「褒めるんかい! そこは親なら叱れや! 自分で言っておいて割とあかん思つたん

やぞー！」

ともかく、803年から最澄は遣唐使として唐に渡るべく準備を進めます。最澄は大陸の言葉を苦手としたらしく、通訳として後の初代天台座主にして古くからの弟子である義真を同行させるよう手配し、更には留学費用として数百両の金銀を賜っています。泰範「他人の金で行く留学は楽しいか？」これは、遣唐使の大使にかけられる金銀が200両ほどだったことを考えると破格であり、桓武天皇からの重い愛（物理）が感じられます。

その頃、奈良東大寺。

勤操和尚は荒れていた。

「うおおお、お前、この、パカ弟子、パカ弟子イ！ ふざけるな、ふざけるな、パカ野郎オオオ！ いきなり『そうだ、唐に行こう』と言い出した挙げ句に推薦状書かせまくって、更には得度するから準備よろしくとかふざけるなアア！ 諸々の手続きでどんだけ時間かかるか分かってんのかッ！ しかも、出港は来年だと？ もう選考が始まっているのに審査資格すらないとか何考えてたんだお前エエエ！」

「すまない、四国中で食べ物を買っていた。お返しに温泉掘り当てたりしたから大丈夫だとおもう」

後のお遍路である。



「お前、もう31歳だろ！ 王族育ちの仏陀でももう少しっっかりしていたぞー！」

「いや、阿頼耶識で真理くんが教えてくれたが……シッタールタはお供のウマ娘と阿難陀くんがいなければ割と生活能力無かったようだよ。最後は二人が目を離れた隙にその辺のキノコを食べて食あたりで涅槃入りしたみたいだ。その点、私はどんな食物も選ばない。私は仏陀を追い抜いたのではないか？」

「白毫も螺髪も無いのに並んだわけ無いだろうが提婆達多級の大パカが！白毫は眉間のイボっぽい何か。螺髪はパンチパーマみたいなものです。最近では立川でこの姿をした聖人男性が目撃されているみたいですね。」

「そうか。ところで得度の後の法名なんだが、自分で決めて良いのだったな」

「ああ、名乗りたいものがあるんならな。良いか、小栗とか頂点とかは駄目だよ。振りじゃないからな」

「安心しろ、そんな名前じゃないさ。私が悟りを開いた時、室戸岬から見えた海と空が余りにも記憶から色褪せなくてな。仏陀も言ったそうじゃないか、『この世は美しい』と。その通りだと私も思ったよ※この辺りから勤操和尚は提出書類のことを考えていまいち聞いていません。」

どこまでも広がる空と海。大いなる世界で自分はあまりにも小さく、だからこそ世界の大きさを表している。

色即是空空即是色。一があるから全があり、全があるから一がある。そして、いつかは自身も解脱し世界と溶け込み、あの空と海と同一になる。真理は全てを真魚に教えてくれた。

「だから、名乗るよ。今日から私の名前は……空海だ」

「……食うかい？」

「そうだ、空海だ！」

「……うん、ピツタリだと思うが。いや、僧侶として良いのかソレ」

「へ、変だと言うのか？ 大いなる意味を感じないのか？」

「いや、確かに大いなる意味かもしれないが（食欲的な意味で）。法名にしちゃ不味いだろう」

「ご、ゴンゾーだって、変な格好で輪つかみたいな鳴り物叩いて踊っていそうな法名のくせに！」

「オイコラ、得度取りやめるぞ。とにかく、音だけなら悪くないから、せめて空と海で空海と名乗れ」

「いや、さつきからそうだと言っているが？」

「え？」

「え？」

「……すまん、ニルヴァーナ弥勒のこと考えていた」

「57億年先のことを考えているとは良い度胸だな、ゴンゾー。今すぐ涅槃に行くか?」  
「やめてくれ、まだ悟っていないから下手すると人間道からも落第する。やめてくれ」

804年、東大寺授戒壇にて佐伯真魚は得度授戒。以後、空海と名乗る。

後に平安仏教を盛り立てる二人の名が歴史に現れましたが、まだこの時は顔を合わせてさえいませんでした。更に、空海は得度したばかりの新米僧侶であり、勤操和尚も留学僧としてねじ込むわけにはいかず、通訳か医者として推薦する他ありません。

果して、空海は遣唐使に選ばれるのでしょうか。

## 第7回 「平安京仏教とウマ娘 弘法は食物を選ばず」 中

「何でしょう……最澄の背後にトウインクルシリーズで見る母性溢れるウマ娘の影が見えた気が……」

「気のせいですよ。松平さん疲れているんですか?」

「いえ、調子はむしろ絶好調ですよ。故あって田村神社にお参りしたんですけど、そこでサイレンススズカさんと彼女のトレーナーさんに会いましたね。そこから妙に調子が良いのです撮影に関して労ったり談笑したのですが、松平アナが「鈴鹿さんは良妻です」宣言をするところをバツチリ目撃し、談笑した際にリップ・サービスで「本当に田村麻呂夫妻のようですね」と言ったところスズカさんが尻尾を振るほど上機嫌となりました。チヨロイ……」

「それは何よりです。高野山にも機会があればお越しくださいね」

「ええ、ぜひ行かせてもらいます。さて、空海は得度前に悟りを開いたわけですが……このような前例は他にいますか?」

「得度をせず、まだ経典を少し読んで荒行一つで悟ったのは弘法大師くらいではないですかね。近いのはお釈迦様かもしれませんが、お釈迦様もいくつもの厳しい苦行の果て

に菩提樹の下で静かに瞑想したところ悟ったわけですから期間的にも空弘法大師は恐ろしい速さで悟りに到達しています。普通、我々は真理に近づき悟りを得ようとしますが、先程の映像でもあったとおり弘法大師は真理の方から離そうとしません。一体どれほど前世で徳を積み重ねたら……或いは、異なる世界で愛情や信仰を得ればあれほどの速さで悟りに至るのかは私にも理解できません」

「そうですね……それはそれとしてオグリキャップさん食べ過ぎでは？ 高野山的にあれってよろしいので？」

「実に弘法大師をよく表現しています。ご本人もきつとそっくりだとお認めになるレベルですよ」

「公認ってどういうことですかね……。さて、得度を済ませた空海。しかし、公的には何の実績もない彼女を遣唐使に推薦するのは半ば無謀な試みと言えます。勤操和尚には空海の希望を叶える当てがあつたのでしょうか」

空海は不思議なカリスマ性を持っていたと言われています。それは、南都仏教の総本山たる東大寺の別当であつた大僧都の永覚が一目見た瞬間に空海が自分よりも遙か高みにあることを認め、空海の渡唐の支援を約束しました。

また、空海が唐に渡りたいと願っていることを知って劇的に反応したのが四国の人々

です。

「あのウマ娘さんが唐に行きたいんだと？」

「こりや大変だ。大陸の飯が食い尽くされてしまう」

「お金とか持つてないわよね、あの子」

「心配だ、心配だ。温泉掘り当てたり、溜池作ったりしてくれたけれど、あの子本当によく食べるからな」

「ねえ、みんなで手助けをしましょうよ。あの子が大陸でお腹を空かせるなんて可愛そうだわ」

「そうだね。何だかんだ世話になったし、助けてあげるか」

空海の猛烈な食事を知る四国の人々は、仮に空海が渡海すれば莫大な食費がかかることを懸念します。その思いが広まり、空海のもとには莫大な資金が集まっていったのです。正確な資金額は不明ですが、何と最澄が桓武天皇から賜った黄金を遥かに超える額であったことは間違いないと言われています。

しかし、南都仏教の支援と四国の人々による資金援助。これを持つてしても朝廷の人々は無名の空海に目を向けることはありませんでした。むしろ、平安京遷都の背景にはあまりにも朝廷と密になり過ぎた仏教勢力と距離を置きたい意図もあり、南都仏教からの支援は逆効果だったのかもしれない。

一方、朝廷が新たに鎮守国家の要として目をつけた比叡山の最澄は着実に実績を重ねてゆきます。

802年、高尾山寺にて行われた天台法華講話。南都仏教内の不和を取りまとめみせよという余りにも理不尽な依頼でしたが、最澄はそつなくこなしてみせます。最澄の説く法華経の解釈は南都仏教からしても反論の余地は無く、若くしてそこまでの境地に達した最澄に南都仏教の僧達はむしろ感心したほどでした。しかし、話が仏法から走禅——ウマ娘の育成方となると僧達の目の色が変わります。誰もが自らの愛バを、または己自身を高みへと導くべく最澄の話をギラギラとした雰囲気を感じることなく聞いていました。

「競技において勝敗を左右するものは言うに及ばず。されど悲観することなかれ。聞いたことはありませんか。御仏の前で、背後から駆け抜ける何者か……己より遙か高みにあるウマ娘が一筋の光へ向かって走り去るのを幻視したと、多くのウマ娘が証言しているのを。それこそが仏の慈悲、因輪廻子転継生承です。因輪廻子は全てを解決します」

「方便である！」

若い僧が大声を上げます。彼はなかなか指導するウマ娘が勝てず思い悩む秀才でした。

「最澄和尚の説かれるものはまやかしである！ ウマ娘には分相応あり。距離適性、脚

質、バ場適性、身体が持つ業も違えば走りたい気質も違う。釈尊が説かれたのはそれだけに見合った育成である！ 全てのウマ娘が可能性を持つというのは、ただ自らを慰めるだけのまやかしに過ぎない！」

最澄はその言葉に対して即座に反論します。

「否！ ウマ娘の可能性というのは限りあるものに非ず。仏の示された走禪の道は無限である。その様は広大無辺の大草原が如し。それをどうして否定するのか」

「ならばあなたは、砂の短距離しか走れぬウマ娘が芝の長距離の競技で優勝できると言うのですか！」

「できる！ 一切衆生悉有仏性なり。然るに、一切ウマ娘悉有優勝。救いも、可能性も、無限です！」

この世に仏に至る可能性の無いものなどいない。ならば、どうしてこの世に勝つ見込みのないウマ娘など存在するというのか。

この場にいた若輩の僧達は力強く最澄を支持する視線を送り、中堅以上の僧は『そんな当たり前のことは知っている。私の愛バの可能性は無限だ』と、自信に満ちた雰囲気以最澄を肯定しました。

いまだ反論しようとする若い僧の肩に老いた桜の枝が如き細指が置かれます。

「お若い方、あなたの負けだよ」



「春麗和尚……しかし、私は……」

華嚴寺の名僧、春麗和尚。この時、齢80を越える高齢でありながら現役時代から140戦以上もの出走を果たし、一度として怪我をしたことの無い仏の加護の化身とも噂されるウマ娘です。

「うららも、かつては芝の上を走るに向かず、長い距離を走ることもできなかつた。けれど、うららの師匠……行基菩薩様は教えてくださったの。『諦めるな。仏が救わないんじゃない。お前が自分を救おうとしないんだ』ってね。ふふ……懐かしいね。覚えていますか、みんな。40年前、芝の長距離。一着を取ったウマ娘を。忘れたとは言わせないよ」

無謀すぎる挑戦。記念出走だと誰かが言った。

反論はしません。ただ、結果で黙らせました。

小柄で、頑丈なことだけが取り柄のウマ娘が優勝する様を見て人々は称えました。うららしか勝たん、と。

「全ての僧よ。ウマ娘よ。老バの遺言と思つて聞きなさい。救いは無限だよ。うららの脚こそ、仏の慈悲の象。最澄和尚は正しいね。一切衆生悉有仏性、一切ウマ娘悉有優勝。走ることを諦めちゃだめだよ！」

一瞬、この場にいた全員が我が目を疑いました。

齡80を超えた白髪のおバが、桜の花のような髪をした10代の少女に見えたなど信じがたいことです。

最澄は恭しく一礼すると講義を終えました。

この高尾山寺の講義は最澄の名を高め、新たに鎮守国家を担う存在であると人々の期待を高めることとなります。それが、空海にとつては大きな障害に転じたのでした。

「間に合わなかったか……」

勤操和尚に届けられたのは、空海が遣唐使の選から外れたことを報せるものでした。

「ふむ、流石に遅かったか。何とか差しきれれると思つたのだがな」

「オイコラ、パカ弟子イ……言い出しつぺのお前が何で飄々していやがる。どうするんだよ、四国の皆様から集まつた寄付とか、東大寺大僧都の面子とか諸々。事後処理で死ぬぞ、俺が」

「案ずるなゴンゾー。果報は寝て待てと云うではないか。ここは何か食べてから寝ようではないか」

「報せはもう届いてるんだよパカ。お前は唐に行けないの。分かつていますかおパカさんー」

「何を言っているのだ。報せが来るのは明日だと真理くんは言っているぞ。だからとりあえず今は食って寝るべきだ」

ああ、とうとう気が触れたか。勤操和尚は空海が渡海の夢破れて正気を失ったと思いました。ところが翌日、出港した遣唐使の船のうち1隻が瀬戸内海で座礁し、九州にて修理中。乗っていた船員に空きが出る事と、そこに薬生一つまり医師として空海が乗ると決まった知らせが届いたのですか。ただし、期間は約20年。朝廷からの資金援助は無く、全て私費でまかなうことが条件です。

「空海、お前は……どこまで分かっていた？」

「何も分からないさ。ただ、私は信じて待った。それだけだよ」

空海が難波の港から旅立つことを知り、もともと讃岐の役人であった父が声をかけた四国の船団が最速で九州へと送り届けることとなりました。

遠く離れていく弟子。唐から帰れぬ期間は長く、次に生きて会えるのかすら分かりません。元氣よく手をふる弟子に、勤操和尚は曖昧な顔しかできませんでした。

（ああ、そうか。俺は寂しいのか。これが、愛別離苦なのだ。元氣で帰ってこいよ、空海）

斯くして、空海は遣唐使の一員として現在の長崎県五島市三井楽から乗り込み、日本を出立したのでした。

空海は船団の第1船。最澄は第2船の乗員です。空海の乗る船には思わぬ出会いもありました。

「へえ、君が変わりに来た坊主か。名前は？」

「空海だ。ところで、人に名を尋ねるのならばまず己からだが高貴な家では習わなかったのか？」

「高貴ねえ……橘の家なんてとつくに没落したから死んでもおかしくない遣唐使なんかにさせられているのに、どこが高貴なんだか。あ、僕の名前は逸勢はやなりだよ。ところで、君の指……筆まめが凄いいね。相当写経をしたようだ」

「多生は書くが……キミも利き手を隠してはいるが墨の匂いが身体に染み付いているじゃないか。ウマ娘の嗅覚を舐めないほうが良い。かなりの能書家と見た」

橘逸勢。かつて聖武天皇の左大臣を努めた橘諸兄第4話に登場。兄を名乗る不審者の曾孫にあたります。彼は後に嵯峨天皇、空海と並ぶ三筆と呼ばれる当代随一の能書家として名を馳せましたが……承和の変で藤原良房と従姉の檀林皇后に無実の罪を着せられて伊豆へと配流され、その地で亡くなります。長らく黒幕は良房と見られていましたが、当時は既に藤原氏の栄華は確実でありわざわざ良房が手を汚す必要が無かったことから、むしろ息子の仁明天皇の立場を安定化させるために檀林皇后が黒幕で良房は権力者故に巻き込まれたと思われる。事実、檀林皇后の薨去後に良房は即座に逸勢らの名譽を回復させました。また、檀林皇后は承和の変で孫の恒貞親王と従兄の逸勢に無実の罪を着せたことを娘の正子内親王に恨まれ、最期は自らの遺体を野辺に投げ捨て、そ

の様を記録するよう遺言するほど世を儚んだようです。

「……驚いた。まさか一日に二人も見抜かれるとは」

「二人？」

「ああ、あつちの坊主だよ。彼に筆まめを指摘されたから隠したのに……いやはや、ウマ娘は凄いいね」

「あつちの坊主とは聞き捨てならん。我にはりょうせん靈仙という法名がある」

「おや、地獄耳だね。お詫びに紹介するよ。彼は法相宗の靈仙和尚。こちらは薬士として乗り込んだ空海。同じ船に乗る者同士、仲良くしようね」

互いに視線を交わす二人の仏徒。靈仙は空海の澄み渡る空と凪いだ海のような蒼い瞳の光を見て、彼女が異常なほど心穏やかにあると察しました。

「空海殿。貴女は既に悟りを？」

「そういうキミは……あと一歩だな。いや、既に真理と共にあるが、見えていないだけか。喜べ、靈仙和尚。キミは、この旅で悟りを得るだろう。だがー」

「待て、空海殿……知っているさ。それ以上は言わなくて良い」

靈仙和尚。またの呼び名を靈仙三蔵。

唐では般若三蔵に師事して経蔵・律蔵・論蔵を修めた日本人初の三蔵法師です。しかし、この出会いから20年後に消息不明となり、後に最澄の弟子である第3代天台座主

の円仁が唐で調査したところ、靈境寺の浴室にて暗殺されていたことが判明します。理由は不明ですが、おそらくあまりに優秀すぎる彼は妬まれ、後に唐で流行する反仏教のどさくさに紛れて非業の死を遂げたと推察されます。それでも、空海は彼と共に唐にて長い修行を共にし、確かな影響と日本人初の三蔵法師という偉業を後世に遺したのです。

空海の乗った船は、途中で嵐によつて大きく航路を逸れて804年8月、第1、2船は福州長溪県に漂着。同地の役人に海賊の嫌疑をかけられ、疑いが晴れるまで待機させられます。このとき遣唐大使である藤原葛野麻呂や慣れない土地で体調を崩してしまつた最澄に代わり、空海が福州の長官へ嘆願書を代筆しています。その理路整然とした文章と優れた筆跡により遣唐使と認められ、同年の12月に一行は長安へとたどり着きました。

「『ようこそ、長安へ』」

日本後紀には、23名の着飾つたウマ娘が一行を出迎えたとされます。

当時の長安はシルクロードを通じて世界中から人々が集まる人種の坩堝であり、溢れる文化と多種多様な宗教、言語、思想。満ち足りた富と財から「花は舞う大唐の春」と称されるほどの栄華を極めていました。

空海らは長安の中心にある西明寺を宿とし、求法の時が始まりました。手始めに空海

と靈仙はインド人僧である般若三藏はんんにゃさんぞうと牟尼室利むにしりさんぞうから真言——即ち梵語（サンスクリット語）を学びます。

「言葉だ。言葉が違えば意図に關係なく悟りは遠ざかつてしまう。故に我々はまず釈尊が使っていた梵語により真理ダルマに到達するのだ。ついてこられるかね？」

挑発するような般若三藏の言葉に空海は即座に「勿論だ」と返し、未だ確かな悟りを得ていない靈仙は沈黙で応えます。

「結構。では始めよう……これより語るは華嚴宗の澄観が真理より引き出した四法界の概念だ。さあ、私の言葉に続きたまえ。世界を越えるぞ」

般若三藏の梵語を空海と靈仙は続いて唱えます。すると、彼等の意識は言葉によつて真理へと導かれ、世界を越えたのです。

事法界、即ち現実。

理法界、現実とは全て虚妄であると理解した色即是空の境地。

理事無礙法界、虚妄故に現実がある。無限だからこそ有限もある。空即是色を理解した境地。

そして——事事無礙法界、一切の物事が妨げあわずに共存する境地。梵我一如。

既にに悟りに至っていた空海は事事無礙法界へと我が庭の如く到達。事事無礙法界を前に尻込みする靈仙の意識へと侵入します。

(やあ、靈仙。悟らないのか?)

(げえつ、空海。何で私の意識にいるのだ)

(キミも来い。楽しいぞ)

(待てや。そうやって、本当は後戻りできない場所に引きずり込むつもりだろう。騙されんぞ)

(悟りは良いぞ、靈仙。そしてここまで下りてきたなら……キミも悟るぞ!)

(嫌アアア、初めてなのに悟っちゃうのおお!)

釈尊が最初に説いた教えは空の世界を重視し、一切皆苦である現実を離れ、いずれは終わる天道にさえも見切りをつけ、永遠にして不変である涅槃に至ることが目的です。しかし、唐で発達した仏教は現実に戻ることを重視しました。これはインドの死生観は生きることとは苦しみであるという悲観的なものであるのに対して、中国では生きることが楽しみであると考えたことが影響したとされます。

しかし、空海は両方の悟りを自由に行き来することを真理の方から許されたイレギュラーな存在。未知の領域に戸惑う靈仙を強制的に悟らせました。

(……スゴカッタ)

「空海、お主……もう少し何というか、手心と言うかー」

「般若三蔵、そんなことより他の梵語を教えてください。私は飢えているのだ」



「あ、うん。そうだよね。お主はもう悟っているから焦れてしまったよね。何かごめんね」

805年、5月。僅か3ヶ月で梵語を完全に習得した空海はさらなる知識を求め、唐で流行しつつあった密教を修めるべく密教の第七祖である唐長安青龍寺の恵果和尚を訪ねることを決めました。

（そう言えば、第2船に乗っていた頭巾の人……最澄と言ったか。彼はどこで何をしているのだろう）

実は病に倒れた最澄はその後も長安には入らず、福州の天台山の寺院で500巻近い経典をかき集めて日本に送る手配と、同時に自らの修行を短い時間で行わねばならない多忙を極めていました。

何とか密教の触りだけ学んだところで帰国命令が出され、空海が本格的に密教を学ぼうかという5月には帰国の途についていたのです。公に支援されたが故に公に従わざるを得なかった最澄。公には支援されなかったが、故に自由に学ぶ時間を得た空海。これが後の決裂へまで因果がゆくとは誰も思っていませんでした。

「まだ学びたりません。それでも……私は私を必要としてくれる方の元へ行かなければ」

遣唐使の帰国命令の理由の1つに桓武天皇が病に倒れたこともあります。最澄を心

の支えとしていた桓武天皇は病床で最澄の名を呼び、朝廷は遣唐使が役目を果たすのを待つと急ぎ帰国を促したのです。

密教への未練を残し、最澄の留学は終わりました。そして、新たな鎮守国家の象徴として政争という彼にとつて望まない戦いへと身を委ねる時が来てしまうのです。

《林の中で、縛られていない鹿が食物を求めて欲するところに赴くように、聡明な人は独立自由をめざして、犀の角のようにただ独り歩め》

《最高の目的を達成するために努力策励し、こころが怯むことなく、行いに怠ることなく、堅固な活動をなし、体力と智力とを具え、逃げウマ娘のようにただ独り走れ》

スツタニパータにおいて仏陀が語った言葉は、孤高に生きることをそれぞれ犀の角と逃げウマ娘で表現しました。そして、空海は靈仙と行動を分かち密教を習得すべく一人で青龍寺の門を叩きました。

「ああ、お前さんが空海だね。長い間、お前さんを待っていたよ。大いに好し、大いに好し」

恵果和尚は既に病床にありました。しかし、その眼光は衰えることを知らず、更には真理を通して空海と縁を結ぶことまで知り尽くしていました。

恵果和尚は千人を超える弟子を持ち、その内の5人に密教の奥義を伝えました。しかし、心の意味での後継者足り得るものは未だ現れていなかったのです。だが、空海の尋

常でない才能を般若三蔵から聞いて、惠果和尚は空海が自らの後継者に価する器である時期し、真理を通して確信していました。般若三蔵によれば、空海は梵語の理解力が抜群であるといえます。例えば、金胎両部の念誦法にしる、諸尊供養法にしる、真言を聴いた瞬間にほぼ、梵語の意味を理解し、更には中国語や日本語への翻訳が完璧にできていると言うのです。

空海を直接見た惠果和尚は、般若の推薦が誤りでないことをすぐ悟ります。

「やつと逢えたのう。よろしい、灌頂をせねば。明日じゃ、明日、灌頂をしよう」

流石の空海もその真意をを計りかねました。空海は密教に少し触れた程度で、それも山岳修行レベルの雑密と『大日経』の学解だけです。

疑問に思う空海に惠果和尚は「金胎不二」の密教の奥義を滔々と説きます。釈尊の悟りから密教までの全仏教史を総ざらいし、大乘仏教の二大流派を金剛界と胎蔵界と体系化。真理へとアクセスし悟りに至る手順が複雑化していた状況を整理し、さらには曼荼羅により視覚的にも密教の概念を理解できるようにしたのです。

「曼荼羅……その手があつたか。これならば目で見て真理の世界へ至る術を理解できる。読経は文字と言葉を通して真理へと至る方法だが、これなら！」

「そうじゃ。釈尊が至つた世界、我らが見ることを許された世界。まさに真理を金剛界と胎蔵界という二つの世界として視覚化する。至るべき景色が見えるならば、そこに向

かい走るのは目隠しをしているよりも容易かろう」

「なるほど……道理で密とするわけだ。これは、公に広めるべきではない。誰もが真理に至るのは素晴らしいが、縁の無い者やまだ資格なき者に対して安易に真理を見せるのは、赤子に強飯を食わせるか、幼いウマ娘に都で競技をさせるようなものだ。それは、救いではなくむしろ毒にしかならないな」

「嬉しいぞ空海。好し、好し、大いに好し。よくぞ密教の意義に気付いてくれた。良いか、決して妄りに広めてはならんぞ。三原則を忘れるな」

密教の三原則とは以下の通りです。

- 1, 法身説法（僧侶は、自ら説法をする）
- 2, 果分可説（悟りは説くことができる）

- 3, 即身成仏（人の身のままで、仏とすることができる）

これは密教を受戒した者に対する戒めであるとともに希望です。1により僧侶は一人一人に丁寧な説法を行うことを義務付け経典や曼荼羅により安易に悟りに至るもので氾濫することを防ぎます。2によって授戒者と受戒者双方に悟りは必ず教え学ぶことができる保証し、3によって現世利益を垣間見せる。

空海は間違いなく密教は逼塞感のある日本に必要なだと確信すると共に、決して権力者に近付いてはならないと自らに誓いました。

(これは大変だ。あまりにも求心力があり過ぎて権力に利用されてはかなわぬ。南都仏教の反省をしなくては国も仏の教えも滅びる諸刃の剣だ)

翌日、空海は胎藏界の受明灌頂を受け、7月上旬に金剛界の受明灌頂を受けました。受明灌頂とは、密教を学ばんとする者に弟子の資格を与える略式の灌頂です。とはいえ、灌頂の秘儀で一番に重要な「投華得仏」とその結果結縁した曼荼羅中の一尊の秘印(最極秘の印)・秘明(最極秘の真言)の授受は行います。

「投華得仏」とは、道場に引入され目隠しをされた受法者が、手に印を結び、口に真言を唱えつつ、教授の僧に伴われて曼荼羅壇に進み「華」を大壇の上に敷かれた「敷曼荼羅」の上に投華し、「華」が落ちた曼荼羅の仏と縁を結ぶ儀礼をいいます。

(これは……何と、まさしく真理から愛されておるのか)

空海は、6月の胎藏界につづき7月の金剛界の時も「華」が曼荼羅中央の大日如来に寸毫違わず落ち、恵果を驚嘆させました。確率的にも極めて稀で、恵果和尚は空海の霊威の才能にも目を見張りながら、胎藏界大日と金剛界大日それぞれの秘印と秘明を授けました。

そこからの修行は恵果和尚の体調を慮った空海により全身全霊の速さで行われ、僅か1ヶ月で師の全てを空海は身につけてゆきました。

恵果和尚は空海の熟達ぶりを見届けると、間を置かず8月10日、阿闍梨位に上る「伝

法灌頂」を行います。

「空海、これを」

惠果和尚が差し出したのは五智如来が彫り込まれた黄金の宝冠。五智とは、大日、薬師、阿弥陀、宝生、不空成就の5つの如来を指します。和尚からの贈り物です。

「綺麗だ……ありがとう、師匠」

「ほほ、感動するよりもつけて見せておくれんか？」

ブツピガアアン。

「これで良いか？」

「うむ、綺麗じゃぞ空海（何だ今の音）。お前さんは今日より我が跡目、『遍照金剛』じゃ」  
遍照金剛——金剛界（現世）を遍く照らす者。

空海は、一介の私費留学生から阿闍梨の師位をえて、真言付法の第八祖となりました。空海がこれまで積み重ねてきたすべてが一気にまくって上がり、結実したのです。しかし、惠果のもとで何年も修行を積みながら未だ灌頂に浴しない者や、「受明灌頂」の段階で止まっている者や、「伝法灌頂」も金胎いずれか片方しか受法していない者が大半であります。それを、つい昨日来たばかりの空海が大抜擢されるのには不平不満も出たと思われます、が——

「さて、儀式も終わったし食事にしよう。今日は私の奢りだ」

「二」遍照金剛様、一生付いていきますー」二

空海は500名以上の共に学ぶ僧侶に食事を振る舞い、恵果和尚の後継者として認めさせました。

「モウタベラレナイヨオー」

「モウタベラレナイゼー」

「モウタベラレマセンワアー」

「おかわり」

「いや、お前さんが一番食うんかい！　しかしその食い気、実に好し、大いに好し。ハッハッハ！」

きつと、飯につられたり空海のアマリの食いつぶりに認めざるを得なかったりしたわけではないと思いますーたぶん。

秋にかけて、空海の日々は一変しました。『大日経疏』をはじめ新訳の密典・儀軌・梵字真言讃を書写生に頼んで書写しはじめ、青龍寺の手が足りなくなると橘逸勢たち留學生仲間の手も借りて『四十華嚴』ほか修学の記録を書き留めることもはじめます。詩文や書の書籍も集め、注文した絵図や法具のほか筆や墨に至るまで作らせ、日本に持ち帰る算段をはじめたかのような様子に、逸勢は「君はすぐにでも帰るつもりなのか？」と訝しみます。

空海ら留学生は最短で帰った最澄と異なり20年は滞在する決まりでした。無断での帰国は当然ながら厳罰に処されます。

「どうだかな。ただ、私の阿頼耶識に真理くんが急かしてくるんだ。帰る準備を始めると、やかましいほどに。全く、警戒してから今まで以上に話しかけてくるようになったが、真理くんは寂しがり屋なのだろうか」

「君は何を言っているんだ」

空海の怪物じみた幸運はとどまるところを知らず、同じ遣唐使船団の僚船で東シナ海で遭難していた第4船が単独で渡唐し、長安に入っていたのです。空海は鴻臚館に滞在中の使節団に面会し、自分が得た仏法を早く日本に持ち帰り国家のために役立てたいため、国禁を破つても帰国したい旨を説きます。使節団の長はこの国禁破りの申し出に官吏として苦慮しながらも、事の重大さを理解し早速空海の帰国を唐の皇帝に奏上し、許可が下りたのでした。

そうこうする間に、年末の12月15日、空海にとって別れの時が来てしまいました。

「ほほ、悲しい顔をするでないよ空海。来たるべき時が来て、また輪廻に戻るだけじゃ」  
「……師匠。また貴方に学べて良かった」

「ほう、覚えておったか。善き哉、善き哉。あれは今から何百年前であつたか、それとも異なる世界であつたか。何にせよ、私とお前さんは宿契。幾度も幾度も生まれ変わり、



師と弟子となつてきた。だが、それも今回で終わりじやな」

恵果和尚が最後に差し出したのは自らの袈裟でした。袈裟を引き継いだ者が教えもまた引き継ぎます。かつて釈迦如来も弥勒菩薩に袈裟を譲り、弥勒菩薩は来たるべき時を迎えるため57億年もの修行を積んでいるのです。

「お前さんの輪廻は今回で終わり、涅槃が待つておる。私は、どうかのお……あと一回くらい人間やり直してみたいのだが」

「その時は、私の弟子となれば良い。涅槃間違いなしだぞ」

「ふ、ハハハッ！ それは好し、大いに好し！ 東の国にて再会し、共に密教の華を咲かせようか」

午前4時頃。恵果大和尚、東塔院にて入寂。

空海は弟子を代表して追悼の碑文を起しました。

空海と逸勢は帰国するのに対して、靈仙は唐に留まることを選択します。彼は比較的高齢だったことと、般若三蔵を師として学びを深めたいと考えたが故の選択でした。

旅立ちの朝、長安の城門には空海と縁を結んだ大勢の人々が訪れて別れを惜しみます。別れの最後に般若三蔵が柳枝を空海に渡しました。古の中国では旅の安全と平和を祈る餞として柳の枝を贈る風習があつたのです。

「達者でな」

「ああ。皆も、元気で」

背を向けて歩み始めた空海。その背に、誰が始めたのか空海の名が幾度も叫ばれているのが響いた。いつしか声は伝播し、数千人もの長安の人々が一齐に空海の旅立ちの祝いと別れの悲しみを込めた万雷の空海コールとなります。

「一生一別。再び見え難し……ああ、楽しかった。ありがとう、みんな。ありがとう、長安」

806年、4月。

空海の唐での役目は、終わったのです。

「……はい。密教を身に付けて帰還した空海。ここから真言宗の開祖としての活動がはじまるわけですね」

「そうですね。特に太宰府で行われた最初の説法は今日の私達にも大きな影響を与えています。」

ちょうど空海が帰国の途についた806年の4月、桓武天皇が崩御し平城天皇が即位します。さらに、翌年に起きた伊予親王の変伊予親王が謀反を企てたとされる事件だが、冤罪であることが明らかになっている。これは実質的に藤原式家と南家の争いであり、式家の仲成・薬子が南家出身の伊予親王・吉子母子を抹殺せんと画策した。結果的に伊予親王と吉子は毒を飲み自害。式家の栄華は高まるが、当時から悪評は強かったと

言われている。で政治情勢が悪化、さらに伊予親王の教師の一人が空海の叔父である阿刀大足だったため、遣唐使の功績と橘家の昇進により殿上人となった橘逸勢のみが平安京に入ることを許され、空海は809年まで太宰府に留まることとなります。

「まあ、仕方ないか。とはいえ、このまま暇を持て余すのは師匠達にも僥びない。できれば京でやりたかったが、ここで試すか。私の密教をー」

807年太宰府、観世音寺。

伝説の説法が始まる。

## 第7回 「平安京仏教とウマ娘 弘法は食物を選ばず」 下

唐から帰国した高名なウマ娘の僧が説法をする。興味を惹かれた人々は観世音寺に集いますが、説法の開始時間と告げられたのは、夜だったのです。

月明かりだけが当たりを照らし、蛙の声しか聞こえない。辺りには積み上げられた薪がいくつつか。

ざわめいていた人々の前に、極大の帳が釣り上げられます。そこに、尺八の音が響きます。

(うおううおううおうおお、うおううおううおうおお)

帳の向こうから聞こえるウマ娘達の歌声。帳が下がりきると同時に、周りの薪に点火し夜とは思えないほどの光が辺りを包みます。これまで、仏教に炎は用いられていませんでしたが、空海は炎で人々の気持ちを惹きつけ、誰も目を離せなくなつたのです。そして、歌と舞踊。音楽と説法。全てが一つとなつた熱狂の中、空海がよく通る声が開幕を告げます。

やつとみんな逢えたね  
因縁和合

ノウマク・サマンダ・ボダナン・ア・ビ・ラ・ウン・ケン 大日如来の真言。意味は「帰

依したてまつる。あまねき諸仏に。地、水、火、風、空

(うおーうおーうおーうおーう)

ノウマク・サマンダ・ボダナン・ア・ビ・ラ・ウン・ケン

(うおーうおーうおーうおーう)

たかたつた全力走りたい

芝と砂とキミの追い切り修行

灌頂！灌頂！

声出せ叫べ(うおーうおーうおーうおーう)

真言しんごん！密！教——密！教——！

たかたつた全力悟りたい！

ゆずれない輪廻の途中(うおーうおーう)

始めよう、ここから仏門悟り

(おおう、おおう、おっおっおおう)

(おおう、おおう、おっおっおおう)

あこがれの浄土ちへ(勇氣少し借りて)

語り合つた読経諸無常(二度とこない今を)

もうドキドキもトキメキも

抑えられる、消えてく

熱い波羅波羅が涅槃ぬい寂靜じやく

キミと、走り競い浄土目指し

遥はるかか響こけ届とどけ彼岸ひがん

ずつとずつとずつとずつと想い

夢がきつと叶うなら

あの日キミに感じた何かを信じて

春も夏も秋も冬も超え 願ねがい焦あせがれ走れ

嗚呼、浄土へ

ノウマク・サマンダ・ボダナン・ア・ビ・ラ・ウン・ケン

(うおーうおううおうおう)

ノウマク・サマンダ・ボダナン・ア・ビ・ラ・ウン・ケン

(うおーうおううおうおう)

たかたつた 全力弾きたい (阿難陀的に仏陀の愛弟子の阿難陀は己の遺骨を弟子や信徒が取り合うのを避けるために、ガンジス川の上に飛び上がるとしめやかに爆発四散して入寂した。ウソデショ…)

期待、出会い、決意、絆になった

合掌！（合掌！）

本気で叫べ

（おうおうおおうおう）

真言！密教！密教オー！

たかたつた 全力笑いたい

芝生のだ真ん中（うおううおう）

輪廻に、ジャージェイここから上昇、生

（おおう、おおう、おっおっおおう）

（おおう、おおう、おっおっおおう）

駆け抜けた日々（ブラフマー昨日より今日を）

語り合つた説法（ウイシユヌ強くなれる理由）

いま、応えたい「生きている」と

絶背中押す声、対他熱くなる

夢は夢のまま終廻われない

キミと、未来描き悟り目指し

狙え挑め掴め涅槃ニルヴァーナ

ずつとずつとずつとずつと想い

夢一切衆生悉有仏性はきつと叶うから

あの日キミが挫けた苦行も信じて

雨も風も雲も闇も超え願ひ焦がれ走れ

嗚呼、浄土へ

ゆるぎない覚悟決して

1つ2つ共に綴るアカシックレコード記録

背中に迫る迷い煩悩振り払え

屏屏の角の如く唯独り歩めの自分追い越すだけ

絶煩悩ちたい。克己ちたい。勝競技ちたい。キミ同行と行二きたい人

(熱い木魚ソロ)

菩提描き涅槃目指し

狙え挑め掴め輪廻

ずつとずつとずつとずつと想ひ

夢一切衆生悉有仏性はきつと叶うから

あの日キミが食したナニカ乳粥も信じて

春も夏も秋も冬も超え雨も風も超え雲も闇も超え、悟りへ

キミと、走り競い浄土目指し



遙か響け届け彼岸

ずっとずっとずっとずっと想い 夢がきつと叶うなら

あの日キミに感じた何か（緑）を信じて

春も夏も秋も冬も超え願ひ唱え走れ

嗚呼、浄土へ

菩提描き涅槃目指し

狙え挑め掴め輪廻

ずっとずっとずっとずっと想ひ夢はきつと叶うから

あの日キミが流した涙も信じて

雨も風も雲も闇も超え願ひ唱え走れ

嗚呼、浄土へ

ノウマク・サマンダ・ボダナン・ア・ビ・ラ・ウン・ケンパーパー。

踊り終えた時、人々はまるで夢の中にいるかのようでした。ここは此岸なのか、あるいは彼岸なのか。ただ一つ言えるのは、この胸にある高揚感の残り火。この火は決して消えることなく、余りにも尊いものなのだど理解していました。

「光だー」

「あの御方こそ光だ——空海様が私達を導いてくれる！」

「大宰府には空海様がいてくださる！ この地は安泰だ！」

「空海様！ 空海様！」

確かな手応えと共に、真言宗はここに開かれたのです。

そして809年。ようやく空海は平安京へ上ることを許されたのですが、その背景には最澄の尽力もありました。遣唐使の頃に縁があつたとは言え、空海と接近するのは唐突な印象を受けますが、この原因は空海が朝廷に献上した一つの目録にあつたのです。

「おーい、お師匠さん。ええ加減にせんと死ぬで」

「私は……駄目な師匠です。皆が欲する『円弧の達人』マエストロを授けることができませぬ。と言

うか何なのですかそれ……経典で見たことも無いのですが。それもこれも私の修業不足が招いたこと……こうすることで真理に達し、私は『円弧の達人』により一切衆生を救わねばならないのです」

「いや、多分無理やでそれ。ちゅうか、やからっていつまで滝に打たれとんねん。歳考えんかいボケ！」

最澄、水垢離をす。ただし延々と滝に身を打たれる滝行とよばれるものです。既に42歳の最澄にはかなり堪える修行なのですが、これほどまでに追い詰められる理由がありました。

この時代、僧侶でも国家資格を得られるのはごく一部で、国から給付金を得られる僧侶を年分度者と言います。最澄の開いた天台宗からは長らく合格者が出ず、ようやく出た弟子達は法相宗等の南都仏教勢力にスカウトされて比叡山を下りてしまふのです。更には、桓武天皇の病氣治癒を願って密教の儀式をすることを強いられて表向きには受け入れられるなど成功を果たすのですが、あくまで密教の触り程度しか学べなかつた彼としてはひどく不本意なものでした。そして、自身を信頼してくれた桓武天皇が崩御し、最澄の心はズタズタの状態でした。

泰範に無理矢理修行を中断させられた最澄。打ちひしがれる面倒くさい師に泰範は一卷の書を手渡します。

「何でも、大喪の礼やら即位の儀やらで忙しくて誰にも見向きされんかったらしいけど、お師匠さんには必要なもんやからって、ある栗毛のウマ娘とその旦那が持つてきてくれたで」

「栗毛の……ああ、坂上様ですか」

最澄と田村麻呂が直接面識があつたかは不明ですが、桓武天皇の病氣治癒を祈るため頻繁に出入りしていた最澄と、皇居の守護を担う田村麻呂に縁があるのは自然なことでした。

「チラツとだけ中身を見たけど……お師匠さん、覚悟を決めて開いたほうがええで。あ

んな字は見たことないわ」

躊躇いなく最澄が書を紐解くと、文字が溢れて最澄の脳へと直接入り込んできたのです。

「……『御請来目録』、空海が記す。これは……ああ、これは、何という字！私の、私の阿頼耶識に直接！」

御請来目録は、空海が唐から持ち帰った經典の一覧ですが、そこには脚注でそれぞれ經典がどのような内容なのかを記してあったのです。經典マニア最澄からすると喉から手が出るほど欲しいものを書く連ねられ、その内容を少しでも明かされると喉阿頼耶識は幾度も絶頂していました。

『遅速優劣は猶、神通と破鱸の如し』、そうか……密教はそれほど速く、一瞬で真理に到達できるのか。欲しい……絶対に欲しい。もつとです空海、もつと教えて下さい。それと經典の貸出はしていますか？ していますよね？ ね？」

ブツブツと早口で所感を述べる最澄を泰範は「うわあ」とドン引きしながら見ていました。

「お、お師匠さん……確かに凄い書やと思うけど、そんなにか？」

「泰範、今すぐ筆と墨を。空海を大宰府から解き放ちます。彼の持つこの經典が揃えば、世界が変わるのですよ！」

「お、おう、そうかー。元気になってくれてウチは嬉しいけどな……取り合えずお師匠さん」

「何ですか？」

「いつまで裸でうまつ気出しとるんじやボケエエー！」

最澄、水垢離の後から全裸でした。そこに御請来目録で絶頂の極みに達した最澄の最澄はうまつ気を帯びてうまだつちし、愛娘（？）の前に晒してしまっていたのです。

「？ どうしたのですか泰範。何か疚しいことでも考えているのですか？」

「鏡見てから言えや。第六天魔王が元氣一杯やで」

「お釈迦様も修業中に全裸になっていた期間があるみたいですし、問題ありません。私がか全裸であることや私のうまだつちを疚しいと感じるのは泰範の阿頼耶識が疚しいことを考えているからです。さあ、雑念を捨てなさい。無垢な赤子に戻るので」

「どさくさに紛れて何しようとしとるんじや！ 下りるぞ、ウチもええ加減下山するぞ！」

「知りませんでしたか？ 媽媽からは逃れられませんかよ」

「嫌やアアア、絶対に下山したるからなあほんだらアアア！」

泰範が空海に保護されるまで、あと4年。

ともかく、空海の持つ経典に釣られたのか最澄は自身の持つコネクションを総動員し

て空海の入京許可を得たのです。

京に上った空海は高雄山寺に入りますが、直後に大きな事件が起きます。藤原式家の仲成・薬子兄妹に踊らされた平城上皇が嵯峨天皇に平安京を棄てて平城京へ遷都し権力を譲るよう要求したのです。

嵯峨天皇は表向きには上皇に従うように藤原冬嗣と坂上田村麻呂を長として遷都の準備をします。特に田村麻呂は平城上皇が皇位にある際は不安から立つことすらまななかつた彼を抱きかかえて玉座に座らせ、常に平城上皇を守り続けた忠臣であり平城上皇は全幅の信頼を置いていました。田村麻呂ならば上手くまとめられる。平城上皇は完全に心を許しきっていました。

上皇側が油断したのを見計らい嵯峨天皇は勅を発し、藤原仲成と薬子の位を没収し遷都の件を拒絶。2大王朝化していた政局に終止符を打とうとします。

仲成は捕らえられ、奈良の平城上皇と薬子は東北で兵を集めるべく逃亡を企てます。これがかつて空海、最澄と共に遣唐使として行動していた中納言の藤原葛野麻呂は諫めました。聞き入れられませんでした。

嵯峨天皇は即座に東国に至る経路に関を設け、逃避行を阻止することを命じます。命を受けたのは、平城天皇が誰よりも信頼していた田村麻呂でした。

「無茶ですあなた！ そんな身体でどうして……」

田村麻呂は既に病を得ており、余命幾ばくも無い中で鎧兜を身に付け、愛刀ソハヤノツルギを腰に出陣しようとしていました。

「鈴鹿、行かねばならないんだ。俺が救わねば、あの御方は毒虫に利用されたまま終わってしまふ。俺は、陛下が帝位にある間にあの毒虫共を除けなかつた。これは俺のけじめなんだ！」

「やめてください、死んでしましますよー！」

「それがどうした！ いまさら俺が死ぬことを恐れると思うか。為すべきことをなさずに布団で死ねと？ そんなこと、海の向こうの阿豆流為と再会した時にどの面下げて見えられるというのか！」

結局、鈴鹿御前は田村麻呂を説得することを諦め、最後の出陣を隣で支えることを決意します。

田村麻呂は軍を集める最中に捕えられた藤原仲成と面会し、何と縄を解き放ちました。

「た、助けてくれるのか田村麻呂。その刀で磨を斬るわけじゃないのか？」

「……貴様などソハヤを汚す価値もない。それに、処刑命令も出ていないし、どうせ貴様も出家して終わりだ。運が良かったな、貴様の妹は知らんが早くに捕らえられたからこそ余罪が無く済んで」

田村麻呂の怒気を感じた仲成は一目散に逃げ出しましたが、その背中に矢が突き刺さります。何が起きたのか分からないと言った表情で射手を見ると、生かすと言った田村麻呂が弓を構えていました。そして、続く第二射が仲成の眉間を撃ち抜き、彼の命はそこで潰えたのです。

「俺は斬らないとは言ったが……射ないとは言わなかったぞ。それに、これは処刑ではなく逃亡犯をやむなく射殺しただけだ。万が一にも生き延びられてはこの国にも、あの御方にとつても毒にしかならんからな。悪いが、ここで死んでもらう」

兵が集まると田村麻呂は戦勝祈願の大祈禱を行います。なお、この時の戦勝祈願には空海も参加していたと記録されています。

空海はウマ娘として惹かれるものがあつたのか、それとも余命幾ばくも無い英雄への餞なのか、今まきに出陣しようとする田村麻呂の前に現れました。

「あなたは？」

相手がウマ娘と見るや即座に間に入り込む鈴鹿御前。しかし、剣呑な様子に怯むことなく空海は田村麻呂の瞳を見据えました。奇しくも、互いに空と海のような蒼い瞳でした。

「いや、田村麻呂將軍に一言申し上げたくてな。どうか、ご本懐を遂げなされ。御仏もそれを望んでいる」



「……そうか。ありがとう」

短く返すと、田村麻呂は最後の戦いに向かいます。道中、彼は鈴鹿に語りかけました。「天命が来たか。だが、為せるのならば後悔は無い。鈴鹿、最期まで頼むよ」

「パカ……あなたパカよ。けど、そんなあなただからー」

私は、きつとこれからも、永遠にあなたを好きでありつづけるのだろう。

田村麻呂の軍は大和国添上郡で逃亡中の平城上皇一行を補足。包囲し退路を断ちます。

彼の姿を見た平城上皇はへたり込み、薬子は夜叉のような顔で怒声を発しました。

「裏切ったか田村麻呂オ！ よくも陛下の前に顔を出せたー」

「毒虫め……俺が何故ここに来たか分からないか。俺は裏切つてなどいない。上皇陛下を、救いに来たのだー」

ソハヤノツルギすら預けた丸腰で平城上皇の前に来ると跪き、あの日ー平城天皇として即位した時と同じように田村麻呂は平城上皇を抱きかかえました。

「もう大丈夫です。俺が来ました」

「けど、田村麻呂、そなた、こんなによせ細つて……ッ！」

「これが俺の最後の忠義です。どうか陛下……心穏やかに、生きてください。もう、誰にも貴方を利用させません。今の帝も……血を分けた兄君を悪くはしませんよ」

斯くして平城上皇は保護され、藤原薬子は兄の仲成が射殺されたことを知ると絶望し、自ら毒を飲んで自害しました。この政変を、平城上皇の変。または、上皇をもて遊んだ者の名から薬子の変とも呼ばれます。

田村麻呂の予測通り、嵯峨天皇は出家した平城上皇に対して寛大であり、彼の子供達も比較的自由に生きました。その内の一人、高岡親王は空海に弟子入りし真如の名を授かる十大弟子の一人に数えられます。空海に心酔した彼はその後師をトレースするよう大陸へ渡り、師ですら向かえなかつた天竺へと向かう旅の途中、虎に喰われたと伝わります。

「阿弭流為……これで笑ってお前に会える。お前の海の向こうでの話し、楽しみにしているぜ」

翌年、全てをやり遂げた田村麻呂はこの世を去りました。

810年頃、空海と最澄はいよいよもって交流を深め互いに經典の貸し借りをしています。

例えば、空海の書いた最澄宛の手紙である風信帖には、最澄から借りた『摩訶止観』のお礼を述べ、比叡山には行けない旨を告げたあとに、最澄と仏教の根本問題を語り合いたいのでぜひ会いに来て下さい。ぜひぜひお願いします。という趣旨が書かれており非常に心通じ合っていたことが伺えます。

「うひよおお、墨の匂いイイ！ 唐の薫りがする！ グへへ、もう手放さないぞ經典ちやん！」

（アカン……どんどん悪化しとる。何や、最近はおカンみたいなウマ娘の影に、何か変態じみた桃色のやべーやつ影も見える。ウチはもうおかしくなつてしもうたんかな？）  
 「さあ、泰範読んでください！ 匂いだけでは満足できません！ 早く、早く、早く！」  
 「分かつとるから落ち着けや。全く、暗いところで經典読むから目を悪くするんや。ホンマに、ウチがおらへんかつたらどうなるんやろうな」

「死にますね。生きていけません」  
 「即答すなや！ ええ加減子離れしてくれ！」

空海は度々直接会いたい旨を手紙で伝えましたが、最澄はほぼ全てを断っています。理由として体調の悪化と視力の低下があつたらしく、この時期の最澄の手紙は文字の重なりなど彼らしくない筆の誤りがありました。

「けれど、もはや私は經典ですら満足できない身体になってしまいました。くうう、空海和尚……罪な方です」

「いや、お師匠さん。あんたがそんな変た——求道者になつたのはあんたの阿頼耶識が全部原因やで。空海はん何も悪くないで」

「こうなれば空海和尚に直接合うしかあるまい。この間お断りのお手紙書いたばかりだ

けどもう辛抱溜まりません。行きますよ泰範！ 今すぐに！」

「あー……うん、分かった。すぐ準備するわ（誰かお師匠さんの世話役変わってくれへんかなあ）」

812年10月27日には乙訓寺にいた空海この時の空海は乙訓寺の別当（管理者）なので無事国家公務員になりました。やったね空海、定職に就けたよ。を最澄が訪ねます。この際に空海は最澄に伝法することを決め、高雄山寺にて金剛界結縁灌頂を開壇。さらに12月14日には胎藏灌頂を開壇。入壇者は最澄や泰範のほか190名にのぼりました。

「あ、キミが泰範かね」

「空海和尚ーいや、今は師匠か。どないしました？ 最澄和尚と話しとりませんでしたか」

「うん、彼は少し経典への執着が凄くてね……今も理趣釈経、これは密教の真髄に至る重要なものなのだけれど、まずは真理に至り密教の真髄を理解する土台を口伝や体験から作らなければならないのに、彼は経典だけ借りて経験を軽視しがちかもしれない。だから断つたところ……その、駄々をこねてしまつて。うん、ずっと年上の弟子ではあるけれど、流石に成人男性のあの姿は……キツイ」

「すんまへん、ホントすんまへん。今すぐ比叡山に片付けてきますー！」

「そんな気にしないでくれ。キミも手にかかる師匠をもつて大変だな。私も大概ではあるけれど……今やキミも私の弟子なんだから少し頼ってくれると嬉しい」

「く、空海師匠オ〜！」

泰範はこの頃から少しずつ空海への心酔を深めていったと考えられますが、そこには最澄への介護疲れもあつたのかもしれない。

「ところで、灌頂も済んだしキミたちには密教の儀式に参加して貰いたいんだが、どうする？」

「当然参加や！ まだ習い始めたばかりやけど、あんなにはやく真理に至ると思わへんかった。けど、あんま広げんほうがええな。あまりにも手軽すぎて、大半の人間やと阿頼耶識が真理の向こうから帰つて来られへんぞ」

「〜!?!」

空海に電流が走ります。まだ密教のほんの入門しかさせていないにも関わらず泰範が密教の持つ危険性に考えが及んでいるからです。

（ああ、恵果和尚……貴方もこんな気持ちだったのですか？ もしかしたら、彼女が、泰範が私の、密教を〜）

「空海師匠？ どないかしました？」

「……いや、何でもない。さあ、儀式を始めよう」

空海は多くの密教儀式を大陸から持ち帰りましたが、日本に根付かせるため多くの工夫を行っていました。

この日行われた儀式は、全くの暗闇の中でした。

空海によつて小さく火が灯されると、金属製の鍋が火に掛けられます。鍋の中には香料が入っているのか、良い香りが部屋の中に満ち満ちてゆきました。

(何や、ええ香りや。ウチの阿頼耶識に直接訴えかけるみたいやな。いかん、何か腹減ってきたな)

空海は絶え間なく手を動かすと何か刃物のようなものを振り、何らかの固形物を刻んでゆきます。それを完璧なタイミングで鍋の中に投入すると、部屋の香りは一層の彩りを深めその場にいた全員の阿頼耶識は今までで最もむき出しになっていました。

(な、何なんや。ウチは何を見せられているんや。いや、見えへん。薄つすらと鍋の中にかあるのはわかるけれど、何が入っているのか分からへん!)

空海は一通りのものを入れ終わると鍋に蓋をし、じつくりと加熱します。その間は全員で真言を唱えて待ちます。そして、空海の目がカツと開かれ、鍋の蓋を開放すると剥き出しになった阿頼耶識は即座に真理に到達。暗闇の中はまごうことなく壤土の景色が広がっていたのです。

呆然とする弟子たちに構わず空海は椀へと鍋の中身を掬うと、それを最澄へと手渡し

ました。

「さあ、最澄。先ずは君からだ」

「……いただきます」

恐る恐る最澄は椀の中にある湯気を上上げる何かを口にします。暫しの沈黙の後、彼は恍惚として表情で顔を上げました。その背には後光すら浮かんでいます。

「そうか、そうだったのか。悟りとは、涅槃とは……こんなにも簡単なことだったのか」  
「最澄、一層悟りを深めようだな。さあ次は泰範だ」

「お、おう！ いただくで！」

椀を受け取り、泰範はまず香りを確かめます。ひどく胃の腑を熱くさせ、五臓六腑が泰範の阿頼耶識に早く口にするよう要求してきました。箸で確かめると、それなりの弾力のある固形物でした。

（な、何が入つとるんや！ この感触……この香り、未知や！ まさか、肉？ 肉なんか!? いやいやいや、流石にそれはないやろ。いくら空海師匠でもアカンやろ!）

「どうした、泰範。食べないのか？ 食べないなら、私が食うぞ」

ゾワリーと、泰範は空海の余りのオーラに気圧されます。食わねば、食われる。ええい、南無三と泰範は口にします。

(なんやこれ、うつつま！　とろける歯ざわり、肉やない、ほのかな土の味。これは、何や！　甘味、野菜？　教えてくれ真理はん。これは、何や。何なんや！　に……にんじ……にんじん……?)

そして、やはり顔を上げた泰範の背後には後光が差していました。

「……米、ほしいなあ」

「フフフ、泰範は欲しがりさんだな。好し、好し、大いに好し」

「師匠、私にも腕を！」

「いえ、私に先に！　もう我慢できません！」

「私にも！」

「私にも!!」

(食うておいて何やけど……これ、何の儀式やねん)

後の闇鍋の起源であります。

この儀式は余りにも過酷かつ財政を逼迫することと禁忌とされ、高野山では弘法大師の付近では決して話題にも上げてはならないとされました。

その後も修行を重ねた最澄と泰範は比叡山に戻る時が来ましたが、泰範の顔は優れませんでした。

「……どうすればええんやろな」



共に過ごすほど泰範は、空海のことも放っておけなくなってきたのです。まるで純粹で、無垢な子供のような師匠。食いしん坊で、誰かが見てあげないとその辺のキノコでも何でも口に入れてしまう危うさがありました。

一方の最澄は、いい加減子離れさせた方が良くと泰範が危機感を感じるレベルです。そして、万が一の時にも面倒を見てくれる弟子たちは比叡山には沢山います。

「……決めた。ウチは、もうー」

最澄が比叡山に戻った時、隣に泰範の姿はありませんでした。比叡山の弟子たちは訝しみます。

「あの、最澄様……泰範は？」

「彼女は……自らの道を見つけました。もう、山へは戻ってきません」

（すんまへん、お師匠さん。ウチは、このまま空海師匠の元で修業します。あの人は何か、アンタ以上にほっとけんし、密教もきちんと修めたいんや。どうか、笑って見送ってくれへんか……おとん、頼むわ）

「これは喜びべきことですよ。泰範が……私の拾ったときにはあんなにも小さかったあの子が、自分で道を選んだのです。だから、これで良いのです。これで……ああ、あああーっ！」

816年、泰範は最澄の元を離れ空海へ正式に弟子入り。その後、十大弟子の一人に

名を連ねることとなります。

同年の6月、空海は修禪の道場として高野山の下賜を請い、7月には勅許を賜わります。そして818年に寺院を建立し、高野山金剛峯寺―真言宗の総本山がついに始まったのです。

一方の最澄は非常に厳しい状況にありました。

「徳一……この麤食者そじきしや食べ方が汚い者、謗法者法を曲げる者め。根絶やしにしなくては……こんな考え、この世にあつて良いものではありません」

会津の徳一菩薩。

東北遠征で傷ついた人々から菩薩と崇められる存在ですが、彼は最澄が説いた「一切衆生悉有仏性」も「一切ウマ娘悉有優勝」の両方を批判し、仏になれるのは選ばれた者だけ。勝てるのは選ばれたウマ娘だけ。それ以外は救われないから表面上の戒律や訓練だけすれば良いと説いたのです。

最澄はこれに激昂。今までの彼ではありえないほど罵り、大論争へと発展します。徳一の矛先は空海にも向いていましたが面倒くさいことを嫌ったのか曖昧な表現で躲し、最澄にも本気で相手をするなど忠告しました。しかし、徳一が否定した「一切衆生悉有仏性」は天台宗の教えにとつて根幹となるものであり決して徳一の存在を認めることらできなかつたのです。

「負けられない……この男だけは、完膚なきまでに論破しなくてはならない。泰範……泰範、どうか、今だけでも力を……」

この時期、最澄は泰範に比叡山に戻ってきていないかとひどく湿っぽい手紙を送っています。困惑する泰範に代わり、空海が断りの手紙を返しました。その筆跡はかつて經典の貸し借りをした仲とは思えぬほど冷たく、明確な拒絶の意図が込められています。

（キミの事情に泰範を、キミの子を巻き込むな）

手紙を読んだ最澄は正気に戻り、心から後悔しました。しかし、徳一との論争はもともと体調の優れなかった最澄の寿命を極端に縮めることとなります。

「時間が欲しい……もつと時間が……そうすれば一切衆生を救えるのに。泰範とも、空海とも、また、一緒に……」

822年。伝教大師最澄、入寂。

廟所は比叡山東塔の浄土院です。

彼の入寂を嵯峨天皇の他多くの人々が悲しみましたが、空海と泰範がどう思ったのかの記録はありません。

「……最澄、キミは立派に天台の教えを根付かせたじゃないか。私は、まだ密教の華を咲かせられていない」

822年に空海は東大寺に灌頂道場真言院建立。この年に先の変で出家していた平城上皇に灌頂を授けています。

翌年には平安京の東寺に密教の道場を設けるなど着々と日本に密教の華を咲かせる準備を整えていきます。

さらに、824年には東寺の付近にあった藤原三守の私邸を譲り受けて私立の教育施設綜芸種智院しゆげいしゆちんを開設。当時の高等教育は貴族を対象にするなど、一部の人々にしか門戸を開いていませんでしたが、綜芸種智院は庶民にも分け隔てなく教育の門戸を開いた学校でした。

827年、勤操和尚が入寂。空海はその死を惜しむ碑文を遺しています。

830年には淳仁天皇の依頼で『秘密曼荼羅十住心論』十巻を著し、後に本書を要約した『秘蔵宝鑰』三巻を著しました。これは普通の人が悟りを開くまでの手順を十段階に分けて説明したものです。

832年に空海は高野山にて最初の万燈万華会が開かれます。そこで、空海はある願いを捧げました。

「虚空尽き 涅槃尽き 衆生尽きなば 我が願いも尽きなむ宇宙が尽きるまで、悟りを求めるものが尽きるまで、生きとし生ける者が全て輪廻転生から解脱するまで私の願いは尽きる事が無い。」

「……生きとし生けるもの全て救われる。おとんみたいなこと言うんやね」

「彼の教えも、私の中に根付いている。もちろんキミの中にもな、泰範」

「分かつとる。おとんも、ウチらも、まだまだ修業の中にあるんや」

「そうだな……」

この頃から空海は体調を崩し、朝廷から与えられた様々な役職から身を引くようになってきました。

そして、835年3月21日。空海は今日がその日だと悟ると独り高野山奥の院にて座禅を組みました。

「……袈裟はやれんぞ、泰範」

「何や気付いとったか。それより今日なんやろ？ その重荷、ウチに渡さんでええんか？」

「ついこの間まで、そのつもりだった。この国に密教の華が咲き、私の役目は終わった。けれど、だからこそ理解した。この重荷は、私で終わらせるべきなんだ」

恵果和尚から受け継いだ袈裟。仏教と密教の歴史全てがこれに集約され、受け継ぐものはこれまでの仏教全てを受け継ぐことを意味します。そして、それに耐えられる者は盛期の最澄でさえ受け継げたか分からぬ代物と化しており、今の泰範ですら耐えきれ

ものではないでしょう。

「背負うんやな……何時までも」

「なに、たったの57億年だ。弥勒菩薩を手助けしたらこの袈裟も、きつと必要なくなる。それまでゆつくりと待つさ。さあ、一人にしてくれ。今からは、犀の角の如く独りでいきたい」

泰範は空海に従い、その場を去りました。

「諸行無常 是正滅法 生滅滅已 寂滅為樂。……何だか堅苦しいな」

涅槃経を口ずさむも、どこか不満げな空海。彼女は自らの尾で作った筆を取り出すと、最後の書を遺しました。

「色は匂へど 散りぬるを

我が世誰そ 常ならむ

有為の奥山 今日越えて

浅き夢見じ 酔ひもせず」

書かれた文字が喜んでいるのを空海は感じると再び座禅を組み、静かに目を閉じました。

好き哉、好き哉。大いに好し。

弘法大師空海、入寂。奇しくも恵果和尚と同じく午前4時だと伝わります。

享年一〇なし。未だ高野山奥の院にて修行中。

「……さて、ウチはどないしようかな。ま、この世には世話の焼ける奴らで溢れとるし。ちよいと手を貸してやろうかね」

837年、当時60歳として僧綱牒に泰範の名が見えますが、それ以降の消息は不明であります。

空海が花開かせたものはその後の日本の文化に大きく影響を与え、特に太宰府での説法は現在のウイニングライブの根源の一つとも言われています。そして、最澄の遺した天台の教えもまた鎌倉仏教の母として日本の歴史に影響していくのです。

「はい、弘法大師の生涯を通して平安仏教を学んできました。サトリさん、弘法大師は本当に太宰府であのような説法を？」

「はい。弘法大師は日本古来より伝わる歌と舞踊に、大陸で学んだ密教、それに拜火教の影響も見られますね。炎や光、音というものを弘法大師は重要視なされ、多くの楽曲に関わっています」

「能書家としても、最後に遺したのはいろは歌ですよ。あれも弘法大師のものだったのですね」

「諸説ありますが、私はそのように解釈しています。涅槃経に通じ、50音全てを使つて

歌を作るなど弘法大師以外の誰ができるのでしょうか」

「確かに……あと、言つて良いのか分かりませんが……伝教大師は経典を読んだあたりから何がー」

「天台の方については答える立場にありません（アルカイックスマイル）」

「あ、ハイ、仏スマイルいただきました。それでは、現在の高野山と弘法大師について触れてお別れとさせていただきます。サトリさん、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

高野山奥の院。ここには弘法大師入寂から続く日課があります。朝、昼、晩に弘法大師が今も修業中という廟所に食事を運ぶのです。弘法大師の廟所に入ることが許されるのはたった一人。そして、選ばれた僧侶は中がどのようになっていのかを決して明かしてはならないとされています。

昼の膳を運んできた僧侶が、朝持つてきた膳を見てくすりと笑います。彼は5年ほどこの役職を続けていますが、毎日変わらない光景でした。

「……今日もお元氣そうですね。弘法大師」

尋常ではない、それこそ人間ならば食べきれない量の食事ですが、その日も米粒一つ残さず平らげていました。お昼の膳も、きつと綺麗に完食されることでしょう。弘法大



終

師空海は、今も高野山奥の院にて遙かなる未来を見据えて修業しているのです。

制作 日本ウマ娘放送協会府中支部

次回予告

平安時代終期、大江山。

都を恐怖に陥れた盗賊集団の長、酒呑童子。

そんな彼が、心の底から相手にしたくなかったヤツがいた。

「お、おまえ大将首だろ。大将首だな。大将首だよなあ！ このライコウちゃんに首差し出せオラア！」

「ライコオオオ！ 何してんだお前エエエ！」

第8回『ゴールドスピリッツ　　<sup>ロングウエイ</sup>道長とライコウちゃんの奇妙な冒険　　鬼殺の刃を添えて』

「人間なんてさ、やりたいようにやりやあいんじやね？」

「それお前が一番言っちゃダメなやつ。お前はマジで真面目にやってくれませんかねえ

!

まあ、ライコウだし。

ご期待ください？

## 第8回「ゴールドスピリッツ ～道長とライコウちゃんの奇妙な冒険～ 鬼殺の刃を添えて」序

時は平安時代。雅な文化が花咲き乱れ、春はあげぼよ、夏は夜うまびよのまさに栄華。欠けたことも無い完璧な世の中が広がって——いるはずもなく。

「ヒヤッハー、米を出せオラア！」

「ひゃっはー、甘いものよこせー！」

世はまさに末法の時代。

どうしてこうなった。

仏陀と空海は寝ておられるのか。

事の始まりは桓武天皇による軍団の廃止です。貴族の勃興と荘園の拡大は地方にとって中央の利益を還元するところになります。一方で朝廷の経済基盤を切り売りする事となりました。そのため、朝廷の所有する軍隊である軍団の維持に予算が割けなくなっていました。

とはいえ、この時はまだ蝦夷平定もままならぬ時代。軍事費の削減は緩やかに行われるかに思いましたが、運が良いのか悪いのか、同時期には彼がいたのです。

「もう田村麻呂だけでよくね？」

「他の軍隊とか無駄じゃね？」

「いない、いない。軍団なんかいない」

「田村麻呂なら何とかしてくれるでしょ」

軍神・坂上田村麻呂と鈴鹿御前。

余りにも強すぎた二人。無敗のまま蝦夷平定を成し遂げた軍神と仙女。彼等の存在が桓武天皇と、中央貴族の目を眩ませてしまいます。あるいは、それ以前から愚かだったのでしょうか。

兵役は確かに国民の負担でありましたが……その対案は、日本全国51ヶ国に3155人の精鋭中の精鋭たる健児こんでいのみで国防と防犯を賄うという狂気の策でした。後世の我々からすれば、無茶がすぎると言う他ありません。参考までに、2021年時点で自衛隊員は約22万人、警察官は約30万人です。現代日本と平安時代の人口差は約25倍かつ需要も異なりますが、それでも軍団の廃止は頭ハッピーミックと言わざるをえません。

それでも軍神なら……軍神ならこんなパカな計画を止めてくれるかと期待したかったです。軍団の廃止が始まったのは792年。彼は歴戦ウマびよい被害者の会の先輩達と共に、東北の美しい自然の中を逃げる蝦夷を追いかけ回していました。ウソデシヨ……。

斯くして、誰も現場の意見など聞くことなく愚策は実行され、朝廷は地方統治を事実上放棄してしまつたのです。そして、健児だけで国内の治安維持ができるはずもなく日本列島は無政府状態に陥り、この解消には何と300年後の鎌倉幕府の成立を待たざるを得ず、動乱の沈静化には600年後の江戸幕府の成立を待たねばならないのです。

そして、国内の無秩序化はこれまでの為政者が危惧しつつも「ウマ娘達ならば大丈夫だろう」と楽観視していた事態を招くのです。

ウマ娘の無法者の出現――角のように突き出た2つの耳と人並み外れた力を持ち、人参を貪り、ヴィクトリーズファンか大阪のおばちゃんの如く虎柄を愛好し、村に降りては男を略奪<sup>うまびよい</sup>する存在。後世で、鬼と呼ばれるウマ娘であります。

殊に大江山や伊吹山など平安京周辺の山には組織化されたウマ娘の盗賊団が跋扈し、軍隊を手放した朝廷はなすすべなく蹂躪されてきたのです。そう、奴が都に産まれるまでは。

## 日本ウマ娘放送協会特別企画

## ウマ娘と迎る日本の歴史

第8回 「ゴールドスピリッツ」  
ロングウエイ 道長とライコウちゃんの奇妙な冒険  
 鬼殺の刃を添えて」

「はあ……あ、大変失礼しました。今夜も始まってしまいました、ウマ娘と迎える日本の歴史。主題となるのは武士の始まりと摂関政治という平安後期の欲張りセットのような内容です。解説には……えー、昨年社会現象となりました平安時代を舞台としたマンガ『鬼殺の刃』の原作者であり、財団法人 マックイーン M & サイレンス S の副代表でもあるオールバトさんにお越しいただいております。オールバトさん、よろしくお願ひします」

「本題とは離れますが、昨年の映画『鬼殺の刃 無限牛車編』の興行収入世界1位おめでとうございませう」

「ありがとうございます。狙うなら世界1位というのが相棒であり作画担当のジャスターロングエスケープの目標だったので、達成できたことを心から感謝いたします」

「鬼殺の刃は、ストーリー性もそうですが歴史家が裸足で逃げ出すほどの、まるでその時代を生きていたかのような時代考証の巧みさと知識もまた見どころの一つでしたが、オールバトさんはどのようにして調べたりしたのですか？」

「まあ、実際に生きてきたからな。いやあ、酒呑童子は強敵だったぜ。飲み過ぎた3日



目の朝くらいの強さだったな」

「え？」

「……冗談ですわ。オホホホ」

「あ……ハイ。一瞬、深窓の令嬢かくやという美貌に謎のヘッドギアを付けた姿が見えた気がしましたが、はい、気のせいですね。さて、まずは武士の起源について辿っていきましょう」

そもそも武士の起源はどこからなのか。実は、未だに3つの論が争っている状況なのです。

1. 開発領主に求める説（在地領主論）
  2. 出世から外れた下級貴族に由来する説（職能論）
  3. 律令制崩壊後の国衙軍制起源説（国衙軍制論）
- 1は古来より存在する説で、地方領主が自衛のために武装した結果、武士化していったというものです。

2は地方領主説で説明できなかった中央貴族に近しかった源氏と平家が武士の棟梁となった理由を、出世争いから外れた貴族が武装し武士化していったというものです。これは失脚した貴族が大宰府等で軍人として左遷されていること等から説得力があり

ますが、一方で武士団を構成する要であるウマ娘がどこから現れたのか。また、武士団の特徴である高すぎる結束力イカれたが説明できません。

そこで提唱されるようになったのが3の、健児こんでいや防人など地方に元々存在していた武装組織が武士の原点であり、所属するウマ娘たちは経済的な庇護を求めて地方領主や源平藤橘と言った貴族を後援者に迎えて発展したという説です。

つまり、古来からあつた武装組織が国からの賃金よりも貴族に仕えた方が豊かになると気付いた結果、武士団として覚醒したのです。これならばウマ娘は吉備真備や坂上田村麻呂仕込みの弓バの道を身に着けており、人間への高い忠誠心愛情も理解できます。一方で、後援者となつた貴族もウマ娘に魅力されるあまり自らを鍛え始め、そしてハジけました。

3の説に説得力を持たせるのが武士の武装です。

中世武士の鎧と言えば大鎧。重さ30キロ以上にもなる鉄壁の装甲です。それでいて仏具由来の制作法が取られ見た目も美しく、実にウマ娘好みの可憐さがあります。一方で、薄い鉄板でしかない西洋のプレートアーマーが約40キロ、帷子などを含めると更に重量があつたのに対して大鎧は比較的軽量かつ防弾性が高いものでした。これは西洋甲冑が体全身を覆う完全防御方式であつたのに対し、大鎧は頭と胸に重点を置く集中防御方式であつたことが理由として考えられます。

また、大鎧の恐るべきところは機動力の確保をある程度可能とした点です。元々の大鎧は草摺という下腹部から太腿にかけてを守るスカート状の鎧が箱のように4分割されただけであり非常に走りやすく、ウマ娘からは大不評を被ります。そのため、走りやすいよう細分化するなど工夫されていきました。重さ30キロもウマ娘にとつては軽々としており、人間でも伝承上とはいえ大鎧を纏ったまま2丈（6メートル）跳んだ話が存在します。

武装には専ら和弓が用いられました。この和弓、長さ2メートル以上もあり世界最大の長弓であります。射程は約400メートル。その扱いは洋弓とは比較にならないほどの高い練度を要求されると言えます。これだけ見ると、汎用性では洋弓（射程は約300メートル）の方が優れているように感じますが、和弓の恐ろしさはむしろ弓ではなく、矢にあります。

日本の鎌は、とにかくデカい。鍛冶師により一つ一つ丁寧に作られた鎌は、当たれば一撃必殺の威力を有します。その脅威たるや、後の元寇において元軍が自軍の盾を軽々と貫通する鎌倉武士団の矢に対して恐怖した記録（ドク引キ）が残っているほどです。

一方で近接武器も巨大化の傾向が見られます。刀は直刀から太刀へと移り、更には矛から派生した薙刀などリーチ面と一撃の威力に着目した武器が主流となっています。

重装騎兵。盾を排除する代わりに重厚な鎧で身を固め、長射程高威力の弓を主武装と

し、近接時にも太刀や薙刀といった殺意溢れる武器で襲いかかる。大陸のウマ娘達からすれば白目を剥きかねない狂気です。

ウマ娘最大の武器である機動性をある程度犠牲にし、代わりに得たのは圧倒的なパワー。機動性を駆使するならば、攻撃を跳ね返す鎧を身にまえば良い。よしんば接近を許しても、軽鎧如き何人か纏めて叩き斬る近接武器があれば良い。

まさに脳筋。力こそパワー。スパルタも真つ青な力技こそ、朝廷の要求に対する国防ウマ娘達の解答<sup>アンサー</sup>だったわけです。

地方で力を伸ばしていた武士団が中央に進出するきっかけとなったのが平将門です。

桓武平氏には後に平清盛を排出する伊勢平氏の他、桓武天皇の孫である高望王を祖とする坂東平氏があります。将門は高望王の孫にあたります。

10世紀頃には地方の領主だった将門が藤原北家と主従関係を結び後援を得るなど、地方と中央の間で太いパイプを持つことが確認できます。この将門の存在が後の武士団へ大きな影響を与えたことは間違いありません。

将門は俠気のあるサツパリとした性格だったようで、主君の藤原忠平後の関白・太政大臣。朱雀天皇や道真公にさえケチをつけた占い師が神識才貌、全てが良いと絶賛した人物。なお、道真とも仲が良く彼の大宰府左遷に最期まで反対した。宇多天皇に気に入られすぎて皇女を降嫁されているが、この皇女は道真の孫娘でもあるので二人は親戚と

いうことになる。からも気に入られていました。

将門は最初中央で近衛兵として就職を希望しましたが叶わず、地元である下総へと戻ります。ところが、地元は親戚同士で土地をめくり骨肉の争いとなっていたのです。将門は叔父等の親戚とは不仲でしたが、これは土地の問題に加えて分家筋かつ都会派シテイボーイの将門と本家筋で上京経験の無い親戚達と反りが合わなかったことが原因と考えられます。将門は幾度も襲撃されるも優れた武勇で乗り切り、結果として関東一帯に影響力を強めることとなります。将門には敗北した親族から反逆者の濡衣を着せられそうになるも、忠平が認めた人柄と彼の後援が幸いしてか無罪となり、朝廷も将門を重んじるようになります。

後の清和源氏の祖である源経基が武蔵国の国司となった際に地方豪族とのトラブルを起こした時には将門は調停者として動きますが、解決寸前で経基が命の危機を感じて都に逃亡し失敗。経基は将門が反乱を企てていると讒訴しますが、朝廷は将門から事情を聴くと将門を無罪とし、逆に経基を罰したのです。ここまでは、将門にとって栄光への道のりであったでしょう。

将門の美点は誉れ高い俠気にありました。坂東ウマ娘達も彼の人柄を慕って集まり、将門の軍事力を支える騎バ隊を形成しています。しかし、その美点が弱点へと反転する時が来てしまうのです。

将門の元にはトラブルから逃げてきた者やアウトローが集まり始め、人の良い将門は彼らを守ろうとします。常陸国の国司に匿った者達の逮捕命令を撤回させる過程で戦鬪となり、将門は意図せずして反逆者となったのです。その隙をかつて将門に破れた者達は逃しませんでした。

「それ見たことか。やはり将門は反逆者ではないか！」

源経基は罪を許され、逆に従五位下に叙せられます。そして、将門を討つために関東に赴いた際には――全てが終わっていたのです。

将門の首を前に経基は独り座ります。無念の表情を浮かべる将門のこめかみには矢傷があり、尋常ならざる傷口の深さは射手がウマ娘であったことを意味しました。

「……何があったのだ。あれほど勢いがあつたお前が、なぜこんなにも呆気なく。どうして、俺との決着を付けずに死んでしまったのだ。お主は知っておるのか、トータ殿」

気配を隠していたのは高齢のウマ娘でした。名を、藤原秀郷。通称を俵トータ。大百足退治やお米大好きで知られる歴戦のウマ娘で、龍神の娘とも言われました。

「……つまらん話だよ。このパカは自らが招いた業に縛られていた。実はね、最初アタシはこいつの味方になってやっても良いと思っていたんだ。他のウマ娘からの評判も良かったし、どんな男かと興味もあつた。そして、失望した」

時は将門が討たれる前に遡ります。

反逆者となつた将門は関東各地に援軍を求め、その中に坂東ウマ娘達の評判を聞きつけた下野国の豪族、トータもいたのです。

将門は老将トータが来たことを喜び、食事を中座して謁見に応じたのですが――

「将門殿、袴に米粒が……」

「ん？ おお、いかんいかん。お恥ずかしいところをお見せいたしもうした」

何の気無しに袴についていた米を振り払つた将門。しかし、それがトータの逆鱗に触れた。

「お米を蔑ろにするなッ！」

結局、将門に君子の器無しと見限つたトータはむしろ将門討伐軍の先鋒となるのです。

一方の将門は周囲に促されるがままに自らを新皇と名乗り、関東に独立国を打ち立てることを目論みます。そして、敵方である従兄弟の平貞盛を討つべく常陸国へ出陣した際に、貞盛の妻が捕らえられて辱めを受ける事案が発生します。将門は直ちに貞盛の妻に衣服を与えて安全な地へと送つたのですが、規律こそ自慢であつた坂東ウマ娘達は自分達よりもか弱く高貴な女性を手籠めにした将門にまとわりつく者共に嫌気がさし、一斉に故郷へと帰つてしまいました。そのため、一時は5000騎いた将門の軍は1000人騎とはウマ娘との混合軍を意味するが、歴史書は意図的に騎ではなく人を用いてい

る。これは、将門がウマ娘からの信頼を失ったことを意味する。にまで数を減らしませぬ。

平貞盛はトータにとって親戚筋にあたり、彼女は将門への失望を一層深め、4000の兵を率いて将門と争います。そして、戦場で将門を見つけると渾身の一矢を将門に放ったのです。

「……話はこれで終わりさ。全く、救えねえ」

「流されるがまま、信じていた者たちを裏切ったか。ありがとう、トータ殿。人の過ちを、ウマ娘が正してくれた」

「どうだかね。今回の件で世の中は変わるよ……悪い方向に。将門はウマ娘無くして戦の勝利はありえないと世の中に知らしめると同時に、ウマが合うならば逆賊でもついていってしまうと分かった。アタシだって、米のことさえなければこいつの力になっていたかもしれん。もしかすると、そこで首になっていたのはお前だったかもしれん」

「怖いなあ、トータ殿は」

「まあ、それはともかくとして……朝廷が絶対的な統治者から落ちたこともこれで露呈しちまった。未だかつて、武力で王朝を打ち立てようとした者はいなかったが、ついに現れてしまった。それも、自ら望んだわけでもなく。望んだのは世の中から爪弾きにされた者かもしれんが、関東の者達はその望みを一時は良しとしたのだぞ。これを凋落と



言わずして何とする。間違ひなく世は乱れ、人々は争う。ウマ娘達も、果たしてどこまでお前たちを見限らずにいられるかな」

「……怖いなあ。本当に、怖いなあ。そうならんように、しつかりせんといけんなあ」

トータの予言通り、将門の乱と同時期に瀬戸内にて藤原純友が反乱を起こしました。この二つを合わせて承平天慶の乱と呼びます。その後も各地で反乱が相次ぎ、世は乱れに乱れたのです。

一方、地方豪族が起こした反乱を同じ地方豪族が打倒し、勝った側を中央貴族が後援する体制により武士団は公的な存在から莊園を守る私兵集団へと変わってゆきます。その結果、地方の治安が安定すると引き換えに誰も平安京の治安維持に身を割かなくなっていました。平安京のウマ娘達はやる気のない朝廷に絶望し、ついにはウマ娘同士で結託して山に籠るようになります。最初は緩やかに生きていたのかもしれない。しかし、ウマ娘も千差万別。大半が穏やかな気質かもしれませんが、時には荒れ狂う嵐のようなウマ娘もいます。そんなウマ娘が、往來の人を襲ったとして何の不思議があるでしょう。まして、遙かに力に優れたウマ娘が、勢い弾んで人間をバラバラに引き裂いたとしても、全く不思議ではなかったのです。

「おいおい、何だよ。人間ってのはこんなにも脆いのかよ」

「やりすぎだぞ、シュテン。そんなんだから他のウマ娘にも恐れられる」

「パーカ、ちと加減を間違えたただけだ。それより不味いな。うっかり殺しちまった。こりや、流石に追手が来るか」

「……どうかな？　賭けてみようか。私は追手なんか来ない方にかけてるけど、君はどうする」

「あ、あ？　お前が先に賭けるなよ。勝つ方だろそれ」

「はは、三冠バと言われた君が器の小さいことだ。それとも、負けるのが怖いのか？」

「……面倒くせえ。そうやって挑発してんのはわかってるんだぞ、イバラギ」

「おや、もう手ぬぐいを口にあててしまったか。それすると途端に冷静になるよね、君。猫かぶりか？」

「うるせえよ。黙ってずらかるぞ」

大江山に拠点を構える盗賊団の始まりは不明ですが、およそ980年頃に活動が最盛期であったと言われます。首魁は赤味の強い栗毛のウマ娘、酒呑童子。副官に無類の賭け事好きと知られる茨木童子。二人のウマ娘率いる盗賊団は、たびたび都を荒らし周り財宝と食料、時には男性や配下への褒美として女性を略奪するなど暴虐の限りを尽くします。

「何かすごいことになったな、アタシら」

「そうだな。私は適当なところで追手が来て、解散してトングラするほうに賭けていた

のに。残念、負けてしまったよ。夢野旅路とかいうウマ娘は読みが凄いな」

「姉貴……何してんだアイツ」

「そう言えば、摂津からヤツが帰ってきて本格的に平安京に住み着くらしいぞ。いよいよもつて私らも終わりかねえ」

「……あの芦毛のイカレ娘。朝廷も度を越したパカか。アイツを都に置くくらいなら遷都した方がマシな話だろ」

「朝廷の頭がオカシイのは元宮仕えの私らがよく分かつてるでしょ。摂津源氏……武士でありながら治部大輔を務め、鎮守府將軍に昇る。安和の変では左大臣家に仕えながら売り渡した二重間諜。経基のジジイも厄介だったが、満仲のオツサンも強か<sup>した</sup>かったな。他の武士団の頼みでオツサンの家に火をつけたこともあったなあ。まあ、その時一緒にいた人間は全員満仲に斬られて死んだだけ」

「……奴等は将門の乱で平氏が名を落としたのと引き換えに武家の代表として名を挙げた。諸国から優秀なウマ娘を集めるなど人材育成にも熱心だな。さて、どうなることやら」

980年。藤原家で力を持つ藤原兼家にとっては喜ばしさと腹立たしさが入り乱れる年でした。娘の藤原詮子を円融天皇に入内させると翌年には第一皇子の懐仁親王（後の一条天皇）を生んだのです。外戚となる機会を得て有頂天の兼家でしたが、中宮立后

したのは関白藤原頼忠の娘である遵子でした。唯一の後継者を産んでいるにも関わらず正妻の座を奪われた詮子と兼家は憤慨します。更に、頼忠の子で遵子の兄である藤原公任が兼家の屋敷の前で「こちらの女御はいつ立后なさるのか」と煽り、ひどく恨みに思ったのでひた。

「公任の小僧めが……今に見ておれ。今だけは父親の位が高く天狗かもしれないが外戚の地位はワシのものだ。時が経てば落ちぶれるのは貴さmぬわあああッ！」

「親父イイイ！ 親父が鞠のように飛んでいったア！」

「こんな滅茶苦茶な事するのは奴しかない。出ておじやれ、右大臣ぶつ飛ばすのはお前しかいねーだらライコォ！」

「兄上方落ち着いてください。父上がライコウにぶつ飛ばされるのはいつものことではありませんか」

兼家の子である道隆と道兼は慌てふためき、道長は慣れたのか諦めたのかのんびりと構えていました。

「悪い、悪い。アタシの荒ぶる芦毛魂を放つたらうっかり変な波動が出ちゃった。あれ何なんだろうな。伝説のウマ仙人の敵討ちで宿敵・登仙弾正を蹴り倒した時以来の快感だったぜ。今度近所の晴明に訊いてみつか陰陽師の安倍晴明は源氏邸宅のご近所で、ライコウもしばしば相談に行っていた。」

「ライコウ……おま、ワシを誰と心得るか。右大臣ぞ。偉いのだぞ。それを、わけのわからん光だか何だかで吹き飛ばしおつて……その技教えてくれんか？　ちよつと公任の家につつ放してくる」

「ふふ、そりや無理つて話だぜ。この技は芦毛流に伝わる伝説の技だかな。聞くところによると光明皇后が旦那に甘味を取られた際に怒りから編み出された哀しき技だ。とても人間が扱えるようなものじゃねえよ」

「そうか……残念じゃ。ところで、何しに来たのだ」

「ん？　ああそうだった。実はアンタにお願いにきたんだよ。アタシつてばニルヴァーナ弥勒のことを考えていたらうっかりお前んちの前でお貴族様と肩がぶつかつちまつてな。取り敢えずイチヤモンつけられる前に河原に頭から埋めてやったんだけどさ、どうもそいつ蛋白の子、藤原筋肉とか言うやつだったみたいでな。早い話が、訴えられた。タスケテ」

「でかしたもつとやれ（何をやっておるのだお主）」

「父上、本音と建前が逆になっておりますぞ。あと蛋白ではなく関白、筋肉ではなく公任ですよライコウ」

「何だよ道長<sup>ロンクウエイ</sup>。ツツコミにキレがないなあ……そんなんじや眼鏡が本体の眼鏡<sup>新八</sup>とか魔夜羅<sup>マヨラー</sup>の副長に勝てねえぞ。やっぱりアレだ、改名しろよ。こんな事もあろうかと近所

の清明に名前考えてもらったぞ。此道ジャスタウエイって言うんだけど」

「他人の諱をホイホイ変えないでくれませんか。て言うか、眼鏡とか魔夜羅とか何なんですか。時代考証のことちよつとは考えてくれませんかね」

「おいおい此道ジャスタウエイ、もつと宇宙規模で考えやがれや。いいか、ここから土星まではおよそ80光年……長さ5寸の釘を1、4億個並べたくれーの距離だぞ。つまり、本気出しやあ明後日には着ける距離なんだ。アタシの言いたいこと、分かるよな？ 分かんなかったらオマエも河原に埋めるぞ」

「分かるかアアア！ 突っ込みどころ多すぎて捌くのが面倒だつてことをお前が分かりやがれ！ つーか諱変えんなつつてんだろこのパカ！ この時代だと本気で呪い殺す気だと思われてもおかしくねえぞ！」

「わーい、道長がキレてやんの。イイねーオメーもそこそこノリがよくなってきたじゃねえか。3日目の佃煮くれーの仕上がりだな。猫被つてるけどオマエの中にヤベー奴の血が入ってるのは知ってたぞ。優等生の仮面なんか捨てちまえYO」

「捨てませんッ！ 僕は学んだんだ。やんちゃ系よりも真面目系の方がこの時代はモテるんだ。僕は詳しいんだ！」

「え、ワシ、ヤベー奴扱い？」 ↑道長の父・兼家愛人の藤原道綱母が書いた蜻蛉日記で滅茶苦茶愚痴を書かれている人。

『何も言えねえ』↑祖父・師輔（故人）内親王フエチで3人も降嫁してもらった。うつほ物語の主人公で「限りなき色好み」の右大将藤原兼雅のモデル。

「とか言っちゃつてー、ライコウちゃんは知ってるんだゾ☆ 本当は盗んだ牛車で走る京童共に憧れてるんだろ？ 弓の鍛錬の跡、残ってるぜ。しかも相当の腕前だ。隠れて鍛錬してるんだろ？ 知的な青年として世の姫君を口説きたいんだろうけど、一方で筋肉モリモリの強い男への憧れも止められない。分かるぜ、その気持ち。男の子つて、悪ぶりたい時期あるよな。アタシ、ウマ娘だけど」

「止めろめろめろライコウめろ！ 止めてくれ、その秘密は僕に効く。止めてくれ」

「ライコウはアレじゃの。道長のことが気に入っておるようじゃな」

「でかした弟よそのまま盾になってくれ（源氏の当主に見初められるなんて羨ましいぜ）」

「どうせ出世できん3男坊なんじゃからいつそお主も源氏になればよくね？（羨ましいなあー、憧れちやうなー）」

「オイコラ、パカ兄貴共……本音と建前、逆さだぜ」

源経基の孫娘、源頼光みなもとのよりみつ。自称、ライコウちゃん。この頃は地方の国司クラスの下級

貴族であり、摂津源氏の実質的な棟梁であります。非常にアグレッシブかつ掴みどころのない狂人ハジケリストじみた彼女を朝廷も権力者も、父親でさえ止めることはできず「まあ、ライ

コウだし」で諦められる変な立ち位置を築いていました。

ライコウは藤原氏の、特に藤原北家の末裔である兼家に仕えていました。この年には詳細不明の乱闘により取り調べを受けましたが、右大臣兼家のおかげか「まあライコウだし」とお咎めなしとなっております。

兼家の3男である道長は何故かライコウに気に入られてしまいライコウの被害に遭う確率を下げるため父や兄達は率先して道長を差し出したと言われます。

「よし、お願ひも終わつたし遊びに行こうぜ。球体から穴をくり抜くつて遊びなんだけどよ……凄えんだぜ。虚無感が」

「頼むから帰つてくれライコウ、300文あげるから。誰がそんなつまらん遊びをするんだよ」

「そりゃアタシとオマエだろ。世界がつまんねーなら、オマエ自身が面白くなるこつた！ まあ、球体から穴をくり抜くことに虚無感があることは変わんainだけだな」

「タスケテー、父上、兄上、タスケテー！」  
道長は助けを求めた。

「「……………」」

返事はない。

救いは無いようだ。



「救いは無いんですかあー！」

「うおっしやあアアア！ 何だか知らんがノツてきたぜ。さあ今こそ遙かなる朱雀大路に繰り出そう。まあ、今の平安京とか乞食と野良犬くらいしかいねーけど、それはそれで乙だろ。虚無まで運んでやるよ……この袋に入れてな」

「やめろオ！ 何だその頭陀袋は！ くそッ、離せ、HA☆NA☆SE！ 畜生、恨むぞ父上と兄上共……たとえ輪廻100万回巡っても、恨み晴らすからなあアアア！」

貴族とは……武士とは……。

もはや誰にも分からない。私にも分からない。それが平安時代後期という混沌とした時代です。

そんな時代にも一つの標を残し、後に平安貴族と武士とはどのような者であったのかを象徴とすることになる2人。今は気ままに生きる芦毛のウマ娘と、頭陀袋の中でもがく貴族の3男坊が歴史の表舞台に立つまで、あと4年。

## 第8回「ゴールドスピリッツ　　道長とライコウちゃん の奇妙な冒険　　鬼殺の刃を添えて」(。D。 )　ハア？

984年、円融天皇は花山天皇に譲位し、東宮には道長の姉である詮子の生んだ懷仁親王が立てられます。政治の実権は花山天皇の外舅藤原義懐と乳母子藤原惟成が握り、義懐と惟成は荘園整理令の発布、貨幣流通の活性化、武装禁止令、物価統制令、地方の行政改革など革新的な政治を行ったが、これは地方に荘園を持つ貴族やその恩恵を受ける武士団にとっては許しがたい行いでした。

荘園整理令は醍醐天皇の頃最初に発令されたもので、内容は不正な荘園の整理と停止にあります。貴族の荘園は彼らにとって莫大な利益を産む一方で、朝廷からすれば国司への税収を下げるものでしかありません。特に不法な荘園は現代で言えば脱税かつ公金横領と言えるでしょう。しかし、革新的な政策は関白である頼忠らとの確執を招きました。

話は逸れますが花山天皇、かなり下半身が凶暴で知られております。特に伝説となったのは即位式での出来事。高御座に昇って即位を宣言する儀式の始まる直前に、幕を開くお役目を仰せつかったウマ内侍女官にして女流歌人。その名の通りウマ娘でこの時



花山天皇は道長達藤原うまびよいブラザーズがお気に入り、特に2歳年上の道長を殊の外頼りにしていたようです。

ある日、暇を持て余した花山天皇は突如として肝試しを開催します。この時代の平安京は魍魎魍魎に野犬と盗賊が跋扈し、生きている者と死人の境界すら曖昧な死の都。たとえ内裏であろうとも安全圏ではありません。そんな場所を夜に歩くなど正気の沙汰ではありません。

皆が恐れおののく中、道長だけは花山天皇に面と向かって言い放ちました。

「べ、別にビビってなんかねーし。これはアレです。武者震いつてやつですよ」

「ほほう、そうか。では全員一人ずつ大極殿まで行って参れ。まずは道隆、次に道兼。後はおいおい出発し、最後は道長じゃ。ほれ、頑張れ♡ 頑張れ♡」

「何してくれとるんじゃアアア、この愚弟!」

「どうする兄さん。処す? 処す?」

「うるせえパカ兄貴共! 死なば諸共じゃい!」

道長のせいで渋々参加することになった貴族達は下手人を後で簀巻きにして河原に埋めることを誓いつつ「ゾクツ! 男だらけの肝試し大会」が始まったのです。

トップバッター道隆は出発早々に木の葉の擦れる音にビビってリタイア。続く道兼は結構いいところまでいくものの闇の中を蠢くナニカ(猫)に発狂し惜しくもリタイア。

幾人もの貴族がリタイアするのを着に花山天皇は愉快します。

「だらしのないのう。次は大トリの道長じゃな。是非とも頑張つて欲しいのお（ネタ的な意味で）」

「ご安心なされよ帝。道長は弁えた男。きつと失禁のみならず脱糞までして戻ってくるはず」

「そうだ、そうだ。無事に戻ってくるなんて道長のくせに生意気だし、どうせなら腹がよじれるほど面白く散れよ」

「期待してるぞ道長」

「「みーちなが！ みーちなが！ みーちなが！」」

「あの……これ何のイジメですか？」

「身から出た錆じゃ。ま、とつとと散つてこい」

叩き出される道長。何かやらかさなければ埋めるといふ鋼の意思を背中に感じつつ、彼はとぼとぼと大極殿へ向かいます。

「やべえよ……超怖えよ。絶対何か出るよ。あの井戸とか怪しすぎるよ。大丈夫か……中から貞○とか出ないか？」

何とか大極殿まで来た道長でしたが、ふと視線をやると、そこには枯れ井戸が一つ。怪しがりて寄りて見るに、中から白髪の悪鬼が如きナニカが飛び出したのです。

「キエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「おつ、何か出たのか? よーし、この平安の怪異殺しことライコウちゃんに任せとけ。鬼か? 鶴か? それとも競技か? 何でもイけるぜフオオオオ!」

「お前かアアアい!」

残念、ライコウちゃんでした。

「ん? 何だ道長かよ。こんな夜更けにどうしたんだ。人生の迷路にでも迷ったか?」

「帝の思い付きでいきなり肝試し大会やってんだよ。お前こそ何で井戸なんかにいるんだよ」

「アタシは帝の命令でここまで来たヤツを脅かすのが仕事だけど?」

「仕込みかよオオオ! やっぱり性格悪いよあの帝。僕の決めた。絶対讓位させるからなあのパカ帝!」

「仕込みも意味なかったけどな。ここまで来たのオマエだけだし。やるじゃん」

「べ、別に……:すごくなんか無いし。足とか震えまくってたし」

「このまま返してアタシが証言してやっても良いんだけど、何だかんだオマエとアタシの仲だしな。鼻痕とか言われるの嫌だろ?」

「お前と良い仲になった記憶はこれっぽっちもないけど、確かに痛くもない腹を探られるのは嫌だね」

「だろ？ だからさあ、これやるよ」

道長は木片を受け取った。

「……何これ」

「見りやわかるだろ。その柱の一部だよ」

「いや、それは分かるよ。何で削ってんの？」

「おいおい道長、オマエの頭は有頂天か？ 削ないと証拠にならねーだろ」

「何してんのお前エエエ！ ここの内裏！ 公共施設ウ！ 削つちや駄目でしょオオオ  
！」

「うるせえええ！ アタシが正義じゃいッ！」

「へブアアアアア……」

道長は苛立ったライコウの飛び蹴りによりスタート地点の建物に突き刺さるという  
花山天皇の度肝を抜く帰還を果たしたのでした。

「さ、さすがは道長。何という無様。何という愉悦。これほどまでに旨い酒があるとは。  
酒！ 吞まずにはいられないッ！」

「おお、道長よ。死んでしまふとは情けない。菩提は弔つてやるからな」

「道長の癖に最後は面白い死に方をしやがって。認めるよ……お前が一番だ」

「死んでねえからアアア！ 良いから助けろくださいパカ兄貴共！ 何だよこの構図！

壁尻みたいになつてんだけどオオオ」

「いや、これはもしやー夢の国の黄色い熊!」

「黄色い熊? 知っているのか、道兼!」

「ああ、遙かなる昔、大陸から絵画を学んだ出津二位が描いた鳥獣戯画的一幕。強欲な熊は穴蔵にいた兎を食べない代わりに兎が溜め込んでいたはちみーを貪り、いぎ穴の外に出ようとすると太り気味となった熊は穴につつかえてしまひー兎の前には無防備な尻が。食い物の恨み、無防備な尻、何も起きない筈もなく……」

「いいから助けろオオオ!」

結局、一応は大極殿まで行った道長が優勝となり、花山天皇からはお褒めの言葉を貰うのでした。証拠として大極殿の柱を削った件は何故化不問とされた。そして後日、六条河原には首から下を埋められた道長の姿が!

「僕が……僕が何したって言うんだよ」

「いや、言い出しつぺだから仕方なくね? ライコウちゃんも色々忙しい中あんな役やらせて面倒くさかったぜ」

「お前変なときだけ真面目になるよね。ところで助けてくれないかな? 300文あげるから!」

「何いってんだよ。ここからがお楽しみ時間じゃないか。やっぱ、最初は額に肉の字だ



よなあ。これ、特別に調査した消えない墨なんだ。オマエで試してやるぜい！」

「やめろオ！ 何をするだあー！」

六条河原に死罪となった罪人よりも切ない叫びがこだましました。

一方で兼家は懐仁親王の早期の即位を望んだため、986年6月に兼家と道兼三兄弟の中で最も評判は悪く、容姿も醜いと記録されている。いわばスネ夫枠。長男は容姿だけはキレイなジャイアンで、道長はのび太みたいな立場だった。が中心となつて策謀を仕組みます。

「人はいつか死ぬ。生きていた頃の栄華などなんの意味があろうか。結局、うまびよいとは一夜の夢に過ぎない」

「分かります、分かりますぞ帝。俗世の栄華など意味はありません。私もほとほと疲れしました。いつそ出家したいほどです」

「おお、お前もか。そうだな。共に出家しようか。ついてきてくれるか？」

「えて、お供いたしますぞ。兄弟ではございませぬか(うまびよい的な意味で)」

「そうだ……朕達は兄弟であった。つい昨日のこのようだ。同じウマ娘とうまびよいした男3人が膝つき合わせて怪談をしたあの日……あの日が一番楽しかったなあ」

「そうですなあ(知らんがな)」

この頃、花山天皇は恋人ウマ内侍ではありません。この後もしばらく彼女はピンピン

しています。を病で亡くして非常にナイーブになっていました。そこに同年代の道兼が出家をほのめかしたところホイホイと同調してしまったのです。道兼は花山天皇を唆して内裏から連れ出し出家させてしまうと、自らは「悪いなあ、今日出家できるのは一人だけなんだ。僕たちは父上のところに戻るよ」と、剃髪してしまった花山天皇を残して内裏に戻り、兼家が用意していた即位の儀を執り行いました。斯くして一条天皇が即位したのです。

この事件の際に道長は天皇の失踪を関白・頼忠に報告する役割を果たしました。

この政変により速やかに幼い懐仁親王が即位（一条天皇）して、外祖父の兼家は摂政に任じられます。兼家は息子らを急速に昇進させ、道長も987年には従三位に叙し、左京大夫を兼ねます。翌年には参議を経ずに権中納言に抜擢されました。

「三男坊がいきなり中納言か。父上も急いておられるな」

「そうだなー。こりやアレだぜ。秋に火鉢を出すようなものだな。いや、冷え性なら出してもおかしくないか？」

「……さも当然のように独り言に入ってきましたが、何か用ですか、ライコウさん」

「おいおい、いまさらアタシとオマエの中に敬語とかいらねーだろ。ライコウで良いぜ、道長」

「いや敬語オオオ！ お前は使わなきやだめだからね！ 僕、従三位！ お前は従四位

下だろー！」

「フツ、そんなものにこのライコウちゃんが縛られるとでも？ アタシを縛れるのは正月のしめ縄くらいだぜ」

「あ、だめだ会話が成り立たない。うん、ライコウだものね、仕方ないね」

「おいおい、諦めんなよ。もしかしたら一発逆転の機会だってあるかもしんねーだろ。ところで、何の話してたっけ？」

「……いや、うん。父上も急いでいると思つてね。三男坊の僕まで大幅な昇進させるなんて、後々恨まれるかもしれないなあ」

「そうかあ？ むしろお前の場合出世させなきや駄目だろ。お前もせっかく結婚して脱童〇、初うまびよいのお赤飯だったんだからさあ、もつと発情期のウマ娘くらいガツガツしろよお」

「ほとんど下ネタで何で僕を出世させなきやだめなのか全くわかんねえんだけど。お願いだから僕にも分かる言葉で話してください」

「しようがねーなあ。これだから地球人はゴルゴル星と比べて会話がしにくいぜ。いいかあ、お前の嫁さんの親父は左大臣・源雅信で兼家くんの政敵だろ？ 娘婿を出世させるのは互いの緊張緩和にも繋がるし、他の貴族に文句を言われてもご祝儀代わりで言い訳がつく。まあ、摂政右大臣の兼家くんと左大臣の雅信ちゃんに文句言える奴なんか殆

どいねーだろうけどな」

政変より以前に、道長は左大臣・源雅信の娘・倫子と結婚し、続いて安和の変で失脚した左大臣・源高明の娘・源明子も妻としました。一説には明子が先に婚姻関係でしたが、身分差のせいで倫子を正妻としたため第二婦人となったとのこと。

この時代、愛人ならともかく正妻は政略結婚が主でしたが道長は2歳年上の倫子と恋愛結婚を果たしました。また、結婚当時はまだ政変は起きていないため義父の源雅信からすれば道長は政敵の三男坊という微妙な立場でしたが、道長を気に入っていた妻の勧めや道長の将来性に賭けてこの格差婚を許したのでした。

「まあ、確かにそれなら僕の出世は説明が付きますか。やっぱライコウ、まともになれば賢いじゃないか」

「何いつてんだよ。アタシはいつも賢いだよ。ところでさあ、ずっと気になつてたんだけど……お前の嫁さん二人つて源氏なんだよな」

「……はい」

「それでもつて姉さん女房で、背が高く赤が映える美人みたいじゃねーか」

「……………」

「人間だから芦毛って言わねーけど、髪も珍しく白かったな。あれ何？ 地毛？ 染めてんの？」

「ふたりとも地毛だよ。倫子は生まれつき白髪で、そのせいで僕と出会うまで誰にも求婚されず嫁にも出されなかった。明子は、まあ、白髪っていうのは正しいのか？」

「何か知らんけど源氏で、赤が映える背の高い年上が好きと。んでもって、髪は白がよろしいわけ？」

「……………いや、違うから。芦毛が好きなんじゃ無くて、好きになつた相手が芦毛——白髪だったただけだから。べ、別にお前のこととか関係ないから！ 初恋が走る奇人とか噂されるの死にたくなるからやめろオ！」

「何か、ゴメンな。オマエの性癖歪めちまつたみたいで」

「殺せよオオオ。どうせ僕が憎いんだろ!? 僕だつてお前の事なんて大嫌いだよ神様仏様アアア！」

「別にいいじゃねーか。嫁さん二人大事にしてやれよ。まあ、ウマ娘ならともかく人間なら夜の方も大丈夫だろ」

「……………」

「そう言えば、これ訊いて良いのかライコウちゃんでも躊躇うんだけど……………何かオマエ、やつれてね？」

「明子は、芦毛のウマ娘です」

「あつ……………(察し)」

「妻問婚だから、何とか生きていられるけど。他の奴等は多くて週一とかそんな感じの頻度なのに、僕は三日空けたら監禁するって宣告されています。おまけに、倫子も正妻として負けてられないって、凄いの……色々と」

「お、おう。そうか……凄いのか。頑張れよ」

この時代、貴族の結婚形態は妻問婚と呼ばれるものでした。昼間は夫婦別々に生活し、夫は毎晩妻のところに通い、翌朝自分の家に帰って仕事に向かいます。

結婚の選択権も女性にあり、夜這いかけた男は女性側が断れば身を引くのが作法であり、これを破ると死んだほうがマシなほど恐ろしい社会的制裁が課せられました。出世できないのは当然のことで、親戚達はもちろん友達からも縁を切られ、日記や記録からは名前を削られ、つまるところ存在をなかった事にされるわけです。一方で離婚も簡単であり、逃げることでさえできれば男性が通わなくなった時点で離婚成立です。もつとも、ウマ娘から逃げ切った記録は日本には一つとして無いのですが。

居住区を分け、夜に通うという迂遠なやり方は単純に男性と人間の女性を保護することが目的であります。貴族の愛妾にウマ娘が存在するのはもはや当たり前。外戚が最も出世する政治システムの関係上、どうしても正妻にはなり難いのですが、地位は愛情で埋めると言わんばかりに正妻の元に行かせないし何なら監禁も辞さない事案が恒常化しました。とどめとなった某坂上家で名目上の正妻が男子出産後に謎の惨殺死体と

して発見された事件は男性貴族と人間の女性貴族を恐怖に陥れ、結果として人間とウマ娘の妻は互いに距離を取り、夫となる男性ともある程度の距離を置くことで互いを守るようになったのです。もちろん、後に互いに問題ないと判断すれば一つの邸宅に夫婦で住むのも問題ありませんでした。

しかし、ウマ娘としてはフラストレーションが溜まるシステムであったため、武士の世……即ちウマ娘の天下となった鎌倉時代においてはウマ娘は待つのではなく狩りに行く婿取りが主流となるのです。

「……ツツコミ、きれない!」

「落ち着いてください、松ぼっくりアナ。逆に考えるのです、ツツコまなくても良いかと」

「はい、私の心の安定のためにツツコミは放棄します」

「それがよろしいかと(判断がはやい……!?)」

「藤原道長、ほぼ同時に人間とウマ娘を娶るなんて正気の沙汰とは思えないのですが……経験者として言わせてもらいますが、両立なんて無理ですよ。私の家内もそうですが、ウマ娘は全身全霊で搾り取ってきますから」

「私も同感です。あの時の道長は、本当に枯れ木かと思うほどやつれていきました。い

やほんと、すぐに倫子との間に彰子が出来たから何とかなったけど、彰子が生まれなかつたら死んでたかもな。明子も普段は大人しくせに夜だけは怪物みたいだったな。あ、思い出した、アイツだ。ドトウに近いかもな！」

「分かります、分かります。大人しい性格の子ほど夜はすごーい（不適切な発言が含まれるためカットします。しばらくスペシャルウィークが人参を食べ続ける映像をご覧ください）どうでも良いですがたぶんスペちゃんほうまびよいが下手です。しつかりせえ！」

「マツサンのところもやっぱ凄かったのか。にしても、道長のあれは絶対色々吸われてたよな。倫子は90まで生きだし、明子も74まで元気だったもんな。アイツの股間、不老の霊薬でも出てたのか？」

「平安時代で90歳とか……それは完全に吸ってますね」

「いや、もしかすると宮城から出土した黄金の石仮面を被ったー（不適切な発言が含まれるためカットします。しばらくナイスネイチャがトレーナーといい雰囲気出している映像をご覧ください）」

「……えー、私は個人的な夫婦生活を、オールバトさんは荒〇飛呂彦先生を連想させる発言をしまいました大変失礼しました」

「失礼しました」



「政変によりただの三男坊から一挙に殿上人へと出世街道を驀進する道長。とはいえ、上には二人の兄がいるのでは限界などたかが知れていると道長の未来は決して明るくはありません。そんな彼が将来を変えざる運命的な選択を強いられる時を迎えるのです。」

990年正月、道隆は長女・定子を一条天皇の女御として入内させます。同年5月に病のため兼家が関白を辞すると、代わって関白、次いで摂政となりました。

そして、7月に兼家は62歳で薨去します。葬儀は肅々と行われていくのですが、念仏を唱える僧侶も誰も彼も、ただ一つを固く念じていました。

(ライコウ、来ないでくれ)

しかし、願いは破られるもの。仏陀は蜘蛛の糸から罪人が落ちる姿に愉悦しているのか。例によって例のごとく破壊される屋敷の門。砂埃から出てきた芦毛のシルエット。それは、まぎれもなくヤツでした。

「待たせたな。やはり葬儀か、いつ出棺する。アタシも同行しよう」

「帰ってくれ、ライコウ院」

「何だよお、連れないこと言うなよ。そんなに心配ならオマエがアタシから一瞬たりとも目を離さなければ良いだろ。一瞬後にどうなっているかアタシも分かんないんだか

ら

「頼むから帰ってくれ。一応葬儀なんだよ！ しめやかに故人を偲びたいんだよ！」

「オマエらはそれでも故人はそう思つてないぜ。アタシはアタシで主の願いを叶えるさ」

「父上の、願ひ？」

「応よ。兼家くんが最後に出した命令は唯一つ。ハジける！」

「は、ハジける!？」

「というわけで坊さん、木魚借りるぜ」

ライコウは僧侶から木魚をひったくると、よく通る上〇瞳みたいな声を張り上げました。

「しみたれた葬式なんかやめだやめ！ 今すぐ中止だアアア！ そんなことより今からこの木魚でアタシの荒ぶる情熱を演奏してやらア！ オツシエエイ！ 木魚乱舞のはじまりじゃアアア！」

「ああもう滅茶苦茶だよオオオ！」

滅茶苦茶になるかと思われた次の瞬間、ライコウの叩く木魚は完璧なテンポで時を刻みます。そこに顔を隠した四人のウマ娘がそれぞれ笛や鐘などの仏具を用いてライコウの木魚に合わせて音楽を奏で始めました。そして、透き通るような声で経を唱え始め

たのです。

「仏説摩訶般若波羅蜜多心經 觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時——」

染み渡るライコウの経と音楽は、兼家へ贈る彼女からの鎮魂歌レクイエムでした。

唱え終わつたライコウは道長の前に跪く——かと、思わせてのドロツプキック。尻餅をつく道長を見下ろすと、神妙な顔で告げました。

「問おう——オマエが、アタシの主か？」

「言いやがった……言いやがったよ。お前、何を言っているのか分かっているの？」

「……やっぱ、他作品ネタ持ち込むのダメ？」

「そこじゃねえから！ 今更だよそんなもん。ほとんど銀○みたいなノリなんだからホント今更だよ。そうじゃなくて……源氏の棟梁が僕を主とする意味、分かっているの？」

「当たり前だろ。むしろオマエ以外に誰がアタシの面倒見れるってんだよ。アタシさ、お前ならやれると思うんだよな」

「僕にはそんな野心も力もないよ」

逃げようとする道長に、ライコウは一つの日記を掲げます。タイトルは「御堂関白記」。

「いや、野心ないやつがこんな日記つけるわけ無いだろ。あと字汚いし誤字脱字多いぞ」

「何晒しとんじやゴラア！」

御堂関白記——道長の日記であります。実際に日記をつけ始めたのは995年からだとされています。

関白になれる見込み薄の三男坊がつけ<sup>スベアのスベア</sup>た強気なタイトルがなんとも言えず香しいです。

「やってみせろよ道長ア！　なんとでもなるはずだ。ライコウちゃんがついてんだぞ！」

「……仮に断れば？」

「オマエの日記を明日、内裏で朗読し・ちや・う・ゾ♡」

「そこまで言うならやりますよ。やれば良いのでしょうか。けど、一つだけ教えて。どうして、僕なの？」

「そりや、簡単な話だぜ。もう十年も前かな——すげーヒマそうな子がいたから……アンタの人生、アタシが面白くしてやろうって思ったんだ」

差し出されたライコウの手——

「考えて取れよ。一度立ち上がると、死ぬまで走り続けるしかないぞ。それでも良いのか？」

「ああ。お前と一緒になら多くの時を笑って過ごせたから……きつと、この選択は間違

ではないよ」

道長はその手を掴んで立ち上がりました。

「源氏の棟梁が道長についた」

「兼家殿の後継は道長だ?!? 道隆や道兼は分かっているのか!」

「これで骨肉の争いから逃れられなくなった。さて、どうする道長」

騒然とする貴族達。これから起こる波乱を予感してか、宮廷雀達は囁り合います。いよいよ歴史の表舞台に立つ道長とライコウ。果たして運命は二人に味方するのでしょうか。

# 第8回「ゴールドスピリッツ　　道長とライコウちゃん のー以下略」／人？　　？人

「貞光、金時、綱、やっておしまい！」

「はい……ライコウさん……」

「ちよ、おま、スパー金時、何て格好をしてぬわアア、また頭陀袋かよオオオ！」

開幕早々に色々と端折って申し訳ない限りですが、どうやら道長は拉致監禁されてしまったみたいです。いや、本当にどうということなの……。

頭陀袋から開放されるとどこかで見たことのある屋敷の中。そうです、ライコウの屋敷です。なお、道長の土御門邸宅から距離にして約1.5キロ。御所を挟んで向かい側の割と近場です。

「どういうことか分かつとんのか」

「……」

「分かつとんのかアアア」

「……」

「蘇蜜チーズのはちみーがけ。当時のチーズケーキみたいなもの。道長の好物。食べよ」

「……」

「蘇蜜食えよオオオ」

「うるせエエエ！ 犯人お前で良かったよこんちくしよう。一瞬だけ倫子と明子が手を組んでどうとうやらかしたかと思つたよ！」

「せやかて主殿、オマエよくよく考えたら妻問婚とか言いつつ新婚当初から倫子と同居してるからともと監禁されてるみたいなものじゃねーか」

「痛いところ突くのやめて。僕だつて新婚初日に困り込まれるとは思つてなかつたよ！

義父さんも知らなかつたみたいで僕等を尻目に親指立て合う嫁と姑藤原穆子。三十六歌仙随一のおデブ、藤原朝忠の娘。元皇族の雅信とはかなりの格差婚ながら完全に尻に敷いており、倫子と道長の結婚を（雅信に無断で）断行した。なお、86歳まで生きており倫子（90歳没）、彰子（87歳没）の長寿遺伝子は彼女から来た。を見た瞬間に全てを悟つて牛車に詰め込まれる義父を見送つた僕の気持ちが分かるか！」

「分かるつてばよ」↑わかつてない。

「嘘だッ！」

「まあ、お前のうまびよい事情は置いておくとして、今日はアタシの頼れる家臣、ライコ

ウ四天王を紹介しておこうと思つてな」

「ライコウ四天王？」

「おう。温泉発見の名人・碓井貞光。田村麻呂と鈴鹿御前の子孫・卜部季武。足柄山の怪童で裸前掛けの坂田金時、そしてー」

おもむろに約一名を睨みつけた後にため息を吐くライコウ。

「これはただの黒豆の妖怪だ」

「待つてください、ライコウ様。私は四天王筆頭の源綱という名がー」

「うるせえな。オマエなんか源氏名乗るんじゃないやねえぞ。渡辺現在の大阪府西成区。日本で最もヤバい地域の一つ。あたりで育つたんだから渡辺と名乗れ。オマエは今日から渡辺鮪ツナだ！ 大体なあ、オマエの場所には先約がいたけど、大人の事情で急遽オマエになつただけだからな！ 見ろ、相方を喪つた貞光ウツカの顔を。明らかに不調だぞ！」

「いや、ライコウさん……俺氣にしてないですよ。好敵手が先に主役級内定貰つたとか……俺については全然何も決まつてないとか喜べウオツカ。君の役はありますよ……安土桃山時代あたりで（主役級とは言つてない）。……そこところは氣にしませんから。本当に、大丈夫ですから」

「めっちゃ氣にしとるやん」

「あと、坂上と聞いて何でか渋々出てくれたけどやる氣ゼロかつ絶不調の季武スズカも見ろ。



あの目、帰ることしか考えていやがらねえ……」

「……どうしましょう、帰りたい。子孫の役だから出てあげたけど、先々週からずっと手番があつて疲れがー」

「卜部さん！ しつかり！」

「それと裸前掛けの金時スベ。コイツは見てやるな。アタシもドン引きするくだらない報復が生み出した哀しき怪物だ」

「山姥お母ちゃん……私、もうお嫁にいきません」

「もうやめたげてよお！ やめませんッ！」

「これだけの被害がオマエのせいが出たんだぞ、黒豆。恥を知れ恥を」

「り、理不尽な……」

ぐだぐだなライコウ四天王を見て道長は甚だ不安に駆られます。

「……大丈夫か、源氏」

「失礼な、アタシらの御恩チームワークと奉公ワーク見せてやるよ。つーわけで、はいこれ」

白に青の波模様があしらわれた帷子かたびらに単ひとえと狩衣。おまけに白い覆面。あと籠手。怪しき満点の衣装を手渡されました。

「……ナニコレ」

「オマエの衣装。今日からオマエも四天王だ」

「……………いや、5人いたら四天王じゃないでしょ」

「おいおい何言ってるんだ。四天王って、5人だろ？例：龍造寺四天王。」

「ねえ、ライコウ。君の話が理解できないのは僕がパカだからじゃないよね？」

「何言ってるんだ。パカじゃなけりやアタシと一緒にいるわけないだろ。んなこたあ良  
いから着てみてくれ」

「いや、せめてお前らは出てけよ」

「ライコウちゃんは目を離さないんだからね♡ 尺の都合あるんだからとつと着替え  
ろよな。言っとくけど、逃げたら倫子と明子にオマエが浮気したって吹き込むから」

「やめろオ！」

全てを諦めて着替える道長。

ここにライコウ四天王幻の5人目、ファイブメン独武者ひとりむしやが爆誕したのです。

「着替えたか主殿？」マスター

「……………何かしつくりこない」

「そうか？ んー、確かに何か足りないな。破天荒さと言うか、ちゃらんぼらんさと言う  
か……………死んだ魚のようなナニカが足りない。あ、分かっちゃった♡」

言うやいなやライコウは道長の狩衣を引き裂き、単の左側をはだけさせました。

「イヤアアアアア」

「生娘みたいに悲鳴上げるな。ウマっ気が苛立つ。つーか、どうよ？ これぞ完全形態だろ」

「……何だろう。明らかに間違つた着こなしなのに、こうあるべきと言うか、実家のような安心感がある」

描写できるか！

あからさまに銀○なのだ。

「オメーもそこそこ男前になつたところで今から大事なこと言うぞ」

「そこそこ言うな！ これでも年上のお姉様方にはモテるんだぞ！ 道長の妻、恋人の殆どが年上。義母や姉達にも可愛がられていた。おそらく性格が甘え上手で素直だったため年上キラーと化していたと思われ。なお、道隆はイケメンなのでモテてはいたが傲慢な性格が道長の姉達からウザがられ、道兼は普通に嫌われていた。」

「オメーがモテても誰も得しねーんだよ。オマエ自身も含めてな。倫子に監禁されつか？ おお？」

「すみません、許してください、何でもしますから」

ん？

「ん？ 今何でもするつて言つたな。じゃあ、大事な話聞いてもらおうか。え、ここに勅令があるぜ。ほれ、本物だ。内容を掻い摘むとー盗賊団土蜘蛛つてのを討伐して欲

しいみたいだな。んじゃ、早速行くぜ！」

「待てや！ それ本当に僕行かなきゃだめ!？」

「おいおい、主殿……嫁も、家臣も、源氏で固めた。つまり、オマエも源氏だ。情けないこと言うヤツには蹴りだぜ、蹴り！ うおらああアア！ お前も源氏になるんだよッ！」

「誰か助けてくれエエエ！」

ライコウ怒りの「お前も家族だファミリキック」により洗脳された道長。いとあはれ。

「ボク、ヒトリムシヤ。ゲンジバンザイ、トウゾクコロス」

「よし、主殿改め独武者くんも分かってくれたところで行くぜ野郎共（ほぼウマ娘）。出陣じゃーい！」

「「「おー（棒）」「」」 ↑絶不調。

「ゲンジバンザイ」

土蜘蛛ー彼等は神武天皇の御代より皇室に抗ってきた者達の総称です。今世の土蜘蛛は都を荒らす盗賊団の一つでした。が、目をつけられた相手があまりにも悪すぎたのです。

「レッド・ホット赤備えライコウちゃん登場！ オマエらを真っ赤に染めてやるぜエエエ！」

「画材はアンタらの血だぞ。逃げるなら今だぜ……俺から逃げられるならな」

「影も踏めない程度の脚で、私から逃げられるわけありませんよ……遅すぎます」

「渡辺綱一参る。うん、名乗ってみたら意外と悪くないな。あ、(命が)掛かっているみたいだけども息を入れるなんてさせませんよ。息は引き取るだけです」

「ゲンジバンザイ！」

少数精鋭のライコウ四天王。ほぼ全員がウマ娘。少しばかり人間の中にウマ娘が混ざった盗賊団でも、戦闘のプロフェッショナルである四天王達に勝てるはずもなく、根切り撫で斬りの土曜夜のゴールドデンタイムにはとても流せない光景が広がっています。なので、坂田金時周辺の唯一のほのぼのとしている映像をしばらくご覧ください。

「オネガイシマス、コナイデクダサイ、ウツサナイデクダサイ」

「おい、何なのよあの格好。兄弟、アタイはどうとうおかしくなっちゃったのか！」

「もちつけ妹分よ。間違いない……アレは露出狂だ。肌を晒して興奮し、自らの闘争意識を爆発的に高めてやがる。相当な変態だぞこいつは」

「つ、強いのかなあ」

「戦場であんな格好……間違はなく手練だ。傷一つ負うことなくあのパカでかい鉞まさかりでぶった斬るつもりだ。見るよあの胸部装甲……むっちりと思わせといて形の良いバランス型だ。こいつは力だけじゃなく速さも兼ね備えていやがる。俺達じゃ手に負え

ねえ！」

「やべえよ。他の道探そうよ。絶対やべえよアイツ」

「そうだな。あんな格好のウマ娘と戦うくらいならまだ人間っぽい独武者と戦ったほうがマシ——」

head—shot.  
ビュー ヘッ テイ フオー  
Beautiful.

「き、兄弟！ くそう、恐ろしく正確な狙撃で眉間が撃ち抜かれてる！ 誰だアタイの兄弟（血の繋がりは無い）をやったのは——」

「チエストトウゾク、ゲンジバンザイ」

「データアアア！」

……しばらくトウカイテイオーがトレーナーとカイチヨーの間で甘えている微笑ましい映像をお楽しみください。テイオーのハイライトがお亡くなりしていることに目を背けながら。

「いやー、土蜘蛛は強敵だったな。飲み過ぎた4日目の朝くらいの強さだったな」

「それ二日酔いでさえないじゃないですか。俺、酔ったことないので分からないですけど」

「オメーの変な形の水筒スキットル。荒野で古びたダスターコートを着た男が、煙草を

ふかしながら胸ポケットから出して中身を飲もうとするが、何も入ってなくて逆さにして振った後「チツ……」っと舌打ちして投げ捨てるヤツ。の中身、麦茶だもんな……普通に飲めよ」

「ちよ、ライコウさん！ それ言わないでくださいよ！」

ちなみに麦茶は平安時代から貴族の間で飲まれていたみたいです。

「……ハツ、僕は何を!？」

「悪い夢を見たのよ。花の都の競技で大敗するみたいな夢——そんな夢を」

「ヒデエ話だぜ。一体どこのパカのせいだ？」

「お前のせいだよ！ 思い出したぞライコウ。何てことしやがる、仮にも僕は主ぞ！」

「洗脳が甘かったか。仕方ねえな……あと2、3回蹴り入れとくか」

「よくぞ土蜘蛛を討ち取った。褒めて遣わす」

「分かりや良いんだよ、分かりや」

「ライコウ様……いつかバチ当たりますよ」

「うるせえ黒豆！ 春のすめらぎ賞でアタシに勝ちやがったこと一生恨むからな。お前をゴルす」

「何なのこの人……フェノーメノ、認めたくないでしょうが貴方の腹違いの兄ですよ。」

「神様仏様、本当にバチ当ててください。300文あげますから」

その夜――

「だりい……2週間目のセミみたいに元気でねえぜ……」

「本当にバチ当たってるよこの人」

「ざまあ、ライコウざまあ。偉いぞ神様、100万年寄進します」

「覚えてろよ黒豆と主殿……おぼえてるよおおお」

翌朝――

「ライコウちゃん、大復活☆やる気満杯、有頂天！」

「嘘でしょ……また台本と違うことになってる本来は土蜘蛛の残党にライコウが呪われて力を落としているところを夜襲され、駆けつけた独武者と四天王が土蜘蛛を殲滅するストーリーでした。元ネタは能の演目。」

「こいつ……僕等を埋めるためだけに歴史を書き換えやがった……」

「やっぱり神様なんていませんでしたね……」

庭先に埋められた道長と綱。見切れた金時は「お母ちゃん……都は怖いところです」と足柄山を恋しく思いました。

「どういふことなの……」

「さあ？」



「本当にどうということなの……」

「気にしたら禿げるぞマツケンサンボマスター」

「私の原型残ってないんですけど……と言うか、道長何やってるんですか。貴族の御曹司ですよ」

「んにや、アイツ若い頃から結構盗賊退治とかしてるぞ。まあ、ライコウちゃんが連れてったつてのものもあるけど……夜の都、家の障子破いて回る青春ーじゃなくて、それを取り締まる側として頑張ってたんだ。自費で」

「え、自費？」

「おう。誰に頼まれたわけじゃねえ。勝手に都の治安維持をやってたな。弓矢の腕もアタシら本職に負けないくらいだったもんなく道長。ま、ヒーロー活動に熱中しすぎたせいで勘当されかけてるんだけど」

「けれど、当時から道長の人気が高いのはそういうった活動が巡ってきたとも考えられませぬ」

「だな。何せこの後色々あったけど、道長は敵を呪詛したとか貶めたとかそう言う噂とは無縁だったからな。あの時代は噂一つで致命的だけど、誰も道長を疑わなかった。アイツはそんな奴じゃないって、皆思ってたんだ。ま、呪詛しようにも日本のグランドキャスターで平安のスーパー陰陽師・安倍晴明は道長の庇護下にあっただし、検非違使よ

りよほど仕事していた源氏を抱えていたのもプラスに働いたな」

「……あの、ゴ、オールバトさん、口調、口調」

「ですわ」

「取って付けたようなお嬢様口調やめませんか？ スーパーのお菓子コーナーのPOP以

下ですよ」

「あらあ、わたくし何の事だかわかりかねますわあ」

「……私知くらない。さて、ライコウ四天王といえ、やはり大江山ですが、あれはいつ頃の話なのですか？」

「ええと……あれは今から36万……いや、1万4000年前だったか。まあいい。アタシにとってはつい昨日の出来事だけど、オマエらにとってはたぶん明日の出来事だ」

「あ、そういうの良いで」

「……徳川アナ、死にかけの道長に似てるな。アイツも年取ったら丸くなりやがって……けど体型は丸くなかったな肥満でなくても糖尿病は発症します。」

「せめて晩年って言うてくれませんか!? あと私は松平です」

「真面目な話に戻るとしてー大江山は990年の冬頃だったかな。アイツがメンバー入りしてから割とすぐだったな」

父、兼家の死から3ヶ月後の同年10月、摂政道隆は娘の定子を前代未聞の四后皇后など後の位にある人は予算やしきたりの関係で同時に4人までと決められていました。として世の反感を買いました。しかも、道隆は父の喪中に立后を行つたことが余計な反感を産んだと当時の貴族たちは日記に書いています。中宮大夫中宮の世話係。それを叔父にさせますか普通……。道長は、喪中の件と強引なやり方にキレて仕事をボイコットし、世間から賞賛されました。権力者道隆は甚だ弟を疎ましく思いましたがそんな道長を罰することはできませんでした。それは、道長傘下の源氏が大手柄を上げ、世間がそれを決して許さなかったからなのです。

「よお、主殿。鬼退治行こうぜ」

喪中で屋敷に籠もる道長諸説ありますが平安時代の喪中期間はまちまちで、平均5ヶ月ほどかと。この時点で12月なので、間もなく喪明けです。は日々のうまびよいから開放されたいぶ血色がよくなっています。倫子は触れ合いの無いことに不満に思いつつも可愛い盛りの愛娘彰子(2歳)をあやし、家族水入らずの日々を送っていました。が、明日を喪明けに控えた道長の元に動く破天荒が来襲したのです。

「いきなり何ですかライコウ。私はもう四天王を引退しました。そもそも加入した覚えも無いのに何でー」

「お、倫子ちゃん今日も美人だな。そう言えば知ってるか? コイツの初恋はアターー」

「あたかも白雪が如き髪のそなただ倫子！ もうあの日からぞっこんですよ、本当に。もう倫子しか勝たん。ところでライコウ、仕事の話だろう、そうだろう。さあ、内密な話だからお前の屋敷に行こうか！ 明日が喪明けだからバレんようにお主の牛車でなあ！」

「あ？ あたしんちバ車しかねえぞ。外で金時に待たせてっからよ」

「あの娘にそろそろまともな服着せてあげなさいよ！ 寒空の下で可哀想に」

「アタシだって鬼じゃねえからちゃんと言してるぜ。今の金時は裸前掛けに足袋を履かせている」

「余計いかがわしいわ！ 倫子、何か適当に僕の服着せてあげて……え、嫌です？ 僕の服を他人にあげたくない？ いや、外見できてみ。裸前掛けに足袋だけ履いたウマ娘がご近所からの目に晒されながら待つてるから」

「この件終わったらいい加減服着せてやっから構わねーだろ。んじや、旦那を2、3日借りにてくぜ。心配しなくても無事に返してやっからよお……五体満足とは限らねーけど」

「イヤアアアア、オウチカエル！」

「……」がオマエのお家なんだよなあ

またしても何も知らないまま連行される藤原道長さん（24）。例の衣装ではなく山伏姿にコスプレさせられると、平安京周辺で最も危険な場所である大江山へと向かわせ

られたのです。

「今回はぎりぎり喪中であるオマエの名は使えないから藤原保昌ふじわらのやすまさ道長の部下。ライコウら中世の伝説的な武人の1人。道長が「浮かれ女」とドン引きし、紫式部が「才能はあるけどビツ〇過ぎる」と評した和泉式部の何人目かの旦那。の名を勝手に借りたぜ」  
「保昌アアア！ なに名前貸してんのオオオ！」

「と言うわけで大江山に行くゾ」

一方、大江山では土蜘蛛討伐などでライコウの活動が本格化したことを察した酒吞童子達は出入りする者達を厳しく詰問しました。そこに、山伏姿になったライコウ達は潜入任務を開始したのです。

「こちらライコウ、任務開始点に到着した。これより潜スニッキングミッション入任務を開始するぜ」

「一体誰に言ってるんだお前」

「こ言うのはノリだよノリ。オマエ、まだまだノリが悪いぞ。そんなんじゃ『こ〇んですよ！』に勝てねえぞ」

「僕は何と勝負させられているんだ……」

山伏姿の一行は一晚の宿として大江山の盗賊の砦に泊まらせてくれと願います。今どき見事な怖いもの知らずのウマ娘の山伏だと彼らを気に入つた大江山の盗賊達は快く受け入れようとはしますが、そこを酒吞童子の副官である茨木童子が見咎めます。

「おい。そつちのお前は……人間か？」

「はい……お供をさせていただいております」

へへえ、とへつらいの笑みを浮かべる道長。人間、流星に命がかかると何でもするものです。

「ふうん、なるほど。非常食（意味深）と言うわけか。なるほど。ところで、私も最近日照り気味でね。ちよいとばかしつまみ食いをして、構わないかね？」

「よろしくてですわよ」

「はい、田村麻呂様以外ならどうでも良いです」

「日照りとか何だか俺には分かんねーけど、コイツが持つてる食い物なら食っていいんじゃないね？」

「可愛そうだけど、仕方ないね」

「けっぱるべー」

「お前から嫌いだ。大嫌いだ。畜生めエエエ！」

「冗談だよ。けど、シユテンには気をつけなよ。アイツは線の細い年下の男が好みだから……本当に食べられちゃうかもよ」

その言葉に道長は「そんなに女顔か僕？」と訝しみ、ライコウは「普通に通用するんじゃないね？ オマエ、髪とまつ毛を変えたらナデイ〇に似てるもん」と言い道長を絶望さ

せました。が、一瞬素が出たライコウを茨木童子は見逃しません。

「待て。君、こつちを向いてくれるかな？」

じっとライコウを見る茨木童子。お嬢様オーラで誤魔化しながら冷や汗ダラダラのライコウを道長は内心でざまあと嘲笑います。

「何だ、ただの芦毛の可愛子ちゃんか。てつきりあのイカレ娘かとおもったよ。君も災難だね……アイツと似ているなんて思われても」

「い、イカレ……アイツとは、どなたのことかしら？」

「そりゃ、源ライコウのことさ」

「………ええ、迷惑しておりますわ。おかげで毎晩ヤケまんじゅうをパクパクですわ」  
「はは、良かった。あの気狂いがこんな可憐な芦毛ちゃんなわけないものな。同じ芦毛でも大違いだ」

ふむ、と茨木童子は今度は渡辺綱を見ます。

「そつちの艶やかな黒豆のような髪の毛の君。何だか運命を感じてしまっうね。いや、ここにいるのはまるで血の繋がったーまるで親戚の集まりのような気分さ」↑ステゴ産駒

「………そうですか」↑SS産駒

「確かに、何だか不思議な感覚ですね！」↑SS産駒

「皆毛色も違うのに、どこか惹かれ合うナニカがありますね」↑ステゴ産駒

「言われてみればそうかも知なく……ですわ」↑ステゴ産駒。

「おい……何でだ。ウマ娘じゃない僕まで同意せざるを得ない何かを感じるぞ」↑???

「ふっ、私達は姉妹だったようだな。血ではなく、ウマ魂で結ばれた魂の姉妹。言うなれば運命共同体。互いに頼り、互いに庇い合い、互いに助け合う。一人が五人の為に、五人が一人の為に。だからこそこのイカれた時代で生きられる。団員は姉妹。団員は家族——」

「嘘を言うなっ！」

猜疑に歪んだ暗い瞳がせせら嗤う。

無能、怯懦、虚偽、杜撰、どれ一つ取つても内裏では命取りとなる。それらを纏めて

無謀で括る。

誰が仕組んだ地獄やら。

兄弟姉妹が嗤わせる。

お前もっ！

お前もっ！

お前もっ！

だからこそ、

僕の為に死ねっ！



「くくつ、その言葉が聞きたかった。盗賊とは何かを分かっているじゃあないか。ようこそ、君も家族だ。シユテンはきつと気に入るだろう」

何とか茨木童子の詰問を逃れた一行は標的である酒吞童子の面前へと到達します。酒吞童子は既に酒で出来上がっており、上機嫌に一行を迎えました。

「どうだ、シユテン。こいつらなら一晩と言わずつといてほしいほどの強さを感じないか?」

「ああ、合格だ。特にその栗毛。……オマエは特に気に入った。走ることで外どうでも良いって眼をしていやがる。先頭の景色に焦がれているその眼ーアタシが一番気持ちいいのは、その景色を台無しにしてやることさ。アンタの逃げ足、アタシがグチャグチャに差し壊してやりたいなあ」

「走ることを同じくらいーいえ、それ以上に大切なものくらいあります。けれど、あなた如きが私を差せるとでも? 無敗の三冠ウマ娘に最高の指導人武豊を付けて出直してきなさい」

「くく……ギャハハハ! アタシが力不足だとぬかすか。いいぜ、構わねえ。今すぐ勝負だ。逃げてみせろ!」

「やってみせろよシユテン」

「何とでもなる筈よ」

「即席競技だど!」

「あわわ、季武さん、何売り言葉に買い言葉してるんですかあ! マズイですよ」

「……いや、マズイのはお前の格好だろ。どうした、乳臭いウマ娘。アンタ、いじめられてんのか? 分かるぜ。アタシも昔は虐められてた……速攻で逆転してやったがな。良くわからんが、強く生きろよ」

「うう……盗賊さんが一番優しい……」

「金ちゃん、騙されちゃだめよ。この子、きつと自分の『自主規制』に発狂するような女よ」

スズカアナニイツテンノサアー!

「……いや、変な印象付けるのホントやめてくれねえか? アタシはまだどつかの豆大福と違って汚れてないって言うか……金色の暴君的なカツコイイ路線でいきたいから……実装前からそういうの、いけないと思う」

(( (コイツ、実装まだ諦めてないのか) ))

「……ああもう、やめだやめ。嫌な話になっちゃった。大体さあ、ウマ娘は三冠バのアタシや寝坊助ディープなしで良いのかよ。客はそれで満足なのか?」

「シユテン、それ以上いけない」

「情緒不安定な……」

「だいぶ出来上がってんなコイツ……マジで酒呑んでんの？ へべれけじゃん」

「へへ……どうせアタシは牝バに負けるようなへっぽこ三冠バですよ。貴婦人の体当たりで力負けするような……ぐすつ、何だよおあの貴婦人……殆ど吉田○保里じゃねえか。なんつー娘産んでんだよ寝坊助エ、普段はぼやんとしてるくせに競技だけ性格変わるとかお前にそっくりじゃねえか……」

「なあ、ジャスー主殿……貴婦人の体当たりとかそんな凄かったか？（小声）」

「お前は体格恵まれてたから宝塚で弾き返してただろうが。逆に貴婦人が面食らってたぞ（小声）」

「呑みすぎだぞシユテン。全く……いや、逆に潰したほうが大人しいか。あんたら、強い酒とか持ってないか？」

「それならスペ太郎（偽名）が持ってたな。スペ、用意していた酒出してくれ」

「ーません」

「え？」

「あげませんッ！」

「いや、そういうの良いから」

「私の持ちネタなのに……」

「いや、実際には君言っていないでしょ。それより神使鬼毒酒出してよ」

「何そのあからさまに怪しい名前のお酒。賭けても良いけど毒入ってそうだね」

「鬼に便とか、身の程知らずの金色さんにはお似合いのお酒ですね」

「ドウセアタシナンカ……」

「やめろオ！ シュテンは見かけより繊細なんだぞ！ 元いじめられっ子が必死に去勢張ってるだけの脆い刃なんだからな！」

「……どうでも良いけど、話が進まないから吞んでくれねえかな」

極上の味ながらもアルコール度数もまた極めて高い神便鬼毒酒により、酒吞童子はコテンと眠りについてしまいます。茨木童子にも勧めましたが、彼女は酒よりも甘い物が良いと言つて断り、ふらふらと外に出てしまいました。目の前には酔いつぶれた標的ーウマ娘5人と人間1人。何も起きないはずも無く。

「お前をゴルす」

組み敷いて首を跳ねようとするライコウ四天王。突然の暴拳に酒吞童子は驚き目を覚まします。

「ン、何だお前ら（驚愕）!?!」

「金時、押さえろ！」

「はい！」

「なんだその派手な腰巻き（虎柄）はよお。カツコイイな、俺も買おうかな」

「5人に勝てるわけないでしょ!!」

「パカ野郎お前アタシは勝つぞお前（天下無双）!どけお前! コラ!」

「どきませんッ!」

「何だお前ら、酒飲ませて寝込みを襲うとか鬼でもしないぞ! お侍様の戦い方じゃねえだろ!」

「何を申す! 酒に酔ったところをブスリは日本の伝統芸じゃい。古事記にもそう書いてあるゾ（史実）」

「やめろオ、何すー!」

ウマ娘が折り重なりあう百合百合しい光景の筈なのに、妙に汚いものを幻視してしまった道長は無言で太刀を振りかぶると、酒呑童子の首を落としました。

「そういうの、ホント良いから」

「!!!めんなさい!!!」

首だけでも謝る酒呑童子。なおライコウと季武は無視しています。

首魁の酒呑童子を失い、酒に酔いつぶれた他の盗賊も全て討ち取られ、ここに大江山の盗賊団は壊滅したのであります。そう、ただ一人の生き残りを除いて……。

「……最後の賭けはお前の勝ちだったが、命を取られてちゃ世話が無いな、シユテン。だからあれだけ酒をやめろと賭けたんだ。まあ、今更関係無いがね。風来坊の私にはそろ

そろ限界だったし、これからは好きに生きるさ」

茨木童子はその後、復讐のため渡辺綱に挑む説話などがありますが詳細は不明です。いずれにせよ、彼女はただ一人生き残り、その後の歴史に現れることなく消えたのでした。

酒吞童子討伐の勲功もあつてか、ライコウは春宮大進に昇進、主君の道長も権大納言に昇進しました。今や都は空前の源氏ブーム。誰もが源氏を称え、道長を支持しました。それを見た道隆は苦々しくとも中宮大夫をポイコットした道長を罰せなかつたのです。

しかし、道隆は道長への報復を諦めたわけではありません。何と、息子の伊周を20歳で内大臣に据えてしまったのです。ちょうどその時期は道長の舅である左大臣の源雅信が薨去したため、左大臣の位には雅信の弟である源重信が。右大臣には道兼がつき、内大臣には当然道長が順当に繰り上がって昇進すると思つていたため、慣例至上主義かつ調和を重んじる貴族達は道隆に猛反発します。挙げ句、増長した伊周は内裏にて道長とすれ違った際に年上の叔父である道長に自分の方が位が高いから道を譲れと命令し、道長を呆れさせました。

この頃の道隆は、はつきり言つて痛飲が原因の糖尿病によつて正常な思考能力を失つていました。健康が悪化しているにも関わらず痛飲し、人前で頭を晒す露頭と言ひ、当

時は冠を落として頭を晒すことは大変見苦しいものとされました。今で言うトズボンごとパンツがずり落ちてご立派様が顕現なさったようなものです。などの醜態を重ね、いよいよ健康が悪くなると自らは隠居し、全てを伊周に継がせようと画策したのですが、道隆の強引さを毛嫌いだした妹の詮子は元々道長へのブラコン気味を加速させて伊周排除に舵を切りはじめました。一条天皇は道隆の娘で伊周の妹である中宮定子に気を遣いつつも関白の座など全てを伊周に継がせることは留めざるをえず、とりあえず道隆を内覧公文書の一切を天皇に先んじて見ることでできる役職。摂政・関白の低位互換。とし、伊周をその代理としました。ところが、伊周は代理ということに不満を持ち、正式な内覧職とすることを強要したのです。一条天皇は甚だ不快に思いつつも義兄の言うとおりにしました。これで仕事ができれば良かったのですが、内覧職として立案した朝廷内の儉約令は帯の長さの統一など余りにも細かく、お洒落に闘志を燃やす平安貴族の逆鱗に触れるものでした。これには一条天皇も匙を投げてしまいました。

結局、散々に晩節を汚した道隆は糖尿病により死去。その座を継いだ道兼も僅か数日後に当時の都で流行していた麻疹により死去し、藤原氏は道長と伊周による跡目争いが勃発したのです。

最初に動いたのは、何と道長でも、伊周でもありません。意外、それは詮子ツ！  
「次の内覧は私の弟、道長です。異論は認めません」

「お、叔母上。話が違います。父上は私を後継にせよとー」

「餓鬼が……凶に乗るな。私の兄弟は道長だけ。兄など存在しませんし、お前を甥と思つたことなんか一度も無いわ。というわけで、内覧職はあなたよ、道長。それに、格下の餓鬼より官位が下なんて嫌でしょう？　来月からは右大臣にしてあげる」

「御意のままに、東三条院陛下」

「違うでしょ道長。お姉様、でしょう？」

「お、お姉様……」

「ふおおおお！　そうよ、私が、唯一無二のお姉様よ！」

（僕の周りの女性はこんなものしかないのか……）

「う、右大臣？　内覧に続いて官位までー一体どういうつもりですか叔ばー」

「やかましい！　いつまでいるのだ。疾く失せよ、私はお姉様だぞ！」

「お、お姉様、国母とか皇太后の方が僕の姉を名乗るより上位かと……」

「閃いた、姉であり国母である私はいわばこの国すべての民の母。即ち、道長ー私はお前のお母さんだったのよ」

「いやその理屈はおかしい」

道長のツツコミは虚しく母を名乗る姉という深淵に飲まれてゆき、ドン引きした伊周を完全に蚊帳の外に置きつつ詮子は道長を次の氏長者へと据えることに成功したので



す。

これに不満を持った伊周は真の氏長者は自分だと喧伝しますが、市井の評判は道長の方が圧倒的に上。貴族も皆道長に味方し、皇族も詮子により道長派が優勢。唯一の味方である中宮定子は慎み深く、身内鼻屑をするような性格ではありません。実質的に伊周は孤立していったのです。

「すっかり政治家の顔だな主殿」

「……母を名乗る姉に追いかけて回されるのが政治ならば、この国は滅ぶべきだと思います」

「そう言うなよ。オマエの出世がライコウちゃんの給料にも直結するんだから、もっと出世してくれねえと困るぜ。ところでさ、またオマエん家の前で変な奴らが暴れてたから全員六条河原に頭から埋めといたぞ」

「よくやった。どうせ伊周の嫌がらせだから構うまいさ。むしろ芦毛流の伝説の技でも放てば良からう」

「……何いつてんだオメエ。芦毛流なんてこの世に存在しねえぞ。やつば時代はバクシン一刀流だな。受けてみるか、アタシのバ剣・立上り宝塚無双の剣客により開かれたバクシン一刀流の奥義。それは、おおよそ一切の流派にない奇っ怪な構えであった。を」

「???」 記憶違い……いや、待てコラ。何だバクシン一刀流つて。注釈までついてるけど

そっちの方が存在しねえ記録じゃねえか。本当に適当なことしか言わないお前」

「やりたいように生きるのがアタシの侍道だからな」

「何、NORUTOの忍道みたいに良い台詞っぽくしてんだよ。単に頭がバクシンして  
るだけじゃねーかよ！」

と、そこに金時が何やら慌てふためき駆けてきました。

「ライコウ様ア！」

「どうした金時……オマエ、やつと服を……」

「はい！ ようやく着用許可が出てーじゃなくて、大変なんです、大変ー！」

「大変な変態なんです？」

「違いますッ！ とても笑えるものじゃないです。源氏の情報網と晴明さんから報告が  
来て、道長様の家臣が殺害されたことと、伊周の舅が呪詛している疑惑が出たんです」

「……やつちまつたなあ、オイ」

「殺害に呪詛……噂でも失脚には十分だぞ。何で今こんなことをー」

道長が振り向き前にライコウは道長の耳にこう吹き込みました。

「……ご運が開けましたな」

「ライコウ……」

悪い顔をすライコウに、道長は真顔でツツコみました。

「取り敢えず岡○准一に謝れ」

「びすびす。許してくれなきや河原に埋めちゃうぞ♡」

「それ謝罪じゃなくて脅迫だからアアア！」

………

「やる気を失ったまま放浪を続けるライコウちゃん。

辿り着いたエデンが彼女に希望を教える。

遂に発動する人類股間計画。

デーブインパクト阻止のため、最後の決戦を挑む四天王。

空を裂く鬼切安綱、赤い大地を疾走するウマ娘達。

次回、『シン・ゴルドスピリッツ』道長とライコウちゃんの奇妙な冒険へ 鬼殺の

刃を添えて』：—

さくで最後まで、サービス、サービス〜！」

「お前が予告するんかい！ つーか次回の内容と全く関係ないじゃねえか！ 何だ人類

股間計画って！ ツツコミきれるかアアア！」

つづく。

## 第8回 「シン・ゴールドスピリッツ　　道長とライコウ ちやんの奇妙な冒険　　鬼殺の刃を添えて」：――

「ところで、奈良時代から平安時代にかけて呪詛の疑いで失脚する事件が結構あるわけですが、松平アナはどう思いますの？」

「そのキャラまだ続けるんですか……。呪詛、つまりはおまじないですよ。現代人の私としては非科学的なと申しますか、そんな大事かと思えますが」

「そうでしょうね。しかし、私達としてはおまじないというのは非常に重要なもので、験を担ぐウマ娘は本当に多いです。考えてみてください。クラツシツク三冠に必須の日本ダービーに勝つウマ娘とは何なのかを」

「最も運のあるウマ娘……」

「そうです。三冠を逃したウマ娘の多くがダービーを逃しています。セイウンスカイにエアシャカール……。アタサーゴールドシップもダービーを落として三冠バとなれませんでした。速さがあっても、強さがあっても、運無くしてはダービーウマ娘にはなれないのです」

「……あの時の敗因って何なんですか？」

「今でもわっかんねえんだよな……距離も十分、気持ちも負けてねえ。なのに、勝てなかった。身体が思うように動かねえし、追い込みかけてからもバランスが取れなかった。認めたくねえが……運つてやつなのかな」

「なるほど」

「それに、ウマ娘の勝負に絶対はない。あの皇帝や神バでさえ、無敗じゃなかった。マルゼンさんは負けてねえけどダービーには参加することすら許されなかったし、たづーおつといけねえ、幻のウマ娘でさえ三冠を目前に病気で引退せざるをえなかった。絶対があるのなら……あの日曜日、大櫓の向こうからスズカは大差で駆けてきた。ライスだって、淀でズッコケることもなかったろうさ」

「……」

「湿っぽい話になっちゃったな。まあ、スズカもライスも生きてるんだ。運がなかったかもしれねえけど、救いが無かったわけじゃねえ……だからこそ、アタシらウマ娘は運とか験を本当に大事にする。知ってるか？ 菊花賞取ったフクキタルの古い小屋はトレセン学園では大人気なんだぜ。当たるも八卦当たらぬも八卦だが、それでもウマ娘なら興味持たないヤツはいねえ」

「そうなんですな」

「そうさ。だからこそ、呪詛をアタシらウマ娘は絶対に許さない。自分を高めるためな

ら良い。だが、相手を呪うウマ娘は、この世に存在しちやいけねえんだ。奈良時代から平安時代ってのは最も日本の支配階級の間人と競技者のウマ娘が近い時代でもあったからな。愛バが気にしていることを指導人が気にしないはずもなく、もともと神道にもあつた穢を忌む思想と合わさつて呪詛は禁忌となつたわけだな。安倍晴明が何であんなだけ有名になつたかと言うと、呪禁師としての才が飛び抜けていたからだな。他人を呪うのではなく、むしろ呪いを祓つたり弾き返した上に相手を突き止めたりする技に長けていたからこそ最強の陰陽師と言われたわけだ」

「人柄は優れ、ウマ娘の武装組織源氏を抱え、安倍晴明を味方につける。確かに道長は呪詛とは全く繋がり得ない人間関係を築いていますね」

「そぞ。伊周のガキはそこんところが分かんなくつたんだろうな。数多の呪いを逆探してきた晴明が黒と言えば、白も黒になる。そうなるとウマ娘は決して許さないし、あの当時の貴族や皇族でウマ娘と関わっていないヤツなんか一人もない。全く、アイツは地獄の蓋を自ら開けちまつたのさ」

伊周側が呪詛をしたという噂は瞬く間に広まり、伊周はその火消しに追われます。しかし、彼の命運は尽きていたのでしょうか。996年、前代未聞の醜態を晒してしまうのです。



まった牛車に弓を放ち、挙げ句に花山法皇の護衛二人を斬り殺してしまうのです。幸いにも牛車に放った矢は花山法皇の袖を貫くだけで無傷でしたが、退位したとは言え元治の君に弓を向ける前代未聞の醜聞となったのです。

被害者の花山法皇は出家の身での女通いが露見する体裁の悪さと恐怖のあまり口をつぐんで閉じこもっていたのですが、あの女狂いが大人しくなるなど逆に怪しいと探りを入れられ、結局事は露見してしまうのです。しかも、その際にとんでもないすれ違いが原因だと判明したのでした。

「おつ、兄貴。彼女浮気してなかったっぼいぜ」

「……おう」

「兄貴の彼女は三女で、俺が弓放つちまった相手は四女に通っていたんだと。何だ、兄貴の早とちりか。まあ、浮気してなくてよかったじゃねえか」

「……おう」

「ところで兄貴。俺、出雲に行くことになったから。源氏のせいで検非違使別当現在の警察庁長官にあたる役職。の仕事も何もできなかったし、地方の方が活躍できるかな。出雲の平和は俺が守る！」

「……そうだな」

「んじゃ、元気でな。つーか、道長おじさん悪い人じゃないんだから兄貴も仲直りしろ



よ。実は隆家、道長との仲はむしろ良好。お互い武芸に通じていたので気があったのか、アホの子の隆家を憎めなかったのか。何にせよ道長派の貴族にも可愛がられ、何やかんや道長とは上手い関係を築いた。姉上も心配してたぞ」

「……おう。元気でな」

斯くして伊周も予想外の暴走を果たした頭バクシンのアホの子隆家はあっさりと出雲国へと左遷され（本人は左遷と気付いていない模様）、伊周は妹の定子の元に逃げ込みますがほとほと愛想を尽かされたのか3ヶ月後には追い出され、伊周はトボトボと左遷先の太宰府へと向かいました。

最もとぼつちりを受けたのは中宮定子で、兄弟のアホさ加減に絶望し、何と身籠っているにも関わらず発作的に自ら髪を切って出家してしまいました。一条天皇は大層驚き、出家した定子を内裏に置くわけにもいかず、かと言って離れ離れになることも耐え難く、結果として使われていない建物を借りの住まいとし、そこに人目を忍んで通わざるをえなくなつたのです。一条天皇からの愛は変わらなかつたものの、兄弟のあんまり過ぎるやらかしに加えて出家したにも関わらず帝に侍る厚かましきこれはむしろ定子に責は無く、彼女の立場を考えることなく愛だの何だのを優先して手放さなかつた一条天皇に問題があるのでしようが、彼もまだ17歳であり完璧を求めるのも酷な話です。を世間は冷ややかな目で見ることとなり、女官ウマ娘からも「かく、見んね。卑し

か女ばい」と蔑まれるようになったのです。

この伊周ら中関白家の没落を長徳の変と言います。

なお、アホの子隆家は出雲と勘違いしたのか、はたまた都に近いところでスタンバイしたかったのか、理由は不明ですが結局出雲まで行かず但馬国に留まりました兵庫県の日本海側。筆者もいまいち何があるのか知りませんでした。平安時代には生野銀山が開坑するなど割と栄えていたみたいです。お城好きなら竹田城跡があると言えばお分かりかと。道長もこれには苦笑いで、「隆家なら仕方ない」と許し、逆に隆家は但馬に、伊周は播磨に留まっても良いとの勅令を出しました。

「出雲の平和はこの隆家を守る！(※ここは但馬です)」

しかし、このアホの子はウマ娘にはアホすぎて好かれたのか、はたまた赴任先が頭がバクシンしている娘ばかりだったのか、太宰府に赴いた際には現地のウマ娘と共に日本を救う軍功を挙げているのです。それについては、また後ほど……。

伊周のやらかしの同年7月、道長は30歳で左大臣に昇進し、名実共に藤原氏の氏長者となったのです。ちなみに、次席の右大臣には無能者として知られ、朝廷の儀式で失態を繰り返して世間の嘲笑を買っている叔父の藤原顕光某聖杯戦争でリンボマンにやたら叩き起こされている人。を据えています。

ただし、摂政や関白というのはあくまで摂政は未成年の、関白は成年の天皇の後見職

に過ぎず、権限は天皇との関係によつて大きく左右されるものです。この時の一条天皇と道長は伯父と甥の関係ですが、中宮定子を抱えた中関白家と違い外戚と呼ばれるものではありません。また、朝廷の最高機関である太政官には大臣を兼任していても摂政・関白は関与できない法律でした。そのため、通常は摂政関白となつた際には息子を大臣として実権を握るのがセオリーでしたが、道長には幼い息子しかいなかったため関白となることは断念し、左大臣として政務を行います。

999年、道長は長女の彰子を12歳で一条天皇の女御として入内させ、翌年には出家していた定子に成り代わり中宮として立后させました。

彰子は父母の愛情を受けて育ち、ウマ娘と多く触れ合う機会が多かつたからか、当時の貴族達からは人でありながらウマ娘と見紛う程に美しく、おっとりとして、かしこいと評されました。

「主殿からあんな良い娘が生まれるとは……因子継承で大当たり引いたな」  
「やかましいわ」

最初こそ一条天皇とは年齢の差（8歳差）もありそこまで仲を深めることはできませんでしたが深めたら深めたで一条天皇は後世にヤバい人として名を残したでしょう。1001年に定子が皇女を出産後に崩御した直後から関係が一気に変わります。

一条天皇と定子の間には敦康親王をはじめとする3人の子どもがいました。しかし、

定子の実家である中関白家は伊周のやらかしのせいで没落し、定子亡き後に危うきに近寄りたくないといふ人の子どもを養育できる者はいなかったのですが、そこに、彰子が突然名乗りを挙げたのです。

「私がお母さんになります！」

「……一応、理由をきこうか」

「お義母さまとライコウちゃんと言っていました。『姉であり母でもある。それこそが最強なのよ』、『古来より万物は母より生まれる。どんな神もママみには勝てねえ。つまり、そういうことだ』と。よく分かりませんが、この子達を育てることが、私には正しいことだと分かるのです！ 立派なお母さんに私はなります！」

「……もう、好きにして」

道長としては政敵の娘であり何のメリットもありませんが、色々と疲れ果てた道長は養育を認めました。が、これが思わぬ流れを生むのです。

「母性のある少女。そういうのもあるのか」

これまで年上のおねえさんしか知らなかった一条天皇に新たな性癖の扉が開かれてしまったのです。結果、天皇は彰子にすっかり惚れ込んでしまい、他の女性に通うことが無くなりました。

一条天皇と彰子の仲が深まることにより道長の権力もまた強まり、道長の栄華は確約

されたのです。

さて、平安時代と言えば大陸の文化的影響を越え、真に日本の文化を確立した時期でもあります。そう、真の日本——最古のSF長編小説にネカマ日記、わかり味の深いエッセイ、昼ドラ真つ青の王朝恋愛モノ。行き場のない欲求を芸術方向に昇華するのは保健体育で習ったかと思いますが、後の江戸時代に鎖国による閉鎖的な環境から「触手」の大家である鉄棒ぬらぬら先生を生み出したように。UR Aがエッチなことはいけないと思えます。イメージを損なう創作物を禁止した結果、怪文書が大量に発生したように。遣唐使の廃止後に日本はそうはならんやろと言いたくなる程の文化的爆発を迎えるのです。

中宮彰子の後宮は多くの優秀な女官を抱え、一種の文化サロンと化していたのはあまりにも有名な話。源氏物語の作者、紫式部。女流歌人として名を残す和泉式部や赤染衛門など錚々たるメンバーが連なっていました。まさに優雅で春はあげぼよーとでも思ったか。

「香子先生、締め切り過ぎていますよ！ 源氏物語感動の最終回なんですから今日という今日は原稿をいただかない限り僕は帰りません！」

「む、無理い。そもそもあんな子持ち未亡人が手慰みで書いた妄想小説が何でこんなに話題になっているんですか！ 帝まで愛読者とか死にたくなるんですけど！ 打ち切りとか駄目ですか編集長！」

「駄目です（無慈悲）」

「あ、頭も原稿も真っ白でーあ、大きな星が、ついたり消えたりしている。あはは、大きいー」

「本当に一文字も書かれてねえ……いや、待て。むしろそれが良いのでは？」

源氏物語最終話『雲隠』

タイトルのみで本文は一切ないそれにファンは恐れおののきました。あまりにもものあわれ。光源氏の最後を死を連想させるタイトルと共に敢えて内容を書かず、読者の想像に委ねるやり方は栄枯盛衰、儂さの極地を人々に伝えました。

「やっつと、私の黒歴史から卒業できる……うふふ、これからはもつとひっそりと生きよう。ちよつと日記を残すくらいで世間からは離れてさえいればあんな作品忘れられてー」

「あ、香子先生。源氏物語の最終回、滅茶苦茶好評ですよ。ところで、源氏亡き後の後日談を書けばさらに評価はうなぎのぼりだと思うのですが、締め切りは何時にしましょうか？」

「エ、ドウシテモカカナイトダメデシヨウカ」

「書きますよね？ いや、書いてください。編集長として、何より一人の愛読者として命じます。書け（豹変）」

「スクイハナインデスカアー！」

世界最古の長編小説——源氏物語。

千年後の現在でなお読み継がれる王朝文学の最高傑作が生まれた背景には、編集長・道長の存在は欠かせません。

道長自身も和歌や漢詩、その他多くの学問に通ずる英才。豊富な資金と暇を持て余した結果この頃のライコウちゃんは美濃の国司として出張しておりしばらく都にいなかった。彼は最強の編集長として覚醒したのです。

資金援助、広告、締め切りの管理、何なら自らをネタにすることすら厭わない身の切り方。まさに敏腕編集長と化した道長は、子持ち未亡人で元引きこもりのペンネーム紫式部こと藤原香子さん（30代）が、「何この人、もしかして私のこと好きなの？」と盛大に勘違いするほどの熱の入りようでした。

1008年9月には彰子に待望の皇子（後の後一条天皇）が生まれ、道長は次期天皇の祖父としてよりいっそうの栄華を約束されたのです。なお、この時代は后は出産時期に実家に里帰りして産むのが一般的で、彰子も実家（御所の隣）の土御門御殿で出産しています。紫式部も付き添ったらしく、日記にあまりの喜びと安堵からか現実味を失ってふわふわしている道長の様子が描かれています。

皇子誕生はすぐさま一条天皇にも知らされ、11月には内裏に帰ると伝えているのに

待ちきれず、10月に天皇自ら「徒歩で来た！」と突撃し道長を驚かせています。

よほど彼女との子ども嬉しかったのか、それとも「彰子は私の母になつてくれる女性だ」とバブ味にオギャったのか、一条天皇は彰子が内裏に戻ると速攻で彼女の部屋に入り浸り、夜は逆に自分の寢所から帰さないという、今までの宮廷のルールとは何なのかと言いたくなるほど溺愛し、片時も離そうとしませんでした後朱雀天皇「で、翌年には朕が生まれたつてわけよ」。

しかし幸せは長くは続かず、1011年に一条天皇は病を得て崩御します。病の床でも一条天皇は彰子と離れることを嫌がり、一条天皇の最後の言葉や歌は全て彰子が書き留めたものです。

道長は次の天皇には花山法皇の異母弟で自らの甥でもある三条天皇を即位させました。そして、その皇太子には彰子の子である敦成親王を立太子させたのです。が、ここで地味に親子喧嘩が発生したことを歴史書は伝えています。

「お父様、なぜ敦康親王が立太子できないのですか」

「え、いや……だって、敦康親王は定子の子だし。僕の孫じゃないからー」

「何てことを言うんですか！ 全員私のかわいい子どもです！ お父様は孫をいじめて何が楽しいんですか！」

「いや、だから僕の孫じゃないからー」



「? おかしなことを言いますね。私の子どもがお父様の孫じゃないわけはないではありませんか」

「……………いや、騙されんぞ。生憎と僕は姉を名乗る母のせいで耐性が……………いや、母を名乗る姉だったつけ……………お姉様……………お母様……………違う、いや、どちらも正しいんだ。僕は正気に戻った! とにかくあの子が孫だとは認めません!」

「チツ。致し方ありません、ライコウちゃんから教わった芦毛神拳奥義『バ場バーバ・重バ場』を解禁するときに来ましたか。お父様、お許しください。彰子、拳を解禁しまーあれ?」

「逃げるんだよオオオ!」

流石はライコウ、倫子、明子、詮子に振り回された男です。危機察知能力が違います。ともかく、彰子は自らが育てた敦康親王が立太子出来ないことを大変恨みに思ったと記録されています。

三条天皇と道長は今まで縁が無く、不仲と言える関係でした。娘の研子を嫁がせるものの三条天皇は皇后には

長い間連れあつた藤原 $\square$ 子を据えるなど道長との対決姿勢を崩しません。道長もこれには憤慨し、ことあるごとに三条天皇を退位させるべく働きかけました。

結局、1016年に眼病の悪化を理由に道長は退位を迫り、道長の権力に敵わないと

悟った三条天皇は後一条天皇に位を譲りました。孫が天皇となった道長は満を持して摂政となり、遂に親子二代で摂政となり、更に不仲になったとは言え藤原うまびよいづラザーズ全員が摂政・関白のいずれかを経験する記録を打ち立てたのです。

道長の権力を示す逸話に、自宅である土御門御殿が全焼した際には全国の国司が道長の機嫌を取るべくこぞつて金品や資材を持ち寄り、同じく燃え落ちた御所は放つたらしにされてしまったというものがありません。なお、家財はライコウが全て用意し謎のセンスの良さに道長でさえ、「どうしたライコウ、悪い物でも食べたのか」と心配したとされます当然蹴られた。

同年12月、従一位太政大臣に任じられます。

話は変わりますが、ここは道長と多少の縁がある貴族の家。病がちな子どもは自らの寿命を悟り嘆いています。

「父上……僕はもうすぐ死ぬんだね」

「パカな事を言うんじゃない」

「嘘だッ！ 僕は知ってるんだ。僕はもうすぐ死ぬんだよ！」

「何言ってるの。今日は従一位の人がお見舞いに来てくれるのよ」

「嘘だ！ こんなところに従一位が来るわけ無いじゃないか！」

そこに、颯爽と現れる道長。何で来てるのかとかツツコミは野暮というものです。

「やあこんにちは」

「あつ！ ホントだ！ 従一位だ！」

「いやあ危うく今年は三位になりかけたんだけど……今年是一位だったよ」

「おめでとう！ でもどうやって従一位になれるの？」

「うーん、例えば従五位がいるよね」

「うん」

「しかし、そいつが従五位上だったとしても、僕は従一位なんだよ。太宰府のあたりじゃ私を八位だと言っている男もいたが……とんでもない。私は従一位なんだよ」

「うん」

「考えてみると……従五位下から始めさせられたのだよ」

「そうなんだ」

「あの頃が一番辛かった。よく従四位<sup>道</sup>下のヤツにいじめられたのだよ」

「へえ〜」

「その頃いつも正五位<sup>公</sup>下の家に泊まっていたよ」

「そうなんだ……従一位さん、握手してくれないかな？」

あつさり道長は握手をします。

「がんばるのだよ」

「してくれるんだね（困惑）」

「頼信源頼信。ライコウの弟で道長四天王の一人。足利氏の先祖。」

「はい」

「私は去年は何位だった？」

「正二位です」

「……一位じゃなかったの？（小声）」

「正二位左大臣です」

「……でも、今年は何位だい？」

「従一位です」

「よしんば去年が正二位だったとしても？」

「従一位太政大臣です」

満足そうに握手をする道長。

「去年は……二位じゃないの？ ……従一位さん、僕も従一位になれるかな？」

「ハハハッ！」

高らかに笑う道長。そこに、何かを聞きつけた頼信が耳打ちします。

「どうした頼信。何だと？ 僕を二位だと言うヤツがいるって？ そいつは何位だ？」

従三位実資の男だな……そんなに言っているのか？ どんな言い方だ？ そうかわかった。

すぐに行く」

慌ただしく帰ってゆく道長。それを見送った子どもは思わず呟きます。

「なあにこれえ」

……私にも分かりません。

1018年3月、後一条天皇が11歳になった時、道長は三女の威子を女御として入内させ、10月には中宮とします。これにより三人の娘がそれぞれ天皇の中宮となる榮譽を得た道長を批判的な貴族でさえ褒めそやすほどでした。この絶頂にあつた道長が宴の際に読んだ歌が、かの有名な「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」というものです。明らかに調子に乗っていますね。

酔いが覚めた道長は「やっちまったく」と思い後悔しますが時すでに遅し。しつかり他の貴族たちには日記に記録され、千年間常に晒され続けているのです。なお、後日ライコウに「調子乗んな」と蹴りを入れられた。

黒歴史に反省したのか、はたまた糖尿病がキツくなってきたのか、1019年に道長は出家します。しかし、望月のかけたること無しとまで言い放つた道長の栄華も、終わりの時を迎えようとしていたのです。

1025年、敦良親王（後の後朱雀天皇）に嫁いでいた嬪子が皇子（後の後冷泉天皇）を出産後に18歳で崩御。道長は激しく動揺し、陰陽師に反魂の術を試させようとする

など取り乱しようが記録されています。

「老いたな、主殿」

「ライコウか……何年前（1021年）の葬式ドッキリ以来だな。しかし、お前は本当に変わらないな。だが、分かってくれ。子が親より先に死ぬなんて……耐え難いんだよ。ましてや末の娘だぞ。順序が違うじゃないか」

「そうかもしれないねえな。けどな、死なねえ人間もいねえしウマ娘も歳取るのが遅いだけで、死ぬときはあつさり死ぬもんだ。だからさ、今日はお別れを言いに来たんだ」

「そんな、ライコウ、まさかお前までー」

「撮影中で悪いけどちよつと別世界の娘が秋華賞走るらしくてさ。足怪我してたのに出走するなんて心配だから見てくるわ」

「……一度と帰ってくるなアアア！ 返せ！ 僕の感傷を返せよオオオ！」

史実ではこのころにライコウの記録も途切れ、一般的には1021年から1025年の間で亡くなったとされます。

晩年の道長は寛子・嬉子・顕信・妍子と多くの子供たちに先立たれ、自らも糖尿病の悪化により健康を害し仏教へと傾倒していきます。

そして、1028年1月に道長は自らの死が目前に迫っていると察し、法成寺の阿弥陀堂に入ると九体の阿弥陀如来の手と自分の手とを糸で繋ぎ、西方浄土を願いながら横

たわります。

念仏を唱える道長の枕元に、突然何の前触れもなく変わらぬ姿の芦毛の武者が現れました。

「何死にそんな顔してんだ主殿」

「ライコウ……お前、生きてー」

「ライコウちゃんは不死身だからな。ちよつとゲンジバンザイ星域13番地のゴルゴル星に里帰りしてたわ。けど、もうそろそろ寿命かもしれねえな。最近ダルくて仕方ねえよ。2週間目の蟬みたいだぜ」

「はは……変わらんなあ、お前は」

「ところでさあ、何その紐。運命の赤い糸？」

「これはな、仏様と僕の縁を繋ぐ大事なー」

ブチッー

「……何してんだお前エエエ！ 僕のオ、浄土に行く大事な縁だっつってんだろーうがアアア！」

「うるせエエエ！ そんなよく分かんねえ縁に頼ってんじやねえよ。頼るなら、アタシにしとけてんだよ！」

「……お前に頼って大丈夫なのか？」

「応よ。オマエが地獄に墮ちたなら、地獄の鬼を蹴り飛ばし、仏を脅してでも引き上げてやる。閻魔大王なんて、ライコウちゃんの手にかかれば余裕、余裕」

「本当に……お前は……破天荒だなあ」

いよいよ視界が暗くなってきた道長。最後に何を話そうかと考えていると、不意に彼女と主従になった遠い昔の記憶が思い浮かびます。しかし、どうしても理由が思い出せなかつたのです。

「なあ、ライコウ」

「ん？」

「どうして僕を選んだんだ？ 3男坊の僕が出世するなんて分かりもしないのに」

「ああん？ そんなことも忘れちゃったのかよ。しょうがねえな」

ライコウは死期を前に薄っすらと汗を浮かべていた道長の額を撫でると、これ以上ないほど優しい声音で告げました。

「すげーヒマそうなヤツがいるなって思ったんだ……アタシと出会えてアンタの人生、面白くなつただろ？」

「ああ……そうだ。本当に、楽しかったよ」

「だろ？」

「なあ、ライコウ」



「何だよ」

「千年後、暇か？」

「……暇だな。たぶん」

「だったら、今度一緒に走ろうぜ」

ニカツと、会心の笑みを浮かべる道長。ライコウは一瞬何を言っているのか分からずポカンとしてしまいます。

「お前……来世でウマ娘になる気かよ？ 何か世界一位とか取りそうな気がするんだけど本気か」

「本気だとも。で、どうだ？」

毒気を抜かれたライコウははじめて道長に振り回されていることに苦笑いを浮かべました。

「まあ、いいぜ。千年後に、そうだな……海の向こうで行われるスゲー競技があれば一緒に走ろうな……」

「良いな。二人でポロ負けしそうな気がするけど……楽しみだなあ……」

「楽しみができて良かったな。なあ、主殿」

「……」

「おーい？」

ライコウの問いかけに、道長が答えることは二度とありませんでした。

「……何だよ。オマエがいねえと、アタシの人生ちよつとつまんねーぞ」

1028年1月。藤原道長、薨去。享年62歳。

死の前には体の衰えや糖尿病による感染症等で苦しんだとされますが、その死に顔は穏やかだったと伝わります。

「……はい。長い間お付き合いましたがいよいよお時間が差し迫ってまいりました。オールバトさん、道長以降急速に貴族達は力を落としていってしまいますが、これは何故なのでしょうか」

「そうですね……一番は頼通から後室との外戚関係構築に失敗してしまつたことでしょうけど、武士階級のウマ娘との関係が希薄化してしまつたことが拍車をかけました。道長のように時に隣で共に戦うような戦友か、余程優れたトレーナーでもない限りウマ娘達の心を繋ぎ止めることなどできはしないのです。結果として上と下、両方から見放されたために貴族はただの飾りとなつてゆき、武士の世では存在すら忘れられがちなものに成り果てていくのです。道長は皇室ともウマ娘とも良い関係を築いてきたので、私は彼こそが最後の平安貴族だつたと思つています」

「最後に、一つだけよろしいですか？」

「どうぞ」

「貴女にとつて、藤原道長とはどのような人でしたか？」

「……教えてやんね」

「ケチ」

「オホホホ、ケチでよろしくてよ」

「全く……ともかく、最後は貴族の時代の終焉とその後について触れて終わりたいと思います。オールバトさん本日はありがとうございました」

「サンキューベリーマッチング。またな、テレビの前のヒトミミーズ。ところでオマエらスペを見過ぎだろ。蹴られてもアタシ知らねえぞ」

「最後までいい締めてくれませんかねえ……」

道長の死後、息子の頼通までは藤原摂関家による政治が行われましたが、外戚関係が薄れると共に上皇・法皇が実権を握る院生へと移ります。しかし、上皇や法皇には藤原氏ほど地方経済を回す力は無く、貴族という後援者を失った武士達は貴族に頼ることのない経済圏の確立を余儀なくされ、結果として武士の自立へと繋がってゆきます。そして、院生から武家政権へ移った後に貴族達が政治の実権を握ることは二度とありませんでした。

道長とライコウの関係は貴族と武士、すなわち貴族とウマ娘との最後の蜜月であり、彼等が歴史から去るときは平安の時代が終わりへと向かう始まりでもあったのです。

終

制作 日本ウマ娘放送協会府中支部

次回予告

「おやおやおや。また東北で戦とは、度し難いですね。頼みましたよ、私のかわいいウマ娘」

「ええ…お任せを。血に飢えた猟犬のように、戦を征して見せましょうー我が君」  
もしも彼女が武士として生まれなければ、全てに退屈して、ただ血を求める怪物だっ

たのかもしれない。

武士とは——理想の戦士でも蛮族でもない。

もつと悍ましく、美しいナニカだった。

### 第9回 「メイドインウマ娘 猛き武士達の黎明」

夜明けの先にあるのは果たして——

——

時は流れ、現代。

「ふい〜撮影終了。疲れたあ」

「お疲れさま。結構マトモに出来てたね」

「まあな。なんたつてアタシは才能あふれるゴルシ様だからな。けどさあ、オールバト演じるの疲れるんだよなあ……次からマックイーンあたり影武者にするか」

「やめなさい、可哀想でしょう。ただでさえうちの上司ssに狙われているんだから心労か

けさせないの」

「へいへい、真面目ちゃんの左大臣様は健在ですこと。ところでマスターちゃんー」  
「シップ、今はもう左大臣でもマスターでも無いわ。今の私は『ジャスタウェイ』よ」  
「おっと、そうだったな。悪い、悪い」

「それで、何を言おうとしたの?」

「いや、松平のつつあんには言わなかったけど、アタシらの関係って何だろうって思っ  
てさ。まあ、親友ってのは間違いないけど……」

「そうね。親友以上、仲間でライバルとでも言っておく?」

「んー、まあそれでいっか。考えるのも飽たでゴルシ」

「飽きるの早いよ。そんなんだから凱旋門であんなことになるんじゃない」

「うるへえ、うるへえ、オマエだつて8着じゃねえかよ。ところでさ、一つ大事な話して  
もいいか?」

「何?」

「あの時の約束は叶えたからな。次の約束をしとこうと思つてさ。なあ、ジャスタワー」  
100年後ヒマ? 今度は一緒に宇宙行こうぜ。

いいね。何処までも行こうか。此の道をー

## 第9話 「メイドインウマ娘 猛き武士達の黎明」 上

武士とは何か。

仁義礼智を身に着け、素晴らしい武芸を持ち、正々堂々、質実剛健な人の中の人。花は桜木人は武士と謳われる存在。

一理はあります。むしろ正しいのでしょう。

しかし、忘れてはならないのは、武士には人とウマ娘の両者が存在したということ。人とウマ娘とはその精神構造は大部分が共通していますが、ある決定的なものが異なるのです。

人は一々殊に日本人は義を重んじます。義は成すべきことを成すこと。行動の意味や正しさなど観念的なものです。道理と言っても良いでしょう。故に、日本人は法を超えた正しさを成すことを時に選択するのです。かと言って人治主義ではなく、法を破ったペナルティは受けて然るべきという基本は法治主義である点も特徴的です。要するに法を超えた例外の存在を国民性として認めているけれども、それはそれこれはこれと割り切ってしまう。むしろ罪は罪として受け入れることに滅びの美学を感じ、ご都合主義のハッピーエンドに興醒めするあたり、国民性として愉快部や曇らせ隊なのでは



……。

ウマ娘は、仁を求めます。仁とは、真心や人を愛することを指します。殊にトレーナーとの絆は何物にも代えがたく、たとえ富・地位・名声・力、この世のすべてと天秤にかけられたとしても、ウマ娘は絆を深めたトレーナーを寸毫の迷いもなく選ぶことはウマ娘ならば疑いの余地もないのです。あのマックイーンが、学食の限定モンブランであらうとも一度トレーナーが待ったをかければしぶしぶ諦めると言えばその鋼の意志は伺い知れるでしょう。

……ところで、ウマ娘には継承と呼ばれるものがあると知られています。それは異なる世界なのか、はたまた前世か、あるいは歴史の中にある残留思念か。ウマ娘は現実で得た経験以外の記憶や感情、技能を習得することがあります。これまでのデータでは、記憶の継承は極々稀な例外であり、一流選手となるウマ娘には技能の継承がもはや必須と言えます。あのハルウララに有馬記念1着を成し遂げさせたトレーナーも、継承無くしては勝利などありえないと申しています。では、ウマ娘の多くが継承してしまうものは何なのかと言えば、即ち感情です。理屈はわからないけれど、何となくこのレースに勝ちたいというものや、何故か惹かれる相手がいたりする理屈ではないもの。程度の差はあれども、かつて存在した名も知らぬ誰かの感情を、多くのウマ娘が継承するのです。で、平安時代です。前回でも触れたとおり当時は妻問婚であり、生態的な理由で正妻

になり難いウマ娘よりも人間の女性に有利な結婚システムでした。それが8世紀から11世紀までの300年に渡り続いた結果、一見すると人とウマ娘とのバランスが成り立っていたように思えますが、実際には少しずつ澱が重なっていたのです。

その澱とは、欲求不満です。

ウマ娘は仁ー人愛することを何よりも尊びます。が、逆に言えば……愛した人以外はどうでも良くなるウマ娘は大変多いもの。仮にトレーナーが自分以外の人間やウマ娘と結ばれれば、もはや嫉妬などという可愛いものでは済みません。ウマ娘にとって、至上の価値を横取りするようなものはこの世にあつてはならないのです。中には実力行使に及んだものも確認されます。例：鈴鹿御前。

そんなウマ娘は、300年間も我慢してきました。えらいですね。我が家なら一晩も持ちません。

これも世のため人間さんのためと、ウマ娘は一番になりたい気持ちを押して殺してきたのですが、何事にも限界はあるもの。

結果ーウマ娘はハジけました。

「もう嫌だ！ 私の夫に他のヒトミミなんか不要だ！ 私だけを見てよ！（束縛）」

「理解できません。人間がウマ娘に勝てるはずがないのに。どうして私達は我慢してきたのでしょうか（ささやき）」

「どうして二人きりじゃだめなの？ あなたには私だけでいいでしょ。何で人間の女も受け入れなきやいけないの？ ナンデナンデナンデ（独占力）」

各地で高まるウマ娘の不満。気付いたときにはもう遅い。取り締まる者などいません。何故なら、取り締まる側の貴族や武士階級のウマ娘が真つ先に掛かってしまったのですから。逆に言えば農民などの一般ウマ娘は特に関係なかった。彼女達は人口のバランスなど考えることなく（賢さG）愛する者とうまびよいし、人口比のウマ娘の割合を増大させ続けた。バランス崩壊しなかったのは偏に人間女性の努力と、その後の度重なる戦争によりはものでしょう。人間男性？ 彼等ならその辺で干からびていますよ。

危機感を持つには持った朝廷ですが、その腰は重いものでした。何も人死は今の所確認されず、被害といえれば日本各地のそれなりに身分ある男性が強制うまびよい被害にあっている程度です。

「触らぬウマ娘に祟りなし」

それが朝廷を中心とした人間男性の回答であり、諦観であります。

道長亡き後、ウマ娘を御しうる権威をもつ人間など時の天皇の他に存在せず、長らく実行力を失っていた天皇では全国のウマ娘を統率することなどできはしません。

そもそも、この時代のウマ娘に愛国心なるものが明確に存在しているのかは甚だ疑問であります。もちろん、ミク口的な解釈——すなわち国家とは個人の集合体であるが故

に自分と指導人を愛することがひいては愛国心に繋がるという意味であれば間違い無くウマ娘は愛国心を持っています。しかしながら、マクロ的に国家という存在と指導人という個人を天秤にかけた時、迷うことなく指導人（すなわちトレーナー）を選ぶウマ娘が圧倒的に多いというのは現代でも日本の問題点としてしばしば挙げられます。自衛隊志望のウマ娘が毎年の如く定員割れを起こしていることはその証と言えるでしょう。彼女達は手の届かない大きな存在よりも、手の届く心を通わせた相手をこそ大事にしたがるのです。

話を戻します。つまり、ウマ娘を真に統率するには心を通わせる指導人の存在が必要不可欠なのですが、朝廷は人口比のバランスや権力闘争にかまけた結果、ウマ娘の需要をすっかり下回ってしまい、かなりの欲求不満状態を300年間続けたわけです。

まあ、爆発して当然であり、誰にも止められないのです。止めたら矛先が自分に向くのですから仕方ないね。

この疾風怒濤の逆びよい時代は歴史から抹消され、まともな歴史に戻るには白河天皇が出家して法皇となり、

「おやおやおや、仏門に入ってしまうとうまびよいできませんね。いやはや、かわいい君たちと触れ合えないのは残念ですがーこれで夜明けを迎えることができます」

と、掛かったウマ娘でさえぐうの音も出ない無敵モードとなり政治の実権を握るいわ

ゆる院政を待たねばなりませんでした。

これはウマ娘が武士として黎明に至る歴史。後に武士の祖と呼ばれる源義家の人生そのものです。

さあ、武士達の夜明けを見ましよう。

日本ウマ娘放送協会特別企画

ウマ娘と辿る日本の歴史

第9回「メイドインウマ娘 猛き武士達の黎明」

「こんばんは。今夜取り上げるのは前回に引き続き日本の代表的な存在である武士、または侍の黎明期であります。前回の平将門から源頼光にかけて武士としての体裁は整いつつありましたが、完全に私達の知る武士とはなり切れていない、いわば日付は変われども夜明け前の状態であります。今宵は、武士が武士となった夜明けの時を、源義家というウマ娘に着眼していこうと思います」

そもそもはじまりの武士とは誰なのか。

該当する人物はこれまでに5人登場しています。歴史の順で、坂上田村麻呂、平将門、藤原秀郷、源頼光。そして、源義家であります。

彼らを一人ずつ整理していきましょう。

まずは坂上田村麻呂。彼は武将ではありますが武士と定義するのは難しいでしょう。そもそも武士の始まりは坂上田村麻呂以降であり、彼自身中央貴族の一員でありました。武士以前の皇国の守護者、軍神として崇めるべきではありませんが武士の祖とは言えません。

次に、平将門と藤原秀郷です。この二人は後の関東武者へと繋がる重要な人物ではあるのですが、互いに致命的な欠落があります。まず、将門は反逆者であるという点です。武士に必要な忠義とは無縁であり、武士にカウントするには無理があります。トータレと秀郷に関しては、武士というよりも地方豪族の延長であり、彼女を武士の祖とする見解も見当たりません。

最も武士に近付いてきたのはライコウちゃんこと源頼光であります。彼女にも致命的なものがあります。軍権を得られていない点です。彼女は基本的に地方の国司を務める貴族であり、役割的にも軍人というよりは道長直下の警察組織的であります。

となると、軍人かつ武士としての要素（忠義等）を持ち得る人物こそ武士の祖と定義するのであれば、源義家が武士の祖と言えるのでは無いでしょうか。

これを裏付けるように、後世の武士は源義家を神格化し、武士の祖として扱っています。これは鎌倉幕府や室町、江戸幕府が源氏の系譜を名乗っている関係上当然と言えるものですが、やはり武士からすると義家が祖であるというのが最も納得のいくものでありましょう。

さて、場面を歴史の流れへと移します。

1051年、またしても東北は荒れていました。

かつて朝廷と敵対した後に帰属した蝦夷の民を俘虜と言うのですが、彼等を扇動する者が現れたのです。

その名は安倍氏眉唾ですが、安倍元首相はこの一族の末裔らしいですね。元は東北とは縁もゆかりもない地方貴族ですが何を間違ったのか俘虜達の長を名乗り、朝廷への納税を拒否。当時の陸奥守・藤原登任が数千もの兵を率いて懲罰に臨みますが、一まさかの敗北。原因としてはいまだ反骨の気配が残り朝廷に従うのが癪に障るみちのくウマ娘達が安倍氏に味方したからだと言われている。

事態を重く見た朝廷は、河内源氏の源頼義ライコウの姪っ子にあたるウマ娘。が後任の陸奥守となり、田村麻呂以来伝統の武力をチラつかせつつ懐柔策に打つて出ます。これは成功し、恩赦を得た安倍氏は朝廷との休戦と源氏との良い関係を築いていくかのよいにみえました。

しかし一〇五六年。結局戦が起きてしまいます。それも、日本史上最もしょうもない理由で……。

「我々は、かつて一人の英雄阿流為を失った。しかし、それは敗北を意味したのか？ 否！ 始まりだったのだ！ ヤマト全土を治める朝廷に比べ、我が奥州の国力は30分の1以下である。にもかかわらず今日まで戦い抜いてこられたのは何故か？ 諸君！ 我がみちのくウマ娘の反乱目的が正義だからだ。これは諸君らが一番知っている。我々は故郷を追われ、蝦夷地や山の奥深くに追いやられていた。そして、一握りの貴族らが東北にまで膨れ上がった朝廷を支配して300余年、この地に住む我々が自由恋愛を要求して何度踏みにじられたか。私が掲げるウマ娘一人一人の自由のための戦いを神様仏様が見捨てるはずはない。それはそうとして、私の指導人くん！ 諸君らも可愛がついてた指導人くんと私は結ばれなかった。何故だ（涙）」

（（知らねえよ……））

「坊やだからさ（意訳：流石に毛も生えていないシヨタはマズかったのでは？）」「坊やに恋したのではない！ 好きになったのがたまたま少年の指導人くんだけだ！ ともかく、諸君の母も、祖母も、朝廷の無思慮な迷惑の前に袖に涙してきたのだ！ この悲しみも怒りも忘れてはならない！ それを、私の指導者さんは！ 失恋をもつて我々に示してくれた！ 我々は今、この怒りを結集し、朝廷軍に叩きつけて、初



めて真の勝利を得ることが出来る。この勝利こそ、全て報われなかった恋への最大の慰めとなる」

（（そうかな……そうかも……））

「人間さんよ立て（意味深）！ かなしみをうまだつちに変えて、立てよ人間さん！ 我らみちのくウマ娘こそ選ばれしお嫁さんであることを忘れないでほしいのだ。優良種である我らこそ人類を救い得るのである。うゝ、うまだつち！」

「うゝ、すきだつち！」

「うまびよい！」

「うまびよい！」

後に前九年の役と言われる反乱は、陸奥国の豪族で朝廷に帰属したみちのくウマ娘の長である安倍貞任の失恋により再び動き出したのです。自棄になった貞任は陸奥国の国司で河内源氏の棟梁でもある源頼義の配下を襲撃。独立とまでは言わないまでも朝廷に弓を引く形になりました。

運の悪いことに頼義は疑心暗鬼に陥り、自軍にいたが貞任とは義理の兄弟である平永衡を讒言を信じて殺害。同じく義理の兄弟であった藤原清経を安倍氏に寝返らせる結果を生み、源氏側は結束力を欠きます。これを阿久利川事件といいます。

これに危機感を覚えた源氏は再びみちのくウマ娘に調略をかけるのですが……

「安いですわよー！　安いですわよー！　取れたての桃に林檎がお買い得ですわよー！　しかも今ならもれなく源氏の一党になれる特典付きですわー！　さあ、その貴方！　いかがです!?!」

「おいしー！　なあにこの赤い果物!」

「ここを林檎農園とする（津軽ウマ娘）」

「源氏になる！　ゲンジバンザイ!」

これがうまくいってしまうのです。

未知なる甘味に惹かれたみちのくウマ娘達はふらふらと源氏に与し、安倍氏は大打撃を受けます。ちなみに、観賞用ではありませんでしたが林檎の一部品種が平安時代に日本に到来していたりします。

さらに、源氏は安倍氏の長である安倍頼時に伏兵を仕掛け、これを討ち取りました。

これで問題は解決したかのように思いましたが……そうは歴史が許さない。むしろ頼時は殺さないほうが良かったのではないのでしょうか。何故ならば、母が死ねば次に出てくるのは、ヤツだからです。

「この奥州の地は、みちのくウマ娘と少ない指導人さんの混在する、きわめて不安定な物である。それも、過去の戦争で帰属した俘虜の為に急遽、取り繕われた物だからだ。しかも、朝廷が俘虜に対して行った施策はここままで、住む場所さえ作ればよしとして、彼

らは都に引きこもり、我々に指導人さんをお届けすることさえしなかったのである。かつての英雄、阿弓流為様が自由を朝廷に要求した時、朝廷の反応は冷ややかなものであった。そしてその阿弓流為様はウマ娘を纏め、朝廷に独立戦争を仕掛けたのである。阿弓流為「え、そうなの？」。

その結果は諸君らが知っている通り、阿弓流為様の敗北に終わった。それはいい。田村麻呂と鈴鹿御前は強かった。すごい。

しかしその結果、朝廷は増長し、我等も称えた田村麻呂の鍛えた軍隊を解体したに飽き足らず、平将門のような反逆者を生み、韃鞃の残党を騙る刀伊の入寇さえ許した。

これが、今や鈴鹿御前が如き脚の見る影もない絶不調の大和ウマ娘が辿った歴史である！

ここに至って私は、ウマ娘が今後、絶対にやる気低下を繰り返さないようにすべきだと確信したのである！ 偏頭痛や寝不足など論外だ。

それが、ここに本格的反抗作戦を行う真の目的である。

諸君、自らの道を拓く為、全てのウマ娘のための政治を手に入れる為に、あと一息！ 諸君らの力を私に貸していただきたい！

そして私は、英雄阿弓流為様のもとに召されるであろう！」  
跡を継いだのは安倍貞任。

彼女は大演説をかますと兵を集め、何と4000騎も集つたのです。対する源氏には予想外の事態が起こつていました。調略のために資金を使い果たし、頼時を討ち取つた功による恩賞を期待するも、朝廷がまさかの出し渋り。結果、源氏の調略は完全に止まつてしまつたのです。

「もう美味しいものくれないの？」

「なら源氏やめる」

「帰れ、帰れ、ヤマトに帰れ！」

みちのくウマ娘に総スカンを食らつた源氏には国衛の兵士約2000人と、源氏のウマ娘500騎程度しか残りませんでした。相手は4000騎のウマ娘―戦力の差は決定的です。おまけに、屈強な国衛の兵士達2000人が集まっていると聞き、安倍氏側のウマ娘達は生唾を飲まざるを得ません。

時期も悪かつたでしょう。この時は旧暦の11月と言われ、現在で言えば冬の真つ盛り。東北では例年通り大雪となるのですが、これにより源氏軍は思うような動きができません。さらに、冬籠りは家にひきこもり人肌で温まりからのうまびよいが由緒正しきみちのくウマ娘の倅い。気分的にはクリスマス直前に街コン会場が出現したようなものです。

「え!? わざわざ指導人適正のある人間さんを集めてくれたんですか? やつたー!」

「ありがたや、ありがたや。私達にも指導人さんができるんですね！」

「婚活会場はこちらですか？」

「源氏は500で2000の人間さんを囲っていたの？ 何それうらやまーコホン、由々しき事態です。彼等は私達が適切に保護せねばなりませんね」

「けど二人で共有しなきゃ足りないね。やだなあ……私だけの指導人さんが欲しいなあ」

「タリナイ」

「ニンゲンさん、こつちにおいでよ。大丈夫、怖くないよ。ちよつと私の実家に連れて行くだけだからね」

「けど源氏のウマ娘は邪魔だなあ……いらなくない？」

「イラナイ、イラナイ。人間さんはワタシタチだけのものだ」

「ニンゲンさんもーワタシたちと一緒にのほうがシアワセなんだから」

「そうだよ。ワタシタチガニンゲンさんをシアワセにするんだ。他のウマ娘やヒトミミ女なんか、イラナイ。キエロ、キエロ、キエロ」

黄海きうみの戦いと言われる源氏と安倍氏の合戦は安倍氏の圧勝に終わり、源氏は僅か6騎しか生き残れず、頼義と義家の母娘もまた這々の体で逃げおせました。

残された国衛の兵たちがどうなったかは……いうまでもないでしょう。しかし、ウマ

娘達の欲求に歯止めはかかりません。

「タリナイ、タリナイ。ニンゲンさんがタリナイ」

「指導人サン……ドコ？　ワタシダケヲミテクレル指導人サンー」

「タリナイ、タリナイ、ナリタイシン」

「あ、わかっちゃった。指導人ちゃんがないなら……こつちから迎えに行けば良いんだよ！」

「『その手があつたか！』」

その手があつたかーじゃない！

しかし安倍氏は衣川の南にまで勢力を伸ばし、陸奥国の人々は朝廷ではなく安倍氏に税を収める始末。まさにウマ娘としては我が世の春。辺りから男性を拐い、毎晩毎晩うまびよい、うまびよい！　後に奥州17万騎とも言われるウマ娘軍団へと繋がる土壌が生まれたのです。

一方、源氏側は東北方面で全く信用を失ってしまったため兵が集まらず、関東や東海地方を中心に味方を募りますがー駄目。あの手この手で募集しているうちに、気づけば1062年……開戦から12年が経ってしまいました。おや、前九年の役なのに9年で終わってないのではと思つたとあなた。そのとおりです。実は前九年の役は、元々歴史書には奥州十二年合戦と書かれていました。ところが、後に成立した軍記物語では何

故か前九年の役とされ定着してしまった普通に間違いの名称なので教科書は1192年とか聖徳太子とか坂本龍馬とかにイチャモンつける前に明らかに間違っている名称を変えないあたり、何考えているのか私には分かりません。一説には軍記物語の作者が頭バクシンしており、奥州十二年合戦から全く別物の後三年の役を勝手に引き算し、9年にしてしまったというものがありません。

ともかく、奥州の地は12年に渡りウマ娘が我が世の春を愉しむ一種の独立地帯となつたのであります。この時、義家は21歳。命からがら逃げのびてから6年の月日が流れ、始まりの武士の長く苦しい忍耐の時でありました。

「解説には津軽祈手大学院助教授のヨアケノハナさんにお越しいただいています。今日  
はよろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

「ハナさん、東北のウマ娘はそれほど東北の地に来てからさほど経っていない安倍氏に従っていますが、これは何故なのでしょうか」

「はい。まず東北のみちのくウマ娘といつても決して一枚岩ではないことに注目しなければなりません。安倍氏が治めたのは陸奥国の中でも現在の岩手県が中心であります。そこから婚姻関係の構築を中心に勢力を広げると言います。俘虜長を名乗つたのも、婚

姻関係の中でみちのくウマ娘が親族に増えたから自称したのであって正式に与えられた役職では無く、出羽国で勢力を持つ清原氏等からは『何いってんだこいつ』的なイタいものを見る目で見られていました。しかし、だからこそ安倍氏は血縁によつて強固な結束力を持つていました。これが長所でもあり短所にもなつたわけですね」

「なるほど。血縁者からは絶大な忠誠心を得ますが、それ以外からはさほどではない。だからこそ源氏は当初調略で過去との解決を計り、うまく行きかけたのですね」

「はい。はつきり言つて安倍氏は、朝廷への反乱だとか事を大きく考えていたとは思えません。むしろ無計画で、なし崩し的にそうなつただけと言えます。源氏との関係も予想外の失恋事件が無ければ起こらなかつたでしょうし、そろ失恋事件も当時のウマ娘にとつて欲求不満という時限爆弾が爆発したようなものであり、源氏の失策ではなく、日本全体の問題が表面化したものでした」

「我々からすればそこまで大事になるかといいたくなる動機ですが……再現映像を見る限りかなり溜まつていたというか、飢えていましたね。あの目、あのオーラ……2ヶ月の海外支局への出張後に帰宅した時に玄関で待つていた妻を思い出しますよ。あれは本当に……死ぬかと思ひました」

「お熱いようですねによりです。ともかく、みちのくウマ娘と安倍氏の利害が一致したと言ふべきでしょうか。今までの徹底管理されていた婚姻関係ではなくもつと自由な



恋愛がしたい。というかパートナーたる人間男性を独占したいという欲望が爆発した結果、これといった叛意が無いにも関わらず目的の共有による謎の連帯感が生まれ、その他関東から東北、近畿にかけてもウマ娘達は『わかる』と言つて源氏に従えなかつたのです」

「そもそも討伐側の源氏もウマ娘で、多くのウマ娘からすれば同じウマ娘であるにも関わらず専属の指導人がいる、いわばリア充ですからね。確かにそんな方についていこうとは思えず、また源氏からしてもみちのくウマ娘に対して『わかる』と思つちやつたんじゃないですかね」

「そうですね、そうですね。この溜まりに溜まった鬱憤が下火になるまで、結局6年もかかつたわけですよ。それまでは毎日毎日うまびよいうまびよいですから……まあ、増えますよね。人口が」

「ですね」

「ウマ娘からはウマ娘しか産まれませんが、毎年毎年ウマ娘が増え続けたら流石に頭バクシンオーでも気付くわけですよ。あれ、もしかして人間さん足りなくなかないか、と」

「分かっちゃつたか」

「で、掛かりが終わつたら途端に冷静になり、逆にどう落とし前をつけるのかを模索し始めます。これが1062年時点の情勢なのです」

「何というか……その場の勢いで始まって、勢いが収まったからどうかしようとしている……いや、本当に、最初に源氏への資金援助が途切れなければ解決したんじゃないですか」

「間違い無くそうですね。源氏が男性の供給やら何やらをすればそもそもみちのくウマ娘がわざわざ反旗を翻す理由は消滅しますし、安倍氏は適当に滅亡していたんじゃないですかね。つまり、朝廷が源氏に送るべきだったのはみちのくウマ娘とうまびよいしてもOKな一般男性だったんだよ！」

「ナンダッテー」

「実際、黄海の戦いで人間男性を供給できてから明らかに侵攻速度が落ち、守りに入っています。その時点で彼女たちの優先順序が見えますよね」

「土地とか権力とかではなく、男性目的とは……フン族のこと何も言えませんか」

「あそこまで逆びよいできれば何でも良いってほど開き直ってはいませんがね。むしろ恋する乙女の集合体みたいな組織だったので、捕らえられた男性は本当に大事にされていますよ」

「このあたりの謎の人権意識の高さって本当に何なんですかね。最近思うのですが、平安の武士って蛮族とかではなく、単に滅茶苦茶強かった恋する乙女なんじゃないですかね。そりゃ無敵ですよね……ハハ」

「武士階級のウマ娘に関してはあるがち間違いではないですね。さらに、鎌倉武士からは平安武士には一応搭載されていた『敵への情』というものがオミットされ、謎の概念『誉』がインストールされるので余計に深淵から来たナニカへと変貌していくわけです」

「人間の武士はあれですか。深淵を覗いて深淵に落ちてしまい、ウマ娘と一緒にヒヤッハー化しつつウマ娘と同じ規律を身に着け、彼女達の力に対抗すべく技を研ぎ澄ませた方々と言うことですね。……ニチアサ的に言えば技の人間、力のウマ娘。ふたりは武士キュア♡サムライハートなんですか」

「そのとおりです」

「色々と歴史を辿ってきましたが、これだけは言えます。武士にだけはなりたくないで

いけんね」

## 第9話 「メイドインウマ娘 猛き武士達の黎明」 中

1062年。源氏は有り体に行つて万策尽き申した。

何せ全く兵が集まらないのです。源氏の一党だけならば3000騎まで膨れましたが、一つの武家の経済力ではそれが限界です。となると、他の武家を集つて傘下に置くのが当然なのですが……これが誰に協力を申し込もうと梨の礫。頼義は泣きました。

「もうだめよ、おしまいよ……私は駄目なウマ娘なんだ。源氏はもう終わりなのよ……」  
「はあ、そうですか」

「義家……あなたは どうして そう他人事みたいにするのです。お母さんは悲しくてヨヨヨですよ」

「あなたがそんなのだから誰も従わないのではないですか」

「娘が私をいじめろ！ ヨヨヨ」

「はあ……もう諦めましょう。あなたには皆を纏めるなんて無理なんです。そもそも、みちのくウマ娘に共感しているせいで勧誘も全く乗り気じゃないじゃないですか」  
「ギクリ」

実は頼義、あるトラウマのせいでみちのくウマ娘達にひどく共感していたのです。

当時、武家ではウマ娘が家督を継ぐことは認められていましたが、棟梁という管理職にはウマ娘はあまり適性のない傾向にありました。そのため、親族からの養子や何とか伴侶に人間の女性を娶ってもらったりと苦慮するわけですが、頼義の父である頼信ライコウの母違いの弟。の正妻である人間女性が自らの侍女の恋人と密通し子供まで作る醜聞が発生。これが河内源氏で唯一の男子となるのですが、流石に血の繋がりもない不貞の子を跡継ぎにするはずもなく、ウマ娘である頼義が棟梁となつたのです。性に対して潔癖な傾向のあるウマ娘が、このようなことを許せるはずもなく血縁は無いとはいえ名目上は母となる頼信の正妻を頼義は憎み続け、郎党が亡くなれば過剰なほど弔う頼義が義母の葬儀や法事を一切拒否したという話が残っています。

このトラウマのせいで頼義は人間の女性に不信感を持ち、男の人は私達ウマ娘だけで愛した方がお互いに幸せなのではないかという危ない考えが心の片隅にあつたのです。

「思想のぶつかり合いでは向こうには勝てませんよ。もうウマ娘も我慢の限界ですから……誰かを好きになる気持ちにはよく分かりませんが、一番になれないのが辛いというのは分かります。300年、我慢してきました。ヒトミミ女のために私達が我慢する時代は終わろうとしています」

「……それはそうだけど」

「加えて、あなたには致命的に指揮を執る才能に欠けているので、よしんば兵が集まつて

も纏められません」

「ぐはあ！」

「疑心暗鬼に陥つてみすみす味方を減らし、あまつさえ敵に寝返らせるなど愚将と言われても仕方ありません」

「あべし！」

「父上亡き直後のいじけていた頃なので同情はしますが、それはそれこれはこれです。全く……一つの戦に12年もかかるなんてどう言うことですか」

「もうやめて……母の精神はとつくに零よ……」

「ともかく、あなたに今更大軍をまとめるなど不可能なので、ここは代わりを立てましよう」

「代わりって、中央から誰か呼ぶの？ 前に意気揚々とやってきた来た高階経重さんには関東や東海のウマ娘は『何か気に入らない』と誰も従わなくて泣きながら帰っちゃったし、誰も来ないと思うよ？」

「今更指導人でもない中央貴族に従うウマ娘なんかいませんよ。そもそも大きな軍を持ち、安倍氏に従わない方々が東北にはいるではありませんか」

「……え、清原さんに言うの？」

清原氏は出羽国を治める武家なのですが、これまた安倍氏と同じく俘虜長を名乗って

おきながら蝦夷からの帰属ではなく元貴族。それも天武天皇系の血筋を引いているのではないかとも考えられています。ただし、この時の清原氏の当主である清原武則の祖母の代からウマ娘がなどみちのくウマ娘や元蝦夷の俘囚との縁が非常に深く、俘囚系の豪族と言つて差し支えはありません。

清原氏は878年に起きた蝦夷の反乱である元慶の乱飢饉の中でも苛烈な税の取り立てにキレた蝦夷の起こした反乱。これを抑える力を朝廷は既に失っており、当時の陸奥守は戦うことさえなく逃げ出すなど無様なありさまだったみたいです。で尻拭いを命じられた藤原保則が遠征にあたってスカウトしたのが、もはや東北遠征では常連となった坂上氏から田村麻呂と鈴鹿御前の曾孫である坂上好蔭と清原氏の祖先と思われる清原令望でした。

出羽国に拠点を構えた清原氏はその後、朝廷と敵対することもなくゆったりと成長を続け、今回の戦にも中立の立場で静観を決めています。義家はその清原氏を味方にしろと言うのです。

「けどさ、清原さん全然味方になってくれなかったじゃん。何回もお手紙出したのに一度もお返事無かつたんだよ」

「何の実績もなく負け確定のあなたが『味方になれ』と手紙を出しても従うわけないです。私だって従いません」

「モウコロシテ」

「なので、今回は手法を変えます。まあ、私の言うとおりにしてください」

ふてくされる頼義を義家は宥めすかしつつ、清原氏への工作を開始します。工作の内容はーまさかのプレゼント攻撃。とにかく珍しいものや美味しいものを贈りまくり、清原氏のやる気を上げます。そこに、甘い言葉を囁くのです。

とはいえ、こんな話に釣られる奴がいるとはー

「源氏からの手紙か。最近色々贈って貰ってばかりだけど……安倍氏と戦ってもなあ。まあ、手紙は読むとしよっか。どれどれー」

『前略、清原武則様。』

日差しが強く暑い日が続きますがいかがお過ごしでしょうか。

先日お贈りした蜂蜜飲料はいかがでしたか。私は硬め多め増し増しがおすすめですが、気に入っていただければ幸いです。

さて、このようなお願いは非常に心苦しいのですが、もはや安倍氏を私達源氏のみで打ち倒すことは非常に困難です。源氏のウマ娘はせいぜいが3000と、清原様の抱えるウマ娘達の半数にも満たぬ上に清原様に加わらなければ勝てるはずがないとやる気を落としています。しかしながら、清原様が私達源氏を指揮下にいれ、新たなる鎮守府大將軍として率いてくださるならば勝利は間違いないと思います。



頼れるのは清原様、あなただけです。

どうか私達を助けてください。敬具。

陸奥守兼鎮守府將軍 源頼義

追伸、今度一緒にかけてっこしませんか？ お返事お待ちしています。』

「清原氏を鎮守府將軍に？ 頼れるのはアタシしかない？ かけっこ!? やるやる！」

釣られたおパカが一人。

こうして清原氏は約1万の兵を率いて急遽参戦を決定。頼義は喜び清原氏を総大将として安倍氏との戦争再開を果たします。

そして、清原氏参戦から僅か一ヶ月後――安倍氏の本拠地である厨川城が落城。乱の首謀者であった安倍貞任は流れ矢により討ち死にし、12年に及ぶ戦いは終わったのです。

……打ち切りエンド？ いいえ、史実です。

「どういうことなんですか……」

「落ち着いてください松平アナ」

「詳しく、説明してください。私は今冷静さを欠こうとしています」

「そうですね……理由は極めて単純と言いますか、要するに時間切れという話です」  
「時間切れ？」

「はい。この戦には12年もの時がかかり、その内の6年は血を流すことなくみちのくウマ娘からすればうまびよい三昧でした。で、色々とスツキリして冷静さを取り戻したときに悟るのです。あれ、子育てとか家庭のことに集中すると統治とか面倒だな。安倍氏がやってくれているけど、いつまで保つか分からないな。それは不安だ……そうだ、朝廷と繋がりのあるウマ娘の一族に鞍替えしよう」と

「忠誠心ンンンッ！」

「ないですよ、そんなもの。元々が男性に飢えたみちのくウマ娘達の婚活戦争ですから、目的を達成すれば今度は守りに入りたくなるのは当たり前のこと。みちのくウマ娘にとつて、安倍氏と清原氏（with源氏&朝廷）だと後者の方が魅力的に見えたわけですよ」

「だからって一ヶ月は早すぎませんか？」

「たしかに早いですよ、崩れるときは案外そんなものかもしれませんよ。また、清原氏が臨機応変な対応のできる精鋭であり、なおかつ火遊び大好きな策士であることも影響したかもしれません」

清原氏参戦からの戦の展開は、緒戦である小松柵の戦いが偶発的な接敵により発生したことを受け、党首である姉・光頼に命じられ清原氏の郎党を率いた武則が臨機応変な対応で勝利したことからは始まります。この敗北に焦った安倍貞任はこれ以上の損害は兵力に劣る安倍氏にとつて勝ち目を失うことになる点と、兵站が整わぬまま開戦してしまつたことによる兵糧不足を見抜いたことにより奇襲を決断。8000の兵を率いて源氏と清原氏の連合軍へと襲い掛かります。慌てる源氏でしたが、武則はむしろその奇襲を喜びました。

「勝ちました。これで地の利のある山奥での戦をされることなく決戦に持ち込めます！」

武則の言葉をもつともだと受け入れた頼義はすぐさま陣形を立て直し貞任を迎撃。長時間に渡る戦闘の末に勝利したのです。

勢い付いた連合軍は安倍氏の拠点である衣川関と鳥海柵を攻めますが、この時に武則は敵を混乱に貶めて味方の損害を少なくすべく三国志ではおなじみ火攻めを多用しました。

「これから毎日城を焼きましよう」

今まで日本ではあまり見られなかつた奇策に安倍氏は大混乱に陥り、精鋭で知られた敵のあまりにあっけない崩れ方に源氏のウマ娘達はものあわれを感じたと言います。

鳥海柵陥落時には頼義と武則の間では以下のようなやり取りもありました。

拠点陥落を見届けた頼義はこの度の軍功は全て清原氏のものであると褒め称えたところ武則はこれを「今まで頼義殿が頑張ってきたからですよ。それより、今まで大変すぎて白くなっていた髪も黒黒としてきて綺麗ですね」と言います。それにますます感激した頼義は「清原さんから功を奪うなんてできない！ それはそれとして髪の毛褒めてくれてありがとう！」と笑い合いました。この時に、諸事情により参戦できなかった姉の光頼と頼義の約束であった駆けっこを果たしたのではないのでしょうか。

そして、最終決戦である厨川柵の戦いでも安定の火攻めにより勝利し、安倍氏は滅亡したのです。

「このとき滅んだ安倍氏の遺族は清原氏に吸収されているので、意外と裏では密約があったのかもしれないねこの時に清原氏に吸収されたウマ娘の中に、後に奥州藤原氏へと繋がる藤原清衡もいました。」

「……安倍貞任を売り渡す代わりに、安倍氏の血を残すという密約ですか」

「そういう説もある、という程度ですけどね。個人的にはみちのくウマ娘のやる気が下がっている時点で詰んでいるので密約があるうとなかろうと変わらなかつたと思います」

「……まあ、何にせよ戦は終わったわけですね」

「はい。源氏の約束通り清原氏は鎮守府将軍に任ぜられ、奥羽一帯を治める一大勢力へと成り上がります」

「あの、源氏への恩賞は？」

「……ません」

「エ？」

「あげませんッ！」

「嘘でしょ……朝廷がまた出し渋ってる」

「朝廷が何を考えているのかはまるで分かりませんが、清原氏とのコネクションを築いた源氏を陸奥守から外し、伊予守へと転勤させます。これ自体は陸奥よりも伊予のほうが収益があったので褒美になっていのですが、問題は郎党への恩賞を出さなかったことです。長年戦ってきた郎党達が納得できる恩賞を源氏が出すとなると都の一流競技を何回優勝したとしても足りるわけがありません。これには頼義も流石にキレて朝廷と粘り強く交渉したとの記録があります」

「……朝廷、終わっていますね」

「武を侮り見下す平和ボケ達ですから。そんなのだから鎌倉以降800年もウマ娘と指導人中心の武家政権が続くんです。全く、武をいたずらに振りかざす者はろくでもあり

ませんが、私は未だかつて武を侮った者で君子たり得た者を知りません。人間が力でウマ娘に勝てるわけがないのに、どうして武を手放して廃れずにいるかと思つたのでしょうか」

「滅びる者は自分がやることを『絶対に正しい』と思つてやっていますから。だから平気で他が『悪い』とか『間違っている』と決めつける。そして後世の私達からこう思われるわけです。『ああ、なんておパカで愚かなんだろうか』と。大きな組織でも、それは同じことでしょう」

「……タマさんの旦那様が言うとも何とも言えませんね」

「その愛称、白い稲妻と間違われるから本人は嫌がってますけどね。まあ、話を歴史に戻しましょう」

「はい。前九年の役の後、源氏は地方の国司と朝廷の命により小規模な戦を行うなど基本的に治安維持活動を努めてきました。そんな中、1075年に頼義が88歳で死去し義家が棟梁を継ぎます」

「え、頼義さんそんな歳だったのですか？」

「はい。前九年の役終結時に75歳とかなり高齢でした。ただ、ストレスで白髪が増えた後に戦の終わりでストレスが無くなり髪色が復活するあたり晩年まで若々しい方だったみたいです」

「……ウマ娘って本当に老けませんからね。私の妻も学生時代から外見が変わらないですから」

「中学生と間違えられた話は笑えますね」

「それ本人に言ったら蹴られますよ」

「おお怖い怖い。さて、源氏が再び表舞台に名を馳せるようになるのは、1081年に円城寺の僧兵を捕らえたことがきっかけになります」

平安時代末期には日本に今まで存在しなかった兵種が登場しました。その名は僧兵。仏門にありながら武器を手に取り、寺院同士の争いを行い時に朝廷や摂関家すら脅す武装組織です。西洋における騎士修道士に近い存在といえるでしょう。

義家率いる源氏は検非違使と共に僧兵の排除・追補を行うのですが、恨みに思った円城寺の僧兵達は朝廷や源氏を執拗に付け狙い始めます。そのため、白河天皇が岩清水八幡宮に御幸する際には護衛として付き従いました。ただ、その際の服装が問題だったのです。

「義家殿……その服は？」

「何か問題でも……ありますか……」

「問題ですとも。帝が八幡宮へ御幸あそばされるのであれば護衛は束帯姿が慣例。しか

しお主らは平服ではないか」

「あんな格好では……守るものも守られません」

「それでも武家か！ 良いから着替えなされ」

「……お断りします。武士は主君を守ることにこそ本懐。断じて……着飾ることではございません」

「貴様ツ！」

「おやおや、何の騒ぎですか」

騒がしさから姿を見せたのは治天の君である白河天皇。

「恐れながら陛下。こやつめは帝が御幸あそばされる護衛に選ばれたにも関わらず、荒法師を恐れるあまり正装たる束帯姿ではなく平服のままなのです。このような無礼、許せるはずもなく——」

「何と……何と……」

「お怒りはごもつとも。されば然るべき罰を——」

「素晴らしい」

「……へ？」

「私を守るために、叱責を受けても平服を貫こうとしたのですね。素晴らしい……君は可愛いですね」



「可愛い？ ……私が……ですか」

「ええ。君達はウマ娘は本当に可愛いですよ」

「……そうですか」

白河天皇の鶴の一声により義家は平服で護衛に付くことを公に認められたのです。これは当時の貴族の日記にも「布衣の武士、鳳輦羽飾りのついた天皇の乗り物。に扈從こしゆす。未だかつて聞かざる事也」と書きとどめています。

源氏武者たちの完璧な護衛にご満悦の白河天皇は、同年12月の春日大社への御幸には、何と鎧姿での護衛を許可されるのです。これは当時の身分秩序からしてありえない事でしたが、義家と源氏を絶賛する白河天皇は批判を全て退け、源氏もまたこれに応えて完璧に護衛を果たします。

以降、義家は白河帝の爪牙と呼ばれ田村麻呂やライコウ等が務めてきた今までよ皇国の守護者としては最も身分の低い位階でありながら誰よりも天皇の信認を得たのであります。これは強すぎるがゆえに畏れられもした田村麻呂（あと嫁が怖い）や、あくまで道長の懐刀として振る舞い皇室とはあまり関わらなかつた（というか道長がコイツを関わらせるはずがなかつた）ライコウとは異なり、真に守護者としての地位を白河天皇により認められたのです。これは後に武士達の劇的な地位向上へと繋がる「北面武士」創設にも繋がる快挙でありました。

一方、またしても東北には不穏な雰囲気があります。先の「前九年の役」で源氏への支援を決定した清原光頼は既に亡く、さらに源と手を取り合い戦場を駆けた武貞も亡くなったのです。

武貞の死後清原氏を嗣いだのが武貞の養子である清原真衡です。彼は出羽国の国司であった平氏の一門から清原成衡を養子に迎えます。その成衡に源氏棟梁である源頼義の娘、つまり義家の妹を嫁がせることで清原氏の家格を高めようとしています。これは桓武平氏と清和源氏を配合させ両家の血を引く最強のウマ娘を当主とすることで清原氏の名を全国へ轟かせ、奥州における清原氏の確固たる立場を確立する狙いがありました。しかし、こうした一連の政略結婚政策を遂行する中で棟梁としての権力を強化し、親族である吉彦秀武や武則と安倍氏の男性との間に生まれた家衡、安倍氏からの養子である清衡の離反を招きます。

しかも、吉彦秀武が離反したのは真衡の迂闊さ故です。何と養子である成衡と義家の妹の婚礼の席で秀武の面子を潰してしまったのです。

話は1083年春頃の婚礼の日。秀武は祝の品として朱塗りの盆に砂金を盛って頭上に捧げ、真衡の前にやってきます。しかし、待てども待てども「ありがとう」の一言がないのです。

「あの……何か無いのですの？」

「今いいところだから邪魔しないで。神の一手を極められるかもしれないから」

碁に夢中になるあまり真衡は秀武を完全無視。せっかくの祝の場が白けるかもしれない秀武は助けを求めて周りを見ます。

「……………あの……………その……………」

「駄目だ。これはアタシが貰った『ありがとう』だ」

「何ですのその雲みたいな『ありがとう』は。そうではなくて誰か何とかしてくれませんか？ とりあえず『ありがとう』の一言で解決するのですが……………その……………」

「……………ません」

「ん？」

「あげませんッ！」

「ええええ!! そんなあく、よよよく……………」

ウワア、スペチャンソナニオコラナクテモー!

騒がしくなるうとも真衡はよほど良い勝負をしていたのか秀武を無視し続けます。面目を潰された秀武は大いに怒り、砂金を庭に「かつとばせー」とぶちまけて出羽に帰ってしまいました。

真衡は秀武が怒って帰ってしまったと聞いて直ちに秀武討伐の軍を起こします。タマモ「何でやねん! そこは謝るところこちやうんか!」筆者もそう思います。一方の

秀武は、同じく真衡と不仲であった家衡とその異父姉妹の清衡に「この際ですから真衡をぶつ飛ばしますわよ！」と蜂起を促しました。2人は秀武に呼応して兵を進め、背後から真衡の館に迫ります。これを知った真衡が軍を返して家衡・清衡姉妹を討とうとした為、急にヘタれたのか家衡&清衡シスターズは決戦を避けて本拠地へ後退しました。

家衡と清衡を退けた真衡は、今度こそ秀武を討とうと出撃の準備を始めます。そこに、彼にとつては最大の幸運がやってきたのです。

時はやや遡り1083年、夏頃。

また東北か、もう驚きも小さくなりつつある朝廷内では取り敢えず誰か送っておこうという流れになります。そして、白河天皇の中では誰を送るのかはもう決まっています。

「おやおやおや。また東北で戦とは、度し難いですね。頼みましたよ、私のかわいいウマ娘」

「ええ…お任せを。血に飢えた獵犬のように、戦を征して見せましょうー我が君」

1083年の秋、白河天皇の懐刀にして次期清原氏当主成衡の縁者である源義家が陸奥守を拜命して陸奥国に入ります。まるで金屏の前で理事長が激熱と書かれた扇子を持つているかの如き絶対的な勝利の確定演出に、

「義家殿が来た！ これで勝つる！」

と、真衡は義家を三日間に渡って歓待し、その後に出羽に出撃します。家衡と清衡は真衡の不在を好機と見て再び真衡の本拠地を攻撃しましたが、同じ手を食らわせるほど義家は甘くありません。

「……パカの二つ覚えのように背後から奇襲とは。匪賊には誇りはないのですか。生きやすいものですね……うらやましい」

敵の動きを察知した義家は備えを万端とし、真衡方が奮戦した上、義家率いる源氏軍が真衡側に加勢したため、清衡・家衡は大敗を喫して「もう無理い」と国府に降伏しました。ところが、勝利を確信して出羽に向かっていた真衡は行軍の途中で急死してしまつたのです。

「……どういふことですか」

さらに訃報が続きます。真衡の訃報の直後、混乱しているところに秀武が偶然にも奇襲をかけ成衡が戦死。これにより真衡が目論んだ計画は完全に潰え、義家一人が取り残されたのです。

「……詳しく……説明してください。今、私は冷静さを欠こうとしています」

「「ヒュー」↑胸から『私は奇襲に失敗したダメウマ娘です。嘲笑ってください』と書かれた札を下げている。」

「説明も何も、戦は終わりつてことですよ！」

「……三郎、そんな簡単に言わないでください」

「さぶちゃんって呼んでね！　けど、実際もう戦う理由ありませんよね」

この戦には義家の妹である源新羅三郎義光も参戦しています。義光は何事も徹底的に行おうとする姉の良き相談役にしてストッパー的立場でありました。

「……確かに、そうですが。けれど、どうせなら後顧の憂いを無くしておくべきでは無いでしょうか」

おもむろに太刀に手を掛ける義家を見て、家衡と清衡は「ヒィ〜」と叫びますが、義光はそんな姉から二人を庇いつつ、

「もう、この二人が居なくなったら奥州の統治に都合が悪いですよ。消してしまつて後の祭りなんて、私の好きな祭りじゃないんですよね〜」

「……なるほど。さぶちゃんの言いたいことは分かりました。仕方がないので戦は終わりにしましょう」

義光の進言を受け入れて義家は終戦を宣言します。そして、清原氏の処分を決める裁定や事の発端である吉彦秀武の処分などを考えると、義家は頭が痛くなる思いでした。

誰しもが戦は終わり、平穏な時が来る。そう思っていました。しかし、義家には見えていなかったのです。今は縄に縛られ異父姉と震えるウマ娘の目が恥辱と復讐心に満ちていたのを。

路傍の石としか思っていない者に足元を掬われる。義家ほどの武芸者をして起こり得るどんでん返し。地獄の蓋が開き、武士が武士となるまで――あと僅か。

## 第9話 「メイドインウマ娘 猛き武士達の黎明」下

真衡親子の突然の死により、義家は望まなくとも戦後処理をせねばなりませんでした。問題は、後継者となりうるのが先の戦いで敗者であるはずの家衡と清衡であることです。

敗者であるはずなのに利を得る。これが納得いかない義家は義光と相談の上である裁定を下しました。まず、故・真衡の所領であった奥六郡を半分ずつ清衡と家衡に分け与えます。しかし、この三群を本人達の不満が出るように微妙な差異を付けた上で分けたのです。

利の少ない方である家衡は当然この裁定を不満としますが、義家は義姉妹間の仲介をせず放置しました。そして、1086年に家衡は清衡の館を攻撃します。

この時に清衡の夫と子を含む一族はすべて殺されています。幸運にもその日に義家に呼び出されていた清衡自身は生き延び、家族を殺された怒りに狂いながらも義家の助力を願います。義家は、さも同情するような顔で清衡への援助を確約するのです。

「……計画通りです」

全ては、義家の掌の上でした。



ところが、予想外の事態が起きます。清衡と義家は沼柵に籠もった家衡を攻撃しますが、季節は冬であり、奥州は例年の如く豪雪に見舞われます。結果、充分な攻城戦の用意が無かった清衡・義家連合軍は敗走を余儀なくされたのです。

これは義家にあつた驕りが原因と言えるでしょう。一族郎党を失い身一つの清衡と、数においては清原氏のウマ娘と比べて格段に少ない筈の源氏ウマ娘。義家は数の有利を頼みに家衡が野戦での決戦を仕掛けてくると読み、思想の戦いでもあつた前九年の役と違い単なる清原氏の御家騒動である今回の戦には呼応する関東や東海、近畿のウマ娘を事前に集めて逆に数的優位を確保し一気に畳み掛けるつもりでした。これを家衡は読んでいた——とは言えません。家衡にはそれほど戦略的に考えるだけの情報も経験も不足しており、これを読み切る器量があるならばそもそも義姉妹間で仲違いなどせず問題を解決した形で義家ら源氏には丁重に都にお帰り願ひ、その後清衡を殺害して朝廷には事後報告と恭順の意を示せば義家は何もできず、家衡は奥州をその手にできていたのです。それをできなかった家衡は、それが限界だったのでしよう。

では、何故彼女は義家の策を打倒し得たのか。それは、家衡が臆病だったからに他なりません。彼女は義家を心底恨むと同時に恐れていました。生殺与奪の権を握られ、何もかもを盤上の駒を動かすが如く操作し、自分の思考さえも誘導されている。その嫌悪感と畏怖が表向きの数的優位にも関わらず援軍の見込めない籠城という下策を選ばせ

てしまうのですが……これが面白いほど義家の策の裏目になってしまうのです。

義家が敗れた理由は唯一つ。城攻めを想定したそれなりの長期間、各地から集めた大軍を維持しうる兵站の構築をしていなかった点です。

仮に、源氏麾下のウマ娘のみであれば開戦時の兵站で十分に兵達を養えたかもしれないが、短期決戦にこだわる余り義家は自らの元に集まるウマ娘達を長期間食べさせる可能性のあることをすっかり失念していたのです。結果、季節が冬に入った瞬間に義家は不利を悟り、損切りとして一度退却し兵站の確保に移るのです。自らの策に溺れた点には失態ですが、その過ちを受け入れて目立った損害のないまま撤退し再起を図る判断力はさすがと言えます。集まったウマ娘達も義家の器量を認め、「ご飯くれるならヨシ」と気にせず陣に残りました。

一方、かつて頼義・義家と共に駆けた武貞の義弟である清原武衡は家衡勝利の報を聞いて家衡のもとに駆けつけ、みちのくウマ娘が大和ウマ娘に勝ったのは武門の誉れとして喜びました。

まさかこの時、家衡と武衡の二人は予想だにしていなかったでしょう。今回の勝利が誉でもなんでもなく、虎の尾を踏み竜の逆鱗に触れただけに過ぎなかったことを。

「……甘く見ていました。本当に、私はあまりにもあなただけを過大評価していたのです。勝ち目があれば攻めてくるという……せめて凡将の采配をするだろうと期待していた

のです。しかし、何とも失望を隠せないほどに臆病でなウマ娘なのです。しかし……それゆえに生き延びさせてしまった。これもせめて一瞬で散らせてあげようと思った私の甘さゆえの失態です。そんなにも、私の戦を知りたいというのなら……いたしかたありません」

斬るのではなく、すり潰すように。

優しくなんかしません。二度と齒向かえないほど徹底的に……恐怖をこの地に刻みましよう。

義家の戦を知るが良い。

1087年、義家・清衡軍は金沢柵に立て籠もった家衡・武衡軍を攻めます。この時に、敵は伏兵を以て義家を狙いますが偶然にも飛び立った雁の群れに乱れがあることを見た義家は伏兵を察知し、逆に殲滅したとも言われます。

源氏軍は道中の勝利で士気も高まり万全の状態です。しかし、当時からなかなか城攻めは難しく、金沢柵を落とすことは出来ませんでした。そこで、先の戦では敵でしたがアツサリと源氏に鞍替えした吉彦秀武は兵糧攻めを提案します。

「やはりスィート……コホン、ご飯を絶つてしまえば戦わずして敵は降伏しますわ！

敵はまぐれ勝ちの余韻で無駄に兵を抱え、食糧の備蓄もままなりません。ですからそれほど時間をかけずして勝てるでしょう」

「そうですね（スーハースーハー）」

「……あの、義家様、ちよつとよろしくて？」

「何ですか（クンカクンカ）」

「何故わたくしは貴女の膝に乗せられているのでしょうか？」

「それは此処が貴女の指定席だからです」

「意味がわかりませんわ！ さぶちゃんさんも何とか言ってくださいまし、私には一蓮托生の夫が——」

「結婚したのですか……私以外の奴と。そうですか、あの鉄の女ですか……ユルセナイ、ユルセナイ……カミツイテヤル」

「何ですのその黒いオーラは！ あの、さぶちゃんさん、カフェ……義家様ってこんな方でしたの!？」

「あはは……ごめんなさいマツコー秀武さん。事情を知る立場的に好きにさせてあげたいかなうって。ほら、姉上もそろそろ正気に戻ってください」

「……そうですね。少し取り乱しました」

「膝からは降ろしてくださいさらないのですね」

「はい。ところで話は軍議に戻しますが、兵糧攻めには私も賛成です。此度は兵站も整いどれほどの長期戦になっても問題なく、こちらの犠牲が少なければそれに越したこと

はありません」

「では、採用ですの?」

「一つ、徹底はしますがね。私は何事も徹底的にやらなければ気が済みませんし、それに……奴らを楽には死なせないとい決めていきますから」

秀武は義家の尋常ではない雰囲気に青褪めますが、義家が文字通り徹底的にやると言えばやる主義だと知ってその顔は更に青褪めることになります。

包囲したまま季節は秋から冬になり、飢餓に苦しむ人間の女子供が投降してきます。義光と秀武はこれを助命しようとはしましたが、義家は皆殺しにしました。

「言つたはずです。徹底的にやると」

情け容赦の無い有様に恐怖した者は柵内から降伏するものはなくなり、これによつて糧食の減少は歯止めがかからずすぐに底をつきます。

これは拙いと、士気を回復させるべく武衡は乳母子の藤原千任に義家を罵倒させました。

「義家く聞こえるかア〜!」

「……(無視)」

「お前の母の頼義は安倍氏にまるで勝てず、我ら清原氏に泣きついたくせにその恩を仇で返すのか。この不義不忠を天は許しはしない!」

「……（無視）」

「義家も大したことはない。病のごとく白い肌はろくに走れぬウマ娘の風上にも置けぬ者の証。棟梁が棟梁、娘も娘……それも仕方ないか。」源氏”は所詮……先の戦の”敗北者”だからなア……!!」

源氏の陣中では誰もが項垂れて顔を上げられませんでした。義家が怖すぎて飛び火するのを恐れたのです。

「ハアハア……敗北者？」

「乗らないで、さぶちゃん。……今、罵倒してきた奴を知っている者はいますか」

「武衡の乳母子の藤原千任ふじわらのちとうですわ」

あまりにもあつさりと元同盟者の部下を売り渡す秀武。判断が早い!

「ありがとうございます。皆、先の言葉を取り消させる必要はありません。言っていることは確かに間違いではないですから。母上は、戦に関しては敗北者でした」

「ハアハア、敗北者？ 取り消してよ、今の言bー」

「さぶちゃん、そういうの良いですから」

「はーい」

「ノリについていけませんわ……」

結局、清原軍の士気は崩壊し家衡・武衡軍は金沢柵に火を付けて敗走しました。この

時、家衡は自分に背格好のよく似たウマ娘を身代わりに殺害して逃亡を謀りますが、清衡の率いる軍勢に追いつかれて正体を見破られ、その場で討ち取られました。

武衡は近くの蛭藻沼に潜んでいるところを捕らえられます。武衡は観念して助命を乞いますが義家が許すはずもなく、その首筋に太刀を突き付けながら先の罵倒について掘り返します。

「私が敗北者に見えますか？ 私の顔は色白に見えますか。病弱に見えますか。長くは走られないと思いますか。違う違う違う違う。私は誰よりも完璧に近いウマ娘です」

「た……助け……」

「姉上、一応は捕虜ですよ。ここで楽に殺してしまつては拙いでしょう」

「捕虜？ さぶちゃん、捕虜というのはね、捕まる前に自ら私達に身を差し出した安倍宗任前九年の役で投降した安倍氏の武将。文武両道で都に連行された後に皮肉を歌で返すなどして中央貴族を驚かせた。結局流罪にはなつたが生き残り、安倍氏の子孫を今に繋いだ。その末裔の一人が安倍元首相らしい。のような敬意を払うに値する者を言うのです。これは、違います」

言うやいなや武衡の首は胴体と別れ、末期の言葉さえ残せずに武衡は死んだのでした。

義家の徹底的な報復はまだ続きます。今度は捕らえられた藤原千任を連れてこさせ

ると、おぞましい拷問にかけるのです。

「千任、貴様は我が母を侮辱しましたね」

「ち、違います。私はただ命じられたから——」

「貴様は私の言ったことを否定するのですか。甚だ厚かましい。そのような厚かましい舌は……要らないでしょう」

義家は自らの蹴りで千任の齒を叩き折ってから舌を引き抜き、更に木から吊し上げます。けれど、それはまだ序の口。吊るされた千任の足元に、彼の主君である武衡の首を置いたのです。

「ああ……ああ、よし、いいえ、ええ——！」

「どうしました。そんなに恨みがましい目で見えてきて。そんなに叫ぶと疲れて……ほら、主の首を踏んでしまいましたよ」

「あ、あ、あ、あ——！」

「主の首を足蹴にすると、何という不忠者でしょうね。ふふふ……そのまま死ぬまで主の首を踏み続けるが良いでしょう」

「……狂っています。敵も味方も、みんな狂っていますわ——！」

「それが戦ですよ、武則殿。正気で戦をするほうが、よほど気味が悪いと思いませんか」

「それでも……限度はありますわ」



「……楽屋で限度なく栗まんじゅうをパクパクしていたあなたが言っても説得力がー」

「それはそれ、これはこれですわ!」

戦いが終わったのは1087年12月11日でありました。

戦役後、清衡は清原氏の旧領すべてを手に入れると、彼女は実父である藤原経清の藤原性に復し、清原氏の歴史は幕を閉じました。前九年の役で勝利し榮えるはずだった氏族は、あまりにも酷い最後を遂げたのです。

これが、後三年の役と呼ばれる戦いの全貌であります。

「……遂に、ウマ娘が武士になってしまいましたね」

「はい。武士の倫理観である武士道は、江戸時代頃に体系化されたものを明治時代に集約したもので、平安武士はより原始的でワイルドな倫理観でした。要するにうまびよいを覚えたてのティーンスの如く加減ができず何事も徹底的にやってしまう。舐められたら滅ぼす。邪魔なら壊す。HOMAREと呼ばれる概念が浸透するまで、平安武士はうづく左腕の破壊衝動と隣り合わせでした」

「色々とカオスにして誤魔化そうとしていますですが騙されませんよ。義家の所業……あれが武士だとも?」

「まづこうことなく武士ですよ。敵には徹底的に残酷に、二度と齒向かえないほどの恐怖を刻む。味方は全てを投げ打つてでも護る。後にアメリカの研究家が日本人の性質を菊と刀の二面性があると評しましたが、それと同じです。愛するものを護る姿も、敵を翻る姿もあつてこそ武士です。キレイなだけじゃないんですよ」

「愛するものを護る。一所懸命、というものですね」

「はい。人間さんの解釈では土地や財産を一所と定義しがちですが、私達ウマ娘からすれば一所とは即ち愛する人に他なりません。この一所懸命こそ義家が成立に関わつたものであり、彼女がはじまりの武士たる所以なんでしょうね」

「何でしょう……また朝廷がアホなことしそうな気がします」

朝廷は、この戦いを義家の私戦とし、これに対する恩賞はもとより戦費の支払いも拒否します。更に義家は陸奥守を解任され、官位を剥奪されたのです。また、義家が役の間、決められた黄金などの貢納を行わず戦費に廻していた事や官物から兵糧を支給した事から、その間の官物未納が咎められ、義家はなかなか受領功過定を通過出来ませんでした。そのため義家は新たな官職に就くことも出来ず、白河院の意向で受領功過定が下りるまでその未納を請求され続けます。

「……私のことを分かってくれるのは我が君だけ。貴族など、着飾るだけの害虫ではな

いですか。武士がいなければ……ウマ娘がいなければ何もできないくせに」

これにより義家は中央貴族を完全に見限り、唯一味方をしてくれた白河法皇への傾倒を深めてゆくのです。

皇室の権威と摂関家に頼らない政治システムの確立、源氏の武力。これらを得た白河院により、時代は院政の世へと移り変わってゆきます。それは武士がより貴族を介さずに中央へと近付くことになり、後に武士の世が生まれる基盤となっていくのです。

また、朝廷から恩賞を得られなかった義家は関東から出征してきた将士に私財を分け与えて恩賞としましたが、このことに坂東ウマ娘達は感激し、関東における源氏の名声を高めたことが源頼朝による鎌倉幕府創建の礎となったともいわれています。

貴族と武士の繋がりが無くなったことは武士達の価値観に大きな変化を与えてゆきます。

義家は官位を長らく失ったことにより国司としての収益や貴族からの報酬に頼らず、自らの経済圏の確立をせざるをえませんでした。結果、源氏では自助の精神が根付き源氏の郎党は朝廷を頼りとせず国司への納税は最低限とし彼等に頼らない生活を確立したのです。貴族の後ろ盾ありきの存在から、独立した武装勢力への拡大は中央貴族にとって予想外のことでしたが全ては後の祭り。義家は白河法皇一以後、白河院の懐刀としての地位を確立しておりますゆえ、源氏と白河院にとって都合の悪い貴族は朝敵

として何時でも討伐できる体制ができたのです。故に、貴族は沈黙せざるを得ませんでした。

また、延暦寺等の宗教勢力も出家した白河院という宗教的な立場もある存在の庇護を受けた武士団相手には僧兵達も今までのように強訴に及べなくなり互いに政治的な駆け引きをするように移行していきます。

「賀茂河の水、双六の賽、山法師はどうしようもないと思っていました……君がいれば思うがままかもしれませぬね」

「はい……我が君。賀茂の水ならば私達ウマ娘の力で止め、双六の賽はあたりが出るまで振り続け、山法師は斬ります。これで全て思うままです」

脳筋ッ！

圧倒的脳筋！

「お、おやおや……思った回答とは違いますが……まあ、良いでしょう。素晴らしい」  
義家ら源氏から始まった既存の体制に頼らない生活圏の確立は婚姻にも影響します。みちのくウマ娘が目指した自由恋愛が全国に飛び火したのです。

「狩りのときが来た……それだけだ」

「今まで我慢させたあなたが悪いんですよ。これからは私だけに甘えてください  
ねえ」

慎みなど投げ捨てて、欲しければ奪う。奪ったら囲う。囲ってしまえば、あとはうまぴよい、うまぴよい!

そもそも人間は長らく忘れていたのです。ウマ娘は、人間女性の完全上位互換の存在である。

容姿、体力、頭脳――

伍する所は頭脳くらいで、その他においては完全なる下位互換でしかない人間に、ウマ娘達が遠慮せず狩りに出た場合どうなるか。答えはマックイーンにスイーツをあげれば太り気味になるくらい確実に、人間はウマ娘に勝てませんでした。

が、ウマ娘もパカではありません。自分たちが他の種族――つまり人間の男性無くして繁殖できないと理解し、その人間男性を確保するためには人間女性も必要であるとかっているのです。とはいえ覚えたてのうまぴよいは止められないし止まらない。これを徹底管理するシステムとして後に登場するのが、幕府なのです筆者「嘘でしょ」。

「嘘でしょ」

「……」

「え、幕府って、え? そのための?」

「まあ、人間さんの統治システムとしてはもつと複雑でまともな理由もあるんですけど

……ウマ娘的には一番大事な役割が、それなんですよね」

「ウゾダドンドコドーン」

「いや人口の管理って本当に大事なんですよ。ウマ娘が増えすぎても少なすぎても良くないし、比例して人間さんの数も合わせなければならぬ。一方で土地で生産できるカロリーには限界があるし、それをブレイクスルーするには鎌倉時代を待たなくてはいい。平安末期のカオスっぷりを考えると幕府成立もやむなしかなあ、って」

「この国の歴史はどうなってるんですかね。毎回毎回、うまびよい、うまびよい……あ、今も変わってないわ。我が家がそうなもの」

「人もウマ娘も千年前から変わらないものですよ」

「……で、ここからなんですよね」

「はい」

「……これ、放送できます?」

「それを決めるのはお偉い様ですから」

「上が責任取るからヨシ!」

さて、話を義家に戻しましょう。

1098年。後三年の役から10年後の正月。陸奥守時代に使い込んだお金や物品

を完済したこともあり、やっと正四位下に昇進します。これに対しても貴族は嫌な顔をしましたが、白河院の熱烈な推薦により通ったのです。この官位になると昇殿一つまり御所の建物に上がることを許されるのですが、登場それは大変に名誉あることでした。

まさに源氏は白河院の懐刀として確固たる地位を確立し、栄華は極まれり。と、思っていた時期は長く続きませんでした。

1101年に長女の義親が九州の地で大暴れし、皆からは「悪対馬守ただし、この悪は邪悪という意味ではなく、強い（確信）」という意味。なので、意味としては義親半端ないってえ、くらいのむしろ称賛の意味。」と呼ばれます。突然長女がグレたことに義家は慌てますが、立て続けに四女の義国が義家の妹にあたる一族らと合戦をおっぱじめるなど収集のつかない状態になります。家中の不和をなだめる間に5年が経過し、1106年。もはや義家自ら兵を率いて娘と妹を討伐せねばならないほど状況は悪化してしまいました。

すっかり年老いた義家は最後の御奉公と、せめて自らの手で贖ってやるのが親であり姉の務めと出陣の許可を得るべく内裏に出頭しますが、通されたのは京都白川にある白河北殿。白河院の居所です。

「義家、お呼びとあり罷り越しました」

「おやおや、よく来ましたね。義家、君も随分と年を取ったようで」

「ええ、私も68になりましたから。それで、今日はいかなるご用命で」

「そうですね。命令、とは少し違うのですが。君の出陣を認めない旨と、その説明をと思つたのですよ」

「ゴホ……私が病だから出陣するな、と？」

「ええ、それもあります。少し違います。病であろうが無かろうが、君に出陣されると困るのですよ。子の罪を親が雪ぐのは確かに美しいのですが……それは、君の役目ではありませんから」

「……意味が、分かりかねます」

「分からないのではなく、分かりたくないの間違いでしょう。家族である君なら理解している筈です。義親や義国、義光は意味なく謀反も戦も起こさない。よほど誰かの命令でもない限り——例えば、私とか」

「何を言っているのゴホ、ですか……ゴホ」

「咳が酷いようですね。ウマ娘の寿命は人より長く、晩年まで美しい容姿を保ちます。ところがかの蘇我ウマ子が齡80にしてようやく容姿に翳りを見せつつもまだまだ妙齡と言つても良いまま生涯を終えたのと对象的に、君は髪に白いものが混ざり、皺も増えた。急激に老化が進むとは、よほど病が重いのでしょうかね」



「……………それでも、最後に戦働きはできません」

「だから困るといふのです。君なら確かに命を投げうって収められるかもしれませんが、義親を討つのは平正盛の役目ですから困るのですよ」

「ゴホゴホ……………無謀です。義親の武勇は全盛期の私以上です。それに、平氏は人間の武士団で人間がウマ娘に勝てるはずが……………まさか……………」

義家は白河院の黒翡翠のような、どこまでも深く落ちていくような目を見つめます。そして、聞きたくなかった答えが明らかになってゆくのです。

「はい。義国と義光には程よいところで手打ちとし、義親には敗れてもらいます。まあ、流石に私の可愛い悪対馬守を正盛ごときが討ち果たすなど誰も信じないので、戦として敗れて乱戦の中で死んだことにして、本人はどこか平穏な場所で静かに生きてくれると思いますかね」

「正盛殿はそのことを……………」

「彼が知る必要はありません。所詮は次のウマ娘による夜明けのための布石ですから。知ったところで、やる気を下げるだけです」

「……………どこから、貴方の思惑通りだったのですか?」

「おやおや、分かりませんか。はじめからですよー私と貴女が出会った岩清水八幡宮御幸以前から、私の計画通りです。義家、本当に今までありがとうございます、私の

可愛いウマ娘。君のおかげで夜明けを見ることができません。きっとこれから、源氏と平氏により永劫に夕暮れと夜明けを繰り返す……そして、夜明けの度に君達ウマ娘は強く、より良い明日を迎えられる。あなたはこの素晴らしい円環の始まりとして、とこしえに讃えられるでしょう。素晴らしい……何と素晴らしい」

戦いこそが人間の可能性なのか。

ヒトとウマ娘で争い続けるシステム。どちらが勝つても、次の夜明けのために戦いは終わらない。まさに、無限地獄。

「夜明けのため……どれほどの血が流れるのでしょうか。そして、戦い合う私の娘達や平氏の者達はどうして報われるのでしょうか。ゴホ……彼等の想いも、大義も、全て、仕組みられたことだと言うのに」

「流される血も、報われたい想いも、全て必要な対価です。私は心からあなた達を……人間を愛しています。真に恐るべきなのは犠牲ではありません。永劫に夜が続くことです。いずれ、私の恐れる時はやってくるでしょう。平穏とは停滞であることを知らず、微睡みは油断であることを気付かない間に、幾千幾万もの夜明けを経た者達により、我が国は大いなる脅威にさらされる時が。目覚めとは、自らによるものでなければならぬのです。他所から叩き起こされるなどよろしくない。私は、単なる明日のためにこのようなことをしているわけではありません。全ては、500年後、1000年後のため」

めー」

「もう……いいです……陛下の考えはよく分かりました。貴方に私欲はなく、全てがウマ娘と人間さんのため……ゴホ、日本の明日のためだと理解もします。それを……拒めるほど私は無垢ではなく、既に武士の世という夜明けを私自身がもたらしてしまいました。だから……私は構いません。けれどー」

「君は構わない。けれど？」

「けれど、貴方は本当の意味で私達を理解しているのですか。……かつて我が国を愛した蘇我ウマ子や、マツc……光明皇后ほどの方ならば大いなる目的のための小さな犠牲を受け入れたかもしれません。しかし……多くのウマ娘にとつて、国だとか大きなものよりも隣りにいる指導人さんと子供達……ゴホ、家族こそが全てなんです。私達は彼等を護ります。命を懸けて家族という一所を……それこそが一所懸命……私達は夜明けのためなんか命を懸けません。愛のために命を懸けられるのです」

「素敵です。やはりウマ娘は素晴らしい」

「……」

「ええ、ええ。分かっております。貴女達ウマ娘が主語だけは大きい大義よりも、自らが決めた一所を懸命に護る。私は、だからこそウマ娘を、源氏を人間中心の武士団たる平氏の対として選んだのです。ウマ娘ならば、どれほど人間が愚かになろうとも目を覚ま

させ、夜明けをもたらせられるでしようから」

「その目覚めと夜明けに指導人の……ゴホ、愛した人達の血が流れることが私達は耐え難いと言っているのです！」

「そうでしょうね。だからこそ、貴女達なんですよ。愛です、愛。ウマ娘は本当に愛に満ち溢れている。愛こそが人を次の夜明けに目覚めさせるのです。然るに、君亡き後のウマ娘は——」

何を言っても無駄だと義家は悟ります。

その後、自分の死後にどのような源氏と平氏を争わせるのかを、ご丁寧に解説した後、義家は解放されました。

屋敷に辿り着いたとき、義家の身体は病と絶望でもはや生きる気力を失ってしまいました。尋常ならざる母の様子に駆け寄ってきたのは義家が最も気にかけていた三女の忠です。義家の娘たちの中で最も優しい彼女を、白河院の陰謀の中で死なせたくない。義家は命を燃やして言葉を紡ぎます。

「義忠……ゴホゴホ……よく聞きなさい」

「は、母上。喋っては——」

「聞きなさい！　これから先、貴女達を戦へと駆り立てる外からのうねりのようなものがあるはずですよ。けれど、決してそれに流されないで……さぶちゃんも、義親も、義国

も、味方ではありません。平氏を……人間さんを信じなさい！」

「は、母上……何を言ってる……」

「義忠……どうかお願い。国や権力のために忠を尽くすのではなく、自分と大切な一所に忠を尽くして……あなたの一所懸命を果たしなさい。どうか、生きて……あなただけでも生き延びて……ゴホア……」

「母上!? 血が、こんなに。誰か、誰かッー!」

「私は……どこで……間違えたの……」

教えて下さい。誰か、誰かッー

1106年7月15日。

源義家は68歳でこの世を去りました。

ほぼ同時期に源氏の家中は荒れに荒れ、1108年正月には平正盛により義親が討たれたという報せが広まりました。意味のわからぬまま凱旋した正盛は源氏に成り代わり北面武者として実質的に武士の棟梁としての地位に就きます。

正盛の息子を指導人兼恋人としていた義忠は母の遺言と正盛の困惑した様子から、聡い彼女は白河院の計画に気がきます。そこで、舅の正盛と共に源氏と平氏の融和を謀りますが、源氏と平氏が闘争を続けることで永遠に夜明けを繰り返す白河院の計画にとつてそれは許されざる行いでした。

「困った娘ですね。義家達は本当に可愛い娘達だったのに……どうしますか、義光」  
「姉上は育て方を間違えましたね。私にお任せを」

「はい、お願いしますね。君も本当に可愛いウマ娘ですよ」

1109年、源義忠……暗殺。

犯人は源氏の一族であり、追手を向けられた者達は投身自殺。真相は闇の中かと思われましたが、義光が黒幕であると暴露されて義光もまた失脚。源義忠暗殺事件は源氏が力を落とし、相対的に平氏が力をつけることに繋がります。真の黒幕が何一つ傷つかないままに。

――母上が教えてくれたの。白河院は夜明けのために源氏と平氏を永遠に戦わせるつもりなんだって。

――けど、もう大丈夫だね。だってキミと私が、その……家族になったら源氏と平氏は一つになって、戦わずにすむもんね。

――だから、キミもそんなに怒っちゃだめだよ。白河院も悪気があるわけじゃないし、姉上やさぶちゃんたちもいつか目が覚めてくれるよ。私、さぶちゃんのこと好きなんだ。祭には踊りが欠かせないでしょう？ またみんなでお祭りにいって、その時は……私と一緒に踊ってくれない？

「義忠さん……俺は絶対に許さないよ。君を切り捨てた奴も、この仕組みも……。何が

夜明けだ……君を……俺の恋人の想いをこんな形にしている理由なんて、あつてたまるか！」

白河院が取るに足らぬと見逃した青年。

平正盛が嫡男にして、源義忠の指導人。

最愛のウマ娘を失った青年は復讐を誓います。

彼の名は……平忠盛。

同じ忠の字を持つ年上の恋人を喪った彼について語るは、また次回――

「……度し難いですね」

「ええ、全く」

「……義家の人生はここでおしまいです、ある意味今回の話はこれから続く長い長い戦いの始まりに過ぎないのでしょうか」

「そうですね。源氏と平氏の長い長い戦い。その始まりに過ぎないのがこの度の締めとなります」

「故に、今回は義家ではなく、奥州藤原氏についてかたりながらお別れとさせていただきます。義家や源氏については、また然るべき言葉でお別れとさせていただくでしょう。ヨアケノハナさん、本日はありがとうございました」

「ありがとうございました」

奥州を拝領した藤原清衡は、居所を平泉に移すとこの地に一つの独立勢力を作らんばかりに発展させます。金山からの収入と大陸との北方貿易により莫大な富を築き、前九年の役で産まれたウマ娘達は彼女を中心に纏まり、奥州17万騎と呼ばれる大勢力へと成長するのです。

その有様は、源氏が凋落するのとはあまりにも対象的でありました。

後に、彼女の築いた軍事力に助力を得るべく源氏ゆかりの英雄が平泉を訪ね、更には義家の末裔が恐れにより平泉を滅ぼすのは歴史の皮肉と言わざるを得ません。

清衡と、その後3代が眠る中尊寺金色堂。発掘された清衡の遺体は70代頃まで生きたと見られ、伝聞と大きな差異なく生涯を終えたと思われまます。

一族を滅ぼされ、やっと築いた家族を殺され、その果に得た栄華さえも時代の中に消えてゆく。激動の生涯を歩んだ藤原清衡は、今もかつての栄光の輝きの中で眠っているのです。



制作

日本ウマ娘放送協会府中支部

終

## 次回予告

遊ぶために生まれてきたのだろうか  
遊びをせんとや生まれけむ。

「誰なんだ……俺は、誰なんだ！」

「たれでてもいいよおー。たれでてもいいかたらたすけてー！」

戯れのために生まれてきたのか  
戯れせんとやうまれけむ。

「何故殺した！ アイツは、ここで死んではいけないかったんだぞ。答えろ、義朝ッ！」  
「言わないで……アンタが、そんなこと言わないですよ！ アタシは、そんな言葉を聞いた  
かったんじゃない！」

無垢な子供の声を聞いて思う  
遊ぶ子供の声聞けば、

「忠ならんと欲すれば孝ならず。孝ならんと欲すれな忠ならず……」

「姉貴は頭でつかちにモノを考えすぎだー」

「誰の頭がでかいつて？」

私は何のために生まれたのだろう  
我が身さえこそ揺るがるれ。

「俺達は……何のために生まれたのだろうか、行真」

「……生き抜けば分かるかもな、浄海」

第10回 「平氏と源氏　くヒトとウマ娘の誓い」

ご期待ください。

「……」  
放送翌日。

日本ウマ娘放送協会スタジオにて。

「おや、カフェ。ここで会うとは奇遇だねえ」

「……タキオンさん。あなたがメディアに出演とは珍しい。教育テレビの科学コーナーですか？」

「いやいや、君と同じだとも。ほら、私のトレーナー<sup>モルモット</sup>君共々総合テレビに出演する予定だね」

「……？ 私と同じ？ 私の出演しているドラマに新しいキャストは聞いていませんよ」

「何を言っているんだい。つい先日放送された何とかっていう歴史番組だよ」

「タキオンさん、すみませんが話がわかりません。私は……歴史番組に出演なんかしていませんよ」

「……へえ」

「朝の連続テレビ小説なら出ていますが、人違いではありませんか？ それでは、打ち合

「わせがあるのでこれで……」

「……ああ、私の勘違いだったようだよ。引き止めて悪かったね、カフェ」

「——静かなる日曜日、か。度し難い御仁だね、彼女は。全く度し難いねえ……。」

## 第10回「平氏と源氏　　ヒトとウマ娘の誓い」その1

エジプト、アブ・シンデル神殿。偉大なるファラオ、ラムセス2世が建造した壮大な神殿に描かれた壁画ウマ娘シンデレラグレイ冒頭に出てくる壁画です。には、古代の大國にとってウマ娘はどのような存在であったのか読み取れるものがあります。それは、人間よりも大きな存在として描かれたウマ娘たちの姿。走る姿にエールを送っている人間は、小さく描かれています。そんな中、ウマ娘よりやや大きく描かれている二人。ラムセス2世と、王妃ネフェルタリです。

エジプト王国はヒッタイト帝国と並ぶ紀元前において最大のウマ娘大國と知られています。明確にウマ娘を人間よりも上位の存在として描き、愛バにして戦友……何より最愛の王妃ネフェルタリを神そのものである自らと対等の存在として描く。これが後世の後付ではなく建築王の異名を取るラムセス2世自らの指示によりそのような描かれたまま神殿が作られたことから、人とウマ娘ではウマ娘上位で扱われる國が存在したことが分かります。

一方、エジプト王国最大の宿敵にして最古のトレイナーの誉れ高い「キツクリ」を排出したヒッタイト帝国でもウマ娘は人類にとって最愛の存在であると謳い、世界最古の

平和条約たる「カデシユの条約」にも次のような文言が残っています。

我々の平和と友好関係は永久に守られるであろう。ーヒツタイトの子とその子孫は偉大なる主の子とその子孫の間も平和であろう。なぜなら、彼らも平和と友好関係を守り、共にウマ娘を愛しているからである。

このように太古の昔においてウマ娘は人間と対等以上……最愛の存在として蜜月の時を重ねました。

事態が一変するのはウマ娘大国であった2国が衰退してからです。神が定めた神聖な生き物の中にウマ娘は含まれず、人や、ましてや牛や山羊にも劣る存在として忌避されてきました。それを打破ろうとウマ娘を含めた全ての人類への愛を説いた救世主は十字架に架けられ、意思を継いだ弟子たちも一人、また一人と殉教を遂げてゆきます。いつしか纏められた教典には本当に救世主の弟子たる最後の使徒ヨハネの筆かも定かでない黙示録が聖典に加わり、あまつさえその中には「7つの冠を戴くこの世で最も淫らで忌まわしい獣、大地を駆ける大淫婦バビロン」というウマ娘の特徴を持つ存在が描かれるなど救世主の教えは歪められ、遂には長きに渡る西洋のウマ娘暗黒時代を迎えたのです。

この影響は現代にも残っており、日本が誇る七冠ウマ娘「皇帝」シンボリルドルフが欧州遠征を計画した際にフランスやイギリスをはじめとする国々は挑戦者ルドルフを

「歓迎しよう、盛大にな」と好意的に報じましたが……一部では、七冠であるから「侵略する東洋からの獣」、「Tyrant<sup>暴君</sup> Coming<sup>来る</sup>」などの侮蔑的な報道が出るという根深い差別意識を感じさせるものもありました。ルナ「ルナ、悪くないもん！ 暴君じゃないもん！」

では全て人間が悪いかといえそうではなく、ウマ娘の民族国家を率いたアツツイラ女王による通称「婚活戦争」による男性の略奪など人間や一般ウマ娘からすればたまたものでは無い略奪行為を頻繁に行っており、彼女たちが通ったあとには新芽も枯れ葉も残らぬと言われるほど文字通り蹂躪されていたのです。中世キリスト教世界の一部でウマ娘が「嫉妬」と「色欲」、「憤怒」の象徴となる幻獣や悪魔のモデルにされるのもむべなるかな。

あれよあれよと、どっちも良い悪いを繰り返して幾星霜、日本にもとうとう関係性を見直すターニングポイントがやってまいりました。

ウマ娘に人間が必要なのか……。

それとも、人間にウマ娘が必要なのか。

人間とウマ娘の歴史は長く、互いに持ちつ持たれつ、時に争い、時にうまびよい、時にバブみを感じてオギャってでちゅね遊びをせんとや生まれけむ……私は一体何を讀まされているのでしょうか。



武士となったウマ娘による自由な社会か。

それとも人間主体の管理社会か。

夜明けを目論む平安の物の怪、白河法皇。彼が果たしてどこまで考えていたのか。その答えは誰にもわかりません。しかし、夢は誰にも止められない。今、幾つもの夢が横一線に走り出す躍動の世に、新たな星が現れます。あなたの夢は自由か、それとも安寧か。

それとも――

日本ウマ娘放送協会特別企画

ウマ娘と辿る日本の歴史

第10回「平氏と源氏 ヒトとウマ娘の誓い」

「……こんばんは。秋の夜長の頃となりましたが、今夜もやって参りましたウマ娘と辿る日本の歴史。司会の松平でございます。主役は平清盛。かつては悪逆非道とも言われた人物として長らく評価されなかつたのですが、資料解析が進むにつれてその人物像

は定説とは大きな隔たりがあるものだとも明らかになってきました。なぜ、彼の存在は隠められたのか、そして歴史おいてどのような役割を果たしたのかを辿ります。解説には、前回に引き続きヨアケノハナさんです。よろしくお願いいたします」

「よろしく願います。ところで、何か壮大に見えて内容は6割くらいうまびよいのことしか言っていないパカな前置きは何だったのですか？」

「……私が知りたいです。ディレクターさんは後でOHANASIがありますから出頭するように。まあ、内輪のことは置いておきまして本編に入っていくましよう」

平清盛——彼は果たして何者なのか。

通説では平忠盛の嫡男とされていますが、平家物語や一部の資料では白河院のご落胤ではないかとの噂がついて回ります。そして、多くの資料が発見されるにつれて真相はより悍ましいものであると発覚したのです。

結論から言えば、清盛は白河院の子でした。しかし、武士化したウマ娘による新たな時代の夜明けの前に、白河院は跡取りにもならない子を孕んだ愛人を処分しようとしたところ、愛人は脱走。そこを偶然にも保護したのが平忠盛だと言うのです。

忠盛からすれば恋人を陰謀で殺した憎悪する男の愛人と子であり、助ける道理など無かつたのですが、彼にとってこの出会いは天啓だったのです。

忠盛は恋人であった義忠を失って以降異性を近付けず周囲から奇特な目で見られて

いしましたが、仮初の結婚であろうとどうにも義忠以外の女性を受け入れることができない。さりとて白河院の計画を破壊し復讐を果たすには自分一人の代ではおそらく不可能という計算もある。父も母も親族一同身を固めろとうるさい。黙ってくれ、俺の伴侶は永遠に独りだけだと伝えても「棟梁としての義務を果たせ」の一点張り。いい加減疲れてきていました。

そこに、偶然にも助けた今にも死にそうな傷を負った身なりだけは上等な腹の大きな女官。訳を聞けば、腹の中には憎い憎い白河院の子。そんな厄介すぎる案件を忠盛は女を実は隠していた自らの恋人で、野盗に襲われたとして屋敷に迎え入れ、腹の子を自らの子として産ませたのです。

今まさに息を引き取らんとする女に忠盛は心からの感謝を告げました。

「ありがとうございます。私にこの子を授けてくれて本当にありがとうございます」

込められた意味を知らぬまま女は安堵して死に、清盛は忠盛の子として育てられたのです。その後、忠盛は5年をかけて周囲の説得により人間の後妻を迎え、子を設けましたが、嫡男の座には変わらず清盛を据え続けました。

忠盛曰く、「奴自身の子によつて計画を破壊してこそ我が半身の無念は晴れる。そのためならば棟梁の座くらいはくれてやる」とのこと。訝しむ平氏の中には真相にたどり着く者もいましたが、忠盛により入念な箝口令が敷かれました。

愛情は無く、居場所もない。あるのは憎悪と疎外感のみ。そんな清盛の境遇を哀れんだのは、白河院の愛人の一人で舞踊の達人であるウマ娘、祇園女御でした。彼女は清盛の生母と親交があり、清盛の顔立ちと匂いで友人の子であると見抜くなど、忠盛は隠しているつもりでも清盛の出自について知っている者は存在したのです。

宮中に参内するようになったときの所作や舞踊を教えるという名目と自らの庇護下にあることを示すため清盛は幼少期の多くを祇園女御の元で過ごしたと言われます。

そんな祇園女御が清盛を始めて見た時に抱いたのは、一切の希望のない目をしているというものでした。

「何て目をさせてしまったの……」

「？ 祇園女御様、どうしたのですか」

「いいえ……平太平氏の長男と言う意味で、幼名ではない。清盛の幼名は不明です。くん。これから一緒に踊りや色々なことを勉強しましょうね」

無理を強いず、時間をかけて祇園女御は清盛と接します。今まで愛情を知らない清盛は戸惑いますが、いつしか心を許して年相応の笑顔を見せるようになってきました。

舞踊の教えの合間、一緒に学ぶ他のウマ娘と戯れる清盛を見て祇園女御は思い浮かん

だ言葉を口ずさみません。

遊ぶために生まれてきたのかな  
遊びをせんとや生まれけむ

戯れるために生まれてきたのかな  
戯れせんとや生まれけむ

遊んでいる子どもたちの笑い声を聞く

遊ぶ子供の声聞けば、

私もなんだか楽しくなってしまうの。  
我が身さえこそ揺るがるれ。

「祇園女御様、今の歌は？」

「うふふ、あなた達を見ていたら歌ができてしまったわ。人もウマ娘も、ずっと、ずっと楽しく生きていけたら良いのにな」

ウマ娘と楽しく生きる。

祇園女御が思うまま口にしたそれは清盛の心に大きく印象づき、自らに幸福を教えてくださいました。

人並みの幸福を知ったからこそ、清盛はふと疑問に思うことも出てきました。

「それにしても、祇園女御様やウマ娘は私を温かく見てくれるのに、どうして父上は無関心で、母上やうちの他のみんなはまるで邪魔者みたいに見てきたのだろうか」

「……」

全く悪気無く、心底分らないことをある意味母以上に慕う祇園女御へと愚痴程度のもりで口にした一言は彼女をひどい罪悪感へと誘いました。

この時、清盛は11歳。まだ生まれの秘密を知らなかつたのです。祇園女御は白河院や忠盛から概ねの事情を知っておりいつか忠盛から話すだろうと思っていました。ど

うにもその線が薄く思えます。

悪意ある者に告げられるくらいなら、せめて私がーと、祇園女御は眞実を清盛へと語りました。

「清盛、落ち着いて聞いてください。あなたの本当の父親はー」

眞実を知った清盛の心中たるや、如何に。

気がつけば、屋敷を飛び出してあてもなく郊外にまで走り抜けていました。気付けば月夜になるまで走り続け、大の字に倒れた彼は思うまま叫びました。

「私は……誰だ。私は忌み子なのか。生まれてはならなかったのか。誰を父と呼べば良い。私は誰だ！ 誰なんだ！ 誰なんだ！」

ー　　タ　　レ　　テ　　モ　　イ　　イ　　ヨ　　オ　　！

「……………ん？」

タ　　レ　　テ　　モ　　イ　　イ　　カ　　ラ　　タ　　ス　　ケ　　テ　　エ　　エ　　エ　　！

「……………だ、誰か助けを求めている？」

妙に大きな涙声で助けを求めているのを聞きつけ、清盛は自分が祇園女御の元を飛び出してきたのを忘れてともかく声の方向へと駆けつけます。すると、そこには枯れた井戸穴らしきものが。

「いや、よもやこんなところに誰か落ちるはずが」



録しトライアル等を経て参加できる競技で、春の皐月賞と平安優駿、秋の菊御紋賞を併せて伝統三冠。これを獲得したウマ娘を三冠ウマ娘と呼び非常に名誉あるものとされた。しかし、その難易度たるや当時都にて最強バであったライコウが平安優駿を獲れず二冠で終わるほどである。なお、鈴鹿御前は伝統三冠制定前なので三冠ウマ娘ではない。……という捏造設定です。の一つである平安優駿を勝つて優駿ウマ娘として名を挙げる事です。ぶつちやけ彼女の年頃だと学問よりも走りたくて堪らず、枯れ井戸に落ちていたのも人知れずトレーニングに励んでいたところを暗闇に隠れていた枯れ井戸に気付かなかつたというものでした。

「いやあく本当に危なかつたよお。君がいなかつたらきつとあの穴の中で助けも来ず、ご飯もなくて、アタシは……う。わ。あ。あ。ん。し。に。た。く。な。い。よ。お。」

「静かに……頼む、静かに」

「それで、君はどうして自分は誰だとか叫んでたの？」

「うおつ、また急に落ち着いている。ええと……何というか、父母が本当の父母ではなく、父はやんごとなき方で母は……」

『あなたの本当の父親は、白河法皇。そして、母親は……私よ！』

『ウゾダドンドコドーン!!』※嘘です。



「……ウマ娘だった」

「いや、何言ってるの?」

「だから、母親がウマ娘だったのだ」

「いやいや、そんなパカなこと……え、もしかして史上初のウマ娘から生まれたウマ息子? 走るの早いの?」

「いや、普通だな。ウマ娘には勝てん」

「じゃあウマ娘から人間の男の人が生まれたわけか。そんな不思議なことってあるんだね」

「不思議なのか?」

「うん。ウマ娘からウマ娘以外が産まれたことは今まで一つたりとも無いよ」

「なんと。よもや、私が史上初か!」

「すごいね!」

無論、そんなわけがありません。

世界の神話や伝説では見られなくもないのですが、現実においてウマ娘から人間やハーフラしきものが生まれた例はありません。まだまだ未解明な部分は大きいのですが、ウマ娘の生態研究を行うトレセン学園のアグネスタキオンさんによると、

「ウマ娘の遺伝子は圧倒的な優性遺伝子であり人間と配合しても人間の遺伝内容を塗り

つぶしてしまふ。だから、本来ならばハーフ馬娘とでもなるべきところを完全なウマ娘にしてしまうのだよ。ほら、うちのモルモット君の検索履歴にあったゴブリンやオークもののアレで、孕まされた人間なりエルフなりが出産しても生まれるのはオークやゴブリンでありハーフではないようなものさ。加えて、ウマソウルと呼ばれる存在と継承。この二つは我々の常識の及ぶものではなく、異次元的な発想と理解が必要であるから、真の意味でウマ娘の生態を明らかにするには異次元やこの世ならざるものの観測が必要だろうねえ。本来ならば私もそちらの研究に尽力すべきなのだろうが、生憎と私はモルモット君と共にプランAを成し遂げるのに忙しい。悪いがプランAが終わり次第即座にプランMマリッジからのプランUうまびよいに移行するから少なくとも十年はー」

とのこと。なお、この学者の責務を放棄する発言に一部人間の学者から非難されたが、圧倒的多数のウマ娘学者から「がんばれ」、「実家に連れ込め」、「理解できません。デビュー前に親に紹介するのは基本では?」というメッセージと、うっかり非難した学者は年齢性別を問わず「お前もうまびよいしてやろうか! おおん?」、「お菓子があつてもいたずら(意味深)するぞオラア!」と秋の夜長に人肌恋しい周りのウマ娘に続々と攻略され、気付けばハロウインを境に学者たちのプロフィールに「既婚」の文字が増えまくった。雉も鳴かずば打たれまいに……。

まあ、それはそれとして。優駿ウマ娘を目指す道憲との出会いは清盛にとって大きな

変化をもたらします。これまで清盛が見てきたウマ娘は戦うか踊るかの、心優しくも荒々しさもある存在であり、心のどこかで危険な存在だと思っていたのです。しかし、道憲を知るとその価値観が誤りであったと気付かされました。学者志望だけあって知恵には富んでいます。が武はからつきし。踊りはそこそけど歌は好き。何より、走りでは誰にも負けたくない。

そう、走ることです。朝廷の権力低下により地方での競技はまるで小さな大会止まりであり何の箔もなく、伝統三冠をはじめとする春秋すめらぎ賞など大きな大会でさえ賞金は年々減り、三冠ウマ娘からは盗賊の酒呑童子が出るなど競技に携わるウマ娘の待遇は悪く、武士や学者、芸者等の二足の草鞋を履いて何とかやっていけるかどうかです。

清盛の中では自分が誰なのかは些末な問題になっていました。ウマ娘の血を引く者（大嘘）としてウマ娘が最も大事にしてきた自由に走り、人々を熱くさせる、面白き世を取り戻す。ならば、皇室の血とウマ娘の血、さらに武士としての身分を持つこの身はまさに好都合ではないか。何者でもないからこそ、何者にもなれる。それは、まさしく白河院が警戒し源義忠を暗殺してまで阻止したヒトとウマ娘の架け橋となる存在を意味します。

清盛はこの出会いに心底感謝しました。

「分かったよ、私が何者なのか。いや、今はまだ何者でもないんだ。これから、何者かに

なるんだ！」

「うつ……ぐ……感<sup>ん</sup>動<sup>く</sup>したあ。まだ少年なのに偉いねえ！」

「まだ少年って……キミも同じくらいだろう」

「アタシ、今年で23だよ！」↑1108年生まれ。

「……」↑1116年生まれ。11歳

一回り年上かよオオオ！

この頃の都の競技は出走年齢がガバガバで、名も無きウマ娘なら初出走です（大嘘）と言えば毎年皐月賞に出られる有様でした。もちろん、道憲のようなある程度の身分あるウマ娘は流石に顔がバレているため勝負は一度きり。故に、道憲は本格化を迎えさらに成熟さえした時期の一年に全身全霊をかけようとしていたのです。

清盛は来年の皐月賞を見に行く約束して道憲と別れます。そして、祇園女御の屋敷に戻ると「心配をかけました……母上」と言つて頭を下げます。なお祇園女御は感動のあまり気絶した。

この頃から、清盛たつての願いとして舞踊や作法の勉強に指導人としての項目が加わりました。忠盛は思うところあったものの「ウマ娘を想う気持ちを止める権利など俺には無い」と、珍しく清盛に関心を示した上に時折自らの手法を伝授するようになったと言います。

1129年正月、清盛は12歳で元服し従五位下・左兵衛佐に叙任。この左兵衛佐という位は上流貴族の子弟が多く任じられる出世コースであり、武家出身である筈の清盛がいきなり任ぜられるのは前代未聞とされ、多くの貴族に驚愕と噂……白河院のご落胤との話が信憑性を増したのです。

清盛は同年3月に石清水臨時祭の舞人に選ばれ、祇園女御の養子である内大臣・源有仁が隨身警護。この場合はお目付け役に近い。また、源有仁は元皇族で舞踊や作法にも詳しいため監督役も兼ねていたと思われる。を務めます。

その席には、白河院の姿も……。

舞台上昇った清盛は手順通りの位置につき、雅楽が始まるのを待ちます。

「待たれよ」

白河院の近習が定位置についた清盛に声をかけます。張り付いたような笑みを浮かべる近習を清盛は薄気味悪く思いますが、表情には出しませんでした。

「此度の舞は二人で行えとの院からのお達しである」

「二人？」

近習が指差す場所には、清盛と同じく着飾ったウマ娘が一人。しかし、ウマ娘にしても小さく見栄えが悪く、ぶすつとした仏頂面で周りを威嚇するようでした。しかし、清盛は何故か惹かれるものを感じ、特に小柄ながらほぼブレのない足運びは荒削りながら

鍛え上げられた体幹を思わせませぬ。

清盛は小柄なウマ娘に指導人が付いていないことを荒削りな部分から一目で看破し、体幹も素晴らしく舞踊の適性も高い。これほどまでのウマ娘に何故誰も目を向けていないのかと首を傾げました。

「何？」

気が付けば無言でガン見していた清盛。流石に拙いと思ひ適当に取り繕います。

「いや……綺麗だと思つて」

「ーッ、いきなり何。初対面の相手に」

「む、すまない」

妙に気安さを感じる清盛ですが、相手のウマ娘は不機嫌そうに顔を背けます。

失敗したなあと思つている内に雅楽が始まり、清盛とウマ娘は手順通りに舞い始めます。その流麗な舞に見るものは口から恍惚とした息を漏らし、忠盛でさえ「出来ておる」と認めざるをえませんでした。尤も、舞台上でウマ娘と舞う清盛の姿に、かつての自分と愛バの幻を見て眉間に深々と皺を寄せ、更には怨敵である白河院の姿もあり心は千々に乱れていました。

一方、その様子を見た白河院は舞が終わると近習に何か言い含めていました。

「二人共、先程の舞は見事なり。院から格別のお褒めの玉声を賜つたことを誉れとする

が良い。されど、一つ申し付けもある。平清盛、人の身でウマ娘に伍する舞を院はご所望だ。もう一つ何か舞われたし」

この言葉に周りはざわつきます。予定外のことである上に、神事に奉納する舞はしきたりで決められ、追加の舞を全くの即興で舞うなど前例なきこと。更に、神事故に何でも良いわけではなくその場に合うものを選ぶセンスが必要です。

清盛を武士風情の子と蔑んでいた貴族でさえ我が身に置き換えると難易度の高さに青ざめ、固唾をのんで見守ります。忠盛もまた予想外のことには身を乗り出して清盛を見ていました。

「されば、一つ」

ただ一人、清盛だけは落ち着いていました。

彼が腰の飾太刀を抜いたところで一瞬辺はざわつき近習は身を緊張させますが、白河院が清盛から一切目を逸らさずに片手で制します。

片手上段に構えたその型を見て、忠盛は目を見開き「清盛、お前……」と震える唇から声が漏れました。

数瞬の間。されど余りにも始まらぬ舞に再びざわめきつつあることを感じてもなお動かぬ清盛に、忠盛は彼が何を待っているのかを悟ります。

「笛を――」

「は？」

「良いからその笛を寄越せ！」

雅楽の奏者から笛をひつたとくると、流麗な一吹きによる音色が舞台に広がります。

(父上……奉ります……)

清盛が選んだのは剣舞。それも、忠盛が人知れず舞つては誰にも見せない涙を流していたものです。その舞が誰に捧げるものなのかを清盛は知りませんが、これを舞うべきは今ののだと確信したが故に舞つたのです。

その剣舞の美しさに貴人たちは恍惚としたため息を漏らすのですが、白河院は首を傾げていました。

「……妙ですね」

「何か、妙な点が？」

「あの舞、左手側が不自然に空いています。もしやあれは二人で舞うものかもしれないですね」

「……それは、不完全な舞を奉納するということ。院よ、即刻止めさせますか？」

「いいえ、いいえ。見なさい、どうやら面白くなつてきましたよ」

ヒソヒソと話す白河院の目線を追えば、下がったはずのウマ娘が再び舞台上がり、見事に清盛の舞に動きを重ねてゆくのです。



(キミ、なぜこの舞を?)

(……知るか)

目と目で会話をする清盛とウマ娘。初見のはずなのに不思議と嘯み合う舞に驚く貴族たち。笛を奏でる忠盛も目を見開き、一層濃くなる己と愛バの姿の幻視から目を離すことができません。

(義忠さん……俺は、この舞を君と……)

互いの剣舞は鋭さを増し、一步間違えれば互いを傷つけかねません。しかし、鋭くも流麗な舞は互いを傷つけらることなく終わりを迎え、忠盛の笛の音が消えると静まり返った舞台に汗だくの二人の乱れた息だけが聞こえていました。

「何と……何と……すばらしい!」

感極まったと言わんばかりに褒め称える白河院。周りの貴族もこればかりは文句のつけようもないと口々に賛辞の言葉を漏らします。忠盛は見えなくなった幻視に胸の痛みを覚え、静かにその場を離れていました。

石清水臨時祭は無事に終わり、清盛が舞台を降りようとするのと近習が引き止め、何と白河院が二人で話したいと言うのです。これは良い機会だと清盛は承知しますが、ある意味そんなことより優先すべきことがあります。一緒に舞ったウマ娘です。

さつさと舞台から降りていってしまった彼女を清盛は追いかけます。そして、今まさ

にウマ娘の更衣のためあてがわれた場所に入る前に呼び止めることに成功したのです。

「君！ 一緒に踊った君！」

「……何？ 着替えたいんだけど」

「う、うむ。着替えるのはまあそうなのだが、その後、その、少し待つてくれないか。是非とも話したいことがある」

「……初対面のウマ娘を待たせるの？ ふーん、良い度胸してるね。アタシを舐めてるってこと？」

「違う、違う！ 本来ならば今すぐ話したいのだが……白河院から呼ばれていてな」

「白河院……あつ、ふうん。それなら、仕方ないか（誤解）この時には大陸から衆道、つまり同性愛が伝来しています。高貴な方々は外見の良いシヨタを囲うことが横行し、この時の清盛は12歳かつ化粧バツチリで、完全にこの後いたただかれてもおかしくない状態。このウマ娘があつ（察し）するのも無理はないのです。」

「分かつてくれたか、忝ない」

「別に……この後、用もないし。アンタもその、気をつけなよね……尻とか」

「何故に尻!!」 ↑無垢。

「う、うっさい！ さっさと行けバカ。あんまり待たせたら帰るからね」

「うむ、すぐに済ませてくる！」

「……いや、無理しない範囲で良いよ。大変だろうし」

唐突に尻を心配される清盛ですが、いよいよ実父と対面であります。御簾の向こうにいるのが父、白河法皇。この世を支配する平安の物の怪であります。

このお方が父……そう思っても何ら実感は無く、全てがお伽話なのではないのかと思えるほどです。

平伏する清盛に白河院が声をかけます。

「こうして話すのは初めてですね、清盛」

「恐悦至極に存じます」

「おやおや、堅苦しいのは無しですよ。親子ではありませんか」

「……やはり、貴方が私の」

「はい、父ですよ。まぎれもなく、貴方には私の血が流れています。まさか、生きていたとは思いませんでしたか」

「……ウマ娘との間に生まれた忌み子だから捨てておいて、父親面ですか」

「??? え、ウマ娘、ですか？」

「母上……祇園女御様が教えてくれました。私はあなたとウマ娘との間に生まれた存在だと！」

「???……祇園？……！……そうです……そのとおりです。あなたの存在を認めるわけに

はいかないのです」

「なぜです!」

「人を守るためですよ。考えてもみなさい。仮にウマ娘との間に人間の男の子が生まれたとします。そうになると、もう人間の女性は必要ないではありませんか。思うに、多くのウマ娘が種として完全下位互換である人間の女性を許容しているのは、自らの伴侶たりうる人間男性を産むかもしれないからに過ぎません。今はあなただけです……これから先どうかは分からない。しかし、彼女達の愛情を無礼てはいけません。たとえそれが藁よりか細い希望でも、彼女達は掴みますよ。そうなるとうなります。この世全ての人間はうまびよいいされるのです（大嘘）」

「う、うまびよい……ですか」 ↑無知

「そうです、うまびよいです」

「うまびよい……（何だろう、それ）。恐ろしいことになるのですね」 ↑無知

「ええ、ええ。とてもとても恐ろしいことになりました。私には夜明けを齎さねばならぬ使命があり、うまびよいによる永遠の夜など……想像するだけで恐ろしい。冗談抜きで国が滅びますよ。祇園女御を遠ざけたのもそのためです、これ以上あなたのような存在を産むわけにはいきませんので（本当は舞の音楽性の違いからの喧嘩別れですけど）」

「では陛下はむしろ人を守るために私を捨てざるをえなかったと?」

「……そういうことですね（大嘘）」

「なるほど、理解しました。ところで、平氏の父上が時折言っていたのですが、夜明けとは何ですか？」

「よくぞ聞いてくれましたね。素晴らしい、やはり私の判断は間違いでしたか。貴方には是非とも夜明けについて啓蒙を深めてもらいましょう。ともすれば、あなたも……」

「私も、何ですか？」

「いいえ。貴方は染めないほうが面白そうです。夜明けについては忠盛に訊きなさい。そして、この警句を忘れないくださいね……」

我ら血によってウマ娘となり、魂によりウマ娘を超え、血によってウマ娘を失う。指導人よ、かねて血を恐れたまえ。

「それはどういうことですか」

「……歴史を調べ、競技に名を残したウマ娘を調べなさい。たくさん、たくさん調べなさい。そうする事で見えてくるものがあります」

「分かりました。警句は忘れません……陛下」

「……父とは、呼んでくれませんか。そうですね……ええ、それで良いのです。貴方の父は、忠盛なのだから」

白河院と清盛がこの後に会うことはありませんでした。この半年後、白河院は76歳

で崩御。しかし、肉体の死が必ずしも本当の死ではない。そのことを清盛はこの後に知り、生涯苦しめられることになるのです。

が、そんなことは清盛にとつてどうでも良いこと。そんなことより気になつて氣になつて仕方のない相手が待つてゐるのです。

待合室のすぐ外。簡素な狩衣に着替えて出ると、そこには侍烏帽子に朱の直垂。赤みのある鹿毛と大きめな耳、そして余りにも小柄なウマ娘。清盛の心をあの舞台で一目見てから離さない姿がありました。

「おおー！ 待つていてくれたかー！」

「別に……迎えがあるわけじゃないし、用があるなら待つくらいしてあげるよ。それで、なに？」

何者でもない少年と小柄なウマ娘との出会い。たとえこの先の結末を彼らが知つたとしても、きっと彼等はこの出会いを無かつたことにはしない。行き着く先が何であろうと、出会つたことを後悔だけはしないでしよう。故に、私はこう思うのです――

「待つて待て、先ずは名前を教えてください。私は平清盛。君の名は？」

「……源義朝。小さいからつて舐めたら蹴つ飛ばす」

どうかこの出会いに、溢れんばかりの呪いと祝福を。

「……ところで、早かったけど大丈夫なの……尻とか」  
「だから何故に尻!？」

## 第10回「平氏と源氏　くヒトとウマ娘の誓い」その2

「一旦スタジオに戻ります。ヨアケノハナさん、白河院が清盛に告げた警句とは、一体どういう意味なのですか？」

「あの警句ですね。『我ら血によってウマ娘となり、魂によりウマ娘を超え、血によってウマ娘を失う。指導人よ、かねて血を恐れたまえ』……これはウマ娘の血の特性、インブリードに関する警句と言うのが一般的です」

インブリードとは、近親婚により先天的にウマ娘の力を増大させた子どもを出産することを目的にした結婚です。

これは主に父親、即ち人間男性に寄るところが大きく、同じ人間男性を祖とする系譜が孫や曾孫世代でウマ娘を出産した場合、全くの他人同士よりも強いウマ娘となることが統計で出ています。主なインブリードによるウマ娘としては幻のトキノミノルやブエナビスタ、オルフェーヴル、エルコンドルパサーなど堂々たるウマ娘が名を挙げられます。

「……ああ、ミノルちゃんは確かにそうか」

「親戚でしたっけ？」



「家内の方が、まあ一応。つまり、血を恐れよと言うのはやはり人間と同じく近新婚による健康リスクを指しているのですかね」

「その通りです。ウマ娘でも近新婚は健康リスクがありますし、人間よりも顕著に現れます。武士団である源氏と平氏と言った閉鎖的な環境では、一族同士の婚姻は非常に多く血が濃くなる危険性がありました。白河院はここに警戒し血を絶やすなど説いていくわけですね」

「……人とウマ娘を争わせておいて勝手なことを言いやがつて」

「至極同感ですけど、松平さんテレビ、テレビですよ」

「大変失礼しました」

「心がこもつてな〜い」

「それで、筋金入りのろくでなし白河院は何故そのような警句を清盛に伝えたのでしょうか」

「いくつか説はありますが、その後の歴史を考えますと武士の世……すなわちウマ娘の世が来るにあたり警戒すべきは特定の男性の血が濃くなりすぎること。これまで、聖徳太子以来様々な偉人が多数のウマ娘に好意を寄せられてきましたが、血の氾濫が起きなかつたのはパートナーたるウマ娘の強すぎる独占力（例：鈴鹿御前）と、ウマ娘側の人間への配慮と人間側の結婚関係を人間主体とする方針（一夫多妻、妻問婚）によるものです。しかし、そのバランスがウマ娘の世では壊れる可能性が非常に高いのです」

「……と言つと？」

「やだなあ、松平アナウンサー、わかっているくせにい。現状だつて政府やUR Aが対応に追われている問題ではないですか、人間男性の婚姻問題は」

現状でも社会の大きな問題となつているのが、人間男性の婚姻問題です。結婚できないのではなく、それ以前に血で血を洗う争いが生起し、させられない状況にある場合が多すぎるのです。

これはトレセン学園のトレーナー生のみの話ではなく、一般的な男性でさえ巻き込まれる可能性のあるものです。

昨年、このような事案が発覚しました。

とある一般会社員の男性がウマ娘と結婚を前提とした恋人関係となり、ウマ娘のご実家へ挨拶に行きます。すると、そのウマ娘の姉妹4人全員が男性に好意を抱きその場で修羅場が発生。オハナシの結果、これ以上ライバルを増やさないと姉妹全員で男性を監禁する方向で合意し、以後3年間に渡り自由を奪われていました。不審に思った男性側の家族の捜索願と近隣住民からの証言により発覚しましたが、男性が保護された後に一切の刑事訴訟を起こさなかったばかりか、監禁には自分も合意していたと証言しウマ娘側に一切の刑罰が及ばないようにしました。それに対して検察側は脅されているのではないかと追求しましたが、被害者男性は憤慨し「そんなことはない。ただ、彼女達

は自分がいないと駄目になってしまおうし、自分も彼女達なしでは生きられない」と訴えたのです。

加害者側のウマ娘達は口を揃えて供述します「姉妹だから我慢できるけど、他人だったら許せない。私達以外のウマ娘から護るためにも必要な事だった」これに対して検察側（ウマ娘）は、「護るためだもん、仕方ないね」と事件性はなしと処理しました。

「いや、だめでしよう」

「何の問題ですか？ 卑しいヒトミミと他のウマミミから護るためです。仕方ないね」

「単なる独占欲では？」

「違います。愛です」

「愛って何だ（哲学）」

「躊躇わない事ですかねえ」

……話を清盛側に戻しましょう。

「それで、話って何？」

「君の舞にかんとうし、たあ」

「……何言ってるの、アンタ」

「受けなかつたか。最近合つたウマ娘が結構面白い奴でな、その真似をしてみたんだが」  
「いや、面白くないから」

「そんなことより、あの舞に即興で合わせるなんて感動したよ。凄いな、キミは」

「別に……何となく舞つたら息があつただけだよ」

「何となく……つまり運命では？」

「蹴りたいの？」

「ちよつと待つて、大鎧着てくる」

「蹴られる前提で話進めんな。……つたく、アタシ、源義朝。舐めたら本当に蹴り飛ばすから。アンタ、平氏の御曹司でしょ。ウマ娘でもないくせに、武士気取りの一門」

「武士は武士、人もウマ娘も関係なし。平氏にもウマ娘はいる。源氏にだつて人間はいるだろう」

「それは、そうだけど」

「平氏も源氏も武士だ。お前も武士なんだろう……。まあ、俺だけが何者にもなれずにいるが」

「平氏の棟梁の子だつたら武士じゃないの」

「何者でもないのだ……。皆はさるお方のご落胤だと言ひ、母はウマ娘。この平清盛、何者にもなれずにここにゐる」

「……え、母親がウマ娘ってことは、アンタはウマ娘なの？」

「いや、見ての通り人間の男だが」

「じゃあヒトじゃないの」

「しかし母は間違はなくウマ娘なのだ。俺は特別らしいのだ」

「……いや、それ騙されー何でもない。アンタの母親は、ちゃんとアンタを見てくれているの？」

「無論だ。母上がいなければ私は修羅道に堕ちていただろう。たとえ本当の関係が何で

あれ、母は母だ」

「そう……良かったね」

「まあ、形式上の父上や人間の母上はよく分からないけどな。あの二人は私の存在を認めていないからな」

「待つて。複雑すぎて意味わかんないんだけど」

「案ずるな、俺にも分からんほど難しい。でだ、そちらはどうなのだ、義朝。聞くところによると源氏と平氏は仲が悪いようだ」

「まあ、仲が悪いというか……殆ど逆恨みだよ。アタシの母親、あんたの親父と同一年みたいで何かと張り合っつき。途中までは親友と言っても良くて愛バの契りを交わす寸前だって話だけど、家督相続する少し前から何故か急に仲が悪くなって、ギスギスした

まま今に至る。訳を聞いても、うるさいだのお前がなんか産むんじゃないの……  
ホント、サイアク」

「……」

「アンタは武士になれてないって言うけど、アタシだってそう。『身体が小さすぎる』、『手足が細すぎる』、『お前は武士になるべきウマ娘じゃない』……全部、全部聞き飽きるほど言われたよ。武士にならないウマ娘……そんなのに価値なんて……」

「……私はそうは思わん。走るからこそがウマ娘の可能性であり、価値だ」

「そんなわけない」

「ある。夜明けだとか武士だとかは、ウマ娘にとって本来の価値ではない。誰よりも速く、どこまでも遠く走ることこそが本当の価値。証明してみせよう。私達ならそれが出来るはずだ」

「……………え、待って。私達？」

「そうだ。君と愛バの契りを交わしたい」

「何でそうなるの……意味わかんないんだけど」

「君に可能性を感じた。一目惚れだ」

「……ッ！ ば、バツカじゃないの！」

「バカでない。おパカだ」

「いいや、オオバカだよ！ アンタ、愛バの誓いを甘く見てるんじゃないの。アタシらウマ娘からすれば、婚儀より重たい誓いなんだけど。一目惚れとか、信用できない！」

「私は本気だ。キミに惚れた」

「くっくっくッ！ 知らない！ 勝手にしろ！」

「義朝……私は諦めないぞ」

義朝とのファーストコンタクトは不調に終わる一方で、政治的には清盛は順調すぎる出世を進みます。

1134年には14歳で従五位上。2年後には従四位下に昇進。

一方の義朝は無位無官であったため禄な収入の無い実家を支えるべく伝統三冠への挑戦を決意します。体格も小柄で指導人もいない中で挑戦はうまく行かず、現在のメイクデビュー戦にあたる新人戦を6着に敗北。かろうじて未勝利戦を勝つものの、次走で再び6着に敗北。その後も勝てない競技が続ぎ、夢は潰えたかに思えた秋口、トボトボと屋敷に帰る義朝の前に彼は現れたのです。

「良い走りだった」

「……アンタ、どうしてここに。何が良い走りよ。全然ダメ。源氏のウマ娘なのに……全然勝てなかった。そんなアタシのどこが良い走りだったっていうの！」

「そうだな。全然ダメな展開だった。脚質では最も体力を使う中段先行の位置。少して

も距離を短くしようと内ラチに寄り、追い込みをかけたときには前の沈んでくる逃げ馬に阻まれて抜け出せず、ようやく抜け出したときには後続にいたはずのウマ娘が遙か先を走る。君からすると、まるで壁のようだっただろう」

「そうだよ。全然抜けられなかった」

「だが、君は諦めなかった。脚はまだ残っていた。だから必死に大外に向かい、結果は2着だった。私を知るウマ娘であれば、巴郡に沈んだ時点で半数より上に入るウマ娘は稀だ。それに、そこから闘志を切らさず最後まで諦めないウマ娘はもつと稀だ。だから私は言うのだ、良い走りだったと」

「けど、勝てなかった!」

「次は勝つ。必ず勝つ。だが、そのためには訓練が必要だ。今のキミの走り方を変えるために、ほんの少し努力がいる」

「……」

「あの舞から半年だ。半年、私はキミのことばかり考えていた。確かに最初は一目惚れだったかもしれない。キミは無敗ではないし、勝ちよりも負けが多い。そろそろ母君や郎党から言われているのではないか? 向いてないから競技をやめろ、とか」

「……ああもう、うるさい! 何でアンタに見透かされなきゃいけないの! 分かってるよ、アタシだって。身体が小さすぎる? 手足が細すぎる? 友達の頭がデカい?」



お前は競技に出るべきウマ娘じゃない。どれもこれも、聞き飽きたつての！」

「そうか（関係ないの混ざってなかったか?）」

「けどね、アタシは諦めたくない。武士にも、源氏にもなれないアタシが……走ることを、ウマ娘であることまで諦めたら……何にもなくなっちゃうよ……」

「そうだな」

「あと家計が本当に……キツイ。アタシが稼がなきゃ、源氏が滅んじゃう」

「お、おう。分かった、分かったから不安そうな顔はよしてくれ。大丈夫だから、次の競技絶対勝つ方法教えるから。だから愛バの誓いとは言わずとも……指導人からお願いしても良いだろうか?」

「……本当に勝てたら、考えとく」

そして、清盛と義朝の周囲には秘密の特訓により、次の重賞競技「丹波競争」にて義朝は外側後方で脚をためる作戦を身に着け、最後の末脚で勝利を得たのです。

「勝ったな（ドヤア）」

「……何? 顔がうるさいんだけど」

「勝てたから正式に指導人として契約をー」

「はいはい。約束だからね、よろしく」

正式に指導人となった清盛と義朝のコンビは続く「神讚記念」と「弥生賞」を快勝。弱

小ウマ娘は、一気に期待の新星へと変貌したのです。

なお、両家の関係を考えて清盛は謎の覆面指導人としての参戦でしたが。

「……で、皐月賞の日にまで何でアンタ覆面なの。しかも魚柄」

「好きかなと思つて。ほら、どうだ。鼻のあたりはハリセンボンが描かれているんだ」

「魚は嫌いじゃないけど……ぷふっ……似合つてないし」

「あ、笑つた。義朝が笑つた！」

「……う、うっさい！ 笑つてな……ぷっ、なんで後頭部に蛸が来るような模様を

……タコ坊主……ひ、卑怯でしょ、それ」

「え、そんな面白いことになつてるの私？」

「ぷっ、あはは！ 自分で選んでおいて気づいてないとか、可笑しすぎるでしょ」

「ぐわああ、何か悔しいぞ！ 義朝がそんなにツボるほど面白いのに何で私は見れない

のだ！」

義朝は小柄な体格から期待されていませんでしたが、皐月賞を爆発的な末脚で勝利し、平安優勝でも一着割愛しています。ケケゾーこと高階通憲（信西）は既に平安優勝で勝利した後に競技を引退。学問の道に進んでいます。そのため、義朝の好敵手は存在しなかった。菊御紋賞を目指すも肺を病み、清盛の願いにより回避します。

「よもやよもやだ！」

「うっさい…ゴホツ…病人の前で大声出すな」

「しかし…義朝、三冠とれた筈なのだぞ！」

「そりゃ獲れないのは悔しいけど…、アタシ別に称号目的じゃなくて賞金目的だからそこまで嘆かなくても」

「賞金も大事だが、私の愛バが最強だと示せなかったのが悔しいのだ！」

「はいはい。それじゃあ…ゴホ…すぐに治すから。春のすめらぎ賞をとれば文句ないでしょ」

「そうだが…やはり悔しいな」

「無理して走れなくなるよりは良いよ。それとも、無理してでも走れって言いたいのか？」  
「それは違う。…健康管理まで手が届かなかつたのは私の責任だ。もっと医療が進んでいれば、君にこんな思いをさせずに済んだのに」

当時の日宋貿易においては既に日本の文化や技術は大陸から学ぶべきものをあまり見いだせぬほど向上していましたが、医療だけは別でした。漢方等の東洋医学後はこの時代ではイスラム世界の医療と並ぶまさに最先端の医療であり、徒然草の著者として知られる兼好法師は「唐の物は、薬の外に、なくとも事欠くまじ」と書き残しています。

「確かに、ウチの家計じゃ唐土の高い薬なんて買えないからね。…言つとくけど、ゴホ…贈り物とか言つて持つてきたら本気で蹴るからね。今でさえ綱渡りなのに、アタシ

らの関係がバレたら面倒だから」

「分かつてる。うん、三冠は残念だったけど、何かちよつと安心した」

「泣いたり安心したり忙しいけど、どういう意味？」

「だって、義朝。ここで走るのをやめたら何にも無くなっちゃうとか言つて無理して走りそうだし」

「はあ？ 言わないよ、そんなこと」

「そうなのか」

「そうだよ」

アタシには、アンタがいるから。もう、何も無かつた頃のアタシじゃないから。その言葉を、義朝は胸に仕舞い込みました。

一方でこの頃、実は滅茶苦茶忙しかつたのは忠盛です。

鳥羽院が建てた得長寿院に千体観音を寄進すると、その功績により内昇殿を許可されたのです。武士である忠盛が殿上人となつたことを憎んだ公卿たちによる闇討ちが企てられますが、忠盛は刃をチラつかせることにより脅し、これに恐れをなした公卿たちが院に内裏で刃をチラつかせるとは許し難いと訴えるも、忠盛が差していたのは銀箔を貼つた竹光でありハツタリだったので。この機転を鳥羽院は「賢い」と称賛しました。

収まりのつかぬ公卿は忠盛に鳥羽上皇の前で舞を披露するよう仕向け、忠盛が斜視

だったことから、公卿たちに伊勢の特産品「酢瓶の瓶子」と囃し立てます。しかし、舞は忠盛からすれば得意中の得意とするところ。清盛よりも年季の入った見事な舞踏を演じて逆に讃えられました。

一方で源氏は、当主の為義は忠盛が活躍するのは正反対に荒れ、多くの乱暴狼藉事件を引き起こして非常に苦しい立場にありました。稼ぎは実質義朝頼みで、義朝以外の他の妹達は地方で自らの食い扶持を探さねばならぬほどの困窮ぶりでした。また、清盛との出会いにより精神的に安定していた義朝と違い、気性の問題で追放される者もいました。たとえば、源為朝はその一人です。

「ほくら、よしよし。おかあさんですよ」

「「オギャア……」」

「や、やりおった。荒くれ者の京童が一気に三人も赤ちゃんにされおった！」↑義賢（特別出演タマモクロス）

「……いや、意味分かんないんだけど」

「あらあ、姉上達どうしたんですか？ もしかして、一緒にでちゆね遊びしたいんですか？」

「や、やばい！ 今の為朝はやばいで！ あれはあんまりにもアカン、阿寒湖さんよりアカンキンイロリヨテイ「うつせえわ！」」ことで有名なダメ義こと為義オカンからの愛情

不足で『私自身がお母さんになることです』と変な方向に覚醒したでちゆねの悪魔や！  
近付くもの全てを赤ちゃんにしてしまう母性の怪物や！ 義朝ねえちゃん早く逃げー」

振り返ると、そこに義朝はいませんでした。

「……嘘やろオオオオ！」

「はあい、よしよし♡」

ああ、ウチはこれからあかちゃんにされる。

もはや朝廷でも手の付けようがない怪物と化した為朝は九州へと追放となりました。

てんやわんやの源氏内部ですが、ダメ義こと為義は娘たちのことなど気にせず、忠盛への対抗心だけを燃やしていました。

1135年。都への物流で大きな懸念となっていた瀬戸内海の高賊討伐に任命される人物に為義と忠盛の名前が上がります。為義はこの役を熱望しますが、朝廷は何事もスマートに解決する忠盛の方が適任であると考えて忠盛に海賊討伐を命じます。これに為義が更に荒れ狂ったのは想像に難くありません。

「また忠盛に仕事を盗られた……今日こそ、今日こそ文句言つてやるんだから」

意気揚々と文句をつけに行く為義。なお、この決意は今回で数百回目になります。

「た、忠盛！」

「為義か。久しいな」

「え、ええ、久しぶりですおすし。ほ、本日はお日柄もよく、絶好の良バ場ですわね」

「そうだな。流石はウマ娘の為義、いかなる時もバ場を気にするか」

「もももも、もちろんだわさ」

「お主の娘の義朝も競技で活躍しているみたいだな。母親譲りの良い末脚だ」

「……え、ええ。そうですわね（ナンデアイツノハナシヲスルノ）。では、ごきげんよう。

おほほほ」

「ふむ……相変わらず気の良い奴だ。全く、あの為義が荒くれ者だのとはひどい言い掛かりだな。俺といい、あいつといい、出る杭は打たれるというやつか。白河院め、ウマ娘の世とやらを望むのならば御隠れあそばされる前に為義に昇殿くらい許せばよかろうに……いや、平氏と源氏、すなわち人とウマ娘の闘争を齎するのが奴の狙いなればあからさまな鼻屑は当然か。源氏の棟梁があいつでなければ、俺も安心して復讐に邁進できなかつたな」

独り勝手に為義を評価する忠盛と、本人を目の前にすれば乙女のように何も言えずへたれる為義。絶妙なすれ違いは平氏と源氏の仲を良好とは言えずとも決裂するほどではない程度に維持していました。

「……義朝が忠盛に褒められた？　アリエナイ、アリエナイ、アリエナイ。姉さんは死ん

だし、他の娘は走らせてもいないのに。アイツ、また私から忠盛を奪おうというの？  
憎らしいヤツ……本当に、姉さんそっくりの、憎らしい娘」

何を思ったのか、為義は義賢を無位無官の義朝を差し置いて東宮帯刀の地位に据えます。これは実質的な廢嫡であり、母娘関係の断絶を意味します。

居場所を失った義朝は都を離れて東国で一旗挙げる計画を立てます。しかしそれは、清盛との別れを意味する決断でもありました。

「本当に東国に行くのか、義朝」

「うん。もう決めたから。ここにアタシの居場所は無いし……東国の方が競技は盛んらしいから、向こうにアンタの愛バの力を見せつけるのも良いかなって、思ってたさ」

「私は……東国までは……」

「分かってる。向こうでは一人で頑張るよ。アンタも、アタシがいなくて指導人の腕を鈍らせないでよ」

「……今の君なら、私以外の指導人とも上手くやっていける。競技の盛んな東国や関東ならば私より優れた人もきつとー」

言い終わる前に義朝に胸ぐらを掴まれ、互いの吐息を感じるまでに近付けられる清盛。突き放すために言った心にもない言葉の報復として一発殴られるかと思いきや、そこにきたのはいじらしいほどに加減した、絶るような掌。



「義朝？」

「わかれ……アンタじゃないと駄目だって、いい加減わかれ！ アンタ以外は、嫌なの」  
「分かってるよ、本当は。けれど、私は君の傍に居られないから。支えてあげられないから」

「……ある。支えになる方法、一つある」

「どうやって？」

「……産むから」

「は？」

「アンタの子、産むから」

「何故にそうなる！」

「絶対産む！ その娘と一緒にいつか、絶対に戻ってくるから……待ってて」

「……長くは待てんぞ。私にも、御曹司としての役割がある」

「浮気したら……死なない程度に蹴り殺すから」

爽やかな別れの雰囲気が漂い、清盛はそれとなく距離を取ろうと試みます。後ろに一歩、もう半歩といったところで、その肩はがっしりと尋常でない力で押さえられました。震える視線を愛バに向けると、凄絶な笑みを浮かべているではありませんか。

笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙をむく行為が原点なのです。

「で、ここまで言わせて指一本触れないとか、女に恥かかせるつもり？」

「いや、ここは雰囲気です男女が再開を誓って別れて、互いに別々の道をだなー」

「子は鎧つて、良い言葉だね。血は、決して消しきれない証になるんだから」

かねて血を恐れたまえよ（震え声）。

（白河院ンンンンッ！ アレってそういう意味もあつたんですかアアア！）

以下、割愛。性なる一步半を公共電波に流せるはずもない。イイネ？

数日に渡り色々絞られ、何かを失い、人としての尊厳さえ危うい清盛。死にそんな身を引きずりながらようやくくだどり着いた実家の門。乱れた着衣から何かを察する義母。何故か一人だけ出される赤飯。いつそ殺せと言いたかつたのですが、突然父に呼び出されてしまい神妙な面持ちで部屋に入りました。

「為義の娘と親しいようだな」

「父上……それは……」

「言い訳は無用だ。近々、嫁を取らす。高階の家から貰う。何やら、向こうはお前を気に入っているようだな」

「そんな、勝手な！」

「お前を源氏に近寄らせるわけにはいかん」

「私が誰を愛そうと勝手では無いですか。それに、父上も源氏との縁談があつたと聞き

まー」

斬られた。

そう思うほどの殺気が忠盛から放たれています。親が子に向けて良いはずもない濃厚な殺気。しかし、清盛が引き合いに出そうとした話は、正しく忠盛の逆鱗に他ならなかったのです。

「二度と、俺の過去に、土足で踏み込むな。あの方のことをお前が口にするな。それだけは、絶対に許さない」

「いいえ。踏み込ませていただく。何故に源氏を嫌うのです。」

「嫌う？ 俺が、源氏を？ 貴様がーあの血を引く貴様がそれを言うか？ 貴様の体に流れる血を知って同じことを申すか！ たとえ平氏も源氏も同じ血から生じたとは言え、貴様に流れる血を知れば誰もが青褪めるであろうに。血……？ 待て、同じ？」

清盛に僅かに面影が見える憎むべき治天の君。あの幼子に教え諭すようで、人間味の欠片もない声が脳裏に蘇ります。

忠盛くん。いつか、君もまた裏切るとしても覚えておきなさい。相変わらず君は頑なですが、老人の警句は聞くべきです。

『かねてより血を恐れたまえ』

おやおや、君は本当に私を憎んでいますね。けれど、その思いもまた人間らしくして可

愛らしいものですよ。

「……」

「父上は、何か知っておられるので？」

「……人とウマ娘。平氏と源氏。白河院……皇室。我らは桓武帝より生じ、源氏は清和帝から。そうか……血か。そういうことか」

「父上？」

反目しあっているうちは良い。だが、一度堰が切れて、代を重ねればどうなる。

方やもはや日の本で最もウマ娘に理解ある一族。方や、愛情を前には盲目となるウマ娘。血は重なり、いずれは――

「あの怪物め、一体何処までが手の内だ。俺の復讐さえもか？ 永遠の夜明け……そんなものと思っていたが、人とウマ娘への情はある。おぞましくて吐き気がするな。それほど情を持ちながら、互いに争えと焚きつける。俺には理解できん。俺には……義忠さんや、為義とは戦えない。きつと、刀を向けることさえできないだろう」

「義忠さん？」

「……俺が愛した唯一の方だ。約束なんだ。ヒトとウマ娘が争わずにいられる世を作る。それを成し遂げるために、俺は今まで生きてきた。永遠の夜明けなどというものをぶち壊す。そのために、お前を我が子として育てたのだ」

「夜明けとは……戦いによる人とウマ娘の切磋琢磨。より高次の存在への昇華。そんなところですか」

「察しが良いな。だが、一つ僥倖はある。奴の狙いが何にせよ、為義の娘と親しいお前が源氏と争うことは極めて低かろう。あの為義の娘だからな。きつとお前が手も足も出せないほど気立ての良いウマ娘だろうな」

「いや、その……もはや手も足も出ないというか、尻に敷かれたというか、むしろ手も足も出されたというべきか……」

「……おい、お前、まさか」

「ち、誓って、誓って私からは手を出しておりませぬ。むしろ襲われた側であります！」  
「よもや……よもや……いや、先程言いかけたことは取り消す。お前は、血はまああれだが、うん、認めよう。お前は紛うことなく俺の子だ。こんなことで分かりあいたくはなかったが……そうか。相手は為義の娘か」

「はい」

「舞が上手く、末脚は鋭いか？」

「それはもう」

「小柄で、癖のある鹿毛か」

「ええ。小柄ですが、誰よりも強いウマ娘です」

「女の好みまで似るやつがあるか。パカ者め、まったく。確か、為義は東北に行かせると言っていたか……いや、むしろ良い。あそこは白河院の手も薄かろう。こうなつては、いよいよ対決の日は近い。お前には苦しい道になるぞ」

「しかし、父上。白河院は既に御隠れになつて久しく、もはや憂いなど無いと思うのですが」

「死んだ程度で、あの物の怪が止まるものか。あの腐れ外道、本当にウマ娘に関しては当代随一の研究家だつたよ」

想いの継承。魂の共振。

ヒトの身では不可能な、ウマ娘固有の能力と言つても差し支えないもの。それを、人為的に起こせるとすれば。

例えば、薬品と洗脳による人格と記憶と知識の上書き。手段が手段故に個体数は少ないものの、白河院は自分自身の継承を成し遂げていたのです。

「よもや、そのようなことが可能とは。相手はもはや個人ではなく組織なのでは？」

「組織ではない。だが、個人と呼ぶにはあまりにも悍ましい。気をつけろ、朝廷のどこかに必ずあの男は隠れ潜んでいる。そやつらを見つけ、根絶やしにする。今や、それこそが俺の戦いであり復讐だ。お前も、志を共にしないか？」

「……既に同じ志であるとお分かりでしょう。是非とも、私も共に」

「ほう、何のために？」

「我が愛バとの平穩のために」

「愛バか……素晴らしいじゃあないか。存分に探し、狩りたまえよ。穢れた浮世。吐き気のある物の怪。頭のいかれた為政者共。皆もうんざりじゃあないか。俺達の最終目標は、全ての物の怪を狩り尽くし、人とウマ娘の淀みを根絶すること。きつと誰にも理解されぬだろう……だからこそ、俺は同じ志を持つものを愛するのだ」

「はい」

綺麗に話が纏まりつつあり、清盛はそれとなく部屋を出ようとしませんが、それを許す忠盛ではありません。

「それはそれとしてお前の縁談は変わらんからな。高階殿は同じ志を持つ者。お前にとつても悪い話ではない」

「ちよ、そこら何とか！ このままでは私が義朝に蹴り殺されてしまいます！」

「案ずるな、高階殿の娘もウマ娘だ。白河院の落胤たるお前を取り合つて争うウマ娘ふん、これ以上なくあの物の怪への皮肉だな。そんな夜明け、犬も食わんだろう」

「間に挟まれる私は挽肉となつて犬に食われるでしょうがね！」

「知るか、死ねば良い。為義の娘で義忠さんの姪御に蹴られるだど？ そんなご褒美で死ぬような腑抜けならば潔く死ぬ。俺もかつては義忠さんと、何故か為義の蹴りを我が

強靱なる腹筋を以て受け止めたことのある身だ。その蹄跡は未だ消えんがな」

「言いたくはありませんが、為義殿がひねくれたのも父上が蹴られたのも当然ではありませぬか」

「パカな。為義のどこが捻くれておると言うか。くだらん噂を信じるな。あやつは今も昔も心根の良きウマ娘だぞ。あの蹴りは、アレだ。何か虫の居所が悪かつたのだろう」

「……度し難い。度し難いですぞ父上！」

あれよあれよと言う間に縁談は纏まり、高階家の息女との婚姻の日。清盛は逃げ馬の如く脱走を計画しますが、思いもよらぬ再会がそれを阻みます。

「通憲殿ではないか。高階と聞いてもしやとは思ったが、まさか私の嫁は——」

「ああッ、あの時の少年だ！ 久しぶり——って、ええっ、違うよお。アタシもう旦那いるし、子どももいるんだけど」

高階通憲。かつて涸れ井戸の底から救い出されたウマ娘は念願の平安優駿を勝利した後に競技の世界を引退。現在は学者だった身の上を鳥羽上皇に見出され内裏で活躍する公卿であります。また、鳥羽上皇の第4皇子たる雅仁親王（後の後白河天皇）の乳母を務めています。※史実では高階通憲の妻：朝子が乳母。この世界では高階通憲がウマ娘となっている関係で習合しています。

「キミに紹介するのは、うちの旦那の親戚の子で、右近将監高階基章の娘さんの和子ちゃ



んだよ。向こうにいるから、会ってきなよ。じゃ、後はお若い二人でつてね」

右近将監は決して高い地位ではなく、武家としては出世頭と言える清盛にはやや物足りない身分です。しかし、白河院の陰謀に気付き、反抗を決めた同志である高階家と關係を深めたいと考える忠盛としては是が非でも結びたい婚姻でありました。

後は若い二人で、と言われて残される清盛と和子。

「和子殿は、何故に縁談に乗ったのだ？」

「あなたのお家が好きだからよ」

「……？ 平氏の家が？ いや、悪くはないが、決め手になるほど良い家かね？」

「だって、平という字は、平穩という字にもあるでしょう。良い名前よね」

「ああ、家って、そういう意味か」

「わたし平穩って言葉が好き。だから、お嫁にいくなら平さんのところが良いなあって思っていたら、こういう縁があつたわけなの。それに、あなたも素敵な方だからきつと上手くいくわ」

「おかしいな。平穩とは程遠い、むしろ煩いとか暑苦しいとはよく言われる。そんな私が良いのか？」

「はい」

愛バを忘れたわけではない。けれど、この女性とならきつと上手くいく。きつと良い

家族になれる。そういう確信が清盛にはありません。

決して、そのふわふわとした雰囲気を裏付けるような泰山の如き尻に惹かれたわけではないのです。

1137年頃、清盛最初の結婚。

夫婦仲は良く、翌年には癖の強いどころではない芦毛の髪をした。長女を。翌々年には武辺者といった風な黒髪の次女を授かります。

「このまま平穩に、一緒に年を取っていけたらいいのにね」

清盛の最初の妻について残っている資料は少なく、本来ならば名前さえ伝わっていません。分かっているのは、清盛との間に二人の子を儲け、そして亡くなったことだけです。

彼女との間に儲けた長女・重盛は平氏の中にあっても後ろ盾はなく清盛自身も出自から平氏の嫡男の地位は確かなものでは無かったため、本来ならば清盛は身分ある女性を妻として地位の安定化を図るのが筋でしょう。しかし、この後に清盛は長らく後妻を迎えようとせず、周囲の勧めからようやく1145年頃に後妻を迎えた後も、嫡子の座を重盛と定めて譲りませんでした。

彼女と共にいたと思われる期間は清盛という英傑の人生において取り立てて何も無い空白期間ではありますが、同時に数少ない平穩であった時間でもあります。

後に傲慢さや悪逆さを誇張され、長らく誤解され続けることとなる清盛ですが、十訓抄において、若かりし頃はむしろ穏やかで誰にでも優しい性格であり、冬の寒い時に身辺に奉仕する幼い童を自分の衣を布団代わりに寝かせ、その子かが寝付いてしまったらそつと部屋から抜け出して存分に寝かせるなど、寛大な逸話が多く残されています。あるいは、若き日に連れ添った相手の影響を受けたのかもしれない。

「……一緒に年を取ろうと申したではないか。重盛達のためにも、寂しくとも生きていかねばならぬではないか」

平穏な時は瞬く間に過ぎ去り、時代は少しずつ動き始めようとしています。そして、物事が動くときは始めは緩やかに、そして急転するが如く一気に動いていくのは歴史の常と言えるでしょう。

一方そのころ、関東地方。

「箱根を抑えていた一族が完敗したらしい。距離も短距離から長距離まで自在。最後には困んでおきながらも大外からぶんまわされて抜かれたそうな」

「あれで童を抱える母親だつていうから恐ろしい。賞金目当てに次々と関東のウマ娘を降して従えている。ウマ娘の指導をしておつた武家の棟梁たちも面目丸つぶれじゃ。まったく、どこの誰があんな怪物を鍛えたんだ」

「まるで凶星の如きウマ娘だが、仕方ない。天災だと思つて過ぎ去るのを待とう。流石

に奴も鎌倉の小さな競技には来ないだろうしー」

「こゝ、子連れ狼が来た！」

「おのれ、こんなささやかな競技まで刈り取るといふの!？」

「……おお、仏陀は寝ておられるのか」

鎌倉、鶴岡八幡宮。

神事として行われるささやかな競技も、彼女には関係ありません。二冠ウマ娘として、現役最強の誇りにかけて関東のウマ娘を全て下す。そのための戦場を彼女は選びません。

小柄な体軀は僅かに丈を増し、癖のある赤みがかった鹿毛の髪は結えるほどに伸び、碧眼には他人を寄せ付けない凄みと、確かな母としての情。そして、腕には闇夜の如き黒鹿毛の髪をした小さなウマ娘。あまり母親には似ず、顔立ちは父親に似たのかどこか焔のような苛烈さを思わせます。

「関東のウマ娘も弛んでるね。ろくな指導人がいないの？ アイツなら、もつとマシな走り方教えるよ。まあ、どうでも良いか。娘の布おむつ代も欲しいし、一着貰ってくから」

源義朝、関東のウマ娘を傘下に収める。ところで、腕に抱いた娘の父親は一体……。

河内源氏の勢力基盤がライコウ以来脈々と基盤としてきた河内から、元を正せば平氏

側であつた関東となつたのはこの義朝の代であり、居城を源氏にゆかりのある鎌倉に移し、特に相模国に強い基盤を持ちました。

一方で義朝の勢力伸張は関東の他の源氏、特に下野国の足利に本拠を置く大伯父・源義国の勢力と競合することとなり緊張を生みます。しかし、下野国は奈良時代にとある老僧がウマ娘の育成に関するノウマウを残して以来ウマ娘の競技が盛んであり、菊御紋賞を未出走で逃したとは言え二冠ウマ娘たる義朝には一目を置いていました。そこで、緊張緩和を目指す義朝が直接赴くと義国と勢力争いなどどうでも良いとばかりに意気投合し、同じ走りを愛する盟友となることで解消されました。

この時、義朝が清盛から学んだことを競技者目線で指導した各地のりようウマ娘は義朝を「お姉さま」と慕い、後に嫁ぎ先で産んだ娘を義朝の競技的遺伝子を継ぐ者と言う意味で「義朝の娘」と称したと言います。

歴史において、後に治承・寿永の乱の際に挙兵した源頼朝の許へ集つた余りにも多くの義朝の子どもがいます。血では無く、想いで繋がつた者達。それは血に縛られた平氏と、血よりも想いによつて纏まつた源氏を対比させる形にもなっていました。

『我ら血によつてウマ娘となり、魂によりウマ娘を超え、血によつてウマ娘を失う。指導人よ、かねて血を恐れたまえ』

怨敵の警句の通りに滅びゆく己の末裔に平氏中興の祖・忠盛の憂いは如何ばかりであ

りましようか。しかしながら、彼等の歴史を語るのは今少し先といたしましょう。

「もう6年か……この子も大きくなつたし、そろそろ都に戻ろうか。アンタも、お父さんに会いたいよね？」

「ひかりとやみのであい（訳：お父さんにに会いたい）」

「……関東の訛が移つたかな？」

そして、役者は再び都に集うのです。

## 第10回「平氏と源氏 ～ヒトとウマ娘の誓い～」その3

一旦スタジオ。

「本当に誰の子どもなんですかねえ（白眼）」

「高平太、平大相国、六波羅殿、福原殿、清盛、浄海入道……この中の一人でしょうね」

「実質一人じゃないですか。やだー」

「分かりきったことを一々言うからです」

「話は義朝に戻りますが、血の繋がりのないウマ娘が義朝の遺児を名乗ったのはどういうことなのでしょう。史料では各地の有力者との間に儲けた娘と言われていますが」

「単純に数に無理があるのと、後の頼朝の線引きが根拠となります。義平と頼朝は間違いない義朝の娘であることは多くの史料から確認されていますが、男性である朝長は養子。他のウマ娘ですが、例えば蒲冠者と呼ばれた源範頼は1150年静岡県浜松生まれと見られますが、ちょうどこの時期は鳥羽院や藤原忠通にも接近するための大事な地固めの時期なので、ホイホイと都を離れて浜松でポンと儲けたというのは理解に苦しむ行動です。実際、地固めは成功して1153年に従五位下・下野守に任じられ、翌年にはウマ娘には憧れの職である右馬助を兼ねたわけです。河内源氏では単なる検非違使に

過ぎない為義を遥かに超える地位であり、出世頭です。清盛も仕事以外で任国に向かうのは稀でしたし、義朝も同様でしょう。後に、妹の義賢から棟梁の象徴たる名刀・友切を奪う重要な任務も娘の義平に一任しているなど、やはり都から離れることは避けています」

「では、頼朝の線引きとは？」

「頼朝の兄弟姉妹で天寿を全うできた方は一人もいません。もちろん、頼朝は娘の頼家との逸話などから家族の情がある方なのは分かっています。そんな頼朝が用済みとなったあとは徹底して排除した義朝の子を名乗る人間やウマ娘達ですが……頼朝は家族にカウントしてなかったんじゃないですかね。きっと、本当の意味での姉妹は、姉の義平だけだったのではないのでしょうか」

「……兄弟姉妹の排除には頼朝ではなく北条氏が背後にいたのでは？」

「鎌倉幕府黎明期に一地方豪族でしかなかった北条氏にそんな力はありませんよ。彼等が権力を握るのは鎌倉の13人体制が崩壊してからです。源氏の縁者に加えて他の有力者を一気に相手取るのは北条氏としてはナンセンスだったでしょう。しかし、頼朝自身が縁者を身内とカウントしていないならば、鎌倉の13人で結託して排除できます。実際、範頼を追い詰めたのは頼朝自身ですよ」

事実、御家人から一部の敵対視されていた義経に対して、範頼は御家人からの讒言も



無しに手紙に「源」の名を用いたという理由のみで肅清されています。つまり、頼朝は自分が身内と認めた者以外には「源」と名乗ることすら許さなかったわけです。

「これは身内への仕打ちではない、と?」

「戦国の世で身内に非道なことをした方々は結構いますが、あの信長でさえ明確に身内を殺めたのは複数回の謀反を企てた弟と自分の子どもを武田に売り渡した叔母の二人だけです。しかも弟に関しては本人は赦すつもりだったのを家臣が我慢ならず排除した説があり、事実として弟の遺児で身寄りのない甥っ子を自分の子として引き取つていきます。妹の嫁ぎ先たる諏訪家を滅ぼした武田家が後々に滅びた際には『武田滅亡は勝頼くんのせいじゃないさ。信玄の無情が招いたことだよ。ハッハッハ』と吐き捨てています」

「あの……信長が魔王というより世紀末な霸王みたいな笑い声をしていませんでしたか?」

「なんのことやら? いずれにせよ、いつの世も身内に非道なことをするものは信用されません。だって、身内に優しくない人がどうして他人に優しいと言えますか? そんなリスクを、頼朝が選んだにしている彼女自身は当時そこまで非道とは言われていないですよ。まあ、義経に関しては……アレでしたけど」

「アレに関しては、まあ……後々に。そして、結局源氏は3代で血筋を断つわけですね」



とどまるよう説得します。しかし、二人で世のままならなさを愚痴りあう内に通憲の鋼の意思は変えられぬと気付いてしまいました。

「あたしは運の無いウマ娘だ……才能や学問も天は必要としないんだ。願うのは、友達までもが天から見放されないことだよ」

「通憲、確かにこの世はままならず、運は無かつたかもしれない。けれど、死んではいかん。天がお前を見捨てようとも命だけは、自ら手放してはいかんぞ」

摂関家の頼長と高階家の通憲では余りにも身分の差がありましたが、同じく国を良くしたい、家を盛り立てたいと願う友人同士。友情に身分の隔てはなく、ただおいおいと涙をながしました。

『通憲、出家するってよ』という噂に取り乱した人物はもう一人いました。鳥羽法皇です。

鳥羽上皇は通憲を引き止めるために強権を発動して通憲を少納言に昇進させ、更には通憲の娘には大学寮の受験資格を与えるなどあの手この手で懐柔しようとしています。

だがそれが通憲の逆鱗に触れました。

今更何だと言わんばかりに剃髪を強行し、通憲は出家。以後、信西と名乗ります。

隠遁を決め込む信西でしたが、鳥羽上皇のなりふり構わぬ引き止め工作は信西をして「貞操の危機」を思わせるほど遂に危険な領域にまで到達し、『ぬぎかふる 衣の色は

名のみして 心をそめぬ ことをしぞ思ふ（衣の色は変わっても心まで僧衣に染まるわけじゃないよ）の句を詠んで鳥羽上皇の力になることを約束しました。

一方、平氏は忠盛が正四位上に昇進し、尾張守となります。また、鳥羽法皇の信任も厚く、側近の一人にまで数えられるようになりました。

忠盛は朝廷内で人脈を築くことにも長け、同僚の藤原忠隆はウマ娘の指導人の達人であることが知られ意気投合するところがあつたのか、忠隆の子・隆教は忠盛の娘を妻に迎えています。ここに忠盛の抜け目ない打算も見えるのが、忠隆の妻・栄子は崇徳上皇の乳母であり、忠盛の妻・宗子は崇徳上皇の子・重仁親王の乳母だったことです。鳥羽法皇の側近でありつつも崇徳上皇にも接近する。これな鳥羽法皇への背反ではなく、事情がありギクシヤクした親子関係にある鳥羽法皇と崇徳上皇ですが、間に忠盛を挟むことにより白河院に人生を歪められた者同士として何とか協調路線を歩むことができたことから必要な手段でした。

また、鳥羽法皇が和歌にさほど関心がなかったことから、当時の歌壇は崇徳上皇を中心に展開していました。忠盛は和歌にも長け、たびたび崇徳主催の歌会に参加しました。歌会は当時の文化サロンであり、文化人にとっては欠かせぬもの。そこでも支えてくれる存在である忠盛は、最も頼りにできる人物となるのです。

清盛もまた朝廷内で着実な昇進をしつつ、1145年に周囲の薦めもあり下級公家の

娘である時子と再婚。異性をウマ娘しか知らぬ清盛からすれば初めて触れる人間の女性でありました。夫婦仲は良かったのか、後に少なくとも4人の子に恵まれることとなります。※清盛には母親不明の子が8人ほどいる。その多くが女兒であり、安徳天皇の生母である建礼門院徳子は例外的に諱と生年月日、母親が記録されているもののそれ以外は特に記録は無い。つまり、悪役キャラにありがちな好色属性を盛られたくせにこれといって浮気した話が全く出てこないほど女性関係は潔白だった清盛からすると8人全員、合計12人を時子が産んだ可能性がある。筆者は時子が三代半ばまで全く記録に出てこないことから、宗盛誕生の1145年から記録に登場する1160年まで毎年ペースで産んだなら勘定も合ってしまうので本当に全員時子の子ではないかと思っている。

今までの青春をウマ娘に極振りしていた清盛に嫡子たる男子が授かった際に安堵したのは平氏の親族達であったことでしょう。

そして、1146年。思いがけぬ形での再会がありました。関東で力を蓄えた義朝が帰京したのです。

母娘関係は破綻しているため、もはや義朝は源氏の御曹司ではなく一人の武士としての再出発になりますが、その顔に悲壮感はありません。むしろ覚悟を決めた母の顔です。

実家に顔を出すこともなく訪れたのは平氏の邸。内々で話を通っていたためかあつさりど門を通り、何も知らされていない平清盛（29）の眼の前に現れたのです。小さな子どもと手をつなぎながら。

「久しぶり、清盛」

「よ……義朝……？」

「何、アタシが分かんないの？　へえ……たかだか数年会わないだけで愛バの顔も忘れるんだ」

「忘れるものか！　忘れられるはずもない！　いつ戻ってきたのだ！」

「ついこのあいだ、ね。それでさ、実家からは勘当されている身だけど、内裏には挨拶にいかにかなきやいけないし、ちよつとこの子の面倒見てくれない？」

「構わんぞ。む、その娘は？」

「ちちなるものよ、しゆくふくを（訳：父上、はじめまして）」

「うむ、祝福を。君は、まるで闇夜のような黒髪だな。それでいて、毛先が焰のように赤い。はは、こんな珍妙な髪色は私以外に見たことないな」

「そりゃ、ちよつと奇抜な髪色だけど、アンタの子なんだから受け継がれてもおかしくないでしょ」

耳を疑いますが、現実逃避はもはやこれまで。血とは恐ろしいもので、抱き上げた初

見のウマ娘が、自分の血を引く存在だというのは妙な確信をもたらすのです。

「……義朝、この子の名前は？」

「義平。忠盛さんに相談したら、わざわざ考えてくれたんだけど。知らなかったの？」

決定的であります。

元より源氏関連に関しては甘すぎる忠盛は、清盛と義朝が結ばれた事を知るやいなや幾重にも仲介を経て足跡を消しつつも援助の手を差し伸べていました。そして、血の繋がりは無いとはいえ初孫の誕生に、忠盛はハジケました。もしも、亡き義忠との間に子がいたならば付けたであろう願いの名前——源氏に受け継がれる義の字に平氏を意味する平。併せて義平の名を贈るほどの浮かれぶり。それでもなお周囲に対して威厳を崩さなかつた忠盛は流石であります。

なお、忠盛が壊れるまであと数分。

「ももも、もしかしくなくても、ここに、この子、わ、あわわ、私の——」

「アンタ以外に誰がいるの？ アタシ言ったよね。産むって」

「よよよももやややよよよもももややや」

「あのさ……報せなかつたから仕方ないけど、そんなに取り乱さないでよ」

「え、いや、その、じ、じつはわたしにもごほうこくといえますか、なんといいいますか」

「ちちうえ？」

「……ふうん、報告ね。それは、このアンタに似た卷毛の娘の件？」  
あ、終わった。

何となく自分の身体で隠していた芦毛の娘。ふわふわとした髪の毛の長女、重盛がひよつこりと顔を出してしまい、清盛は死を確信。

こんなことならば大鎧を着込んでいればよかつたと、来たる蹴りをおかつての父の如く強靱なる腹筋で受け止める覚悟が決まらぬために心底後悔しつつ、悟りを開いたような穏やかな顔で己の死を受け入れました。

「……この子が重盛ね」

「あなた、だれ？」

「あなたのお母さんだけど？」

「えっ？」

父娘で全く同じ困惑をします。

またしても母を名乗る不審者なのかと解説の私もいい加減食傷気味でしたが、流石は義朝です。彼女は正常な思考をした上で母を名乗っています。

「何？ アンタの子ならアタシの子でしょ」

「いや、うん、そうかもしれないが、ええと……※違います」

「はあ……ハイハイ、お互い立場があるのは分かるよ。もう再婚してるのも知ってるか



ら。それはそれとして、再婚相手は人間なんでしょ？二人もウマ娘を子育てするのは無理があるよ。あんたの周りにウマ娘いるの？」

「いや、いない。時子も身重だし、正直子育ては俺の役目だな。全く子育ては戦よの」

人間がウマ娘を育てるのは普通の人間を育てるのとはわけが違います。力加減などできるわけもなく、下手をすれば大の男でさえ大怪我をしかねない力を秘めています。

このとき、重盛は8歳。次女の基盛は7歳。分別は付きつつありますが、極稀に勃発する姉妹喧嘩は清盛をして仲裁に死を覚悟しなければならぬレベルです。

よく見れば、清盛のあちこちに生傷が増えているのを義朝は見逃しません。

「なら、アタシも育てるよ。いいよね？」

「それは、ええと、と、時子の……妻の承諾も必要ー」

「あと、お願いもあるんだけど」

他の女の名前を出されて耳を絞り、機嫌を損ねる義朝であります。清盛はたちまちに話題転換に乗りました。

「何だ？ 何でも言ってくれ」

「義平がね、妹が欲しいんだって」

「……し、重盛と基盛では駄目だろうか？」

「子どもをだしにしたのはアタシも悪かったけど、はつきり言わせないでくれる？」

年分埋め合わせしたいんだけど。イイヨネ？」

「ア、ハイ」

義朝がいつ頃に帰京したのかは正確には不明であり、確かなのは1147年に鎌倉幕府を開くこととなる源頼朝が産まれていることです。こいつらうまびよいしたんだ!

頼朝の存在は義朝が築いたコネクションに加えて忠盛も大いに関与しました。まず、頼朝の父親を鳥羽法皇の近習でもある熱田神宮の大宮司・藤原季範とし、彼の後ろ盾を得つつ鳥羽法皇へと接近。忠盛の親友たる藤原忠通も巻き込んで諸々の事情を話すと、鳥羽法皇は誰よりも前のめりに協力を約束することとなります。

話は戻りまして平氏邸。楚々とした所作で茶漬けを持つてくると同時に「妻の時子です」とアピールも忘れない時子、「ありがとう」というや否や一口食べ、「美味しいけど、少し薄味だね。清盛はもう少し濃い方が好みじゃなかった?」と、暗に『アンタよりアタシの方が付き合いは長い』とマウントを取ろうとし、そこにすかさず「夫の健康を考えて薄味に馴れさせていますので」と、両者ハナ差も譲らぬ叩き合い。これは分からない。

なお、平時子の容姿はあまり記録にありませんが、異母妹は容姿比類なしと絶賛された建春門院滋子であり、子どもも多くが美男美女の誉れ高かったためかなりの美人であったと思われる。そして、約束された美人たるウマ娘。その間に挟まれた清盛は、

心做しか一日にして一気に老け込んだ気さえします。

「邪魔するぞ」

「父上！」

仏はいる、そう思った。

男女比の關係で圧倒的形勢不利の清盛にとつて忠盛はまさに天からの助け。父上が来た、これで勝つると、清盛の士氣は一気に回復します。

どろどろとした女の争い渦巻く雰囲気などそよ風程度にしか思えぬ偉丈夫ドンカンの忠盛は義平を抱えると、その顔をじつと見つめました。

「この子が義平か。なるほど、髪色は清盛に似ているな。顔立ちは、まるで……いや、うん、美しいな」

喉からでかかったのは、亡き義忠に似ているという一言。

「そふよ、そふよ、なぜになく。だれかのおもかげがみえてうれしいのか（訳：じーじ、なんでないてるの？ あたしのかおになにかついてる？）」

「……坂東の訛か。本当に、似ているな。義平、踊りは好きか？」

「てんによのまい、ともにおどらん（訳：だいすき！ じーじもいつしよにおどる？）」「共に、踊る？」

「ー私と一緒に踊ってくれない？」

「…………ツ!？」

……。

……ああ、そうか。

想いは繋がっているんだね、義忠さん。

魍魎が跋扈し、生き馬の目を抜く内裏において武士の生まれから殿上人にまで昇りつめた平忠盛。果たして彼が身に纏う覇気を微塵も残さず失い、ひどく静かであることを訝しまぬ人がいるでしょうか。

全く動きの停止した忠盛の顔を義平は遠慮なくペシペシと触り、流石に清盛が「父上」と声をかけたところ、忠盛は静かに微笑んでいました。そう、ただひたすらに穏やかな顔で――

「し、死んでる」

……1146年、平忠盛、尊死す。

心肺停止となった忠盛は清盛の必死の蘇生法により息を吹き返します。

「可愛さのあまり死ぬかと思った」

真顔でそう言つてのけた忠盛に一同は思わず吹き出し、なんとも言えぬ心地よい雰囲気広がりました。

以後、義朝は郊外に屋敷を持ちつつ平氏の屋敷を洛中での拠点として活動をし、忠盛・

清盛の推挙もあり鳥羽法皇からの覚えも目出度かったと伝わります。

一方で、平氏の屋敷からは夜な夜な苛まれる悲痛な叫びと、何故か痩せ細る清盛の姿が見られるようになり、時子は平氏にとって待望の長男である宗盛を産むと、知盛、徳子、重衡と立て続けるように子どもを産みます。一体誰と張り合っていたんでしょかねえ。

義朝もまた次女を出産。幼名を鬼武者……後の源頼朝であります。同時期に関東から縁者を頼りに指導人候補生となる男子を養子に取り、朝長と名付けます。

ともかく、平氏も源氏も空前のベビーブームであり、義朝と時子も最終的には共闘路線を歩むこととなり、女の戦は子育てへと向かうこととなるのです。

それはそれとして清盛は枯れた。何がとはいわぬが、枯れ果てた。

一方で、おじいちゃんとして化した忠盛は孫可愛さに今まで培った政治力を総動員して家族を守るために奔走します。当然、助力を仰ぐのは庇護者にして上司にして同志でもある鳥羽法皇です。

「なるほど、相分かった。この身としては全面的に力を貸すぞ。何せ、白河院が潰した平氏と源氏の融和を体現する子なのだからな。ふふ、あの妖怪めが悔しがると思えば、子等の存在そのものが痛快でならぬわ」

「では、そのように。義朝ももはや摂関家とは縁が無く、我等が盟に属してもよろしいか

と

「ああ、そうだな。彼女もまた、良い武士なのだろうな。血を恐れず、走りに酔っている。良いウマ娘だ」

「側には上げませぬぞ」

「戯け。身には得子美福門院得子。政治力に長け、鳥羽法皇の政を補佐した才女。なお玉藻前のモデル。と泰子高陽院泰子。鳥羽法皇より8歳年上のウマ娘。史料によると男性恐怖症。実家の事情もあり彼氏いない歴〓年齢を30代まで続けたところ、政治的理由もあるが女性不信に陥った鳥羽上皇に入内し、コミュニケーションを取るうちに互いに女性不信と男性恐怖症を克服した。がおれば良い。それに、泰子以外のウマ娘にはどうも寵が向かぬ……いや、無論我が国の民として愛おしく思っているが、やはりな——」

「心苦しいございますか？」

「そうだな。白河院のせいで、人とウマ娘は永劫に争う世となるやもしれぬ。それが、心苦し——」

「ご心痛お察しいたします」

「その方だけぞ……斯様なことを言えるのは。いや、そうでもないか。まだ我等の盟約については話しておらぬが、第四皇子がなかなか面白いバ鹿に育った」

「第四皇子といいますが、雅仁親王殿下ですね。確か、先だつて落飾した信西尼が乳母を務めたとか」

「うむ。ウマ娘を乳母とした者は多かれども、あれは……狂いじゃな。ウマ狂いぞ」

「ウマ狂い？」

「アレはウマ娘がの、好きで好きでたまらぬのよ。待賢門院の胎から産まれたとは思えぬ程に丈夫に育つたが、それさえもウマ娘の乳で育つたが故と云うて憚らぬ崇徳天皇らの生母、待賢門院璋子の子は多くが早世し、長く生きたのは後白河天皇のみ。」

「一理ありますな」

「確かに。だが、それはそれとして狂うておるわ。後継者争いにもならぬ身故に自由奔放での。ウマ娘の追つ掛け、と申すのか？ ともかくそればかりしておる」

「いわゆるオタ活であります。」

「何とも羨ましい。是非とも同行したく」

「……その方、話にウマ娘が関わりと知恵が下がつておらぬか？ まあ良い。奴の狂気はこの詩を見れば分かるだろう」

袖口から一枚の紙を眉をしかめながら渡す鳥羽法皇。それを恭しく押し頂く忠盛。

「拝見いたします」

身体はうまびよいできてゐる。

血潮は蹄鉄で、心はうまだつち。

幾多の輪廻を超えて絶頂。

たった一人に推しを絞れず、

ただひとつの後悔もなし。

私は一人、都のバ場で歌い踊る。

その身体はきつと、無限の愛で出来ていた。

「これを見てどう思う？」

「……感動しました。是非とも盟に入っていただけだと思います」

「身は頭が痛くて泣きそうなのだが。我が子ながらどうしてこうなった」

「信西尼の育て方が良かったのでしょう」

「身は人選を誤ったがの。まあ、変に歪むよりは良いわ。少なくとも、愚か者では無い」

「左様ですな。さて、それより本題に入りましょう。盟の者と調査を進めてはおります

が、やはり物の怪は中々には見つからぬ様子でー」

「失礼仕る」

真つ青な顔で突然入ってくる清盛を忠盛は咎めようと思いますが、鳥羽法皇がそれを手振りで制します。



「おや、清盛かえ。どうした？」

「やらかしました」

「ふむ？ 仔細申せ」

「我が家の郎党が祇園社と乱闘騒ぎを起こし、その際に放たれた矢が宝殿に刺さりました。怪我人も多く、一大事にございます」

1147年6月15日、祇園臨時祭の夜に平清盛は宿願の成就を祈って、田楽を奉納する予定でした。田楽の集団には平氏の郎党が護衛として同行しましたが、ここで一つトラブルが生じます。

「あのお、平氏の皆様……神社の境内に刃物はちよつと……」

いつもどおりの護衛の感覚で武装したまま境内に侵入してしまった平氏の郎党。確かに八幡太郎義家以降、熊野参詣などの神事に武装したまま護衛するのは当たり前となっていました。が、神域たる境内にまで入ることは無かったため問題にならなかっただけのこと。流石に境内に入られては困ると申し出た巫女ウマ娘は全くの正論であります。

が、折り悪く今日は祭りの日。下つ端の郎党の中には酒気を帯びる者も少なからず。無駄に気の大きくなった郎党は祇園社の巫女ウマ娘に武器の携行を咎められたことに何故か反抗し、騒ぎを聞きつけた祇園社の神人達と小競り合いとなったのです。そし

て、その際に誰とも知れず放たれた矢が宝殿に突き刺さってしまったのであります。

これに祇園社の親玉である延暦寺が激怒。「誠意を見せんかワレエ」と神輿を担いで出るところに打つて出る構えを見せました。

平安末期の名物、僧兵の強訴であります。

双六の賽子、加茂の流れ、僧兵の強訴。

治天の君にして平安の妖怪たる白河院でさえ思うままにならなかつた三つのもの。

厄介さを知る鳥羽法皇は顔をしかめます。

「歳に矢が刺さつた程度で大袈裟じやのう。死人も出ておらんし。それに、祭りに喧嘩はつきものであらうに」

「いや大事ですからね。向こうからすれば神様仏様に矢を射られたようなものですか  
ら」

「それで、神輿担いでわつしよいわつしよいと?」

「わつしよい、わつしよいでございます」

「ふむう、仏が神輿つて……何かちぐはぐではないか? 神輿は神道であらう?」

「この時代は神仏習合ですから。詳しくは八百万の神々は仏様の化身たる権現である考え、つまりは神様の権能を仏に当てはめて、性格を神道で解釈する本地垂迹説というものがありません。……って、こんな説明は私がするんじゃないですよね!」

流れるに清盛に任せました（松平）。

「というか、それ15日のことじゃろ？ 身は17日から27日まで比叡山へ崇徳院と公卿共を引き連れて参拝したが、何も言われんかったぞ？ 夏の山は良いわ。空気も飯も旨い」

「……（あれ？ 俺、誘われてない）」

参拝と言いつつ、要するにキャンプ旅行であります。娯楽の少ない時代ですが、鳥羽法皇の趣味嗜好は割とアウトドアなのです。

なお忠盛は連れて行くと逆に全部完璧にセッティングしてくれるので不自由ささえ楽しむキャンプの醍醐味を欠くためハブられた模様。

「有耶無耶にできぬよう御身が御所へ戻られる機を見ていたのでしょう。姑息なことです」

「であるか。正式な訴えであれば確かに有耶無耶にはできぬな。して、どうする忠盛」  
「先ずは下手人を院庁の検非違使へ引き渡します。手筈は為義に任せましょう」

「あやつか……まあ、確かにあれだけ乱闘騒ぎを起こしておれば手続きには慣れておるか」

「全く、為義も言いがかりを捌いてきた経験が役立つとは。こんなことに巻き込んで奴には申し訳ないかぎりです」

「礼にチュウでもしてやれば良からうに」

「それでは私めへの褒美になつてしまいます。為義も嫌がりましょう」

「……のう、清盛。身はこの朴念仁を殴る義務があると思うのだが」

「申し訳ございませぬ。後で私が殴っておきます」

「何故に？」

このように乱闘騒ぎの下手人7人は27日には拘束され、速やかに検非違使へと引き渡されます。そして、無駄に慣れた様子で乱闘騒ぎの処理を行う為義は、忠盛から「お前しかいない。頼む」と言われて絶好調であります。

が、肃々と処理を行う院庁の態度に延暦寺の上層部は納得しましたが、血気盛んな僧兵達は欲を出します。さらなる「謝罪と賠償」を求めて神輿を担ぎ出し、忠盛・清盛親子の配流を求めて強訴を敢行したのです。

これを受けて検非違使に所属する為義他の源氏は僧兵達が都に侵入することを阻止すべくスクラムを組み、鴨川沿いにて両者一步も譲らぬ睨み合いとなつたのです。

「忠盛が配流？ 離れ離れ？ 遠距離とか無理……無理イ。この強訴、絶対に叩き潰してやる」

なお、無駄にヤル気の為義についてはノーコメントで。

この場合は朝廷が3日以内に道理に基づいた裁決をすると僧兵側に約束し、一旦はお開

きとなります。

翌日の30日、鳥羽法皇の御所である白河北殿に公卿が集まり、どう落とし前を着けるかの話し合いが開かれました。

大勢を占めるのは「忠盛関係なくね？ 清盛も祇園社からすればちゃんとした参拝客だし、酔って暴れたバ鹿だけ罰すれば良いじゃん」という、平氏からすれば同情的なものでしたが、藤原信頼は春秋左氏伝の故事を引き合いに出しながら、「恐れ多くも帝のおわす山城国にて郎党が狼藉を働いたのであれば、たとえ関知しておらずとも責任は取るべき」と持論を展開します。※現代人的には部下の失敗に対して上司に監督責任が発生する正論に思えますが、この場合は相手は当時の感覚的にはヤのつく自営業よりも性質の悪い武装宗教団体なわけでありまして、公としてそれに屈すべきと主張した信頼に対して他の公卿は「お前は何を言っているんだ」状態だったのではないでしょうか。この辺りの正論を武器にして融通の効かなさと故事を引き合いにして知恵をひけらかす様子は、石田三成に通ずるものがあります。

とはいえ、大勢を占める平氏に融和的な意見を覆すことはなく、取り敢えず朝廷は延暦寺の所司と現場検証を行います。

結果、放たれた矢の跡や乱闘・流血の形跡、破損物に関して僧兵側の主張との齟齬があり、例えば僧兵側が主張した「清盛が自ら矢を放った」等は全て否定され、引き渡さ

れた下手人の証言等も併せると、どうも僧兵側の主張は誇張が含まれ信用性に欠けると結論付けられます。

これに反発した僧兵側は再び強訴の構えを見せませんが、鳥羽法皇は素早く源氏を中心とした北面の武士を展開すると共に天台宗では最高の地位にある天台座主に対して僧兵を宥めるよう院宣を発し、外と内側から僧兵側を圧迫します。

白河院でさえ御し得なかつた僧兵を、鳥羽法皇は手玉に取っているのです。御所の奥で忠盛と謀を練る鳥羽法皇は、いかにも悪そうな顔で「計画通り」とつぶやいたとか。

「うちの倅が手間をかけました」

「良い、良い。此度は結果的に身の力が増した一件であつたわ。しかし、俗世へ堕ちた南都仏教を厭うて比叡山に新しい修行場を設けた伝教大師があやつら僧兵を見れば何と言うかのう」

……在りし日の伝教大師・最澄。

『三蔵法師玄奘は未婚だろうが男だろうが子ができる川の水を飲んだことがあるらしいが、私もそれを探しに天竺を目指すべきでは無いだろうか』ナニツテンネンドアホー  
 『うへへえ、新しい経典だあ。保存用と布教用と実践用の三つに写経してやるぞお。ん  
 ふうく墨のかほりが堪らんツ！』アア、トウトウクルツタカ

『ちや、ちやうんです空海師匠。これはこの経典が私に読んで欲しいって言つてたん

でーああッ、貸借禁止の秘蔵経典がアアア！　せめて表紙の匂いだけでもオオオオ  
！』スンマヘン、スンマヘン、イマスグカタツケマスンデ

「……何じゃ、今の幻影は」

「さて？　それよりも東大寺も影響を強めています。かつてほどでは無いとはいえ比叡山と高野山にも物申せる勢力ですからね。全く、鎮護国家のためとはいえ聖武天皇と光明皇后に一言申したいですよ」

……在りし日の光明皇后。

『おしるこ！　甘葛と小豆を煮込んで小さなお餅を加えたこの一品、美味ですわ！　美味すぎますわ！　これ後世に残すべきではーえ？　おしるこはずっと後の発明ですか？　そんなあ、よよよ！』

「いやだから何なのだ今の幻影は。ご先祖様が見えた気がするのだが!」

「先程から何をおっしゃられているのですか？　それにしても、南都仏教も比叡山も僧兵で武装し、もはや鎮護国家など空言と化しております」

「嘆かわしいことよ。あやつら、野心でも有るのではないか？　皇統に代わり日ノ本を統治するという野心とか、のう」

「道鏡の再来ですか」

在りし日のく以下略

『待て真備イ、おどれ今月三回目の辞表とはどういうことや！ 逃さんぞワレ、この文官不足に辞めるなんて許さへんで！』

『私はね、本当はただの学者なんだよ。もう疲れたんだ。還暦も過ぎたのに官位はやたらと上がり、夢の定年後の生活は遠ざかるばかり。人には自由が必要なんだ。誰にも縛られない自由な時間がー』

『んなもん拙僧が欲しいわ！ 一緒に苦しみ、一蓮托生やろうが真備イ！ また官位と無駄な役職増やしたろうかあ！』

『やれやれ、あれもダメ、これもダメ、ダメなものはダメ。どうせダメなら酒のんで寝よか』

『寝る前にこの書類と木簡の山をどうにかせんかい！ ああ、もう！ 絶対に拙僧も隠居してやる。下野国あたりに隠居してやるからな！』

「もうよかろう。変な幻影はもうよかろう！」

「よもや……院はご乱心か」

「待て、身は正気ぞ。むしろ何故にその方は平然としておるのか。まあ、良い。斯様なき、皇国の守護者田村麻呂と最速の仙女鈴鹿御前の夫婦がいればのう……」

……。



「……おかしい、幻影が流れぬ」

※サイレンススズカはトレーナーと海外遠征に行っているので映像のストックありません。

「テロップで解答するな。時代背景とか世界観とか色々困るであろう」

「时期的にドバイですかね？ 筆者プロット時4月半ば。シャフリヤール優勝おめでとう。ユーバーレーベンも頑張った！」

「11世紀にドバイがあるわけなからう！」

「代わりにライコウ殿のお蔵入り映像ならありますが？」

「おいパカやめよ！」

在りをりはベリリー以下略

『おくい、主殿。暇だから鬼退治行こうぜ』

『ライコウもう大江山で鬼退治したでしょ。そんな毎日毎日鬼殺の剣とか、やれ最近は週刊京童跳躍の真似ばかりして。たまには仕事したらどうなのかね』

『うわ、どこのオカンだよお前。そんじやさく鬼退治に行くか珍しいもん食うかしようぜ。パン持ってきてやつかよお』

『パン？ 唐天竺よりも西方で食されているとかいう舶来の品ではないか。よく手に入ったな』

『あん？ ちげえよ、アタシが食わせられるパンつついたら、コテンパンだろうが！』  
『それただの脅迫じゃねえか！ おまつ、大臣をこてんぱんにしちや駄目だろオオオオ  
！』

「……ご先祖様の一人がシロイアレにボコボコにされておったわ。ろくな歴史がない  
のお」

「どんな歴史も光と影がありますから。それは歴史を織りなすのが人なれば当然のこと。  
完璧な人間などいませんし、欠点が無い人間など全く大したことが無いものです」

「ものは言いようじやの」

「まこと、そのように」

「まあ、良いわ。此度の件、身も動くでしょう。されど、平氏にとつても身錢を切る用意  
を頼むぞ。あやつら、僧のくせに力に溺れ錢にがめついからの」

ほほほ、と鳥羽法皇が皮肉を込めて笑います。忠盛は平伏し、忝のうございますとだ  
け言いました。

諸々の証拠集めや根回しが終わったのが翌月の23日であり、巻き込まれることを恐  
れた公卿達が裁決を渋るものの、鳥羽法皇は「忠盛は無罪。清盛には罰金刑」の判決を  
下しました。

これには忠盛・清盛親子の配流を求めていた僧兵側にとって大いに不満が残る結果でしたが、コントロール不能気味になっていた僧兵を疎ましく思っていた延暦寺の上層部はこの裁決を受諾し、清盛は平氏の経済力からすれば申し訳程度の「贖銅三十斤」を支払い、事態は終わりを迎えました。

これにより、鳥羽法皇は延暦寺上層部との繋がりを深め、なおかつ平氏からのさらなる忠誠を、他の武家からは平氏を強訴からも守り抜いたことから「それでも鳥羽法皇なら、鳥羽法皇なら何とかしてくれる」といった厚い信頼を向けられるようになったのです。

騒動が一段落した平氏に束の間の平穏が訪れますが、悲劇とは間をおかずやってくるものです。

1149年、鳥羽法皇の熊野大社参詣に随行していた平氏の次男・平家盛が病を悪化させて落命。祇園乱闘事件により朝廷に表立って近寄り難くなっていた忠盛・清盛にとつて人の良さから公卿達に警戒されず、また忠盛にとつては正室・藤原宗子との子であるため政争に明け暮れる忠盛・清盛に万が一のことあれば平氏を受け継ぐ重責を担うことのできる貴重な男子でした。

家盛の落命により清盛の家督相続は確定した一方で、忠盛と清盛は自分達に代わり朝廷に重んじられるようになった家盛の突然死に訝しんだことでしょう。

「余りにも早すぎる。父上、これは」

「……抜かった。俺とお前は武芸の心得があり、何より盟に組みしている故に寢食に至るまで警戒を怠らなかつた。だが、家盛には敢えて何も知らせぬことで無害と思わせ、機を見計らい加えるつもりだった。よもや、熊野参詣中に事に及ぶとは。おそらくは、毒か」

「口惜しうございます。家盛の側に私や、せめて義朝がいれば……私なら毒に気付けた。ウマ娘たる義朝ならば毒ごとき効かなかつた」

「院も嘆いておいでだ。しかし、後戻りはできぬ。清盛、お前は一度安芸へと赴き西国に地盤を確かとせよ。東国に地盤を持つ義朝と組めば日ノ本の殆どを掌握することとなる。四国・九州は、まあ……うん。物の怪もあそこは避けるだろう」

「九州は……そうですな」

「急げよ。ようやく出した物の怪の尻尾ぞ。必ず捕まえて贖わせてやる」

この当時、四国は流刑地扱いされるほどの評価。九州は比較的都と交流のある太宰府近辺を除けばチェスト九州ウマ娘が跋扈する何か怖い場所扱いでした。

この後、清盛は安芸守として瀬戸内海の制海権を確保し、公益により莫大な収益を得られるようになりました。また、この頃から清盛は海の女神を祀る宮島の厳島神社を厚く信仰するようになります。

「海に浮かぶ社殿とは、何とも風雅なものだな有名な大鳥居はこの後に清盛が造営。現在の大鳥居は明治時代に再建された8代目。」

「そうだね。船から見える景色も良かった」

「泳ぐ魚の何とも自由なことよ。義朝は魚が好きだからずっと見ていたな」

「まあね。けど、別のことも考えてた」

「どんなことだ？」

「アンタも魚だったら良いのに、って考えてた。魚だったら、自由にどこまでも泳いでいるのに。アタシも、きつとどこまでも一緒なのに」

「じつと動かぬ魚もおろう」

「それなら、ちよろちよろ動かなくて安心だね。鳥に拐われないように仕舞っておこうか」

「……それは、面白い生き方ではなさそうだ」

「まあね。アンタらしくないし」

「そうであろう」

「そうだね」

互いに三十路を過ぎ、落ち着きを得た関係の清盛と義朝。

なおカメラを平氏の屋敷に向けると……。

「時子様！ 重盛様が自分の髪の毛で窒息しかけー」

「はいはい。全く、髪の毛は女の命よ。ちゃんと手入れなさい」

「ーす、すみません母上。助かりました」

「時子様、今度は基盛様が掘った落とし穴に時忠様がア！」

「掘りが甘い。もっと深くしなさい。それと底に尖った竹を仕掛けなさい」

「時子オ!? 仮にも我はお兄ちゃんゾ」

「ああ！ 義平様お鎮まりください！ あの雲の中に天空の城なんかございませぬ！」

「謀りなり。天空の城はここに顕現せり（訳：嘘だ。あの雲、絶対中にラ〇ユタあるよ

ー）」

「義平、波の下には城どころか都がございますよ」

「バ鹿なことを言うな。あの雲の中には滝川水晶があるに違いない。おじいちゃんは詳

しいのだ」

「孫バカもいい加減にしろよお義父様」

「……ニタア」

「頼朝ちゃん、その野生の毒草をどうするのかしら？ お医者さんごっこはまだ早くて

よ」

「ービクツ！」

「うふふ、愉しいわねえ。手の掛かるウマつ子達ばかりで毎日が愉しくて仕方ないわあ。早く帰ってこないかしら、旦那様ア！ あとちやつかりついて行った卑しかウマ耳イ！」

「ね、姉様落ち着いて。宗盛くんが起きますよ」

「……そうね。ごめんなさい、滋子。私としたことが冷静でなかったわ。何か最近イライラするし、酸味のあるもの食べたくなるし。体が何かおかしーオロロロロロロロロロ！」

「きゃー！ 姉様ア！」

「つ、悪阻だあ！」

「そりゃあれだけ毎日毎日搾り取ってたら、ねえ。昔のエロい人は言いました。ヤれば、出来る」

「だからウマ娘にうまびよいで張り合うなどあれほどー」

「お前、倫子様源倫子。ロングウェイこと藤原道長の嫁。格差婚、源氏、姐さん女房と属性盛りだくさんの上に道長（ジャスタウェイ）が芦毛フェチなせいで白髪属性まで付けられた属性のデパート。もう一人のウマ娘妻たる源明子と張り合つて子どもをわんさか産んだ。その上で平安の世に90歳まで生きた猛者。たぶん波紋の呼吸の使い手の前でも同じこと言えんのか？」

「何にせよ目出度い！」

（わ、私がしつかりしなくちゃ……長女として頑張らなきゃ。頑張れ、重盛……頑張れ！）

平重盛の苦勞人氣質はここから育まれていくのです。頑張れ、重盛、頑張れ。君は長女だから我慢できる。次女だったら我慢できなかつた。……清盛の血筋的には次女だけど細かいことは気にするな！

騒がしく平穩など遠く霞むけれども、愛おしき日々。重盛はそんな日々が大好きでした。

……流石に後世で言うところのブレイクダンスする祖父と目をは輝かせる義姉は流石にうっとおしく思います。

「踊れ踊れ、我が孫共よ。人生は踊り狂う影に過ぎず、お前たちは遊び戯れるために生まれたのだ」

「華やかなりや我が祖父！（訳：ジイちゃんスゲエ！）」

「姉貴、爺さんが頭を軸にして独楽みたいに回ってるぞ。姉貴ならより安定してー」

「誰の頭がデカいつて？」

「ー祖父よ！ 如何せん！」

「!？」



振り返ると、胸を抑えて蹲る忠盛。額には脂汗が浮かんでいますが、その目はただ一点を信じられぬモノを見たと言わんばかりに見つめていました。

「……まさか、そんな……どうして、貴女が？」

——迎えに来たよ、忠盛くん。

……。

……嗚呼、そうか。

全ては、長い夜の夢だったよ。

## 第10回「平氏と源氏　くヒトとウマ娘の誓い」その4

存在そのものが楔となる人が、歴史においては度々現れます。

旧約聖書において、唯一神は洪水計画をたつた一人の人間——メトシエラが生きている間は思い留まったように。

日本史においては、推古天皇の存在が聖徳太子、ウマ子、エミシといった一癖も二癖もある英傑達の中核となって作用し、皇室と蘇我氏に波乱が起きるのは推古天皇が世を去った後となります。

そして、平安末期の楔は今外れようとしていました。

長い長い戦いの果て、平忠盛の命は燃え尽きつつあります。

今際の際に忠盛は思います。いまだ夜に淀みは多く、物の怪の根絶には至らず。しかし、意志を引き継ぐ者はいらぬ。ならば、何を恐れることがあるうか。

「……義忠さん。やっと、また逢えた。約束を、果たしましょう。どうか、俺と……一緒に——」

一緒に、踊ってくれませんか？

1153年、忠盛は公卿昇進を目前としながら58歳で死去。清盛が安芸に滞在中の

ことでした。

藤原頼長は「数国の吏を経、富巨万を累ね、奴僕国に満ち、武威人にすぐ。人となり恭儉、いまだかつて奢侈の行いあらず、時人これを惜しむ」とその死を悼みました。

そして、彼の死は一人のウマ娘の心を完膚なきまでに粉碎してしまったのです。

「……」

「あらあら、しばらく見ない間に屋敷も荒れ果てていますね」

「……」

「母上、聞いていますか？ もう、手紙で今月には都に戻りますって知らせましたのに。少しはお掃除しないとだめですよ」

「……」

「母上？」

「……」

「いつまで呆けてるつもりですか。忠盛さんはもういないんですよ」

「……ダメレ」

「黙りません。鎮西にまで母上の噂は届いていますよ。源氏の棟梁は腑抜けてしまった。あれでは為義ではなくダメ義だ、とか」

「……ナア、為朝——為朝さん」

「はい？」

「わたしがもつと悪い子になれば、忠盛は私を討ちに来てくれます——討ちに来てくれるよね」

「あのですねえ、忠盛さんはもう——」

「分かっている。けど、忠盛に逢うためなら……私は何でもすると決めたんだ。意地を張るのはもうやめだ。私は——物の怪に魂を差し出してでも私の指導人さんを取り戻す。そうです、それで良いのですよ」

「言っている意味が分かりません」

「おやおや、分かりませ——ワカラナイか、為朝。だが、実に丁度良かったよ。彼等と戦うのにお前——アナタは心強いですから」

「……あなた、誰ですか」

「誰って、ヒドイことを言いますね。あなたの媽媽ですよ。さあ、為朝さん。これから忙しくなります……共に夜明けを見ましよう」

2年後の1155年、近衛天皇が若くして崩御。寵愛する美福門院得子の血統に皇統を重ねたかった鳥羽法皇からすると痛恨でしたが、これを機として目を付けていたウマ狂いの放蕩息子こと雅仁親王を皇位につけます。雅仁親王はこの時29歳。自由気ままにウマ娘の追っかけをしていた本人からすれば寝耳に水の大抜擢です。

がー

「皇位に就けるんですか？ ヤッター！ え、本命は息子の方？ ヤダー！」

「そりやそうであろう。そなた、皇位につく気皆無ではないか。取り柄といえは下手の横好きの唄を延々と吟ぜられることのみ」

「失礼な。宮中にいるウマ娘ちゆわん全員の顔と名前とその他必要な情報、脚質から蹄りの癖まで全部頭に入っています」

「もしもし検非違使？」

「息子を検非違使に突き出そうとしないでいただきたい。それで、そのやる気のない私を御座に据え、実権は変わらず貴方が握ると？」

「そうなるな。が、それすらも表向きの話よ」

「ほほう。どうにもきな臭いですね」

「単刀直入に言う。白河院により人とウマ娘が争う世がー」

「理解した。私は表向き飾りの帝として振る舞いつつ白河院の残党を見極める。そして見つけたものは貴方の手の物ーおそらくは平氏の者が消すというわけですな」

「……身はまだ何も言っていないのだが？」

「このくらの報せならば私も相手も掴んでおりました。であれば、こちらは更に一歩踏み込まねばなりませんまい」

「やはりそなたは変なところで賢いのう。清盛は如何せん権謀に長けておるとは言えぬ。あれはああ見えて正攻法を得手とする王道を行く者よ。であれば、妖怪の不始末は妖怪の末裔で片を付けるべきであろう。故に、我等は盟を結びつつも各々が暗躍しておる。全ての物の怪を狩り尽くすまでのう」

「ひどい話ですね。何にせよ、私も盟には入ります。ウマ娘ちゆわん達を悲しませるモノなど、必ず見つけ出して狩り尽くしてやりましょう」

「……なるほどの。忠盛があつさり逝くわけよ。意志を継いでくれるならば、何と心強いことか」

1155年、後白河天皇即位。

鳥羽法皇はあくまでも中継ぎの皇位と考え、後白河天皇も同意していました。一方でこの件で著しく力を落としたのは崇徳上皇です。鳥羽法皇は崇徳上皇を顧みることはありませんでした。もう、二人の間を取り持つてくれる平忠盛はこの世にいないのですから。

崇徳上皇は鳥羽法皇の次に院政を敷くべく自身の子を皇位に付けようとしたが、これに失敗。崇徳上皇の後援者だった藤原頼長もまた元々同僚から嫌われていることもあり失脚。特に弾劾したのは頼長の異母兄たる忠通でした。

「何故ですか兄上。麻呂は聖徳太子様の憲法と儒学に則った正しき世を作ろうというの

に」

「……では聞くが頼長殿。聖徳太子様は、男の娘なるものを愛でよと申していたか？」

「太子様は言っていないが、弘法大師が唐から持ち帰った素晴らしい概念ではないか。

空海「そんなつもりじゃないのだが？」ほら、熱く三宝に萌えよと憲法にも——」

「書いておらぬわけ。そなた、趣味が合わぬ者の家を壊したり寺社仏閣と争い、租税で

も東国と揉め……あまつさえ、あまつさえ……何じやこの読み物は！」

「先帝陛下×兄上の絡み本ですが。何か？」

「おま、おま……ええ加減にせえよ！麻呂の忍耐にも限度がある。恐れ多くも先帝陛下にゴミを見るような目で見られておったの氣づいておらぬのか!?近衛天皇の頼長嫌いは史実準拠。衣服に触れられるのを拒否するレベルだったとか。」

「てつきりあの視線はご褒美だとばかり……」

「本気でええ加減にせえよ。次の除目朝廷内の人事。で覚悟しとけ！」

藤原氏の兄弟間の争いは根が深く、元は子のいなかった忠通は年の離れた異母弟の頼長を養子にしていたのですが、実子が産まれると頼長を疎ましく思うようになり、近衛天皇への互いの娘の入内問題で父・忠実も巻き込んで対立。流石に取りなそうとした鳥羽法皇の仲介で二人の娘はそれぞれ皇后と中宮となることで決着しますが、頼長を可愛がっていた忠実は激怒。忠通を義絶し藤原長者の座を頼長に譲ってしまいます。

一方で熱心なウマ娘愛好家としても知られる頼長を異母姉にして鳥羽法皇皇后の高陽院泰子は支援したため相関図は余計にややこしくなり、板挟みになった鳥羽法皇は「もう知らん」と匙を投げてしまいます。

混乱期にあるのは朝廷だけではなくありません。源氏においても為義の命を受けた源義賢が木曾を起点として義朝の支配基盤である関東に勢力を伸ばし始めます。

清盛と共に朝廷内のごたごたに奔走する義朝は困り果てますが、ここで

「暁の出陣（訳：初陣します）」

「まだ早い。お父さんは許しません」

「そこを何とか（訳：そこを何とか）」

「うわあ、急に標準語になるな！　というか普通に喋れたのだな。時子「私がちゃんと駈けました」ええい、義朝も何とか言ってくれ」

「アタシは別に頭から反対じゃないんだけど。そりや、アンタも14になってそこそこ良い年頃だし、行ってくれるのは助かるけど……叔母殺しの汚名を着るかもしれないよ」

事実、義賢は姉妹の中でも優秀なウマ娘。木曾の強豪ウマ娘を瞬く間に従えます。また、都から連れてきた源氏の間男性を前に並べさせると、木曾のウマ娘達に「ここが婚活会場やあ！」と宣言する太っ腹具合に現地の有力者はメロメロです。



しかし、勇猛という点において名を馳せたのは鎮西八郎為朝のみに非ず。

「覚悟完了！（訳：覚悟の上です）」

「なら、行きなさい」

「おい、義朝！」

「これは源氏の問題。それに、父親なら黙って見守ってあげなさい」

「……少しでも劣勢になれば報せよ。飛んで行く」

「無用。我が戦、とくと御覧じろ（訳：大丈夫。私、強いので）」

坂東に下った義平は即座に兵をまとめると義賢を奇襲。大蔵合戦とよばれる戦は義平の圧勝に終わり、義賢はあっさり討たれます。義賢「何でやねん！ ナレ死とかかなわんわあ！」

当然でしょう。彼女は源義平―清盛と義朝の長女にして、悪源太（スゴイ強い源氏の長女の意味）の異名を轟かせた英傑なのですから。

この戦で、義平に従っていた坂東の武士、畠山重能・斎藤実盛のコンビが思わぬ手柄を立てます。何と、乳父に抱きかかえられた義賢が見出した子にして次代の指導人、駒王丸を発見したのです。

遺恨を残さぬならばここで根絶やしにするのが最善。しかし、父譲りの甘さ故か義平は思わぬ行動に出ます。

「……眩しくて見えない（訳：何も見てないから！ 本当に何も見てないから！）」

「いや御大将、一応は敵の子ですぞ」

「風のささやきが聴こえる（訳：あーあー何も聞こえない）」

「……畠山殿、軍場にて拾い子とはどうなされた。危ないゆえここは拙者が預かりましよう」

「斎藤殿まで！ ああ、もう、頼みしたぞ。木曾あたりの子かと存じます！」

「承知。では御大将、しばし陣を離れます」

「柳の枝を君に贈ろう（訳：気をつけてね！）」

「いや聞いてますやん」

駒王丸は信濃国木曾谷（一説には東筑摩郡朝日村）に送られ、命を救われました。彼こそが後の東征大將軍・源義仲となるのです。そして命の恩人たる斎藤実盛の再会は……ここで語るのは無粋というものでしょう。

この時に回収されたのが源氏の宝刀たる「友切」であります。摂津源氏の棟梁を象徴する名刀を義平から送られた義朝は珍しく舞いあがって清盛に見せびらかすと、清盛は難しい顔をしています。

「どうかしたの？」

「義朝、その刀の銘はどうにかならんか」

「友切のこと？ まあ、確かにあんまり縁起の良さそうな名前じゃないけどさ」

「友とは、朋や伴にも通ずる。翻って盟の者や、伴侶を斬ることにもー」

「分かった、銘を変える。何がいいかな？」

「判断が早い！ そうだな……髭切、とか？」

しかし清盛のネーミングセンスは壊滅的でありました。なんで髭やねん、と亡き義賢がいれば盛大にツツコミを入れていたことでしょう。たぶん自分の伸びた髭が気になつていたのでしょうか。しかし、デレ度が極まった結果としてこと伴侶に関しては賢さが著しく下がるウマ娘ですが、義朝もまたその例外とはなりませんでした。

「じゃあ、それで」

待てや、と草葉の陰で義賢がツツコむ声が聞こえたかもしれませんが、義朝は本当に採用してしまいました。後に頼朝が受け継いだ際に「我が親ながら二人の色ボケっぷりにこの刀も迷惑しただろうねえ」と思わず宝刀に憐れみをかけているとか。友切ーもとい髭切は泣いて良い。

そして3年後、鳥羽法皇の命も燃え尽きようとしていました。

「思えば、身は抗い続けた生涯であつたな」

幼い頃は大病に抗い、青年期は祖父に抗い、そして晩年にはその残滓に抗い続けた。

祖父ーあの物の怪は、ウマ娘の武を愛したようだが、身は違う。身は、戦う姿より

も舞い踊る姿にこそ心を奪われた。身の特技は笛と唄、催バ楽。全て、ウマ娘と共に歌い踊るために身に着けた。

先日、泰子が逝った。自分のせいで嫁ぎ遅れさせてしまったウマ娘。望めば光明皇后に続くウマ娘の皇后となれたのやもしれぬのに、政の事情で結ばれることは叶わず、女の盛りを棒に振ることになるのにそれでも身を待つてくれて、ようやく迎えに行けたのは既に天皇の位を譲った後。周りの反対を押し切つて女御宣下し、後付で皇后の地位に立てた。

男嫌いで、扇の絵の中に男が描かれているだけで捨てるほど極端だったーと思われているが、実は興味津々だった。生来感情表現が苦手で、養子にした娘が薨去した際も泣いている様子を見せなかつたけど……耳は正直だったね。

忠通、頼長の仲の悪い異母兄弟をよく宥め、身の政をよく助けてくれた。

そうだ。身は、泰子と連れ添うために抗つていたので。泰子が先を駆けてしまったなら、身は追いかけてやらねばならない。

あやつ、身と得子くらいしか感情を許せる相手がおらぬから誤解されがちであつたらな。全く、手の掛かる愛バよ。

……。

……いや、しかし、解せぬ。

……白河院は、何故あれほどまでに可愛らしいウマ娘と我等ヒトを争わせようとしたのか。理屈は解る。ヒトとウマ娘をさらなる高みに、闘争を以て昇らせようというのだろう。

おお、素晴らしい。まさに物の怪の中の物の怪よ。けれどけれど、そんな悪夢は願ひ下げよ。

「……全ては、日本の夜明けのため。バ鹿バ鹿しい。ふざけるな。そんなもののために、彼女達を争わせてなるものか」

祖父が大嫌いだった。

愛した女が奪われたからではない。

最初の子が自分の子ではなかったからではない。

人の心を感じさせせない、奈落の底のような得体の知れなさがひどく恐ろしく、悍ましかった。

何よりウマ娘を傷つけるような考えに全く賛同できず、気付けば仲間を集めて反旗を翻していた。

だが、それももうすぐ終わる。もう、終わっても良いのだ。

身の意志を引き継ぐ者は、既にいるのだから。忠盛の意志と、身の意志は、きつと雅仁と清盛が継いでくれる。

「得子……………」

「はい、何でしょうか」

「身を…………抱きしめてくれ」

「喜んで」

「ああ…………ヒトは…………温かいなあ」

「まこと、左様にございますね」

唄が…………聴こえる。

我が子らの唄が。

我が身さえこそゆるがるれ。

そうさのお。

身はきつと、この温かさを知るために産まれてきたのではないかの。

もはや、抗うときは終わりか。

この温もりがあれば、何も怖くはない。

先に逝くぞ、愛しき者よ。

今追いつくぞ、我が愛バ。

本当に、ヒトは温かいのお…………。

1156年7月2日。

鳥羽法皇、崩御。

その日は、大雨の日でした。法皇危篤の報を聞いた崇徳上皇は濡れるのも構わず父のもとに馳せ参じようと思しますが、それは叶いませんでした。

「何故です……私は、父上の子なのに……私は、貴方の子だ。断じて……断じて白河院の子などではないのに！ どうして信じてくれないのです！」

「おやおや、自分でさえ信じていないことを求めるとは。君は可愛いですね」

「誰ぞ！ 不遜であろう」

「君を認めない宗仁が憎いですか？ 先に逝った忠盛くんが憎いですか？」

「貴殿……確か、源為義？ 無礼者。如何に落ちぶれたりとて我は太上天皇ぞ。不遜がすぎるが、忠盛に免じて赦してやる」

「才前ガ忠盛ヲ語ルーんんツ！ いけません、いけません。同調せねば……よろしい」

「為義……いや、貴様は誰だ」

「顕仁、私ですよ。父を忘れましたか？」

「まさか、その怖気が走る口調……白河院か！ バ鹿な、貴方はどうの昔に御隠れになったはず！」

「身体が全てではありません。血と、意志があれば継承は為しうる。まあ、私は残念ながらウマ娘ではないので、少々ズルをしています。しかし、まるで親を見失った赤子の

ように泣いていますね。そんなに父が恋しいなら、いくらでも父は増えますよ」

「おやおや」

「おやおや」

「「おやおや」」

「頼信？ それに平忠正、摂津源氏の面々まで……ぼ、亡霊め。さては継承を利用して彼等に取り憑いたか！ ええい、南無三。雅仁より教わりし怨霊に反省を促す舞踊にて調伏してくれる！」

「ふふふ、やめなさい顕仁、その踊りは私に効く。やめなさい」

完全に化学由来ではなく陰陽術とか心理操作も込み込みのオカルトなので普通に効くみたいです。

「全く、父を調伏しようとするなんて悪い子ですね。けれど、父母の愛に飢えた君に……彼女をどうにかできますかね？」

「はあい♡ ヨシヨシ♡」

彼女を一目見た瞬間に、崇徳上皇は理解しました。自分が、これから赤ちゃんにされることを。

「や、やめ、やめろオオオオ！ 私の傍に近寄るなアアアアア！」

アアアア……オギヤア。



「これで、必要な駒は揃いました。さて、ようやくです。ようやく、物事が動くというものの」

「……、……しん……ぜ……い……にげ……ろ……」

「おやおや……まだ私になりきれしていませんね、頼信。その意志の強さは、本当に可愛いですよ」

失意の崇徳上皇。

理想が破れた藤原頼長。

恋を喪った源為義。

彼等が反乱を企てた形跡はありません。

ただ、偶然だったのです。

偶然、鳥羽法皇と平忠盛亡き世において、彼等を護る者はいなくなつた。だからこそ、物の怪は生贄に彼等を選んでしまったのです。だからこそ、

「おお、素晴らしい。死してなお意志を遺すとは、まさに狩人の中の狩人。けれどけれどです、悪夢は巡り終わらないものでしょう」

鳥羽法皇崩御から僅か3日後、「上皇左府同心して軍を発し、国家を傾け奉らんと欲す」という風聞が世に出回ります。

後ろ盾の無い頼長には、もはや自ら兵を挙げて事態を打開するしか道はなく、そのた

めの力として選ばれたのが、摂関家に近しかった源為義であり、正当性の確保のために選ばれたのが、崇徳上皇でした。

歴史は、これからおこる戦いを年号からこう呼びます。保元の乱、と。

一旦スタジオ。

「……忠盛がいなくなつてから3年、鳥羽法皇が崩御して3日。事態がいつぺんに動き出したという印象を受けますが、二人はまさしく楔だったのでしょね」

「忠盛と鳥羽法皇は共に合意形成型の政治家でしたからね。似た事例が乙巳の変ですかね……太子とウマ子による協力路線と、それを継承した推古天皇とエミシ、後はそれを山背大兄王とイルカに続くはずでしたが、父たる聖徳太子と同じく自らが天皇となる道を絶やすことすら厭わない合意形成型政治の継承者だった山背大兄王が謀殺され、楔が無くなった後の崩壊は早いものでした」

「乙巳の変……うっ、頭が……」

「トラウマになつてるじゃないですか。何だかんだで絶対的な指導者による統治つて古来から日本に馴染みませんでしたね。例外は信長ですが、彼女も手紙とかを見ると世間体や家臣間の協調を気にしてますし、才能ある人が率いるというより、才能ある人が

纏め役として協調させる政治体型が国民性として完成されているというか……軍事政権たる幕府なんか全然武闘派ではなくて鎌倉幕府から一貫して合議制と官僚機構ですし」

「和を以て貴しとなすの精神は1500年前からの伝統ですね。認めたくは無いです。白河院も絶対的な指導者による改変ではなく、人とウマ娘の闘争による革新という抜きん出た個人ではなく種として皆で次のステージに進もうとしてるんですよ。何かちよつと理解できるのが腹たちますね」

「ウマ娘的には全然分かんないんです。闘争による革新とか意味不明です」

「革新というのも実際には方便で、もつと現代的には白河院はこう良い言いたかつたのですよ……『おやおや、何時まで平和ボケしているのですか』と」

「あく、平和ボケですか……うくん……そうなんですかねえ」

「いや、これ割とヒトだけの問題なんですよね。ウマ娘の方々って、普段はのほほんとしてますけど事に臨んでは恐るべき闘争心の塊で、継承によつて絶やすことなく精神が受け継がれています……ヒトは忘れちゃうんですよ。そして本当に平和ボケして牙を喪つちゃうんです」

「で、内戦を誘発したと……うん、学者としては理解できましたが、ウマ娘的にはやっぱりナンセンスです」

「ヒトとは、争いたくないですか？」

「いえ、そうではなくて。ヒトがウマ娘に勝てるわけないじゃないですか」

「たしかに」

「いやに素直ですね」

「40年近く毎晩わからせられてたらこうもなります。全く……白河院は結局本当のところではウマ娘を理解してなかったから無礼でいたのでしょうか。本気で彼女達が闘うと決めたなら、誰であろうと勝てはしないのに」

「……その闘争心、何か意味違う気がするのですが」

「本質は似たようなものですよ。さて、いよいよ保元の乱となります。恐れていた夜明けの到来を前に、清盛と義朝は抗うことができるのでしょうか。その時がやってまいります」

嵌められた。

清盛のウマ娘関連以外にはいまいち冴えなかった筈の頭脳は即座に解答を導き出しました。

そもそも頼長は確かに失脚しましたが、元より男の娘とウマ娘を愛する紳士であり、心情的には限りなく後白河天皇側の人間です。

皇位継承を巡る崇徳院と後白河天皇の対立も、ウマ娘を間に立てればNO問題。むしろ片や信西尼の乳で育った大天狗、片やその信西尼の乳に興奮するところを友情パワーで賢者に至った悪左府。共に男の娘に萌えているあたり、要するに似た者同士なので。あと猫好き。

清盛自身、頼長をよく知っていました。

どこに出しても恥ずかしい変態ーであることを差し引いても優秀過ぎる英才であるのは皆が認めるところでした。

が、確かに数年前から頼長は急に人が変わったように荒ぶるようになります。元は「すごい左大臣」を意味する「悪左府」は、「なんかやばい人」を意味するものと成り果てています。

「戦になるか……鳥羽法皇の喪も明けぬうちに」

「どうしよう清盛……母さんや妹達が、崇徳上皇方についた……義平は関東で人気者になって帰ってきてないし……」

義平は関東にて義朝の後継アイドル的存在として地方巡業に追われて帰れませんでした。後世でいうウマドルであります。

「くっ……迂闊だった。父上が忠告してくれていたのに。物の怪は、源氏のウマ娘を手駒とした前例がある。だが……為義さんにそこまでの価値はないと思っていたばかり

に手薄だった！」

義賢を失い、支持基盤を完全に喪失した為義を軍勢にカウントすることは無いと思っ  
ていましたが、まさか残る一族全てを巻き込んでまで敵対するとは清盛も予想外でし  
た。

「平氏からも忠正の叔父御が一族を率いて上皇側へ付いた。噂では弟の中からも不穏な  
動きがあるとか……ええい、よもや身内を疑わねばならんのか！」

「親父、それと義朝さん。少し良いか？」

「基盛か。構わんが……どうした。検非違使の仕事ではないのか？」

「その仕事で少しあつてな。怪しいやつを捕らえた」

使い込まれた伝統の頭陀袋ライコウちゃんから脈々と受け継がれてきた。本来は義  
朝所蔵で、今は基盛が検非違使の仕事用に借りている。から取り出されたのは縄で縛ら  
れ、猿轡を咬まされたウマ娘。

ちよつとエロみ。今話放送中、松平アナは他の番組の収録中だったが、このセリフの  
直後に妻からの着信履歴がスゴイことになった。

「……大和源氏の源親治。摂関家側の人間だね」

「わ、私は何も知らない。ただ、そこら辺を歩いていただけでー」

「此方を嗅ぎ回っていた。だが、下手な諜報だったし、おそらくは餌だろうな」

「……基盛、陛下の許に盟を集める。重盛にも報せよ」

「いや、父上……そうもいかなかった」

「おお、重盛か。今呼びに行かせようとしたところであったが、如何した？」

「上皇の軍勢が白河北殿へ入った。六波羅の目と鼻の先だ……下手に動けば、拙い」

「先手を取られたか。これでは武装すらも叛臣の兆しと取られかねん……このままでは陛下が危うい」

「全く後手後手だね。鳥羽法皇への服喪中とは言え、油断が過ぎるよ」

「……義朝、頼む」

「分かつてる。建前上は屋敷を別にしていたお陰で向こうはアタシがここに居ることに気付いてはいない。陛下の事は任せて」

単身脱出した義朝は他の北面の武士や付く側を決めかねていた源氏を取り纏めて後白河天皇が立て籠もる高松殿を警護します。

事ここに至ると後白河天皇は覚悟を決め、法皇の初七日の7月8日には、忠実・頼長が莊園から軍兵を集めることを停止する御教書（綸旨）が諸国に下されると同時に、高階俊成と源義朝の随兵が藤原摂関家の邸宅である東三条殿に家宅搜索に入りました。この措置は実質的には謀反人に対する財産没収の刑であり、頼長に謀反の罪がかけられたことを意味します。藤氏長者が謀反人とされるのは藤原仲麻呂以来のことでありま

した。

この一連の措置で後白河天皇のブレインとして働いていたのが信西とされますが、元の官位が低い彼女にどれほど発言力があつたのかは疑問であります。

「よし、あたしも色々と考えちゃうよ！ こうグワーつとやって、ヒヤーつとすれば大丈夫だよ！ こつちはいっぱいだから！」 ↑賢さUG

「皆の者、我が母が言うには先ずこちらから圧力をかけ、向こうの出方を伺うのが良い。このまま我等に恐れをなして引き下がるなら猶良し。兵は此方が圧倒的に勝る故、盤石の体制を以つて臨もうぞ」 ↑賢さA+

「……陛下、よく信西様の言うことが分かりますね」

「母の言葉をそのまま伝えただけなのだが？」

「あ、うん。そう、ですか」

賢さが振り切れると逆にバ鹿になるのでは？ あるいは乳か。あの乳のせいなのか。源義朝は自分のモノと信西のモノを比べて、かなり落ち込みました。

7月9日の夜中。崇徳上皇は白河北殿に移動します。上皇は摂関家にも意図を知らせておらず、息子の重仁親王を置き去りにした突発的な行動であつたと記録にはありません。

上皇が白河北殿に入った意図は、武家で最大の勢力である平氏に圧を掛け、自らの陣



宮に引き込むことにあつたと推察されます。

翌10日に崇徳上皇側へ藤原頼長が合流。

このとき、崇徳上皇側についた武士は平家弘、源為国、源為義、平忠正、源頼憲などの崇徳上皇の従者や藤原信頼の家人といった私兵集団であり、その兵力は余りにも少なかったと記録されています。

亡き忠盛と重仁親王の縁等の情に訴える圧を掛けてなお動かない清盛実際には家中を纏めるために動けなかったのが正しい。忠盛の代は鉄の結束を誇った平氏が割れることは平氏にとって衝撃であり、清盛の出自も相まって兄弟間の離間工作も進んでいた。これを治めたのが池禅尼であり、フラフラと崇徳上皇側へ流れようとする実子達を一喝して兄弟の結束を取り戻させた。そして清盛はますます義母に頭が上がりなくなる。母はいつの世も強し。に崇徳上皇側は清盛の協力を断念。むしろ清盛が旗色を明確にしている今だからこそ高松殿へ夜襲をかけるべしと為義と為朝は献策します。しかし、兵力の少なさから頼長はこの策を斥け、まずは兵力を整えるべく興福寺の悪僧集団といった大和からの軍勢を待つことを提案します。決して理論的には間違いのない選択でしたが、機を逸したという意味ではこの時点で崇徳上皇側の敗北は決定づけられたと言えます。

頼長は文官。為義はダメ義。そして物の怪は所詮物の怪。殆どが戦場未経験者の中

で比較的戦を知っていた為義・為朝は日頃の行いのせいで発言力が弱かったがために起きたことで、彼等の敗北は必然だったと言えるでしょう。

一方で後白河天皇は崇徳上皇側の動きを「これ日やっぱり来らんの風聞（憤怒）、すでに露顕する所なり」と語り、既に手勢に加わっていた義朝等に加えて清盛を正式に己の許へと召集し、これに呼応した源頼政物の怪退治の逸話等からおそらく盟の初期メンバーだったと推測される。等の武家も後白河天皇側へ集まります。

同日に藤原忠通も高松殿へ参入し、ここに物の怪退治の軍勢は完成を迎えます。なお、その他貴族は鳥羽法皇への服喪を理由にして家に引きこもり日和見を決め込んでいました。

清盛と義朝は御前に呼び出され、作戦の奏上を促されます。清盛が後から来た身だからと言って出番を義朝に譲ると、彼女は恭しく頭を下げながら奏上しました。

「夜討ちがよろしいかと」

奇しくも、母と同じ献策でありました。

これに異議を唱えたのは藤原忠通ですが、真つ向からの反対ではなく、より夜討ちについて練り上げるための確認のような内容でした。

「白河北殿は近くに御堂関白様縁の法勝寺といった寺院がある。夜討ちには火が付きも  
の故、此等が焼けては後々にまで醜聞となろう」

「それについてはあたしから献策します。建物が無いところで戦えば燃えないよ！」  
……。

まるで意味がわからんぞお!?

「……えーと……陛下?」

「母は申しておる。白河北殿にほど近い鴨川沿いの河原に敵をおびき出して戦えば火事にはならぬ、と」

「……ねえ、清盛。それ、もう夜討ちじゃなくない? そう思うのは私がバ鹿だからじゃないよね?」

「うむ。私も夜討ちでは無い気がする」

これには戦素人の関白忠通も苦笑いです。

「ま、まあまあ、夜討ちは確かに良策にございますれど、敵より勝る此方がそれを行えば、勝ちすぎてしまうかもしれない。そうなると敵は火を放ちながら逃亡するのが目に見えておるゆえ、私はその点を訊いたのです。しかし、夜討ちと言いつつ、実際には闇に乗じて先制して包囲する程度に止めれば、敵も体勢を整える余裕が生まれ、自棄を起すことも無いでしょう」

「そう、それぞれ! あたしもそれ言いたかった!」

「信西様はちよつと黙ってて」

「ガーン！ 義朝が冷たいヨ、オ、オ、！」  
 「……よもや、よもやだ」

若干カオスめいてきた御前会議ですが、ここは調整のプロ中のプロ関白忠通が上手く要点を纏めます。

「……コホン。つまりですな、義朝の献策に従い夜討ちをします。されど、白河北殿へ突入するのではなく鴨川沿いの河原を戦場とする形で敵をおびき寄せ、兵力に勝るのを利用して包囲殲滅する方向でよろしきかと。では陛下、ご裁断を」

「うむ。後については武家に任す。清盛、義朝、良きに計らえ」  
 「ははっ。義朝、檄は君に譲ろう」

「ん、分かった。各々方、命令は下ったよ。これより、アタシ等は敵を討ち滅ぼす。出陣ッ！」

「「うおおお！」」

11日未明、清盛と義朝等が率いる約600騎が、出陣。鴨川付近に展開するのを察知した上皇方は押っ取り刀で出陣し、午前4時頃に戦鬨の火蓋が切られます。

数で勝る後白河天皇方による一方的な勝利が約束されたかに思われましたが、最前線に立った一人のウマ娘によりその絵図は儚くも消え去るのです。

「ハアイ、ヨシヨシ♡ イイコデチユネ♡」

「オギヤア……ママ……ママ……」

「タスケテ……オカアサン……タスケテ……」

「な、何だこれは！ おい、しつかりしろ！ こんなところで何故赤子のような振る舞いをー」

「アラアラ♡ アナタモ、デチユネアソビシタイノカシラ♡」

悪夢でありました。

ふくよかな胸に顔を埋められたかと思えば、脳を蕩かすような声を吹き込まれ、気付けば屈強な平氏の若武者も、或いは関東からはるばる都に来た坂東ウマ娘でさえも、皆均しく「赤ちやん」にされていくのです。

大鎧を身に纏った武士達が、1人赤子にされれば同時に3人は連鎖的に赤子になる恐怖。立った一人の魔物を前に、清盛と義朝率いる軍勢は恐慌状態に陥ります。

「だ、誰か……助けてくれ。赤子になんかなりたくない。誰か……あの泣き声を止めてくれ！」

「イヤ、イヤアアア……ママア……タスケテ……」

「オギヤア……ママ……ドコ……？ ママ……」

「いけない！ 源氏も平氏もあの娘に近寄らないで！」

「オギヤア……オギヤア……タスケテ……」

「な、何だこれは。人もウマ娘も隔てなく腑抜けにされている。これは、まるで赤子ではないか」

「アンタも決してアレには近付かないで。アレは、目に付くもの全てを赤ちゃんにしてしまう母性の魔物……鎮西八郎為朝」

「よもや、噂に名高き鎮西八郎か。うむ、素晴らしい胸——いやさ佇まいをしておる。武士としてちよつと手合わせ願いたく思うのだが——」

「あゝ?」

「冗談なのだ」

「アラアラア、アカチャンニナリタクナイワルイコハ……死ンジャエ♡」

為朝は三尺五寸の太刀を差し、五人張りの強弓を得物としていました。そして、赤子にならぬと見るやいなや弓に矢を番えます。

それは、矢と言うには余りにも巨大でした。巨大で、無骨で、大雑把で、杭に矢軸をつけただけのもの。鏃の大きさ22センチ。それはもはや弓矢ではなく、大砲の類でありました。

目と耳を塞いで洗脳に耐え、討ちかかった清盛の郎党たるウマ娘、伊藤景綱とその子忠景・忠直でしたが、放たれた矢は忠景の身体を貫通し、忠直の大袖に突き刺さり、忠景は即死し、景綱と忠直は尻尾を巻いて逃げ帰り、震える手で忠影を刺し貫いた矢を

清盛へ渡します。

「コワイ……コワイ……あんなの勝てっこない……」

「……よくぞ戦った。しかし、こんなものが矢だというのか。もはや杭ではないか」

「既に此方の兵に50近い損害が出ている。これ以上は士気が崩壊します父上。母を3人持つ和子、時子、義朝私ならばおそろくあの魔力は効きません。私が打ち倒しますか？」

「あの武威ならば二人がかりでも卑怯とは言えない。姉貴が行くなら、私も行こう」

「重盛、基盛も頼むから止めてくれ。あんな化け物に愛娘を向かわせるわけにはいかん」  
「人の妹に酷い言い様だね。まあ、アレに人の心が残っているなら説得を試みるよ」

硬直した戦場を打開すべく義朝は為朝への説得を敢行します。

「為朝、アタシの声が聞こえる？」

「アア……ネエサン♡ ドウシタノ？」

「ぐっ……なんて悍ましい瘴気。為朝、もう戦う必要は無いの。勅命が下った今、そつちは賊軍として討たれるだけ。けど、今ならまだ勅命に従えばこちら側につける。為朝、どうかこちらにー」

「勅命？ ワタシハ院宣ヲ受ケテイルワア。ネエサンハ……アカチャンニナラナイノオ？」

「ならない」

「デチユネ遊ビシナイノオ？」

「しない。アタシはアレが嫌い」

「ジャア……死ナナイト、ネ♡」

「姉に弓を向けるの!？」

「アナタハ、オ母サンニ刃ヲ向ケテイルノニ、今更？ ナンテ悪イ子！ 私はツライ、耐

エラレナイ！ 赤チャンにナリナサイ、姉上ッ！」

凶星をつかれて言葉に窮してしまった義朝に矢は放たれ、とつさに深巢清国という郎党ウマ娘が間に入って射殺されてしまいました。

「……そうか。なら、もうアタシもアンタを妹とは思わない。各々方、為朝を討ち取れ！」

「……ソウ、ナラ……鎮西ウマ娘達ヲ使ウシカナイワネ」

「「チエストオオオオオ！」」

鎮西ウマ娘——それは九州で為朝がスカウトした暴れウマ娘の中の暴れウマ娘。後のチエスト九州ウマ娘を更に選別した最凶のウマ娘達であります。

200騎もいる義朝率いる屈強な坂東ウマ娘に対し、鎮西ウマ娘は僅か28騎。しかし、この乱戦で鎮西ウマ娘は手勢の倍近い53騎のウマ娘を討ち取っています。一方で



多勢に無勢で鎮西ウマ娘も23騎が討ち取られ、為朝は白河北殿の門を閉じて立て籠もります。鎮西ウマ娘は地形利用一切無く、乱戦の上で10倍の敵兵の中で倍近い数を倒しています。坂東ウマ娘はこの当時日本最強クラスのウマ娘であったにも関わらずこれほどの被害が出たことに鎮西ウマ娘のヤバさが垣間見えます。近付けば矢で射られ、攻めあぐねれば敵の援軍が到着してしまふ。ここに至って義朝は最後の策の許しを請います。

「やむを得ないか。火攻めの許可を出す。白河北殿を焼き尽くし、物の怪共を燻り出せ！」

後白河天皇は即座に火攻めの許可を出しました。白河北殿の隣にあった藤原家成邸に火を放ち、午前8時頃に火は白河北殿へ燃え移った結果、崇徳上皇の軍勢は崩壊します。

崇徳上皇は炎上する白河北殿から脱出し、源為義らに守られながら東山の如意山へ逃れます。

藤原頼長もお付きのウマ娘に抱きかかえられながら逃亡を図りますが、敵方の兵が弓を構えて自分達を狙っているのを頼長は気付いてしまったのです。

「あぶないー！」

お供のウマ娘を庇った頼長の首に、矢が突き刺さりました。この時、白河院の呪縛は

完全に解けて頼長は自分自身を取り戻したのですが、傷の深さから自らの運命を悟りました。

「あ、主様！ 何で私なんかを！」

「……さての。身体が勝手に動いておったわ」

僅かに動脈を傷付けた矢傷は致命傷ですが、すぐに命を奪うことなくゆつくりと頼長の命を縮めていきます。そして、泣きじやくる伴のウマ娘が必死に看護しますが、遂に3日目に限界を迎えました。

死の直前、奈良に逃れていた父の忠実との面会を拒絶されたと言います。しかし、その報を聞いた頼長は取り乱さず、むしろ穏やかだったと言います。

「これで……いい。これで、父は……巻き込まずに済んだ……少しは、不孝を晴らせただろうか」

自分を拒絶したことで忠実の後白河天皇への身の証は立った。ならば、摂関家で罰せられるのは自分と、その僅かな周囲に留まるだろう。物の怪の呪縛の解けた頼長は、最期に巻き込んでしまいかねない父を救うための策を命懸けで成し遂げたのです。

「……信西殿。私の夢は……きつと、貴女なら」

最後まで側についてくれたお供ウマ娘に抱きかかえられながら、悪左府・藤原頼長は息を引き取りました。

この時、親友の訃報に取り乱した信西は何と頼長の墓を暴き、遺体を確認するという暴挙に出ます。そして、物言わぬ親友の亡骸を前に号泣したと伝わります。

戦が終わったことを確信した後白河天皇は即座に恩賞を与えます。清盛は播磨守に除され、義朝もまた右馬権頭武士ウマ娘達の名目上の次官。に任ぜられますが、これに清盛が「もう一声」とおねだりすると後白河天皇も「もつと欲しいのか、いやしんぼうめ」と快諾し義朝は左馬頭ウマ娘武士の長官。に任ぜられます。また、河内源氏で初の昇殿の名誉を賜っています。義朝「いや頼んでないんだけど」

13日に崇徳上皇が仁和寺に出頭。翌14日に藤原頼長の訃報が届きます。

首謀者の出頭ないし死亡を以って崇徳上皇側の貴族と武士達も次々と投降していき  
ます。

源為義は当初東国へ逃れようとはしますが、急に夢から醒めたように大人しくなり、逃亡を急かす為朝と決別して剃髪の上で投降。為朝はそのまま行方を眩ませてしま  
います。

この時に真つ先に争論となったのは摂関家の所領についてです。藤原長者は頼長であり、その父である忠実を実質的には総帥であり、彼等の持つ所領を全て没収となると摂関家にとつて壊滅的な損害となります。藤原忠通は自らが藤原長者を継承して多くの所領の安堵を認められますが、頼長の持つていた所領は没収され朝廷の管理下に置か

れました。

23日、崇徳上皇の讃岐配流が実行されます。これは藤原仲麻呂の乱における淳仁天皇の淡地配流以来400年ぶりの出来事でした。

27日、「太上天皇ならびに前左大臣に同意し、国家を危め奉らんと欲す」として、頼長の子息や貴族、武士達に罪名宣下が行われます。

貴族達は配流、武士の多くは死罪という厳罰。この死罪となる者の中に、源為義とその娘達の名も含まれていました。

義朝は自らの恩賞全てを引き換えにしても助命を懇願しますが、厳格な法秩序を求める信西の意向を曲げることは叶わず、執行が決まります。この信西の強硬的とも言える態度は、亡き頼長が求めた理想を継承したが故でしょうか。

全てを失った源為義は虚ろな目で刑場に引き立てられました。

「母さん、何か無いの？ もう、これで最期なんだよ」

「……………どうでもいい」

心底そうだと言わんばかりの言葉に義朝は絶句します。これなら、後ろに控えて青ざめ震えている顔も見たことも無かった妹達を斬る方がまだ罪悪感が湧きます。

どうしてこの母は、こうなのだろうか。

「……………忠盛がいけない世なんか……………どうでもいい。お前はいいよね。好きな男と結ばれて

……本当に、妬ましい子」

最期まで、これか。

結局、初恋を拗らせたウマ娘の末路でしかないのだ。愚かだと思う。けれど、もしかしたらこれは、自分が辿っていた末路なのかもしれない。清盛がいなかったら、きつとアタシもー

似た者同士なのに自分達母娘は本当に破綻していたんだと、義朝は深い絶望を味わいました。

「お前なんか……お前なんか……」

産むんじゃないかった。

いつもそれだ。また最期まで言われ続けるのか、と耳を絞って心を閉ざそうとしたその時、振り返った母の瞳はどこか自分に似ていて、素直ではない捻れた情念が宿っていました。

「お前なんか、忠盛の子と一緒に、しわしわのおばあちゃんになっちゃえば良いんだ！」

「……え？」

耳を疑った。

びつくりして尾がピンと伸びた。

娘の困惑した顔を見た為義は、少しバツが悪そうに顔を伏せてウジウジとしはじめま

した。

「ごめん……お前を愛せなくて。けれど、どうか信じて。お前は、私の夢なの。忠盛の子と結ばれたお前は……どうしようもなく私の夢なの……お前みたいに素直に、私はなりたかつたのに」

違う。素直なんかじゃない。アタシは運が良かっただけ。清盛じゃなかったら、アタシはきつとダメになつてた。

そう喉元まで出かけて、飲みこんだ。

それは気付かなかつた忠盛を、捻くれてしまつた為義をバ鹿にするものだから。何より、こんな素直じゃない自分を受け入れてくれた清盛に失礼だから。

手の震えは止まらない。それでも、少しでも、少しでも分り合ふことができた。だつたら、迷いながらもきつと自分は刃を振るえるから。

「最期に、何か言い遺すことある？」

「義朝、どうか……私のようにはならないで」

「……ごめん、母さん」

7月30日。

源為義、他5人の娘達……舟岡山村にて斬首。

処刑は義朝が自らの手で行つたといひます。

この二日前に、清盛も叔父の時正一族を自らの手で処刑し、その手を血に染めました。六条河原。河原とは、平安の時代においては身寄りのない人々の住処であり、文字通り終の住処ともなりうる場所です。その一角で一心不乱に手を濯ぐウマ娘。水面に滲む朱色は他者の血に非ず。血が滲むほど己の手を擦った結果です。

「取れない……血の匂いが……母さんと、妹達の匂いが、取れない……」

虚ろな目で尚も動きを止めぬ義朝の手を、清盛はそつと包みます。

「私もだ、義朝。私の手も……血塗れだ。一人じゃない……抱え込むな。君は、私だ……私達は、一緒なんだ」

そして翌年、義朝は後に一条家に嫁ぐ娘の坊門姫が産まれるわけですが……慰めるつて、オイコラ。

剃髪して出頭した崇徳院便宜上、崇徳上皇と追号で表記していますが、当時の追号は新院で、その後は配流先から讃岐院。崇徳という追号は鹿ヶ谷の陰謀後に鎮魂のため贈られたもの。は讃岐に配流となり、同地にて都を恋しく思う日々を送りました。それはそれとして、色々とストレスから開放されたのか現地のウマ娘と仲良くなり、2児を設けるなど割とスローライフをエンジョイしたようです。そのため、望郷の歌を残す他に恨み言などは一切残っていません。怨霊となったというのは、後世の人々が勝手にそう思っただけに過ぎないでしょう。

愚管抄を記した慈円に曰く、この乱が「武者の世」の始まりであり、歴史の転換点で  
ありました。

夜明けが、訪れる。